
姫将軍と世界の楔

朔夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫将軍と世界の楔

【Nコード】

N5353Y

【作者名】

朔夜

【あらすじ】

イーシャは気になる古代書を見つけた。休暇を取って、古代書に関係あるバテユイ樹海に住まう森の民を訪ねる。古代書の処分と他言無用を条件に、問題の遺跡へと案内してもらうが、何故か遺跡の封印が解かれてしまう。

遺跡で眠っていた超絶美形は記憶がなく、困ったイーシャは遺跡の封印の意味を知っていきそうな者たちに調査を依頼した。結果、とんでもない事態を引き起こしたと分かるが……

初投稿ですが、どうやら作者は長文傾向にあるようです。

毎日の時に更新を目標にしていますが、リアル多忙につき二日に一度になる可能性が高いです。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

残酷描写のタグは保険です。一応戦記ものなので。

あらすじに追い付くまでかなりかかると思いますが、よろしく願
いします。

プロローグ

以上が、お前の役割だ。決して忘れるな

轟くような声が響く。

彼は慄いた。その声に対してではなく、この場所に自らが在ることを。狂いそうな恐れを、他人に悟られたくないという想いのみで、無表情の下に押し隠した。

お前が目覚めた時、おそらく我等はこの世界にないであろう。時が十全に満ち足りて眠りが覚めることを祈っている

つまり、一人で何とかしろということだ。いつもそうだ。

この問題に関しては、こぞって彼に押し付ける。

お前に訪れる久遠の眠りが、安らかであることは保証しよう。だが、その眠りの中に記憶を置いてきたりするでないぞ。最も困った事態になるのはお前自身なのだから

決して忘れてたりするものか。

そう呟く自身の声が遠く。

その時を境に、彼の意識は闇に沈んだ。

第一話

姫将軍イスフェリア（前書き）

何故かルビが振れない……

第一話 姫將軍イスフェリア

世界には大陸が五つ存在する。

一つの大陸は永久凍土、一つの大陸は灼熱砂漠。実質住まう人間は存在しない。

東のハツシュガルド、西のブルトウス、南のスノーン。

それぞれに特色と問題があった。

ハツシュガルドは魔物の発生率が異常に高く、何らかの結界を常時発生しなければとても人間は住めない。

元は凶悪犯の流刑地にされていた、別名魔大陸。

スノーンは単一民族のみが住まい、他大陸とつながりのある国はたった一つ。

閉鎖的で最も面積が狭い大陸だ。

ブルトウスは八民族全てが住まい、もつとも面積が広い。

故に常に争いが発生し、長く続く国が少ない、別名戦乱大陸と、言われていた。

二年前まで。

大陸統一を成し遂げたのはディアマスという建国から百五十年ほどの新興王国。

現王家は元々痩せた厳しい土地に住まう一族で、生きるために一族ごと傭兵団として大陸を渡り歩いていたという。ディアマスはその土地の名から来ている。

この国が大陸統一を果たした要因は、ヒトが王として君臨する国であるというのに、珍しく八民族全てにおいて平等な法を敷いていた事。さまざまな状況において最適な協力体制が取れるよう、地盤が整えてあったからだと言われている。

「また無茶をしたそうだな」

「いいえ、陛下。私にとっては無茶ではありませんでした」

イーシャはきっぱりと即答した。

邪魔にならないよう後頭部で一つに編み上げた長い髪は煌めく銀。ぱつちりとした大きな瞳は董色。

陶器を思わす白い肌。小さな頭に、整った美しい顔立ち。これらを備えた少女は、美貌に不釣り合いな薄汚れた全身鎧を纏い、臣下の礼をとっていた。

「無茶ではない？」

イーシャが城に到着するや否や呼び出した、ダイヤモンド最高権力者。ブルートウス大陸初の統一王レスクは端正な顔を歪め、董色の瞳を陰らせ、玉座から彼女を見下ろしていた。

そのオレンジがかかった見事な赤毛に今だ白髪一つないせいか、実年齢より十は若く見える。

レスクはため息を吐きそうな様子で発言した。

「百以上残党がいると分かっている筈で、將軍自ら一騎打ちをして攻め入る事のどこが無茶ではないと？」

「情報に訂正申し上げます、陛下。攻め入ったものではありません。

あくまでも降伏を促しに向かったのです。最初は相手にされず、不本意にも十七名ほど殺める結果となりましたが」

イーシャの使うのは必殺を目的にした実用的なユーリア流剣術。細胞の一つ一つにまで染み込まれ手加減が効かない殺人剣術だ。襲いかかれると、本人の意思がどうあれ体が即座に反応し、必殺の攻撃が出る。

戦場においては生き伸びることこそが全て。下手に手加減が効いて、不意を突かれ死亡　といった点が無い事においては戦場における最適の剣だ。

イーシャにとっては本当に不本意な結果だった。今回の暴徒鎮圧は、相手が一方的に悪いわけではなかったからである。

「勝てる見込みがあるからといって、進んで危地に飛び込んでいくのは止めてくれ。生きた心地がしない。將軍経験が王位継承者の条件とはいえど、自分の娘を戦場に出すのが嫌な程度に私は父親なのだから」

ディアマスの王位継承権の条件は二つ。直系王族であること、そしてレスクの言うように將軍経験者であることだ。国王は軍事の最高司令官でもあることからである。

別名通り、常に何処かで争いが起こっているブルートウスにおいて、無能な支配者は国の滅びに直結するため、形だけというのは許されない。

「お前ももうすぐ十七。私にとって可愛い末娘なのだ。降るように縁談も来ているというのに」

いつもの愚痴が始まる。

そう判断すると、イーシャはキリの良いところまで大人しく聞いた。下手な所で口を挟むとますます長く、しつこくなるのだ。

「陛下。話題は戻りますが、一つお願いがあります」

「あのね、イスフェリア。今私は大切な話を話していたのだぞ？」

「やれやれと言いたげに、レスクがため息をつく。

仕方ないな。そんな心の声まではずきり聞こえてきそうだ。

イーシャは気にせず、言葉を紡いだ。

「降伏した方々に会って下さりませんか？ 彼らは直接陛下にお目通りして伝えたがっています。イスフェリア「キュオ「イムハール」ディアマスの名にかけて、私は彼等に約束しました」

「そのような事なら頼まれずともする。不幸な民に手を差し伸べるは、私の義務であるのだから」

「ありがとうございます、陛下」

イーシャはにっこりと微笑んで、一礼すると退室許可を求めた。

ブルートウス大陸統一王国ディアマスの王都は、人口・広さ・堅牢さにおいても群を抜いている。ほぼ中心にある王城も広大の一言に尽きた。物のたとえでなく一都市並みの面積なのだ。

造られたのは先代ディアマス女王ルーフィアの時代で、築五十年経っていない。

城壁の高さは約十五M、城門の厚さは三Mで幅は片側の扉さえ開いていれば馬車が一台楽に通れるほどだ。しかも大地の民の特殊な製法で造られ、魔封じの呪が刻まれている。その為、大魔導師級の

魔力波をぶつけようと弾き返すか、分解し無力化してしまう。重さも尋常ではなく、物理的な強度もある為に破壊は困難だ。同じ仕掛けは城壁全体にも施されており、異様なほど守りは強固である。

ディアマス王城内にある王国立大図書館。

蔵書は一千万を楽に越え、広々としている。分類ごとに書庫が分かされており、第三書庫は古代書専門だ。

その第三書庫の一角に陣取って、イーシャは黙々と古代書を読み漁っていた。専門家でさえ読解に一日かける難解な古代書を、慣れ親しんだ本を読むのと同じような速さで読んでいる。

イーシャは一時期まで魔導師になるつもりで学んでいた。

母親がレスクの近衛騎士であったので、元々剣術は厳しく教え込まれていたのだが、王位継承権を取るつもりがなかったのだ。

宮廷魔導師になるには魔力が足りないと気づいて、近衛騎士に方向転換したものの、その当時は將軍になるつもりは全くなかった。

ともあれ、もともと語学に強かったのだろう。古代語も、二十種ある魔法語も古代魔法語も、魔導師に関係ある言語や文字は全て取得済みだ。そんなイーシャだから出来る芸当である。

いつもならば興味深い古代書の内容は、イーシャの頭にちっとも入ってこなかった。理由は分かっている。イーシャはこれ見よがしに大きく息を吐き、横目で集中を妨げる原因を見やった。

ちまた巷で出世株と噂の若き外交官テオシウスが、イーシャの斜め向かい二つ離れた席に座っている。

ちなみに、彼は大陸西部出身者であるので、名前が後だ。

古代書を真剣に読んでるように見えるが　耐えきれなくなつて、イーシャは声をかけた。

「テオ」シウス。あなた、何故ここに居るの？」

「仕事の手が空きまして、たまには古い本を読んでみようかと考えたからです」

細い目をさらに細め、機嫌の良い猫を思わす表情でシウスはそう答えた。

確かに彼の手には古代書がある。

しかし、しかしだ。

一つ決定的に駄目な点があった。

「古代魔道文字マジックなんて読めないの？」

「はは。やだな、イスフェリア様。どうしてそのような事、お思ひになられたのです？」

笑顔のままシウスが聞き返してくる。動揺の欠片も見えない。

直接体を向けると、イーシャはシウスの手の中にある古代書を指差した。

「上下逆になっているもの。これで読めるはずがないでしょ」

そう。彼が読書に勤しむつもりで来たのではないという事は最初から　十分以上前から丸分かりだった。

間違いを注意したくて本に集中出来なかったのである。

シウスは苦笑して、正しく古代書を持ち直した。今更だ。

「それで、本当は何しに来たの？　私の見張り？」

凶星だったらしい。一瞬だけ、シウスの顔が引きつった。瞬時に笑顔に戻る。

やっぱり。

そう思いながら、イーシャは目線を手元に戻した。

「そこまでご理解頂けてるならば、どうか非番の度に騒動を起こさないでください」

「騒動つて……大袈裟な」

イーシャはページをめくった。

ちょうど挿絵のページだ。絵師は名のある者と感じさせる精密なタッチで、迫力ある竜が一体描かれていた。絵の上部に名前らしき文字。

<アルウエス>

イーシャが読んでいるのは魔物事典なのだ。数千年の昔、神がまだこの世界に在った時代の。

「大袈裟ではありません。イスフェリア様。貴女自身が一番御立場を理解なさっているでしょう？ 貴女はただでさえ、妃腹ではない故に舐められやすいのですよ」

<アルウエスは邪竜の中でも最強にして最狂の存在。神でさえも束になつて戦わねば倒すことが不可能>

嘘臭い。

そう思いつつ、イーシャは解説と現代語訳を同時に行つて読み進めた。

「じいやみたいな事を言うのね。連日の激務で老化速度が加速した

の？」

<通常の竜並びに邪竜は自己属性のブレスのみしか吐かない。

しかし、アルウエスは火炎、冷気、雷電、強酸、毒気、光のブレスを吐く事が確認されている。

非常に知能も高く、言語能力もあり、我々の言葉も理解しているという事だ>

「イスフェリア様。私は二十九です！！

まだ若いです！

ともかく、ですね。こうやってただ読書のみで余暇を過ごされるだけでしたら、私どもも目くじらを立てたりしませんとも」

<八大要素を何らかの方法で、それぞれ特殊な石に宿し、その力を増幅させたものを創り出して封印処置すべし。

そんな提案が神族の一部から挙げられており、アルウエスのまき散らす脅威に震えずともすむ日が近づいているようだ。著：クライスⅡⅠⅠイフ>

区切りのいい所で、イーシャはそつと古代書を閉じた。

腐り落ちぬよう、壊れぬよう、保存の魔法が掛かっているとはいえ年代物には違いないのである。乱雑に扱って良いものではない。

書かれている内容の真偽はどうあれ、この一冊で所領の年間予算に相当する価値があるのだから。

第二話 古代書（前書き）

ルビに成功。
ホツとしました。

王家の事情は複雑という偏見でもって、設定してあります。

第二話 古代書

「心配しなくても、当面の余暇はここで過ごす予定よ。この間の暴徒鎮圧の原因の領主、沢山魔道具溜め込んでたでしょう。あれの中に、ちよつと研究してみたいものがあつてね」

シウスは笑顔のまま固まった。数瞬たって、ざあっと血の気が引く。

「それは宮廷魔導師の職務です！ お辞めください！」

静寂で満たされていた書庫の中、勢いよく立ち上がったシウスの声はことのほか良く響いた。

珍しい事に、いつも細めていた目を見開いているので、今までよく分からなかった瞳の色が濃い青だと分かる。

ぼつぼつと周囲に居た利用者達が、何事かと目を向けてきた。

しいー！

静かに。

口元に手を当て、イーシャは吐息で促した。

この場所が何処であるか、思い出したのだろう。

シウスはぐるりと周囲を見回すと、何事も無かったように椅子に座り直した。

「確かに魔道具の研究は危険よ、でもね。慎重に、手順さえ間違わなければ問題ない事でもあるの」

正しい扱い方さえ知っていれば、魔道具は一般人でも所有できる。イーシャが古代書を読んでいるのは研究に入る事前準備だ。対応

出来るよう、さまざまな古の知識を頭の中に入れて増やしておく。
炎の精霊ルビエラが宿る『紅の刃』もそうやって手に入れた。

二代目ディアマス王ヴィルルドが所持し、その死後扱える者がおらず専用の宝物庫に封印された『紅の刃』は非常に強力な魔道具だ。適性がないと精霊^{ルビエラ}に判断されれば、火達磨になる。

イーシャは当時、母親が死んだばかりで色々と切羽詰まっていた。やけになっていたともいう。

幸いだったのは、様子のおかしい彼女に気付いた義兄が封印を解くを手伝ってくれた事であろう。そうでなければ、ルビエラに認められる前に宝物庫の侵入者除けの時点で挫折していた。

その時もしっかり過去の失敗記録を調べたりして、準備を怠っていない。正しく解呪し、ルビエラと契約を交わして所有者として認められたのだ。

「知っているでしょう？ 私は、名前持ちの炎の精霊と契約しているのよ。だから、彼女より下位の精霊や魔力が及ばない呪は、自動的に弾かれて守ってもらえる。私が研究したいと思っている魔道具、『紅の刃』に比べればオモチャ程度の魔力しかなかったしね」

魔道具は、古いものほど扱い方によって兵器になりえるものが多い。非常に危険である。故に研究には多大な労力と時間が必要となるのだ。携わったものが死亡するのも、決して珍しい事ではない。シウスの反応は大袈裟というものではなかった。むしろ多数派だ。

しかし、イーシャは反対されると余計に張り切る性分だった。義妹^{シヤ}の性格を把握していた兄は、知らぬ間に一人で突撃して行きかねないからこそ止めずに手伝う事を選択したのである。

「し、しかし、ですね」

「くどい。テオ」シウス、陛下には問題ないと報告して」

きっぱり。

背筋が竦むほどの鋭い声をかけると、イーシャは机に目を向けた。正確には、シウスが偽装に使った古代書に。手元の魔物事典は興味深いが、魔道具に関する記述はまるで無いので、違う古代書が必要なのである。

まだ何事か言っているシウスを無視し、イーシャは一番近い古代書を引き寄せた。

「イーシャ。魔道具の研究をする予定と聞いたぞ」

翌日の早朝。

レスクは疲れた様子で彼女に尋ねた。こころなし、先日比べ髪や肌に艶が減って見える。

「その予定を立てておりましたが、他にしたい事が出来たので改めます」

「違う事、とな？」

シウスの報告を深刻に受け止めたのであろう。イーシャが呼び出されたのは王の私室だ。愛称で呼んでいる事から、王としての招きではないと示している。

目の前に置かれた薬草茶から立ち上る香気が、半日休みだからと今まで起きていたイーシャの目に染みる。

「はい陛下。下準備中に面白い書を発見しまして」

「お前が、面白いと感じる書？」

言い回しが気にかかったようだ。

レスクは怪訝そうに眉をひそめた。

さすが御父様、勘が良い。

そう思いながら、イーシャは大きく頷いた。

「はい。厚さは大したことが無かったのですが、少々難解で。先ほどようやく解読が終わったところですよ」

「少し？ イーシャ、お前は古代語は殆ど解読できるようになったと言っただけですか？」

「はい。それは虚偽ではありませんよ。ただ私は古代魔法語の方が得意なのです。古エルフ語で書かれていたので手間取りました」

その身に精霊を宿して生まれる六の民族。

その一つ、植物の精霊を体内に宿し、それによって植物に関する能力を有する森の民エルフ。

彼等の寿命はヒトのおよそ十倍。成人したのちはその姿のまま、千の時を生きる。

その多くが森と共に生き、暮らすエルフだが、長寿な民族だけあって残される歴史も文書も信憑性が高い。今のエルフ語になったのは三百年ほど前の事で、それ以前とはまるで異なる。今のエルフ語はヒトとの交流で生まれたもので、以前のものは精霊語が元になったものであるから当然だ。

難易度は桁違い。

古代魔法語は難解だが文字数が少ないので、その倍の字数を用いる古エルフ語より取得は容易かつたりする。

「古エルフ語か……イーシャ、お前の知識を一割ほどアルフにくれ

「やる気はないか？」

「王太子殿下は、私などより何倍も聡明な方です……やる気にさえなれば」

「そうだな……アルフは単に怠けておるだけだ。せつかくの才を無駄にしおって」

レスクは苦笑すると、薬草茶を一口飲んだ。

「話がそれたな。結局、その書の内容はどんなものなのだ？」
「バテユイ樹海の遺跡について」

レスクの顔が、あからさまに引き攣った。

予測通りの反応に、イーシャは微笑み返す。

「題は『最も美しき存在』で、書にはこう綴られています。
＜最も美しい存在をあえて挙げるならば、私は命を賭けて宣言する。
これ以上のものは他に存在しえない。

最も美しい存在という意味を、正しく十全に理解した上で求める
のであれば、探すと良い＞」

筆者の意図は明らかだ。

決してやってはいけないと拒絶を強調されると、むしろ逆にやってみたくなるというのが人情である。

つまり逆。

本当は探すべきではないという意味合いだ。場所については三重に呪で隠してあったのだから。

だからこそ、イーシャは余計に興味を持った。

美は万人に共通するものではない。

個人どころか、同じ時代でも地方によっては美醜が逆転している事もある。

それなのに、ここまで断定しているのも興味深かった。

「バテユイ樹海に行く手続きさえ済めば、そう時間のかかるものではないようです。次回の我が軍の定期出勤までは書類作業ですし、五日ほど休暇申請しても充分手は足りません。バテユイ樹海に通じる転移門の使用許可と族長への謁見手続きの申請、御許し頂けますね？」

「許さん！！」

レスクは即断した。

「遺跡だと！？ まだ魔道具の方が私の目に届くだけ何十倍もましだ！！」

「すでに調査は終了した遺跡なのですよ。陛下。著者自身が最深部まで到達しているようですから。危険度は極めて低いと考えられるのですが」

わざわざ古エルフ語で書かれているのだ。ヒトが書いたとは思えない。仮にヒトが書いたとしても、癖がつくまで使用し慣れた人種が偽りを書くとは思えなかった。

エルフを含め、精霊を宿す民族は揃って長寿だ。その分、己のしでかした結果を目の当たりにする確率も高い。故に、適当な事は書いて残さないし、残せない。

「駄目だ。許可は出さん」

「嫌です。許可して下さい」

「嫌でも駄目だ。私が駄目と言ったら駄目だ」

そう言って、統一王はそっぽを向いた。

大仰な二つ名持ちのレスクは、基本的にイーシャに甘い父親である。唯一愛した女性の子であるイーシャを誰に憚ることなく可愛がっているのだ。憚るべき后が彼には存在しない。

既に年頃である末娘に、孫が見たいと口にはしても。イーシャが断れる縁談しか振らない。

幾らでも政策に利用出来るのにも関わらずだ。この点からも、傍に残す気満々だというのが透けてみえよう。

ちなみに、レスクにもナイシヨだが、大陸の状況によっては政略結婚の必要がある事態になりかねないので、イーシャは保険を掛けである。

結婚の約束をしている者がいるから破棄したい、と答え、相手はラムザアースの名を挙げるのだ。

本人の許可は取ってある。

先王ルフィーアと共に白昼堂々殺害された先王弟の第一子であり、レスクにとつては従弟で養子にあたる第二王子は、ディアマスの結婚相手だ。

複数いる後見の財力・権力・権威・勢力が随一と言ってよく当時、幼い彼を旗頭に独立されかねなかったから養子にとつた彼自身が、非常に有能な歴戦の知将である。

義理とはいえ兄妹。

倫理的に眉を寄せる者はいらるだろうが、ラムザアースを超えれる結婚相手などいないのだ。簡単に破談へ持ち込める。

「どうあっても許可を出さないとおっしゃるのですか？」

「出さぬー！」

仕方がない。

イーシャは奥の手を使う事にした。

「御父様。許可を下さい」

レスクが反対して、何かを望むイーシャを押し留められた事は一度もない。

魔導師を目指した時も、母親が死んだ翌日に騎士として無理やり王に誓いを捧げた時も。初陣に出た時も、結局レスクは許した。

四年振りにレスクを称号ではなく父と呼んで。

無理を通す時の決まり文句を、イーシャは口にした。

「許可はあつた方が色々都合が良いというだけのものよ、御父様。貴方が許して下さいでなくて、本当はかまわないの。他の人に頼んで、知らないうちに勝手に手続きを通して、やりたいようにやるから」

第二話 古代書（後書き）

王は最高権力者ですが、他の宰相とか大臣とかで通せてしまつ書類はそれなりに在るので、イーシャは強気です。

第三話 遺跡への道（前書き）

読んで下さった皆さん。

お気に入り登録なさってくださいの方、ありがとうございます。
面白いと感じて下さるよう、頑張ります。

第三話 遺跡への道

デИАマス王国中央部ラザール地方、バテユイ樹海。

ブルートウス大陸の十分の一を占める広大な樹海は、迷いの森と一般には呼ばれている。その広さもさることながら、精霊力の密度と磁場が異様なまでに高く、自然に迷い^{メイス}の呪が樹海全域にかかってしまっているのだ。

磁石は役に立たず、生来の住人以外は必ず迷子になれるというありがたくない保証付き。

精霊力の密度が高いせいか、癒しの力の濃度も高く、聖獣と称される存在も数多く生きている。

いわば巨大な聖域なのだ。それ故に開発が出来ない。

古来より此処に住んでいるのは、そういった聖獣や魔獣、環境に適応した動物達。そして、その身に植物の精霊を宿す事で加護を得た森の民エルフ。

「<最も美しい存在>ですか……」

エルフ族長フィアセレスは、パラパラと古代書をめくった。

「<バテユイ樹海のシリスの街を通り過ぎ、なお森の奥まった地に在る>

そう記されているのですが、それらしい遺跡の心当たりは御有りでしょうか？」

「……確かに、そう記されてありますね」

ため息混じりに同意すると、フィアセレスは古代書を閉じた。

イーシャの目の前に居る、外側に向けて跳ねる癖の強い長い黒髪の美女は、二十歳前後にしか見えないが、七百歳を超えている長だ。フィアセレスのエルフ特有の長く尖った耳が、へによっと下がって見えた。その中性的な美貌が曇っている。

古代遺跡に案内して下さい。

そう言われれば、その顔が曇るのも当然だ。

樹海内にある四つの街の中、転移門から飛べる方陣が設置されているのはシリスのみ。

レスクから許可をもぎ取ったイーシャは正規の手続きを済ませ、シリスの街にやってきた。王への譲歩として、御目付け役のシウスも連れて。

エルフの街はヒト以外の他の民族同様、自治である。

王の権威は大してないが、無碍にされる事もない。

族長との会見も事前に手続きしてあったのだが、フィアセレスの反応は良いと言えるものではなかった。

「……心当たりはあります」

「本当ですか！」

フィアセレスは頷き、古代書を卓の上に置いた。翡翠色の瞳が憂うように陰る。

「この書は、本来長以外に秘されているものの一つですね。ルーフイアが図書館の蔵書を集めていた時に紛れてしまったようです……貴女は其処に行く事を望んでいるようですが……貴女に限らず夢

の民は、本来未知であるべき存在を何故放っておかないのでしょうか？」

夢の民というのはヒトの事だ。精霊を宿す六の民族はそう呼ぶ。

フィアセレスの言う事は真理の一つだ。

世界にとって余計な事をするのは、体内に宿る精霊に少なからぬ影響を受ける六の民族でも、本能が強い獣の民でもない。常に、ヒトである。

「そもそも何故、遺跡などに行きたいのです？」

「最初は、研究の為に魔道具の記述を探していたのです。その途中で、この書を見つけて踏破済みの古代遺跡という事で、興味を覚えました」

「魔道具を研究しようと考えた理由は？」

イーシャは一瞬迷ったが、正直に答える事にした。

「以前から、強力な魔道具を探しているのです。ある人に捧げたくて」

「……レスク、ではありませんね。今や戦場に立つ事は久しく無く、王国を支える為に欠く事の出来ない存在。そんな道具を捧げるほどの危険はない。

アルフェルクは一時しか興味を持たないから、意味がないでしょう。調べつくしたら、飽きて見向きもしないのが分かり切ってる」

フィアセレスは可能性のある人物名を挙げていった。

「ラムザアースは……必要ですね。暗殺される可能性は王太子アルフェルクより高い」

正解が出たので、イーシャは頷いた。

「母が死んだ時、真っ先に手を差し伸べてくれたのは彼です。この『紅の刃』の封印を、半分解いたのも。だからせめて、同じくらい強力な魔道具を見つけ、少しでも恩返ししたい。それが始めた理由です」

自己満足の為だ。

彼は見返りを求めている。そうだからといって、イーシャは暢の気に甘えていられなかった。

高い目標だ。

名前付きの精霊は高位である。そんな存在が宿るこの剣並みに強力な魔道具は、今のところ見つかる気配すらない。しかし、劣るものを渡したくなかった。

この様子では案内してくれそうもない。

そんな風にイーシャが判断していると、ファイアセレスは古代書を火の入っていない暖炉に投げ入れた。

「他言無用で新たに書へ記す事もなく、私にこれの処分を任す。それが案内の条件です。どうしますか？」

なるほど。

イーシャは心の中でそう呟いた。

ファイアセレスは遺跡の存在を隠匿いんとくしたい。けれど、恩返しをしたくてこの書を発見するに至ったイーシャを無碍むげにするのは躊躇ためらわれる。

古代書を処分すれば、イーシャを通す以外世間には遺跡の真偽が
広まる事は無い。

お目付け役は文官で体力不足であるから、置いていく予定だとイ
ーシャは最初に告げているのだから。

古代書の価値は一財産どころではないものの、間違つて流出した
部外秘のものだと教えられたので、本来イーシャには口を挟む権利
が無い。

そして、彼女は好機を台無しにするような間抜けではなかった。

「遺跡の感想は胸に秘める事にします。その書はフィアセレス様の
思う通りになさって下さい」

細く険しい獣道を、フィアセレスは平地を進んでいるかのように
歩く。

さすが森の民。

優美ともいえる様子に感心しながら、イーシャは彼女のあとに続
いた。

將軍位にあつて、戦地を渡り続ける事も多いイーシャは並外れた
体力の持ち主だ。そんな猛者が苦心するような悪路を、華奢なエル
フ族長は散歩しているような気軽さで進む。

まともな平地はシリスの街周辺だけ。

シウスを置いてきて正解だった。

イーシャは、しみじみそう思った。足手まといを気遣う余裕は持
てそうにない。

シウスは外交官としての本来の職務を全うして、森の民との友好

的な交流を頑張って貰えばいいだけだ。

初めて歩く樹海の空気はヒンヤリ心地よく、澄み切っている。イーシャが見た事の無い植物も多くみられ、歩くだけでも十分価値はあった。

森の民は樹海の散策でさえ、めったに許可を出さない。樹海の中で生きる、あらゆる生物を守るためだ。事実出発時に、余計な動作はするなと警告された。

「もう少しですが、休憩しますか？」

「もう少し、という事は近くまで来ているのですね？」

イーシャの視界には、遺跡らしき建造物は全く入っていない。遺跡ごと森に飲み込まれ、遠目で確認できないという可能性は十分ある。

フィアセレスは青白い顔で頷いた。

「ええ。マナの濃度が飛躍的に増大してきていますから。貴女は感じませんか？」

イーシャは少し考えてから、首を振った。

樹海に入ってから、通常の数千倍もの精霊力と魔力を感じていた。彼女の魔力は、ヒトにしては高い方だが、その細かな差分が分かる。敏感さは無い。

フィアセレスの顔色が悪くなってきたのは数分前からだ。急に蒼褪めたので気にかかつてはいたものの、空気の変化はまるで感じなかった。

「それほど魔力の強い遺跡なのですか？」

「遺跡自体、確かに強力です」

歯切れの悪い言い方で認めると、フィアセレスは再び歩きだした。他にも要因はあるようだが、イーシャに教える気が無いのだろう。

更に数分歩くと、急に森が開けた。

一歩踏み出すまでは、確かに変わらぬ風景が見えていたというのに。

イーシャは思わず、両目を擦った。

擦っても変化はなく、視界は広々とした草原を認識している。

樹海の魔力のせいなのか。

フィアセレスは平然としている。

シリスの街から出た時に、全く同じ現象に遭遇した。それを考えると、自然のものというより人工的な呪の可能性が高い。

余所者の目を欺くための、五感さえ惑わせる強力で巨大な幻影。

遺跡が近い。

そうイーシャは考えると、胸を弾ませて足を進めた。

しばらく進むと、何もない草原に変化が起きる。

草原のちょうど真ん中。

数本の巨木に囲まれた、白い祠びらのようなものが見えた。近づくと、フィアセレスの顔から血の気が更に引いていき、もう真っ青と言いつれるぐらいだ。

遺跡まであと二十Mほど。

手前にある切り株の所で、フィアセレスの歩みが止まった。

第三話 遺跡への道（後書き）

フィアセレスの話し方が丁寧なのは、覚えた共通語が丁寧なものであっただけで、立場的に彼女の方がイーシャより上位です。

ちなみに単位は単純ですが、

1メートル＝1メートル

1セト ＝ 1センチ

1ミル ＝ 1ミリ

1キーロ＝1キロ

です。

第四話 遺跡探索（前書き）

前回ちょっと短かったのを気にしていたら、少し長くなってしまいました。

第四話 遺跡探索

「どうぞ、イスフェリア。直接触れても大丈夫ですよ」
「では、お言葉に甘えて」

イーシャは嬉々として進み　フィアセレスが足を止めた理由を、身をもって理解した。

急激な空気の変化。

圧迫感どころか重量まで感じるほど、超過密で高純度の凄まじい力が漂ただよっている。

万力で頭を締め付けられるような酷い痛みを覚えたが、此処まで来て行かないというのはだいなしである。

イーシャは頭痛を耐えながら、遺跡へと向かった。

遺跡は小さな家程度の大きさで、形状が墓のようにも見える。

材質は手触りからして金属のようだが、イーシャの知識に無い種類だ。

うつすら光を発するのは遺跡にかかった呪のせいだろうか？

表面は磨いたようにつるつるしていて、繋ぎ目のようなものはない。

あっさり一周して、入口が無い事を確認すると、イーシャは切り株の所まで足早に戻った。

体にかかっていた負荷が消え、頭痛も治まる。

どっと噴き出した汗を手巾で拭ハンカチいながら、イーシャはフィアセレスの方へ体を向けた。

「それで……入口は何処に？」

「なかつたのですか!？」

目を大きく見開いて、フィアセレスは驚きもあらわに言った。
どうやら彼女は遺跡に直接入った事がないらしい。

彼女より数倍魔力に対して鈍感なイーシャでさえ、あれほどの圧迫感を受けたのだ。

無理もない事である。

「困りましたね。入口に関しての記述はなかつたんですよ」

此処まで足を運んで目的のものが見つけれないなんて。

他言しないという約束なので、目的を達したとしてもどうだったか内容を報告しないが、発見ならずとなるとレスクに説教の話題^{ネタ}を与える事になってしまう。
それは出来るなら避けたい。

イーシャは遺跡の周辺を探る事にした。

草原が広過ぎる。

そう感じたのだ。

「あれは……」

「……何か気にかかる事でもおありで？」

同じように遺跡の方向に目を向けていたフィアセレスの呟きに、
イーシャは彼女に目を向けた。

フィアセレスは相変わらず顔色が悪い。しかし、先程までは今の
ように首を小さく傾^{かし}げ、眉間に皺^{しわ}を作つてなかつた。

何故、此処^{ここ}にあるんだらう。

そう言いたげな表情をしている。

「ええ。遺跡を囲んでいる木が少し」

イーシャの方に目も向けずに、じつと彼女は観察している。イーシャはファイアセレスに倣って、巨木を観察する事にした。

全身の意識を視覚に集中させ、自分自身の魔力を流し込んで強化し、研ぎ澄ます。

イーシャの視界に、金と銀に光る粒子が加わった。

光る粒子は魔力の素　あらゆる源たる命の素だ。

通常は、ふよふよとそこら辺を漂ただよっているものである。それが異常に密度が高い。あまりの濃度に風景の神秘性が一気に増大する。

そこまでは聖域内である事と、ファイアセレスが先刻主張していた事から驚きはしても理解出来た。

問題は、そのマナが巨木から大量に放出されているように見える事だろう。

イーシャの記憶が確かなら、マナを創り出す木は世界樹周辺に生えていると言われているのだ。名称はそのままマナの木である。

ファイアセレスの反応を見るに、マナの木を見るのが初めてといった感じは見受けられない。

バテユイ樹海内に世界樹があるのは間違いなさそうだ。むしろ世界樹があるからこそ、マナの木も沢山あり、聖域と呼ばれるにふさわしい超高密度の魔力と精霊力で満ち溢あふれているのだろう。

あらゆる世界を構成し、場として繋ぎとめるものが世界樹だとされている。

書に場所が記されておらず、はっきりいって世紀の大発見になるのだが、森の民には常識のようだ。

その上、ファイアセレスの様子から、この近辺には無いようだ。

「分かりました」

「は？ 何が、ですか？」

唐突にファイアセレスが呟いた。

わかつたって何が？

世界樹の件でグルグル考え込んでいたため、イーシャは話しかけられて驚いた。

その反応は予測してなかったようで、ファイアセレスはパチパチと目を瞬かせている。

「入口が何処か、ですよ」

「ああ！！」

イーシャは、ぼんつと右の掌^{てのひら}を握った左手で叩いた。

そもそもの目的は遺跡に入れる場所を、探す事である。

世界樹に関する想像に意識がいき過ぎて、すっかり忘れていた。

貴女、それ以外に何をするために来たの。

そう言いたげに胡乱^{うろた}な眼差しをするファイアセレス。その無言の問いかけには答えず、イーシャは彼女と向かい合う形に体を動かした。

「何故分かつたんですか？」

「マナの動きがおかしいからです。一定の動きで循環するはずのマナが、一部妙な方向へ流れているのが貴女には見えませんか？」

イーシャは素直に頷いた。

マナの動きには規則性がある。しかし、この場所のマナは莫大な量かつ高密度過ぎて、イーシャには観測が難しいのだ。

ファイアセレスは一言そう、とだけ呟くと、マナの木を指差した。

「あの木を境に、遺跡へと向かう流れ。これはそのまま遺跡の動力として吸収されているのでしょうか。これは問題ありません。古い遺跡周辺ではままある現象です」

ファイアセレスは空間を指で示し、流れていくマナの動きを再現して見せた。イーシャが見ているのを確認し、説明を続ける。

「おかしいのは八方位へ向かって伸びる流れの半分ほどです。草原の半ばの辺りで屈折して、此处に向かっています」

ファイアセレスは、傍らにある切り株を指差した。

「じいー」。

イーシャは真剣に、切り株周辺のマナを注視した。ややあって、ぽん、と手を叩く。

「マナは遺跡に向かって流れ吸収される。つまり、この下が入口なんです」

イーシャはファイアセレスに礼を述べると、慎重に切り株を調べ始めた。

切り株そのものが偽装だった。エルフにも不自然さを感知されない、巧妙な切り株に見える跳ね上げ式の扉だったのである。鍵はかかっておらず、扉は簡単に開き、明らかに人工物と分かる階段が覗く。

「地上の遺跡も偽装なんでしょうか？」

通路の壁は地の部分と同じ、白くぼんやり光る金属で、視界は良好だ。ただ、歩を進めることに空気が冷たく澄んでいく。冷気は遺跡の呪からきているようだ。

地上との温度差のせいか、イーシャは頭痛を感じた。

ファイアセレスはゆっくりと首を振る。

「私はそう思いません。おそらくあの部分が動力としての中心。この道は、通路である前に封印術式の一部だろうと考えられます」

封印術式。

さらっと物騒な単語が出てきた事からして、ファイアセレスは遺跡の目的を知っているようだ。強く先導を望んだのも、イーシャを見張る意味合いがあるという事である。

余計な事をさせないように。重要と思わしき場所を避けるために。

「それにしても寒いですね。結界を張っても大丈夫でしょうか？」
「かまわないでしょう。これだけの魔力が零れ出ているのですから」

通路は氷室のような寒さになっていた。

イーシャは樹海を歩くのに動きやすいよう、長袖の厚い上着に長スボン姿だ。

階段を下り始めた時点で寒いと思っていたのだが、彼女より華奢で、ブーツにワンピースという軽装なファイアセレスが平然と歩いているので、言い出しにくかったのだ。

しかし、我慢も限界に近い。このままでは風邪をひく。

イーシャは立ち止まって、背負っていた『紅の刃』を鞘から引き

抜くと刀身の腹を額に当てた。

『紅の刃』は刀身が1M^{メートル}、全長がイーシャの身の丈近くある大剣だが、軽量化の呪が掛かっているため見た目ほど重量はない。柄飾りの拳ほどある紅いダイア以外いたって一般的な造りだ。

意識を剣に集中し、目を閉じて心の中で語りかける。

ルビエラ。寒い。燃える事無い、ゆっくり温度を上げる熱で暖めて。

お願い、力を貸して

はいはい。イーシャちゃんを暖めれば良いのね？

のんびりした精霊の思念と共に、冷気が柔らかい熱気に変化してイーシャの身体を包み込む。冷え切った手足に、じわじわと熱が染み込んでいった。

ふうー。

イーシャは満足げな吐息をこぼすと、剣を鞘に納めた。

精霊であるルビエラは当然のことながら、ヒトであるイーシャと意識が違う。

同調は出来るが、共感は難しいのだ。

例えば、本性が炎であるルビエラは寒いという感覚が無い。

契約している関係で、イーシャの思考は常時ルビエラにダダ漏れ状態なのだが、寒さを理解出来ないので傍観しているだけだ。極端な話、凍死しても原因が分からぬまままでいるだろう。

基本的に、分かりやすい生命の危険が迫らない限り、ルビエラが自発的な行動する事はまず無い。

こうしてイーシャから具体的に頼まないと、力を振るわないのだ。兵器としては強力極まりないが、日常的な補佐を求めるには逐一指

示が必要となる。

イーシャが目を開けると、フィアセレスが驚愕の面持ちで彼女を注視していた。

「い、今の魔剣。もしかや『紅の刃』ですか？」

フィアセレスの体内に宿る精霊と反発しているのかもしれない。
植物と炎じゃあ相性悪いか。

そう思いながら、イーシャは頷いた。

「そうです。貴女の中の精霊が何かの支障をきたすようなら、これ以上の使用を控えますが？」

「いいえ、その点は問題ありません」

フィアセレスは、ふるふると黒髪と長い耳先を揺らしながら懸念^{けねん}を否定した。

ただ。

そう付け加えると、歩きだす。

「伝承の通りなら『紅の刃』には火の王が宿っているとの事でしたので。先程力を振るうまで、精霊の気配さえ感じられなかった事に驚いただけです」

「え!？」

火の王 すなわち、火の精霊王のことだ。

精霊は上中下の三つの階級に別れ、遙か上に王が在る。精霊王は神に等しいかそれ以上の力を持つと言われ、神の居た時代以後、確認されていない。

イーシャは思わず足を止めた。心の中で、絶叫する。

ルビエラ！

貴女、本当は火の王なの！？

アレ？ 知らなかったの？

烈猛れつもうの性質を持つ火の精霊である事さえ、疑わしい和やかな思念が返ってきた。

イーシャが、ルビエラを上位精霊と認識していたのは、何も彼女の気性からだけではない。『紅の刃』から引き出せる炎の力からだ。ルビエラは契約時に、一日どれぐらい力を行使可能か宣言してきた。

火の王は要素エレメントそのものに等しい。それこそ、ほぼ無限に力を引き出せるはずだ。

私じゃなくて、イーシャちゃんの精神が耐えられる分よ。

ヴィルも似たようなものだったから、ヒトが火の王ワタシから使える限界に近いんじゃない？

ルビエラから、珍しく論理的な答えが返ってきた。

存在の次元が遥かに違うから、その力を思いのままに扱う事など不可能なのだろう。

そう考えて、イーシャは身震いした。

寒いのではない。

精霊王を今現在の状態にした存在がいる事に気付いたからだ。

ルビエラは『紅の刃』の内部に力の殆どほとんを封じ込んでいる。そもそも、人間にそんな芸当が出来るはずがない。

『紅の刃』は約百三十年前まで、出入り口の塞がれた洞窟内のマグマの上に突き立てられていたのである。神の御技だろうか。

イーシャちゃん。また考えが飛んでるよ〜

イーシャはハツと我に返ると、現状把握に努めた。先導するファイアセレスとはあまり離れてはいない。早足で後を追う。

通路自体さほど広くは無い。三人並んで歩くと相当狭苦しく感じるだろう。

しばらく、樹海の時と同じように黙々と歩く。通路は緩やかな下り坂のようになってるので、どんどん深く地の底へ潜っている事くらいしか分かる変化はない。

気にかかる事は、頭痛が続いている事だろうか？

もうイーシャは寒くないから、きつと遺跡内の魔力に当てられているせいだ。彼女でさえ、こうなのだ。もっとマナや魔力に敏感なファイアセレスは、更に重症だろう。

大丈夫なのか、とイーシャが尋ねようとした時だった。

黙々と一定速度で進んでいたファイアセレスが、唐突に足を止めた。彼女はしばらくの間、無言で立ち尽くしていたが、糸が切れた人形ネットのように力無く膝をつく。

「ファイアセレス様!？」

イーシャは慌てて臨闘体勢をとった。『紅の刃』を抜き、即座に行動できるよう意識を切り替えると、ファイアセレスに追い付き、様子マリオを窺う。

「どうしました!?! 一体っ……………!?!」

フィアセレスは床に座り込んで前方を凝視し、固まっているかのようにピクリとも動かなかった。

ポロポロと、その翡翠色の目から涙をこぼして。

第四話 遺跡探索（後書き）

次、ようやくあらすじに載ってた彼が出ます。

第五話 最も美しさ存在（前書き）

完成したら0時に予約投稿する事にしました。

毎日更新を目指して描き貯め中です。

第五話 最も美しさ存在

精神攻撃。

エルフ族長の様子に、まずイーシャはそう考えた。遺跡内は濃厚な魔力に満ちていて、索敵が難しいから魔物が住みついていても、おそらく気配を感じない。戦闘態勢に入っている今でさえ、目の前に居るフィアセレス以外に気配を感じないのだ。襲いかかってくるような空気の流れすら、読み取れない。

これは問題だ。

『紅の刃』を持っている状態のイーシャは、敵の呪による精神攻撃をくらっても通じない。

自動的にルビエラが弾く。

背後にフィアセレスを庇い、イーシャは前進した。

前方は巨大な空間が広がっている。

ようやく通路ではない場所まで辿り着いたのだろう。漂う冷気が霧のように視界を妨げる。上方は晴れているのに不思議な事だ。

そこまで考えて、イーシャは頭の中が真っ白になった。

自身の意識とは関係ないところで涙がこぼれ落ち、視線が一点のみに吸い寄せられる。

いにしえの昔。

かつて森の民が魅せられたく最も美しき存在が、そこに在った。

半円型の天井から幾百もの鎖が垂れ下がり、極大の氷塊を覆い包んで支えている。

天井には一見模様と見紛うほど、びっしりと隙間なく力ある古代

魔道文字が綴られ、線化して魔法陣に組み込まれていた。

魔法陣は幾つもの三角や四角を内に重ね、描かれた八芒星。

極寒の永久凍土に在るかのように、上空にある巨岩ほどの氷塊はそのまま形状を安定化させている。

その氷の中。

まるで琥珀こほくに閉じ込められた虫のように、だらりと手足を伸ばし眠っているような人間が透けて見えた。

距離も遠く、天井までの高さが少なくとも二十Mメートルあり、氷塊を覆う鎖に紛れていて見えにくいというものにも関わらず、はっきりと見える。

表現できないほどの美しさだ。何を言っても薄っぺらになってしまっほどの、圧倒的な美。

涙が出るのは感動故だろう。

夜の闇よりも深く昏く艶やかな漆黒の髪。

最高品質の磨きぬいた黒壇に、柔らかさと瑞々しさを含ませたような肌。

皮一枚の誤差も許されぬバランスで形成された姿。白っぽい衣装を着ているように見える。氷と距離に遮られ、性別までは分からない。

ガクガクと激しく体を揺さぶられ、イーシャはようやく思考し始めた。

「……………この人、人間、かしら？」

更なる強烈な刺激が、イーシャを襲った。

パシ！ ごっ！

高い音に続いて鈍い音。ほぼ同時に、イーシャの右頬と左の頬と

いうより顎に疾る痛み。

「人間、のように見えるけど……この美しさ、不可能よね……もつと傍で見れば分かるかも」

そう呟いた時、イーシャの視界が突然塞がれた。ひんやりとした細い指が、両目を覆っている。

抗議の怒気を隠さず撒き散らし、イーシャは邪魔な手を除けると振り返った。

「邪魔しないでよ！　せつかく見てるのに！」

そこに居たのはフィアセレスだった。

真剣な表情で、イーシャの様子を観察するかのようになっている。

「確かに、素晴らしい光景です。私もそう思いますよ。とはいえ、死ぬまで見つめているおつもりで？」

うっ、とイーシャは鼻白んだ。

いつのまにか、床に座り込んでいた。『紅の刃』を床に落として、どれほど見入っていたのか、首の筋が酷く痛む。

よほど力を入れて叩かれたのか、顔の痛みも凄かった。熱を持っているので、きっと腫れているだろう。

揺さぶられて、わずかに頭が働くようになったものの、目が離せずに動けなかった。

時間の流れも五感も思考さえ、全て消し飛ばされて魅了される。そうか。

イーシャはようやく理解した。あの一文の意味。

<最も美しい存在という意味を正しく十全に理解した上で>

その言葉は、死の警告。

「申し訳ありませんでした、ファイアセレス様。正気に戻して下さい、ありがとうございます」

ファイアセレスが止めてくれなかったら、警告の示唆しすする通りになっただろう。『紅の刃』を触れていない限りルビエラと心話も出来ないので、助けはない。

己の死に気付かぬまま見惚れ続ける。それはそれで幸せな死に方かもしれないが、そう考えるとイーシャの頭は冷えた。

「それはお互いさまと言うものです。私も貴女で視界を遮られ、左足に『紅の刃』の柄が落ちるまで同じ状態でしたから」

ファイアセレスはそう言って、立ち上がると歩き出した。

「遺跡を観察するのでしょうか？ くれぐれも、上を見ないように気を配って下さい」

イーシャは頷いて、立ち上がった。『紅の刃』を回収し、床を見ながら慎重に奥へと進む。入口を経過すると、視界を遮っていた冷気が消えた。

侵入者除けのために呪が掛かっていたのだろう。前が見えなければ、自然と視線は上に行く。

中は広がった。王城にある儀式場よりも広い。ここが遺跡の中心地で、間違いなさそうである。

中央まで来て立ち止まると、イーシャはぐるりと周囲を見回し、

観察を始めた。

広さは降りてきた通路を足して考えてみるに、地上の草原がすっぽり収まるほど。

水晶に包まれたマナの木が八本。天井に描かれたものと全く同じ八芒星の魔法陣が床を覆い、マナの木はその頂点部分にそれぞれそびえ立っている。

壁にも古代魔法文字ルンがびっしりと浮かび上がり、一つ一つが寒気がするほどの魔力を放出していた。

「これは……どれほどの魔力総量になるの？」

基本的に、魔法陣は複雑で強大なほど作用する力が増大する。角の多い八芒星で、綴られ方からすると効力は、表裏合わせて十二乗だ。

マナの木から放出されるマナが、陣に導かれて巡回する毎に増幅されていく仕組みになっている。

上空にある鎖や氷塊にも何らかの術式が施されている気がするのだ、全て合算すれば天文学的な数字になるだろう。マナの木を包む水晶も、魔力を高める性質を持つ。

「あ、地上部分も何か施されてそう。そうなる」と

最低量の計算を始めたイーシャの思考に、痺れるような頭痛が割り込んだ。先刻から感じ続けていたモノの比ではない。あまりの激痛に、頭を抱えてその場に座り込む。

「イスフェリア？ どうしました？」

慌てた様子で、フィアセレスが支えの手を伸ばしてきた。彼女の

触れた部分だけ、熱を帯びて暖かい。

ルビエラのおかげで暖かいはずなのに、全身が冷たく、イーシャの視界が暗く光る。

まるで、低血糖か貧血を起こしているような状態だ。

じつとりと汗が噴き出し、妙に聴覚が冴えて自身の呼吸する音すら気に障る。

「なに、これ……私の身体、どうしてこんな……？」

イーシャの頭痛は酷くなる一方だ。

痛みに紛れて凄まじい勢いで、何かの紋様と音としてではない『声』が脳裏を埋めていく。

いにしえの、力ある言葉。（このは）

博識なイーシャにとっても、ただの紋様としかとらえられないほど古き文字が、ただの音の連なりでしかないはずの言葉が、どうしてもか意味も発音の仕方も理解できた。

意識しないままに、それらの言葉が、色を失った唇からこぼれ出る。

「この存在こそ咎とがなり。」

知ることなかれ。近寄ることなかれ。見ることなかれ。触れることなかれ。」

フィアセレスが息を呑んだ。その美貌が強張り、土気色に近いほど血の気が引いていた。

イーシャの両肩に手を置くと、彼女は華奢な体格に似合わぬ力で揺さぶってくる。

「口を閉じなさい！ 神の言葉を世界に出してはならない！！！」

ちゃんと聞こえているのに、イーシャは反応出来なかった。唇が紡ぐ言葉を止められない。

「 解き放つことなかれ。

時足らずして、この場から放たれたのならば。

大いなる厄が目覚め、覆うであろう」

心臓の音が聴こえる。身体の中を廻る血の流れる音すらも。今のイーシャには聴こえていた。

「 我等は此処に示し、残す。

不幸にして幸いなる者よ。我等のコトノハを唱える者よ。

心せよ。覚悟せよ。その身に余りある力を受け止めることを

イーシャはようやく気付いた。

恐ろしく純粹で、膨大な『力』が身体の隅々まで広がり廻っている事に。

彼女の許容量を遙か上回る『力』に身体が負荷を訴えているのだ。即座に内側から破裂してもおかしくない、空間すら引き裂いて歪ませるであろうほどに巨大な『力』が言葉を紡がせている。

「 理解せよ。識^しるがいい。

聖と邪を開放するものよ」

増大された聴覚が、遠く、何か薄く硬いものが割れたような、小さな音を拾う。

同時に、イーシャの身体を蝕んでいた『力』が消失した。

「願わくば時よ。十全に満ちていよ。
大地よ。放たれし存在を。力を。受け入れてあれ。」

『力』の消失と共に、頭痛が消えて感覚が元に戻る。
イーシャは安堵するよりも、ゾツとした。正面に居るファイアセレスと、思わず顔を見合わせる。

エルフの族長はイーシャに負けて劣らず、今にも気絶しそうな顔色だった。

ピキピキ。

窓ガラスにヒビが入ったような音が響く。

二人は同時に上空を見上げた。

氷塊に巻きついていた数多あまたの鎖が、ピキペキと高く澄んだ音をたてながら、ゆつくりと虚空へ消えていく。鎖が全て消え失せると、蜘蛛の巣のような細い亀裂を刻みながら氷塊が落下してきた。

物理原則に逆らい、ゆつくりと。

砕けて小さくなった氷の粒が、キラキラと降り注ぐ。

徐々に大きさと高度を失っていく氷塊。

落下予測地点は、ぽかんと大きく口を開け、仲良く座り込んだイーシャとファイアセレスの真上だ。

口の中に入った氷の粒の冷たさによって、イーシャは我に返った。ファイアセレスを担ぎ上げ、出入り口まで走って退避する。エルフ族長は全身鎧より軽い。

氷塊は五Mメートルほどの幅と厚みと高さを残し、床へと到着した。

その刹那せいな、マナの木が水晶ごと一斉に砕け散って粉々になり、上下左右の魔法陣が光り輝く。光は凝縮し合って、氷塊へと注がれていった。

あまりの光の強さにイーシャが目を閉じ、再び^{まぶた}瞼を上げたその時には。

魔法陣どころか、直接刻みこまれ浮かんでいた古代^{ルーン}魔道文字も魔力の欠片どころか、その場から何一つ無くなっていた。
中心地に横たわる、ただ一人を残して。

第五話 最も美しさ存在（後書き）

イーシャは普通に力持ちです。
フル装備（全身鎧）の時でも走れます。

第六話 一こ機嫌なルビエラ（前書き）

アクセス解析をして総合PVに驚いた作者です。

呼んで下さってありがとうございます。
また少し長くなりました。

第六話

「ご機嫌なルビエラ」

「あゝ！！ やっぱり、カタストロフ様〜！」

甲高い声と同時に、イーシャの目の前に巨大な炎が発生する。瞬時に炎は晴れるが、代わりと言うように一人の女性が出現していた。鮮やかな紅玉色の腰まで届く豪華な巻き毛、大粒の柘榴石を思わす双眸をキラキラ輝かせている妙齡の長身美女だ。

ふつくらとした紅い唇、ヒラヒラした薄手の朱いドレス。褐色の肌以外が全てが色彩の異なる赤で構成されている。

彼女は一点を見つめると、床から三十センチほど浮いたまま、滑るように移動していった。

「カタストロフ様〜！」

心話ではなく、直接耳に響いたルビエラの声に。

イーシャは茫然自失から立ち直った。

何か肩が重い。

目を向けると、フィアセレスの姿が。移動してきて担いだまま下ろすのを忘れていたようだ。フィアセレスはイーシャの首に手を回した状態で、まだ茫然と中心地に目を向けている。

とりあえず、イーシャは彼女をそつと下ろした。フィアセレスが自分で立っているのを確認し、手を離す。

イーシャは中心部、というより何やら楽しそうな赤い人物に目を向けた。

「ルビエラの知り合い？」

心話は『紅の刃』に直接触れてないと出来ないが、常にルビエラと同調しているので彼女もイーシャと同じものを見る事が出来るのだ。

勝手に具現化されたのはさすがに初めてだが、その気になればルビエラは今のよう^{あいつ}に実体を顕せる。ただし、『紅の刃』からあまり遠くまで行けない。

「あら〜？ カタストロフ様、眠ってるの〜？」

聞こえていないわけがないのに、質問の返答はない。

ルビエラは楽しそうに笑顔で床に沈んでいる人物を、ちよん、ちよん、と突いている。しっかり力を制御しているのか、炎は出ていなかった。

「や、やめてルビエラ！ 起こさないで！」

嚴重に封じられていた、火の王^{ルビエラ}の知り合い。

単なる人間である可能性は、まるでない。

「分かったわ〜。確か、人間って必要があるから眠るんでしょ〜？」

「そ、そう。だから自然に起きるのを待ってちょうだい」

新情報。どうやら、一応かの存在は人間の括りに入っているようだ。

イーシャは溜め息をつく^とと、混乱の極致といった様子のフィアセレスに振り向いた。

「とりあえず、場所を移しましょう。私が言うのもなんですが、ここ^こにいても何も出来ません」

「……そうですね。火の王が、何か知っているようですから」

イーシャは疲れていた。

あの『力』を受け入れていた肉体的なものと、予測外の事態が起こってしまった衝撃という精神的なもの両方だ。これ以上無駄に気力や体力を削られるのは真つ平である。

とりあえず、この遺跡から出れば肉体疲労はどうか回復可能だ。

「ルビエラ。その人をここまで抱えて持ってきてくれる？」

「はい」

「着いたら教えてね」

ぎよつとするフィアセレスを視界の端にとらえながら、イーシャは目を閉じた。シリスの街にある転移の方陣を脳裏に思い浮かべながら、呪を唱える。

これなら余計に歩かなくて済むし、一瞬だ。

「イーシャちゃん、来たよ」

「< 開け、空間の道標 >」

合図と共に、イーシャは術を起動させて周囲三M内の対象^{ターゲット}ことその場から転移した。

「あの遺跡は、神々が創り上げたもの。何千年も前から、あの地にありました」

長椅子に深く腰かけ、フィアセレスはそう語った。

手もたれを握りしめた拳が白い。相当な力を入れて握っているよ

うだ。ついつい長椅子から身体を起こして、在る方向を見ないようにするために、必死なのだろう。

そうイーシャは推察する。

全く同じようにして彼女も在る方向を見ないようにしているから、その自己攻防を指摘出来ない。

「やはりそうでしたか……今回の件で樹海に影響が出たら、報告を御願います。私の名と命に代えても補償させて頂きます。元は私の我儘が原因で引き起こされた事態。それくらいしなければ、私の気が収まりません」

遺跡は気の遠くなるほどの時間、樹海の一部となっていた。

その遺跡から、ごそつと魔力とその他の力がなくなったのである。周辺に何も影響が起こらないという事は考えにくかった。

「謝罪は受け取りました……今は先の事よりも、彼の事をどうすべきか考えましょう」

フィアセレスは左に目線を動かしかけ、慌てて右を向いた。

彼女から見て左、イーシャから見て右に一人用の寝台ベットのがある。今その寝台には、一人の青年が横たわっていた。寝台の傍には椅子があり、そこにルビエラが座って今にも歌い出しそうに機嫌良く、青年をじつと眺めている。

実はルビエラが羨ましい。

同じ行動を取りたいが、イーシャがそんな事したら遺跡の時のように意識が飛ぶ。

「ねえ、ルビエラ。彼はどういう人なの？」

「カタストロフ様はカタストロフ様だよ」

ルビエラは青年から視線を外さない。

「でもびっくり！ エストキリアが凍土化したな〜って思ってたから、姿を見なくなっておかしいと思ってたけど。あ〜んな所に封印されてたなんて〜！」

「エストキリアって？」

「えっと、確か氷大陸って今は呼んでるところ」

「……具体的にはどれくらい前なの？」

むむ。

ルビエラの眉間に皺が寄った。

「三千年から四千年くらい前じゃないかしら〜」

範囲が広過ぎる。精霊にとって時間の感覚は薄いようだ。

ルビエラから得られた新たな情報から、彼を封じたのは神で決定である。その時代ならば、まだ神が世界で存在を確認されていた頃だ。

「どうして、この人の事を知ってるの？」

「綺麗だから〜」

おそらく精霊ルビエラの言う『綺麗』はイーシャが使っている容姿を誉める意味とは違う。ルビエラの姿形は人間達の想像した火の王を写しているものであって、実は性別すらない。性別の無い精霊にとって、美醜感覚は極めて必要ないものだからだ。

とにかく青年は精霊が気を止めるほど何かが綺麗なのだろう。

容姿の意味でも間違っていない。

青年の存在感は圧倒的の一言だ。

空気に混じって彼の身体から放射される、恐ろしく強大で凄まじく純粹に透き通った力波は重量が感じられるほど。

形の良い丸い耳に、それぞれ意匠の異なる耳飾りが左右に二つずつ。複雑な文様を刻んだ赤銅色の首環^{トルク}。長い手足にはどっしりとした頑丈そうな錠が詰められ、細く長い鎖で左右が繋がっている。そして、右の中指と左の親指に聖銀^{ミスリル}の指環。

どれも、強烈極まりない封印具だ。

纏^{まと}っている衣装は材質が分からないものの、無地で細工らしきものはない。格好から分かるような、身分を証明する物はなかった。

「目を覚ますまでどれぐらいか、分かる？」

額から汗を流し、青年を見ないように努力を続けるフィアセレス。その努力をあざ笑うかのように、平然と青年を見つめて、ルビエラはわずかに首を傾げた。

「ん〜……なんか瞼^{まぶた}がびくびくしてるし、身体も動いてるからもう起きそうよ〜」

無情な答えに。

イーシャは思わず、ルビエラに固定していた視線を動かして青年の方を見てしまった。

瞬間、その超絶美形つぷりに意識が白く染まり ゆっくりと開かれた焦点の合わない眼と、視線が交わった。微^{かす}かに潤んだ形の良い眼の瞳の色は、透明感のある赤の強い金。いわゆる、『^{インペリアル}皇帝』トパーズのような美しい色彩だ。

焦点が定まり、イーシャを認識したその眼に浮かんだのは
はげしい怒り。

「エーリス！ お前、よくも嵌めやがったな！！」

早口の古代魔法語で、青年は怒鳴った。

老若男女の区別なく腰が砕けそうな低く深い美声だが、声音にひそむ怒りは尋常ではない。殺気すらはらんでいる。

状況が分からず魅了状態のイーシャに何を思ったか、青年は上体の力だけで立ち上がった。手足の長さから身長が高いのは分かっていたが、男性としてもかなり大きい方だろう。二M^{キート}ありそうだ。

ルビエラが立ち上がり、青年の前に立ってイーシャを後ろに庇うとブンブン両手を振った。

「違うよ〜。よく見て。ちょっとは似てるけど人違いです」

「……エーリスじゃない？」

鋭い眼差しが、イーシャの顔を中心に上下する。やや経って、青年の顔から怒りが消え失せた。完全に興味の失せた様子で、ルビエラに視線が移る。

「こんなに植物の力に満ちた場に、何故お前がいるんだ？ ルビエラ」

精霊語に切り替えて、青年は尋ねた。詩を吟ずるような滑らかな言葉に、ルビエラが嬉しそうに微笑む。

「この子が持つてる剣が私の寢床なの〜。一応、契約もしてるから飯の主とも言えるかしら〜」

精霊はあらゆる言語を理解するが、話せるのは精霊語のみ。

イーシャのように契約した相手には、対象の最も耳慣れた言語に

聞こえるだけで、実際は違う。イーシャは契約しているから、なんとか精霊語も分かるというレベルで話せない。

精霊語を話すには先天的な適性がある。

そして精霊に対し、精霊語で接するという事は相手を尊重して対等以上の扱いをしているという意味合いだ。ルビエラが嬉しそうにするわけである。

「そうか……ここは何処だ？」

「え」と、昔で言う、マナの聖域の中よ。今はバテユイ樹海って呼ばれてるけど」

青年の眉がしかめられた。眉間の皺が悩ましい。

ファイアセレスに青年の目が向いた。

ひう。

咽喉のどに詰まったような短い悲鳴が、エルフ族長の口から漏れる。

「その森の民。答える。俺はどうやって解放された？ アレはお前達が神と呼んでる連中が、数年かけて完成させたものだぞ」

今度は古エルフ語が低く響く。異なる難解な言語を苦も無くさらさらと使っている事から、青年がずば抜けて明晰めいせきである事も確定した。

「……………ご説明、させていただく前に、その…………私を見ないで下さいませんか？」

数分の沈黙の後、そうファイアセレスが訴えた。

彼女の翡翠色の瞳が潤んで艶めき、顔は上気している。

気長に返答を待ってた事から推察するに、慣れているのだろう。

青年はあっさり頷くと、誰もいない窓の方向へ顔を向けた。

「これは私見ですが……封印は、同調現象により解かれたようです。貴方と、私の正面に居るイスフェリア。魂の波長か気の波動か脳波のいずれかが、あるいはその全てが酷似こくじしているのでしょう」

ファイアセレスはイーシャが硬直しているのに、ようやく気付いたらしい。長椅子から立ち上がって、彼女の肩を揺さぶりながら説明した。

「貴方の力が外に、イスフェリアを介して生じた衝撃で、封印の一部が破損しました。全てで一つの封印法だったようで、そのまま自壊していったように私には思えたのです」

「ほー」

感心したように青年は呟くと、おもむろに目を閉じた。
瞬間。

イーシャの内側に圧倒的な『力』が満ち溢れる。覚えのある凄まじい激痛が、頭を貫く。あまりの刺激に硬直が解けて、イーシャは土気色に顔を染めて必死に椅子に齧りついた。

そうしなかつたら椅子から転げ落ちていただろう。驚いたファイアセレスの支える手があるがたい。

「……確かに。同調してるな」

素晴らしい美声と共に、イーシャの内にあつた『力』と痛みが消え失せる。

実験された。

そう思い至ってイーシャは憤りを覚えた。怒りで気力が湧き上がってくる。

小さくファイアレスに礼を述べると、勢い良く立ち上がった。震える手足を心の中で罵りながら、乱れた息を整える。直接視界に入れ

ないよう念じながら、青年のいる方角をきつく睨みつけた。

「私はイスフェリアキユオームハールディアマス。イーシャと呼んで。種族は夢の民よ。貴方は誰？」

古代魔法語は話せるが、呪文以外実用した事が無いので発音に自信はない。そのため、イーシャは古エルフ語で尋ねた。怒りにまかせて敬語はやめた。

青年は数秒の沈黙を挟んで、ゆるゆると首を振る。

「名前……分からないな　俺は、誰だ？」

第七話

カタストロフ（前書き）

もう少しであらすじに追いつきそうです！！

第七話

カタストロフ

「ルビエラ？」

イーシャが困惑もあらわに声をかけると、火の王は肩をすくめて見せた。

「名前がどうか分からないけど、周りがカタストロフって呼んでたから私もカタストロフ様って呼んでるよ」

「違和感が無いから、そう呼ばれてはいたんだろうな。名前なのかどうかは分からないが」

青年は軽く握った左手を顎にあて、首を捻った。

いくつかの質問を浴びせたところ、青年　カタストロフに知識は残っているが、自分自身の記憶が欠落している事が分かった。世間で言う記憶喪失だ。

何故ルビエラが分かったのだと聞くと、精霊力の大きさから王と判断したのだと言う。見覚えはないものの、火の王の名前はルビエラだと知っていたのでそう呼び掛けた。

起きてすぐに口走った事柄を指摘すると、エーリスという知人に嵌められた覚えがあるが、それっきり記憶どころか意識が無くなっているようだ。

エーリスの事を尋ねると、またしても首を捻っていた。外見と名前以外分らないと。

フィアセレスもルビエラも、封印されていた理由は知らないという。

この状況でイーシャが取れる道は限定されていた。何もなかった事にして帰るか、フィアセレスに彼の世話を頼んで帰って調査するか、彼を連れて帰って調査するかだ。調査するならば、知っていそうな各民族の長達に協力要請も合わせてしなければならぬ。

遺跡の封印を解いてしまった事で、フィアセレスにはもう十分に迷惑をかけている。

イーシャは溜め息をついた。そう思ってしまったから、連れて帰ったら大変だろうな。そう思ってしまったから。

妙な所で息を継ぐイーシャの呪文を聞きながら、彼は思考を廻らせた。

呪具のせいか、身体が重く殆ど力が入らない。

この呪具は、一つで全体の『力』を半減させるもの。八個あるので、今扱えるのは全力の二百五十六分の一だ。

世界に意識を溶かせば、憶えているより格段に弱く脆い^{もろ}。

既に神と呼ばれる存在が確認されなくなつて、かなり経つという。

世界の強度と、大気中のマナの密度から考えて、十分に納得のいく事であった。

世界が支えるのに耐えきれなくなる時期が迫ってきていたから、世界樹の入口を通つて別世界に移住したのだらう。血に異常が出現して滅びの道を歩みかけてはいたものの、滅んだにしては早過ぎる。瘴気^{しょうき}が激減している理由は分からないが、どうやってか浄化した

ようだ。

知っていたものより、随分と空気が柔らかい。
偶たまには良い事をする。

憶えているというより知識から、彼はそう感心した。神の認識は、強力な能力持ちだが八丈迷惑な民族というものなので。

それにしても。

ちらり、と彼はイーシャを横目でみやった。
少し似ている、あの裏切り者に。

よく見れば、姿形も『力』の質も全然別人だと分かる。髪の色と肌の色が同じせいで、ぱっと見た印象がそっくりなだけだ。

イーシャは彼にとって一応恩人に当たる。遺跡から解放してくれたのだから。

エーリスをかぶらせてはいけないと思うものの、イーシャは見ているとどうにも怒りが湧いてくる。

彼女はエーリスではない。

この感情は八つ当たりであって、実に失礼だ。

何かもう少し思い出せれば、イーシャに苛立つ事もなくなるだろう。

始まりの終わり。終わりの始まり。

どちらの意味にせよ、カラストロフとは厭いやな呼び名だ。厄を封じる意味での名前や称号ならいいが、役割であつたら不吉すぎる。とにかく思い出す時間はあるのだ。

焦る必要はない。

そう考え、彼は身体に纏まとわりつく脆弱ぜいじやくな魔力に身を委ねた。

台車から手を離すと、イーシャはゆつくりと深呼吸を繰り返した。僅かな躊躇ためらいの後、華やかな意匠を凝らした両扉のノッカーを音高く鳴らす。

応答を待たずに扉の片側を開け、台車を後る手に引きながら室内に足を踏み入れる。

「おはよう。よく眠れた？」
「それなりには」

淡々とした声で応え、カタストロフは頷いた。

窓から差し込む爽やかな朝陽の光に照らされた彼は、常にそうだが絵に留めたいほど美しい。どんな天才画家でもそう思い、その美の片鱗へんりんすら写し取れない事に絶望して首を吊りかねないが。

直視は駄目。絶対。

心の中で唱えながら、イーシャは円卓テーブルの傍に台車を停めた。覆いを外し、せつせと二人前の朝食を並べていく。

「服のサイズはどう？」

「長さは問題ないが、幅があまるな」

「それなら、針子に調整させるわ。午後に来るよう手配するから」
「いい。どうせ役に立つとは思えん」

「ごもつとも。」

声に出さずに、イーシャは同意した。

昨日の時点で、カタストロフの服を作らせようとしたのだ。しかし、意気揚々と現れた針子達は見惚れて生ける石像化してしまったのである。

こつそりと深く息を吐き、気を取り直すとイーシャは茶器の蓋をとった。前もって温めてあるから、熱湯を注ぐだけでいい。簡単な淹れ方は母に習ったので彼女にも出来る。

「じゃあ、自分で調整できるものと飾り布なんかで誤魔化せるものを用意させるから」

薫^{かお}り高い茶葉の香りが広がる。

充分蒸らす必要があるので、蓋をして布を被せると砂時計を逆さにし、イーシャは食器を並べ始めた。

「昨夜はちゃんと完食してたみたいだけど、苦手なものはあった？
その前に、食器は使えたかしら？」

イーシャは、別に馬鹿にして言っているのではない。
時代が違うのだ。今使われている食器が無かったり、地域独自のものを使っていた可能性はある。

「今のところ苦手に感じるものはないな。食器についても問題ない
ところで、一つ聞いていいか？」

「何を聞きたいの？」

「何故、お前が来る」

ぴたり。

イーシャは、茶器に伸ばそうとしていた手を止めた。

「お前が下働きのような事をする必要はないだろう。そんな身分でも地位でもない。なのに何故、わざわざ俺の朝飯の準備などする？」

カラストロフは別段皮肉を言っているのではない。馬鹿にしている様子が一切見受けられなかった。

イーシャは蒸し終わった薬草茶をカップに注いだ。

この薬草茶はクセが強く目を覚ますのに最適だが、舌が合わないものには辛い。用意していた牛乳と蜂蜜の小瓶を添えて渡す。

「それはね。他の人に任せると、何もしないからよ」

カラストロフはそのまま飲んで、ぎゅっと眉間に皺を寄せた。

帰城すると、イーシャの予測通りの事態が引き起こされた。

カラストロフを見るなり固まって動かなくなったシウスを、移動の邪魔だったので気絶させて転移し、そのまま医務室送りにした後、イーシャは帰還報告と、謁見要請をした。

要請が即受理され。

謁見に居合わせた人々は全員カラストロフの美に敗北した。

レスクを含め、武官・文官、民族・性別問わずに魅了されて。近くに居る者達は気絶し、その他大勢は呼吸する石像化したのである。イーシャが報告し始めると反応を表わす者達が出たが、位置が遠く特に精神力が強靭な数人だけだった。

「遺跡で封印されていたこの方を、偶然解放する事になりました。

この方に以前の記憶は無く、封印理由は不明。

ですので、私が責任を持って城内の一画に住ませ、理由が分かるまで様子を見るのが妥当と判断し、こうしてお連れしました」

「……そ、それは確かに必要な処置ですが、姫さ いえ、將軍。

事実ですか？」

頬を染め、明後日の方向に目を向ける宰相オースガルド。

妻である降嫁した第一王女セーマゲルタ以外の前では鉄壁の無表情という彼の噂は、見る影もない。

「はい。事実には相違ありません」

とんでもない事態だった。対象が何でも、封印されるにはそれなりの理由がある。

記憶が飛んでしまっているせいなのか、地がそうであるのか。

カタストロフは基本、無表情で淡白な性分らしいものの、極めて知的で冷静だ。彼自体に関しては今のところ危険は無いと訴えかけ 袖を引かれ、イーシャは振り返った。

背後にはカタストロフが居る。

それは分かっていたので、イーシャの視界は床に固定。足枷の鎖は腕の物と同じく彼の身の丈近くあり、邪魔ではないのかと不意に思う。

「何語だ？ 前は人型の種族全部と一部なら魔獣の言語も話せたはずだが、さっぱり分かん」

「現代大陸共通語よ。貴方がここで住めるよう手続きしてるだけ。分からないのが気に食わないなら、これが終わってからでも勉強すればいい事でしょう？」

「それもそうだな」

カタストロフは大人しく引き下がった。彼の低く響く謡ううたような調子の古エルフ語の影響で。

バタリ。また一人床と仲良しなった。

視線をオースガルドに戻すと、目の焦点が合わずにぼんやりしている。

ごほん、ごほん。

数回大きく咳払いして注目を集めてから、イーシャは発言した。

「今のところ、この方が暴れ出すような危険はありません。事態を悲観するだけでは時間の無駄になります。

来月、各族長達との定例議会が予定されていましたね？

各地に連絡を入れ、彼、カタストロフについての調査を願い出たはいただけないでしょうか？

詳細は明日書類で提出いたしますので、それを参考にして下されば結構 陛下、許可して下さいますか？」

レスクは、ぎこちない動きで頷いた。かろうじて、話は耳に入っていたようだ。

形としてはちゃんと承諾が取れたので、これ以上ここに留まっている理由もない。さつさと居なくなった方が、正気に返る時間も早いだろう。

イーシャはカタストロフを連れて、彼女の居住区間の空いた客室に移動したのだが、それからが問題だった。

身の回りの物を整えるべく、身長から見繕った数日分の衣装を運び込ませるのと一緒に、服を作らせようと呼んだ針子達は役に立たず。

城内の案内をさせようと人を呼んだものの、やはり前例に倣い

結局イーシャが案内人となった。そんな散歩中を通りすがりのカタストロフを見て、王城内の機構が次々と機能停止。途中で切り上

げる事になった。

気疲れしたイーシャは彼を部屋まで送り届け、他の手配をし。レスクに提出する書類を作成すると、ゆっくり風呂に入って寝た。

一夜明けて、気力と平静を取り戻した彼女は不安になって厨房へ向かった。結果を聞いて、朝食を届けに来たのである。

案の定、夕食を運んだ給仕はカタストロフを見るなり失神。意識を取り戻すと、廊下で休憩用の長椅子に座らされ、すぐ傍の壁際に空になった皿と使用済みの食器が載った台車が停めてあった、という報告を受けた。

世話をするという目的が、全く果たされていない。

王城の者が対処（直視しない）を覚えるまで、私がやるしかない。イーシャはそんな結論に至った。

「昨日、今の言葉を覚えたいような事を言っていたけど、どうする？ 覚えたいなら教えるわ」

「助かるな。色々ありがとう」

「別に感謝されるような事じゃないわよ。か」

簡単な事しか出来ないし。

そう言いかけ、イーシャは固まった。うっかりカタストロフを直視してしまったのである。

会話中に動かなくなっただせいか、微かに不審げな金の眼差しがジツと注がれた。

ややあつて、カタストロフは呟いた。

「もしかして、俺の名前が言いにくくて舌でも噛んだか？ そうなら、言い易いよう勝手に呼んでくれ」

遠くの皿を取ろうとして、カタストロフは袖にナイフを引っ掛け、床に落とした。拾おうとしてか、屈み込む。視界から彼の姿が消え、イーシャはようやく我に返った。

何を話していたかをしばし考え込み、反芻する。

また同じ目に遭わないとも限らない。

イーシャは、手元の薬草茶へ蜂蜜を混ぜる事に集中した。

「じゃあクーって呼ぶから。文句は受け付けないわよ」

確かに長いので、彼の名は呼びにくい。

正確な綴りが分からないので、呼びやすさ重視。ぱっと思いつかんだからという適当さで決めた。

イーシャはカタストロフではなく、グルグル回る薬草茶の中に目を向け続けているので、どんな反応が返ってきたのか分からない。声に出しての反対は無かったので、承諾されたと判断する事にした。

第八話 平穏な日々（前書き）

今回、少し短いです。

第八話 平穩な日々

「それより、ああも皆に行動不能になれるの、困るわね。貴方の顔、どうにかならないかしら？」

イーシャの口から、ポロっと本音が出た。口に出してしまっただけから、酷い事を言ってしまったと気付いて蒼褪める。ほんの少しだけ視線を上げ、カタストロフの様子を窺った。

「俺に仮面でもつけろと言うのか？ 儀式するのでもないのに」「仮面なんてあったかしら？」

気にしていないようだ。

彼にとって顔を隠すと言えば仮面、仮面と言ったら儀式を連想するらしい。

残念な事に、ダイヤモンド王都では仮面をつける儀式・祭典は存在しない。

他の街出身者なら祭用とかで自分の仮面を持っている可能性は十分だが、王城に仕官する際にわざわざ持参する者はいないだろう。

神聖な儀式用では無い、どちらかと言うと嗜好品に当たるような仮面なら有力者は持っているかもしれない。しかし、王城の宝物庫には無いだろう。夜会なんて年に数えるほどしかないから。

仮面をつけて歩き回られても、別の意味で通りすぎる者を硬直させそう。ただ、カタストロフの美貌の衝撃よりも立ち直るのは何十倍も速そうである。

良い案だと言うのに、現物が無い。

イーシャにしても、面倒をみる関係上ずっと直視しないというのは難しいのだ。

隠してくれた方が、正直助かる。

「……あるかどうか調べさせとく。ところでク。いつから勉強始めたい？」

「早い方がいい」

「分かった。昼食後辺りまでに用意するわね」

それまでに將軍としての書類仕事を終わらせないと。

今日付けで復帰しているが幸い、休暇を取るために進めて置いた分がある。結局一日しか休んでいないから、一週間は余裕だ。

ピタ。

カタストロフの動きが止まった。フォークが皿の少し上でゆらゆら動く。

「？ 今の時代は昼も食事するのか？」

「ああ。この辺りでは一日三食よ。地方によっては違つわ」

どのぐらい必要なか分からず、多めに出した夕食を全て一人で片づけたので健啖家だと判断し、二人分持ってきたが違つたようだ。一日三食口にする人間と、二食の者では一回に食べる量が異なる。今も円卓テーブル上のモノは半分以上、既に彼の胃袋に収まっているから、言われるまで誤解に気付かなかつた。

「どつする？ 昼は食べる？」

「食べる。しばらく世話になるんだ。風習には従つた」

ふと。イーシャは今更ながらある事に気付いた。

引きずるほど長い鎖が付いた、カラストロフの手枷と足枷。

見た目は錠部分以外むしろ装身具のように優美だし、妙に似合っているので拘束具と感じないが、どうしても途中で引っかかるだろうに。どうやって服を着替えたのか？

「その服、切れ込みなんてあったの？」

「無いぞ」

唐突な質問の意図を素早く読み取ったのか、カラストロフはあっさり答えた。

「この八の呪具は見た目と違って、全て同じ材質で出来ている。命^マ素を視覚と触覚に反応するまで高密度に凝縮させてたものだ。こっ^ナやって見せれば分かりやすいか？」

カラストロフは食器を置くと、鎖を握って振り回して見せた。

無音。見た目通りに金属ならばするであろう音が全く聞こえない。

「見えて、触る事は出来るが、物質化までには至っていないから重量が無い。水蒸気や冷気なんかと同じ状態だ。だから物は引っかかり^マらないし、着替えに支障は無いな」

イーシャは絶句した。

「やっぱりクーはただものじゃない。」

そう再認識すると、湯気の出なくなった蜂蜜入りの薬草茶をグイッと飲み干した。

カラストロフは頭の回転がずば抜けて速く、記憶力が良かった。

天才肌の異母兄を連想してしまい、イーシャはわずか嫌な気分になつたが、気を取り直して教えたところ。
素人教師の慣れない不器用なやり方でも、あっさりと五日で一つの言語を習得した。

今使われている言語の元となつている古代語を網羅いじせしており、多少変化した発音の仕方や新しく作られた言葉などに引っかけたりはするものの、現代語訳された本と古代語の辞書を一緒に渡してみれば半日立たずに読破してくる。

知的好奇心が強いのか、はたまた何か考えがあるのか。

他の多くの現代言語に興味を示し、一月の間にどんどん習得していった。はたからその様子を眺めていたイーシャにとっては空恐ろしいまでの早さで。

「おい、イーシャ。これ、もしかしたら俺の事かも知れんぞ」

教え始めて五日目の昼。

カタストロフは分厚い聖典をイーシャに寄越よこした。

この大陸では一般的に主流ではないが、世界三大宗教の一つアース神教の聖典だ。

どの客室にも、三大宗教の聖典が一冊ずつ置いてある。見つけて、言語読解力の上昇のために一人で読んでみたのだろう。

発生が古いため、現代の感覚で言うといささか読みにくい聖典は、信者や学者で無い限り敬遠されがちだ。おまけに長い。これを一人で読破した事の方に、イーシャは驚いた。

「ここだ、読んでみる」

カタストロフは聖典を開き、金属製の朶が挟んであるページを示

した。

「これ、終末の章？ クー、これがどうかしたの？」

一瞥してから、イーシャはカタストロフを見上げた。

見事な金色の眼は、濡れたように艶めく長い前髪で覆い隠され、彼女からは見えない。

その下の、鍛冶師が使うようなレンズ部分が黒い幅広の眼鏡ゴーグルで見とれなくなっている。

顔の半分が見えなくなった事で、カタストロフの迫力の美は数段抑えられていた。

それでも絶世の美貌である事には変わりなく、気を抜くと見惚れてしまうのは変わらない。

ただ、意識を奪われるといった付属効果がなくなったので、すぐに返れるようになった。

仮面は結局城内には無く、誰かに買いに行かせるというイーシャの報告に、何やら考え込んでいたカタストロフは一夜明けたらこうなっていた。

髪質が真っ直ぐに見えるくせ毛で、実は長かった前髪を利用し、仮面代わりにしたのだ。

やり方は簡単で、大判の頭布を巻きつけてフワリとしていた前髪を押しつぶし、飾り紐で固定。これだけで、カタストロフの鼻先まで隠れた。仮面をつけるより、見た目にも怪しくない。

眼鏡ゴーグルはイーシャの発案だ。髪だけでは薄く目元が見えるので。

「いいから早く読め」

イーシャ自身は精霊信仰だ。

アース神教について、大まかな事は知っている。聖典も、参考のために読んだ事はあった。それが由来の魔道具が、それなりの数であるからだ。

読みにくくて好きじゃないんだけどなー。

しぶしぶと、イーシャは再び書面に目を向けた。

「<……世界が悪徳で満たされ、世界樹が枯れ果てる時、最後の審判があらわるる。」

終わりの神が、終末の幕を引き >

んんー？ 終末の幕引きって、これ？」

この聖典の神の名は、古代魔道文字マジンの読み方を引き継いでいる。終わりの神の名はアルウエスとなっているが、カタストロフという単語も同程度に出ていた。

『カタストロフ』の音を、古代魔道文字マジンでそのまま当てはめると、意味は『幕』だ。

単語にすると解釈が広がり、開幕で始まりとか、終幕で終わりとか区切りの際使用するので、わりと呪や術式で使われている事が多い。

古代魔法語にすると綴りの違いで意味が微妙に分かれる。

始まりの終わり。終わりの始まり。

名前としてつけるなら、かなり不穏な印象を受け取るものであった。

「貴方は神かもしれないというの？」

そっいえば。

イーシャはある事を思い出した。

目が覚めてすぐの時、カラストロフは「お前達が神と呼んでいる連中」と言ったのだ。

イーシャもフィアセレスも彼に見惚れていて流したが、あの言い方からすると神ではなく、強力な力のある民族の一つと受け取れる。そうだとすると、精霊ルビエラが人間呼ばわりしたからと外していた『神』という種族候補がひどく有力になってくるのだ。

<この存在こそ咎なり>

不意に、イーシャの脳裏にあの遺跡で吐きいたいたコトノハがよぎった。アレは、終末を示唆する言葉だったのかもしれない。イーシャは小さく震えた。

「単なる可能性の話だ。終末などバカバカしい。瘴気も減ってるし、世界樹が枯れて壊れるほど世界の強度は脆くなってないしな」

そんな風に、一見穏やかな日々は流れて行った。

カラストロフに関するような事が載った古代書は見つからず。

一ヶ月経って、ようやく城内の者が彼の存在と対応に慣れた頃、その日はやってきた。

各民族長を集めた、定例議会の日が。

第八話までの人物紹介（軽くネタばれ有り）（前書き）

基本、名前が出た順です。

本編で関係無い事も載っています。

第八話までの人物紹介（軽くネタバレ有り）

主要キャラ紹介

イーシャ（16）

主人公。

本名イスフェリア「キユオ」イムハール「ダイヤモンド」。

現国王レスクの第五子で末っ子。同腹のきょうだいはいない。

第三王女で、王位継承権は三位。將軍の一人。

母親はレスクの近衛騎士で、刺客と相打ちになって殉死。

その日から人生設計がいろいろあつて変わった人。

火の王ルビエラが宿る魔道具『紅の刃』を所持している。

戦略兵器と言うより、武器として愛用する事が多いので、微妙に宝の持ち腐れ状態。

当初魔導師になるつもりだったため、魔道に関係ある古代語を三
十くらい習得したが、現職ではそれほど使わない。博識。

尊敬する人は母と父と義兄。

実は長兄が嫌いで、長姉とその母が苦手。

義兄と内密の婚約関係にあるが、利害の一致で恋愛感情は無い。
親愛はある。

背中の中ばまであるストレートの銀髪を編みこんで上げている。
運命の騎士王、幻水3の騎士団長と同じような感じの髪型だと思っ
てほしい。

瞳の色は董の紫。肌は白い。美少女なのに、あまりその恩恵にあ
ずかって無い。

身長は百六十くらいで、鍛えているためムチムチではないが、着
やせるタイプで実は結構胸がある。ドレスがよく似合う均整のと

れた体形。

レスク（４８）

ディアマス国王。十六代目。フルネームはまだ無い。

大陸全土を支配勢力下においた事から統一王と呼ばれている。

イーシャの父。実子が四人と養子が一人。孫は六人いるが、イーシャを一番可愛がっている。

王子時代に妃がいたが、二十年前のある事件が原因で離縁。

イーシャ母には求婚したが、元妃の護衛官だったせいで断られた。諦めきれず近衛騎士にして御手つきに。妊娠が分かって再び求婚したが、それでも即効断られた。

赤い髪に紫の瞳。ちなみにディアマス王家の家系に出易いカラー。

実年齢の十歳以上若く見える美男だが、イーシャと同じで、あまりその恩恵を受けていない。

ファイアセレス（７００以上）

森の民エルフ族長。実は既婚者。

基本的に穏和な人物だが、何度となく戦争に参加しているため、攻撃するとなると容赦ない。

植物を伸ばしてきゅつと一捻りで、多くの屍を築いた猛者。

第五話の気付けの際も、腰を入れ、手首のスナップを利かせた良いピンタをくらわせていた。二発目の狙いがずれて危うく脳しんとうを起こしかけていた事に、イーシャは気付いていない。

肩を覆うくらいの外跳ねの黒髪に、翡翠の緑の瞳、白い肌の美女。エルフらしく耳が長い。

ルビエラ(?????)

火属性最強である精霊王。現在イーシャと契約中。ルビエラは常にイーシャの眼と耳を介して、お早うからお休みまで彼女の生活を鑑賞している。

あまり火属性の精霊っぽくはない、のんびりとした性格。カタストロフと、とある精霊王に強い好意を抱いている。

実体化する時は女性体を取っているが、本来、精霊に性別は無い。彼女が詳しく昔の事を覚えていれば、いろいろと早期に解決した。赤い髪に、赤い瞳、褐色の肌をした背の高い美女の姿を取る。

カタストロフ(?????)

あらすじの超絶美形はこの人の事。

素顔を直視出来るのは今のところルビエラのみ。無表情の下で割と色々考えている。

現在記憶喪失中。

ナチュラルに口調が偉そうなのは、周りに居た連中の言葉が移ったせい。

高スペックなチート野郎だが、基本やる気が無い。

封印具のせいではなく、過去にいろいろありすぎて素でそういう性格に。言語習得は忘れた過去で嫌な目にあつたため、防衛本能による無意識の行動である。

実は下戸。匂いで気持ち悪くなり、弱い酒でもコップ一杯で爆睡する。

いろんな意味で、作中一番の不幸を背負っていたりする。

黒髪に赤みがかつた金色の瞳。肌も黒い。身長はきっかり2Mある、細マツチヨ。

サブ&名前だけ出てきたキャラ紹介。

テオシウス(29)

大陸西部出身の外交官。出世株だが、イーシャに数日間振り回された可哀想な人。

目が細い。

アルフェルク(26)

レスクの第三子で、王太子。愛称アルフ。

色々な分野で天才になれる人だが、飽きっぽいのですぐやる気が無くなる。

イーシャ母が初恋で、そっくりな異母妹を彼なりに可愛がっていたら嫌われた残念な兄。既婚者。

ラムザアース(22)

レスクの第四子となってるが養子。実際はルーフィア女王の異母弟の息子。愛称ラス。

イーシャの恩人で、内密の婚約者。利害の一致でロリではない。親愛はある。

王位継承権は第二位。

王位に興味が無いのに有能すぎて、味方も多いが敵も多い。

一時期は後見関係でヤバかったため、イーシャ母の世話に。葬儀

に出た際に義妹が危ない眼をしてたので後をつけたら、案の定。本人の意思とは関係ない騒動に、よく巻き込まれている。

ルーフィア（享年45）

ディアマス15代目国王。レスクの母。歴代最も慕われた女王だが、二十年前に異母弟と共に殺害された。

身体が弱く、本来王位継承権を持っていなかった。

先代の度重なる遠征で候補が戦死しまくった＋大流行した疫病のせいで彼女と生まれて間もない異母弟しか王族が残ってなかったせいで、急きよ即位。將軍を夫にした。

当初中継ぎの予定だったが、有能で三十年間ディアマスに君臨し続けた。

内政重視で、遠征に出た事は一度もない。

ヴィルリド（享年32）

ディアマス二代目国王。愛称ヴィル。

生来虚弱だったが、先天的超レア特殊体質である『精霊に愛されし者』だったため、戦場へ。

この体質者は精霊が常に複数で守るため、基本的に餓えるか衰弱するか、人造物による殺害以外の死因が無い。それも、少し危機感を持っているだけで防御層が厚くなり、剣も矢も魔法も毒も効かない完全防御化する。その上、傍に居るだけで精霊が良いところを見せようとして張り切る為、本人だけでなく他者にも魔法の威力増加という支援効果がある。

当初、支援＋参謀といった位置に居たが、『紅の刃』を手に入れると砲台特化にジエブチェンジ。

『紅の刃』と風の精霊の力を掛け合わせラ ユタの雷を再現したり、さらに水の精霊の力を掛け合わせて水蒸気爆発を起こしたり、火×風×土で粉塵大爆発を発生させたりするチートと化し、炎滅王と呼ばれた。

ちなみに『紅の刃』は単体でも、薙ぎ払え！ が可能で、イーシヤも出来る。

火の民と盟約を結び終わってすぐ、激務がたたり過労死。

エーリス(????)

カタストロフいわく、裏切り者。ぱつと見イーシヤに似ている。彼の飲み物に酒を投入。爆睡したところをとある人物に引き渡した。

オースガルド(40)

宰相。妻以外には鉄壁の無表情との噂がある。

セーマゲルタ(31)

レスクの第一子。王位継承権はない。

第一王女と呼ばれる事はあるが、王籍を剥奪されている。宰相夫人で四児の母。

第八話までの人物紹介（軽くネタバレ有り）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第九話 精霊を宿す民族の長達（前書き）

今回、説明が長いです。

会議が始まらなかった……Orz

第九話 精霊を宿す民族の長達

通常の八民族定例議会では、民族間の不和になりかねない問題や、王国と自治区の交易について専ら話合もじはわれる。

議会があるのは三ヶ月に一度。

基本的に数日かけて互いがある程度妥協するまで話し合い、解散する。最も解散が早かったのは半時で、最長が二週間だ。

欠席や議会中の帰還も許されている。

これは、関係無い議題に付き合わせないための処置だ。

最も欠席回数が多いのは獣の民バーンで、三回に一度くらいの割合ではない。これには理由があり、一番の理由はバーンは部族が多く、代表となる民族長自体がいなかったためだ。

毎回順番に一つの部族長が出てくるわけだが、王国に友好的であっても交易などの政治面の繋がりが殆ど無かったりするとところも多い。それ故、特に話したい事や聞きたい事が無ければ出て来ないのである。

バーンは、ヒトとの間に差別による問題が少ない事も要因の一つであろう。

今回も欠席との通達が、事前にあった。

会議の出席には正装が条件だ。

イーシャは問題なかった。

第三王女としても、將軍としても正装は元々指定され、作られている。今回はレスクに責任派生させたくないの、身分で無く地位將軍位にある騎士の儀礼服だ。

問題はカラストロフだった。

本人は正装の意味合いを理解しても、実感していないらしい。一ヶ月の間に与えた服の中から適当に見繕みつくろったと分かる格好だ。

どんなボロであつてもその美が引き立つだけ、実質似合わない服が存在しないカタストロフは、いつも自分の好きな着方をしている。本日の格好は豪奢ゴージャスでも簡素シンプルでもなく、禁欲ストイック的でもない。

イーシャとて、放置していたわけではなかった。

正装を作らせようと手配はしたのだが、針子達に声をかけるや否や、誰が担当になるかで凄絶な争いに発展。争いが収まらず、何も用意出来ないまま今日を迎えたのだった。

全く持って、美しいのも過ぎると罪である。

ちらり。

イーシャは柱時計に目を向けた。

会議室の隣にある控室にて待機し、かれこれ三時間半。

カタストロフの件は、初日の最初の議題が終わってからと言う事になった。優先順位の高い順から議題に上がる事になっているので、かなり重く見られている。

その当人は、スノーソ大陸製ラスス織りがカバーの三人掛けソファアーに横になり、健やかに昼寝中だ。

いつ出番が来ると断言出来ず、待たされて退屈しているのはイーシャにも分かったので、注意しなかった。

窓から差し込む光に、若草色の頭布からこぼれた髪が、研磨した金属よりも煌めきらいて見える。開いた窓からの微風に、サラサラと僅かな音をたてた。寝息は静かで、聞こえない。

イーシャは退屈していなかった。

見ていて飽きない存在が目の前に居るのだ。ここまで美々しい姿形をじっくり鑑賞する機会はそうない。

ごろん。

カタストロフが寝返りを打つ。

彼の寝付きは極めていいが、寝心地があまり良くないせいだろう。頻繁ひんぱんに転がっている。

それでも彼はソファから落ちない。落ちそうになると支えがないのを無意識に察知するのか、逆側に動くのである。

「便利な体質ねえ。木の上で寝ても落ちないんじゃないかしら？」

ぼそりとイーシャが呟いた時、扉が音高く鳴った。

廊下側ではなく、会議室に繋がる内扉のほうだ。

音に反応して目を覚ましたのか、カタストロフが身体を起こして伸びをした。

ふあふ。

小さく欠伸あくびを噛み殺す音が耳に入る。

イーシャは一度だけ深呼吸すると、立ち上がった。

一月という時間で、どのような事が分かった分からないに関係なく、彼女は確実に責められる。その覚悟は当に出来ていた。

ただ、カタストロフが悪しき存在ではないと分かればいい。

ノックをしてから、イーシャは扉を開けた。

「私わたし、第三騎士団が将イスフェリアシキョウキョオキョウイムイムハールハールディアマス。並びに、仮名カタストロフかりめい。議会の招致しょうちに応じ、現時点より参加いたします。」

本来のものより簡略化された参加表明をして、イーシャは一礼した。これはヒト以外の民族代表が、仰々しく長つたらしい挨拶+表明を嫌うからだ。

そんなものに気を使って時間をかけるより、議題に早く入れ。

実際過去、口に出してある民族長が言い、他の者も賛同したので

挨拶も取っ払われ、ここまで短くなった。

「この二名の参加を認めるか否か。^{いな}反対者は挙手を」

最初の議題が大変だったのか、いささか疲れの見える表情でレスクが発言した。しばし待ち、ゆっくりと見回して誰の手も上がらないのを確認する。

「……反対者なし。よって、参加を認める。席につけ」
「御意に」

きびきびと歩いて移動しながら、不躑^{ぶしつけ}にならない程度にイーシャは各民族代表者達を観察した。

ディアマス王を上座に、六の民族の代表者達が盟約を結んだ順に円卓についている。

レスクの左隣に火の民ドラゴニア族長ドラクロ。

ざんばらの金髪から天地に向かって突き出た、二対四本の白い角。琥珀色の肌に映える深緑色の皮膜質の折り畳まれた双翼。

尾てい骨の辺りから伸びた翼と同色のうるこのある太い尻尾。色素こそ個人によって違いがあるが、この三つが民族特徴だ。体内に宿る火の精霊が強く出ており、口から火炎を吐ける。

翼は飾りでなく上昇は出来ないが、低空ならば滑空も可能だ。

おしなべて好戦的で気が短く、喧嘩は挨拶代わり。

ただし、弱い奴に喧嘩を売っても楽しくない。喧嘩は好きだが殺し合いは嫌い。強い奴が偉い、という図式が成り立っており、怒らせなければさほど危険な民族ではない。

年に一度、族長の座を賭けた大会が開かれている。

ドラクロは連続八十年余り族長の座を死守しており、見た目は二十歳くらいだが若い時期が長い民族でもあるので、イーシャは彼の

実年齢を知らない。

割と陽気な人物なのだが、今のドラクロはオレンジ色の瞳がキラついていて、軽く殺気立って見えた。

レスクの右隣にはファイアセレスが座っている。

露出の少ない濃緑色のドレスを着た、一月振りに会う彼女の翡翠色の瞳には陰りが見えた。

ドラクロの左隣には大地の民ドワーフ族長ペクト。

土の精霊を宿し石を愛する彼等は、手先が器用で優れた技術を世に生み出す。

横幅が広く、ずんぐりどっしりした体格で、背丈が低い。大柄なドラクロの隣なので、余計低く見える。

大人でも百二十セトくらいまでしか成長せず、横幅はあっても太っているわけではない筋肉質。

土の精霊の加護で、大地から生み出されたものに重量を感じない。これらが民族特徴だ。

ペクトはいつものように灰色の頭に兜を被り、鎧姿だった。

ふさふさの見事な髭を指で解かし、つぶらな焦げ茶の瞳が熱心にカタストロフを観察中だ。

ファイアセレスの右隣は空席。つまり、欠席した獣の民バーンの場所だ。途中参加の可能性も考慮されていて、いつも席は用意されている。

ペクトの左隣は風の民ハーピー族長リア・ノイン。

外見が十代半ばの可憐な少女にしか見えないので、見た目は各族長達の中で最年少だ。

天空を駆ける事が出来る大きな羽毛質の翼が、背中から生えている。

風の精霊を宿すため、おしなべて美声で好奇心が強く、放浪癖のある民族で、大昔は神の御使いだといつて思われていた。

風の民は基本的に平和主義で友好的だが、一つの民族特有の問題がある。

それは狂乱セイレーンの旋律と呼ばれ、恐れられている歌声。

風の民が歌うと、周囲に膨大な魔力を撒き散らされるのだ。その歌声を耳にした他の民族は抵抗で来た者を除き、魔力酔いを起こして歌を聞いている以外の行動が取れなくなる。

効果範囲も広いので、船が穏やかな何でもない海域で沈んだりする原因の一つだ。

彼女達は定期的に歌わなくては体調を崩し、最終的には死に至るので禁止する事が出来ない。

リア・ノインは長い金色のまつげを伏し、その隙間から藍紫色らんしの瞳でぼんやり虚空こくうを眺めていた。窓から入り込んだ風に蜂蜜色の髪と、同色の翼がふわふわと揺れている。

薄い布を重ねた、踊り子を連想きわする際どいスリット入り青いドレスが目に見えやかだ。

空席の獣の民代表の右隣りは、闇の民サレ族長オーウエン。

耳は短い三角に尖っていて、肉感的で妖艶　森の民と似て異なる外見特徴を持つ民族だ。

闇の精霊を宿し、闇の中でも光の中でも同じ程の視力を持ち、理知的なものが多くいる。

しかし、ヒトに対して何故か嫌悪感を持っている者が多い。嫌悪を口に出して言う事は少ないが、厨房で黒光りする虫アヒを見る婦女子のような眼をするのだから、おのずと伝わってくるものだ。それもあって、昔から中立よりの敵対的民族とされている。

苦み走る渋みが素敵な男性的美形であるオーウエンは、上機嫌で笑顔だった。イーシャが見かける時、彼は冷笑が無表情が殆ど。珍しい事もあったものである。

切れ長の黒い瞳が嬉しそうに輝いていて、見慣れないせいか、イ
ーシャは少々不気味に感じた。

リア・ノインの左隣、最後にダイヤモンドと盟約を結んだ水の民ニ
ンフ族長スアウ。

顎までの、短い乳白色の髪から覗く紅珊瑚色ベニ珊瑚の耳ビレに、血の気
が薄い青白い肌。水陸どちらでも生活可能な、自然に変態する身体
を持つ民族だ。

やはり体内に宿る水の精霊の影響が強いのか、陸で暮らす者は殆
どおらず、水中や海底に都市をかまえている。

水中では足がうるこのあるヒレに変わり、ヒレ呼吸へ。陸では肺
呼吸へと変化。

最もヒトによる害を被っている民族でもある。

ダイヤモンドへの加盟が遅かったのはそのせいだった。

人魚の迷信を信じてやまぬ者達に、捕えられ、傷つけられ、殺さ
れるので、めったな事ではヒトに姿をさらしたりしない。

スアウは水中でも身体の動きを阻害しない、細身の身体の線が見
て取れる衣装だった。ほっそりとした首につけた三連の真珠の首飾
りが良く似合う。

スアウはドラクロをジツと見ているが、その大きな青灰色の瞳に
は感情が浮かんでいないので、何を考えているのか分からない。し
かし、これは彼女によくある態度だった。

スアウは左手で軽く、分厚い布を巻きつけた長いものを握ってい
る。陸でも生活可能であっても、足の形が歩行にあまり適していな
いので、杖代わりだ。

水の民のみ、公式の場で武器の携帯を許されている。盟約条件の
一つと言う事もあるが、過去実際に会議に來た代表者が悪漢に襲わ
れた事があるからだ。

許されているといっても、杖類か、その代わりになる刀身を布で

巻いた長モノに限っている。前は長槍で、前々回は棍。今回は大鉾のようだった。

千の時を生きる、火の民・森の民・闇の民の様子がおかしく、三百の時を生きる、大地の民・風の民・水の民は通常通りか異常かどうかともとれない様子。

全体的に良くない雰囲気傾向だと、イーシャは判断した。

中央に用意された二人分の椅子の片方に座り、隣を手で示してカタストロフを招く。彼は緊張感の欠片も無い様子で、深く椅子に腰掛けた。

一斉に各民族長達の視線が、中央に集中する。

視線が突き刺さっているのは、やはりというかイーシャではなく、カタストロフだった。

第九話

精霊を宿す民族の長達（後書き）

実は地味にタグを追加しました。

第十話

称号は氷魔王（前書き）

今回だけで、なんと五千二百字を超えました……（汗
最高記録です。

作者は宗教観は人それぞれだと思っていて、信じている方にケチを
つける気は全くありません。

もし今回の話を読んで、御不快になられた方がいらっしやるなら申
し訳なく思います。

第十話 称号は氷魔王

「現時点より、本日二例目の議題をかける。イスフェリア」

レスクの指名に、イーシャは立ち上がった。

「国王陛下、そして各民族長様方。今回はご多忙な中、時間を割いていただき、ありがとうございます」

それぞれ一人ずつ目礼をすると、椅子に座り、本題に入る。

「私の軽率^{わたくし}な振る舞いに対する責めは受けませんが、それは後^{のち}ほど。」

まず先に、お答えを願います。彼について、情報がある方は挙手を」

ドラクロ、フィアセレス、オーウエンの三人が手を上げた。

^{ドラクロ}上座からだど、あのイラついている様子からして悪い事を聞かせられそうだ。

年齢順にしよう。そうイーシャは判断した。

「では、フィアセレス様、オーウエン様、ドラクロ様の順でお答えください」

「……カタストロフ　いと高き、至高神ジオフィードを父に、先天性特異体質『魔王』である闇の民を母に持つ存在の名。母親と同体質で、異名は氷魔王」

そう答えたフィアセレスの声は冷静だった。その瞳はうつとりと、

カタストロフの姿を映している。

イーシャは内心冷や汗ものだった。

完全な神ではないが、なんだか物騒な単語が出てきた気がする。
『魔王』って。

「その体質者について、私は知りません。お教え願えますか？」
「それならば私から説明しよう。闇の民にしか出ない特異体質だ」

オーウエンが渋い声で説明を引き受けた。

「あまり知られていない事だが、我々闇の民は強弱の差はあれ、常に大気中の瘴気や魔素を体内に取りこみ、浄化して己の魔力に変換する体質だ。

『魔王』は『魔を制す王の器』の略で、この能力が及ぶ範囲が極めて特化し、自らの意思で自在に範囲指定を行える者の事を示す。生まれる確率は千年に一人だ」

よかった。そんなに物騒なものじゃない。

イーシャは安堵した。

つまり、全ての闇の民は長生きの者ほど魔力が強くなっていく体質持ちで、『魔王』は桁違いに魔力があるという事だ。

二代目国王ヴィルドの『精霊に愛されし者』ほど、反則な体質ではない。

それにイーシャは心当たりがあった。

カタストロフが常に発する、恐ろしく澄んだ力波。あれは、体質のせいだったらしい。

「歴代の『魔王』の体質者は、至上の一人を除き、左右色違いの瞳

で、必ず片方が金を持ち生まれる。現在、闇の民の元に『魔王』はいない」

畏怖と、恍惚が混じったような眼差しで、オーウェンがカタストロフを見つめた。

「至上たる氷魔王カタストロフ様。御尊顔を拝見しても宜しいでしょうか？」

イーシャはギョツとした。

今カタストロフに素顔をさらされては困った事になる。魅了されて固まり、話を聞くどころではなくなってしまうだろう。

「俺は別にかまわんが、後にしる。闇の民と風の民は平気だったと思うが、違うのもいる」

自分の事であるというのに、カタストロフは熱心な様子ではなかった。

実感が無いのだろうか。

つれない言葉にも、オーウェンは笑顔を崩さない。

闇の民と風の民が平気な理由はなんなのか。

イーシャは少し気になった。

風の民は分かる。彼等は聴覚がヒトの数倍発達している代わりに、弱視だからだ。色素と、大雑把な形が分かる程度の視力しかないと聞く。

闇の民が平気な理由は何なのだろう。

「氷魔王カタストロフの逸話が、幾つか残ってた。氷大陸を作ったのはソイツだ」

じろり。ドラクロは鋭い目つきでカタストロフを見ると、とんでもない事を言い出した。

「灼熱大陸同様、砂漠化が進行していたエストキリアで出現した砂の邪竜討伐で、大陸半分を覆っていた大砂漠ごと絶対零度の凍土へ変化させ、氷に閉じ込めた邪竜を滅ぼした。

そこまでは良かったが。広範囲の凍土化の影響を受けて、残り大陸半分とレノン島が二百年かけて永久凍土に飲み込まれた。氷魔王の異名はこの出来事からだな」

イーシャは目を見開いて、カタストロフを見た。
なんだその神話並みの力は。

レノンの名に、ぴくりとスアウが耳ビレを動かした。
凍土都市レノンはニフの三大都市の一つである。

カタストロフは周囲の空気にかまわず、ぼん！ と、手を打った。

「おー。そうか。海竜王リュアィアサンに会いに行ったのって、邪竜退治に必要なだったからだな」

彼の口から出てきたのは、すつきりした様子と違って重大な言葉だった。

記憶喪失者に、以前の記憶について戻ったかと尋ねるのは多大なストレスを与える行為である。医者に相談した際、そう注意を受けたので、イーシャは一度も戻ったかどうか聞いていない。

その口振りからして、記憶の一部は戻っていたようである。

「……あの方と、何か、関係ある？」

かすれて消えそうな弱々しい声。

頷くか首を振るか耳ビレを動かす以外に、スアウの反応を見た事が無かったイーシャは軽く驚いた。

スアウの声など、初めて聞く。

感情の読みとれぬ目が、カタストロフへ真っ直ぐに注がれていた。

「近海の水の精霊に大勢力を借りる必要があったからだ。協力があった方が、話に時間を使わずにすむからな」

「エストキリア……凍土化してくれた事、感謝します。レノン、わたし達の安息の地になった」

ヒトが寒さのあまり近づいて来ないから。

暗に、スアウはそう語っていた。

人魚狩りは水の民達にとって、文字通り死活問題なのだ。いくら厳しく取り締まっても、迷信を信じるヒトが後を絶たない。

「氷魔王カタストロフに対する評価は、総じて高いが、人格は神に対して反抗的^{みな}と見做されている」

ドラクロが語り出し、話題を元に戻した。

「何らかの失敗で、神々の不満と怒りを集め、封印された。神々に逆らった咎人、極め付きの愚か者。そういう意味^{うち}合いで、火の民の文献では伝えられている。その封印を解く者には、神々の呪いが刻まれるとも書いてあったな。で？ イーシャちゃん。身体は大丈夫か？」

カタストロフに対する刺々しい様子とは裏腹の軽さで、ドラクロ

は尋ねてきた。

呪いについては、イーシャも考えた事がある。神の造った遺跡であるのは間違いなかったからだ。

結果、無いという判断を下した。

カタストロフに対する周囲が引き起こす問題には困っていたものの、半日は一緒に居る事で、むしろイーシャの心は穏やかだった。怒りも悲しみも、さして長く持続しない。

今までは、彼の超絶美形っぷりのせいだと思っていた。

目の保養という言葉がある。つまり美しいものは、それだけで周囲の心に潤いを与えるのだ。

実際は、そのみが理由ではなかった。

カタストロフが『魔王』だからだ。

魔素は怒りや悲しみや憎しみといった、負の感情の集まり。

彼自身が意識してやっていたかは別として、片っ端から吸収され浄化されていたのだろう。

ドラクロにゆっくりり首を振って見せると、イーシャはカタストロフに視線を移した。

「これまでの話に、どういった感想を持たれましたか？」

敬語で話しかけたからだろう。

カタストロフの口元が、一瞬引きつった。失礼な反応だ。

ここは公式の場である。將軍として参加しているのだから、普段がどうあれ、誰が相手であれ、地位の品格が疑われるようなことはしない。

「封印理由以外は、俺の事を言っていると納得できる。時折、記憶

の切れ端のようなものが頭に思い浮かぶからな。幾つか当てはまっていた。ただし、封印理由は違つと断言する。そんなくだらない理由で、俺を封じるような余裕なんざなかったはずだ」

はっ。

カタストロフは鼻でわらった。

思いっきり、馬鹿にしていると分かる嫌な嘲笑い方だ。

「あいつらは弱い。当然の役割を果たしているだけで、お前達に崇められるような、ご立派な民族でもない」

彼を除く全員の顔に困惑が浮かんだ。

数秒経って、ドラクロの顔に赤みが差す。目の鋭さが増し、オレンジの瞳孔が縦に裂けた。

あ。マズイ。

イーシャは冷静にそんな事を思った。

「不老不死にして圧倒的な能力を持つ世界の守護者たちを神聖化して崇め奉るの^{まっ}は当然のことだろうが！ 弱いだって！？ 大陸を沈め、気象を変えるような集団のどこがっ！？」

それが他者であつても、ドラゴニアは自身が認めている強さを否定されると怒る。瞳孔の形が変わっているととなると、憤激しているという状態だろう。

飛びかかっていかなのが不思議なくらいだ。

苛立ちが収まらないのか。

ドラクロは勢い良く立ち上がり、ばさりと皮膜質の翼を大きく広げ、尻尾を一振りした。

メキメキと音を立て、彼の座っていた椅子が碎け、破片が誰もい

ない壁側へと矢のように飛んでいく。

岩すら破壊出来ると言われている、火の民の尻尾の威力を初めて目にして。

すごい。

イーシャは場違いにも感動した。

「前提が間違っている。あいつらは不死どころか不老でもない。竜並みに生きるから老化が遅いだけだ。お前達の考えているような存在だったら、そもそも俺は生まれずにすんだ」

あまり動かないカラストロフの表情筋が、珍しくはつきり動いた。唯一見えてとれる口元に、自嘲の混じった苦々しいものが浮かんで消える。

「弱いつていうのは、別に攻撃力や魔力やらの事じゃない。民族としての、遙か先に繋がっていく生命力の方だ。能力の高いものほど血の近しい者に欲情する。そんな民族に、長く続く力は無い。

ちゃんと滅びの徴は、^{あら}頭われていた……俺の後に生まれた奴が一人もいなかった事だな」

イーシャは、ハッと息を呑んだ。

血は、その先の人物の欠陥も引き継ぐ。近親婚に問題があるのは、そんな弊害が出るのが大きい。後世に血を繋ぐ子供が生まれてこない事は、相当に深刻な問題だ。

イーシャなどより、此処に居る民族長達の方がより身近な話だろう。

長く生きる民族ほど、個体数が少ない。

「とにかく奴等は、お前達に神と奉られるような高尚な存在じゃない。世界だって認めてないから、光の民アルヴなんて正式な民族名

があつたんだ」

「光の民！？ そのような記録は、目にした事ありません」

ガタリ。音を立てて、フィアセレスが立ち上がった。内容が彼女にとつて衝撃的だったのか、円卓に付いた両手が小さく震えている。

「それに。光の精霊はその性質上、人体に宿る事が出来ないはず……」

「身体に精霊は宿っていない。世界にかせられた役割から、その名を与えられた。」

光の精霊が目に見える世界の害悪を灼き、闇の精霊が目に見えない害毒を呑むように。その点については、間違いなく光の民の役目を果たしていたと言えるな。記録については……奴等が抹消したんだろう。より上位に立てるように」

真偽については高位の精霊に確認してみる。

そう駄目押しのように付け加えられて。フィアセレスは力なく、椅子に座り込んだ。

『神』がないのが事実であるのなら一つ疑問がある。

現実に奇跡は起こるのだ。神と言う人知を超えた存在が起こしているのでは無いというのなら、何故起こるのであるつか。

偶然か必然か。

それだけでは片づけられない、推し量る事の出来ない『力』が働いている場合が多過ぎる。

「……では氷魔王。こういう事なの？ 奇跡は、世界そのものが作用している」と

耳目を集める美しい声が、軽やかに響く。

曲の奏べのように静かなソプラノ。

通常はスアウに次いで、必要以外の反応を示さないリア・ノインの言葉に、カタストロフは頷いた。

「そういう事だな。書を読む限りでは、この大陸であまり人気の無い『神竜』 アレが一番説明しやすいな。『神竜』は天寿を全うした極稀な竜が、世界の調節の一部に組み込まれて理や律に反しない程度の力を振るって、主に夢の民に奇跡を起こしてやってるから」

「何故、夢の民が中心なの？ 最も数が多いから？ それとも、最も欲深いから？」

イーシャは初めて知った。

リア・ノインは率直な人間であるようだ。言葉を飾らない。

傍に居るレスクやイーシャの存在を、全くもって気にしていないように見える。

「視覚ではなく世界を音色で認識しているお前なら、夢の民がどれほど喧しくて執拗で力強い要求が多いか、よく分かるだろう？」

二人を気にしてないのは、カタストロフも同様だった。

「そもそも他の民は、滅多な事では世界に助けを求めない。助けを求めた状況になったとしても、届くほどの力強い『音』を送れる者は多くない」

「そうね。夢の民の音は豊かで鮮烈。獣の民は大きいけど単調。他の民達は、精霊の音が混じっていて世界に近くて。夢の民ほど様々な主張ではないもの」

リア・ノインは半ば伏していた臉を上げた。
カラストロフを真つ直ぐ見て、まるで花が開くように、鮮やかな
微笑みを浮かべる。

「ちよつとした皮肉じゃない？ 夢の如く脆く、儂き年月の中、己
が願いを叶えしたため生きる民……由来からして、世界に最も逆らつ
存在なのに最も愛されているなんて」

ふふふ。

鈴を鳴らすような美しい声で笑うリア・ノインは、微笑むその姿
だけなら、まさに古代夢の民が崇めた天の御使いのように見えた。

第十話

称号は氷魔王（後書き）

読んで下さってありがとうございます！！

第十一話 波紋（前書き）

そろそろ、いろいろな事が動きます。

でもまだ伏線……

第十一話 波紋

彼は王城の屋上に来るのが初めてではない。

居心地の良い場所を探すために、王城を一人で散策していた際、立ち寄った事がある。

広々として他人がいないものの、また来たいとは思わなかった。それはこの区域全体的に言える事であろう。

空気が悪いのだ。

淀んで凝り集まった魔素を、引き寄せられて漂う微量の瘴気を感じる。

ここは政治の中心地の上。空気が淀むのは必然。

彼を呼びだしたのは、そんな空気が香りのように取り巻く相手だった。

「私ごときに時間を割いていただき、光栄です。カタストロフ様」

石の床に跪つまたひいて、闇の民サレの族長は深く頭を垂れた。

彼にとつて、オーウエンのような態度で接してくる者は多く、慣れている。

『魔を制す王の器』であるがために、今は無い民族の混血であるが故に。

父方アルヴからは、邪竜対策に便利で壊れにくい生きた道具としてぞんざいに人格を無視され。母方サレからは『神々』以上の崇拜対象としてこの上なく。

一月の間に思い出した過去の欠片は、戻って来てほしくなかった記憶ものの方が多い。

「突然ではありますが、私と共に我らが街へいらしてくださいませんか？ 貴方様の空白を埋める御役に立てると思うのです」

彼は無言でオーウエンに近づいた。右腕を伸ばし、濃灰色の髪ごとその額を掴む。

さすがに彼のこの行動には驚いたのだろう。

オーウエンの身体が、無意識に逃げようと後ろに退いた。

「……族長として選ばれるくらいだ。瘴気の許容耐久容量もそれに高いはず。だというのに、これほど濃い匂いになってるとは！」

額を握った右手に力を込めるのではなく、手のひらを焦点として浄化の力場を凝縮する。そうすると、接触する事が必要であるものの、彼は個体の奥まで浸透した魔素や瘴気を引きずり出せた。

これが出来るからこそ『魔王』として生まれた者は、サレに尊敬され大切にされる。『魔王』の真価とも言つべき能力だ。

手のひらから流れてくる濃密な魔素の気配に、彼は少し胃がムカついた。一分程度で右手を離し、指先で軽くオーウエンの額を突く。蓄積していた消化不良の魔素を急激に解消させられ、サレの族長は呆けた面構えだった。

「お前がこうなっているんなら、他のサレはもっと深刻だな。そうだろう？」

闇の民の体質は欠陥がある。

世界の一部たる闇の精霊そのものではなく、宿っているだけの肉体がある人間であるがために。

取り込んだ魔素や瘴気に、魂が引きずられやすいのだ。簡単に言うと、性格が歪みやすい。

「魔素を生む戦争があればある程、闇の民は強く悪しく好戦的で残酷になる。逆に戦争のない時代であれば、ややひねくれて斜に構えている程度ですむくらいだった。」

「差別の少ないディアマスに加わった点からしても、本来のサレは穏やかな暮らしこそ好むと分かる。」

「さっき言っていたな。今代の『魔王』はいない、と。俺の後は何人いた？ どれだけ長いくない？」

「千年に一人の割合で生まれる『魔王』は、闇の民が生きるための安全本能に近い。民族の正気を保つのに必要なのだ。」

「戦争が続いても、『魔王』が居れば引きずられる事は無い。だが、この大陸は断続的に争いが続き、いま『魔王』は存在しない。嫌な想像しか湧いて来ない状況だ。」

「さあ、オーウェン。本題は何だ？ 先に言っておくが、俺は利用されるのが何より嫌いだ」

「数えるのもバカバカしいほどに、むしろ生まれ落ちた直後から利用され続け、おそらく今この状態でも光の民に利用されている。」

「利用されるのには慣れた。だからといって、他人に利用される事が当然だと思っっているわけではないし、好きなわけではない。」

「彼を崇める闇の民は、願いと言う形で来るからまだ選択権がある。頼られているとはいえ、利用されている事に違いは無く、気分が良いものではなかった。」

「彼には、断れなかったからだ。」

「光の民に道具扱いされるより、サレに崇められている方が待遇は比べ物にならないほどに良い。」

居場所を捨てたくなかったから、断った事がない。でも今ならば断われるのだ。

さほど干渉されない、新しい居場所が出来たから。

夕食の時間が迫っていたので、二題で本日の会議は終了。

当然ながら、イーシャはこっそり民族長達に厳重注意を受けた。覚悟していたとはいえ、ガリガリ気力を削られて。確実に、本題よりもそちらの方が長かった。

「イーシャちゃん。ちょっといいか？」

会議が終了し退室しようとしていたところ、オーウェンが話しかけてきたので、カタストロフとはそこで別行動に。今頃、素顔鑑賞でもしている事だろう。

「はい。何か御用でしょうか？」

廊下を歩いていたイーシャが振り返ると、そこにはドラクロとスアウの姿があった。

この二人と一緒に行動しているのは珍しい。

一般的に反属性の者達は、仲が良くないのだ。この二人だと、ドラクロの方が遥かに年長で強いので、偶然遭っても喧嘩腰になる事は無いようだが。

「私ではなく、カタストロフ殿に用事があられるのでしたら、残念ですけど現在何処に居るかは存じませんが」

凶星だったらしい。ドラクロは広い肩を落とした。

スアウはそんなドラクロをジッと見ている。

会議終了後、ドラクロもカタストロフに話しかけようとしていた。出来なかったのは、彼が椅子を破壊した件でフィアセレスに叱られていたからだ。

「そうか……じゃあ、居そうな場所教えてくれねえか？ 話があるだよ」

イーシャは少し考え込んだ。

この様子からして、別にドラクロは強者との戦いに胸を躍らせているようではないから、本当に話があるのだろう。

カタストロフは一カ月の間、あまり城内を出歩いていない。イーシャが訪ねると大抵客間に居たし、一緒に出ても図書館くらいだ。午前中は外に散歩へ出ているような事を言っていたので、引き籠こもっていたわけではない。

そういえば中庭について誉めていた気がする。空気が良い。寝るのにちょうど良さそうだ、と。

「いえ。オーウェン様と一緒に居るのは間違いないですが、あいにく居場所の心当たりまでは……」

「……そーか。手間取らせて悪かったな。探してみる」

更に肩を落とし、ドラクロは覇気のない声で呟いた。ぴしぴしと軽く尻尾が絨毯の床を叩く。特に力が入ってないのか、絨毯も床も無事だ。

少しばかり哀れに思えて、イーシャは提案した。

「もしよろしければ、普段カタストロフ殿が普段使われている間に

「ご案内しますが？ 闇雲に探されるよりは食事も近い事ですし、すぐ会えると思いますけど」

「本当か!？」

「ばああ。」

目に見えてドラクロは喜びを表情に現し、イーシャの両手を掴んだ。

静かなスアウの視線が、掴まれた両手に突き刺さるような強さで注がれる。

「それなら案内頼む。スアウ、お前はどーすんだ？」

少し考えるような間があつて、スアウは頷いた。

「……わたしも行く。それより、手は離すべき。イスフェリア、未婚の王女。見られたら変な噂立つ」

「あー。そうだった。スマン」

単に見咎めただけのようだ。スアウの眼差しは考えが読めないの
で、少し怖い。

「いいえ。お気になさらず……ではお二方。私の後に着いてきて下さい」

会議室のある王城の本丸区域から、イーシャに与えられた区間までスアウの足を考慮して、ゆっくり歩く。途中で遭遇した女官に命じて、夕食の手配を整えた。

カタストロフの部屋に辿り着き、扉のノッカーを叩く。イーシャはいつものように反応を待たずに開け、室内を見回した。

居間、主寝室、使用人用寝室、物置き、応接室、簡易厨房、食堂、風呂にお手洗い付き。一般家族が楽に住める風雅な客間には人氣が無く、飯の主の姿は無い。

「まだ戻ってきていないようですね。どうぞお入りください。中で待ちましょう」

貸しているとはいえ、この辺りの区間はイーシャの所有だ。特に問題は無い。

イーシャはそう言って、室内に足を踏み入れた。毎日訪問しているだけあって、自室のように勝手はわかる。

応接室に通そうとしたら辞退されたので、居間に二人を落ち着かせると、簡易厨房へ向かった。

棚から白磁のカップと茶器を取りだし、湯を沸かす。保冷庫から切り分けられた胡桃くるみのパイを取りだして、いったんイーシャは居間に戻った。

長方形テーブルの卓を囲む、コの字型の大きな長椅子ソファにドラクロはどつかりと、スアウは彼の対面となる位置に腰かけていた。彼女の傍、椅子の上に杖代わりが乗っている。

二人にパイを薦めてから簡易厨房に戻り、沸騰した湯を人数分のカップと茶器に注ぎ込んで　イーシャはふと、ある事に気付いた。

ニンフはあまり熱に耐性が無いと言われている。全く駄目というわけではないが、ヒトの基準からするとかなりの猫舌なのだ。

茶葉を茶器に入れ砂時計をひっくり返すと、イーシャは保冷庫を開けた。思った通りの物　ジョッキ型のケースに入った氷を発見する。スアウには氷を入れてもらえば良いだろう。自分で飲み加減を決めてもらった方がよさそうだ。舌に火傷は地味につらい事であ

る。

銀色のお盆トレイに茶器と氷のケース、砂時計と湯を捨てたカップを乗せて持ち、イーシャは居間へと戻った。

パイが半ホール分無くなっている。

犯人はドラクロだ。スアウ用のフォークは汚れていない。

「それで、カタストロフ殿にこういった用事がありましたでしょうか？」

立ったまま高い位置で三人分の茶を注ぎ、置く。今回のお茶は、リンという木の花から作られた物で薫りも味もほんのり甘く飲みやすい。

イーシャは自分の分のカップを持つと、一人用のソファアールへ座った。

「現在あの方の後見は私が引き受けているので、気になるのです。ただの好奇心ですので、答えたくないのでしたら、口を閉ざしたままでも構いません」

ドラクロはパイの面積をどんどん減らしていき、スアウは何も手をつけず、冷めると念じているように真っ直ぐカップの湯気を見ている。

返答は無い。

イーシャがそう考えかけた時、ドラクロが食べるのを止めた。

「俺は詫びに来ただけだ。リア・ノインが氷魔王嘘ついてねえって保証してたからな。ちと態度も悪かったし」

ハーピィの世界は音で満たされている。

故に、音として放たれた言葉の陰かげりや濁りにとても敏感で、偽り

を見抜く。

「それと、どーせだからどんなツラしてんのか見てやるうかと思っ
てよ」

ドラクロは軽い調子でそう言っつて、新たな一切れを口に運んだ。
二口めでパイが殆ど消える。甘党らしい。イーシャはそう心の中の
メモ帳ドラクロ編に書き足した。

遅いようなら夕食をここで食べると言っていたから、ただ単にお
腹が空いているだけかもしれない。

スアウは自分用の皿の上のパイですら、手をつけていない。ドラ
クロの食べっぷりに引いてしまった可能性は大だ。パイはもうスア
ウの分しか残ってない。

彼女は先ほど見た時と違って、左手に氷入りケースを持っていた。
やはり、目の前のカップを見ている。湯気はまだ出ているから、あ
まり氷を入れて花茶を薄めたくないようだ。

もしか甘いものが苦手なのだろうか。
確か塩味のクラッカーがあったはず。

そう考え、イーシャが簡易厨房に向かおうと立ち上がりかけた時、
スアウは口を開いた。

「……わたし、氷魔王に用、ない。用があるの、貴方達」

「え？ 私とドラクロ様に？」

イーシャは驚いて、しきりに瞬きを繰り返した。

イーシャはスアウと個人的な繋がりはない。基本的に軍部の仕事

しかしていないからだ。ニンフの問題を扱う部署は管轄が違う。はつきり言って、スアウと会話するの事体これが初めてだ。

ドラクロは將軍に任じられた際、彼から強さを見に会いに来て手合わせしたから、偶然廊下ですれ違えば世間話くらいはするが、共同で何か職務を任されているわけでもない。

「どんなご用件でしょう？」

考えても分からなかったので、イーシャは尋ねた。

第十一話 波紋（後書き）

カラストロフのうけた過去の仕打ちを全部語るとなると、シーン抜きでもR15の指定した方がいいのか考え中。

でも、知ってるパソコンゲームではそういうシーンは抜きで、それっぽい描写があるのに全年齢だったし……うつつむ。

残酷表現内でおさまる？

彼は不幸と言うより、悲惨な気がしてきました。

第十二話 火 対 水（前書き）

今回短いです。

戦闘描写、初めて書きました。

途中から出てる人は、今回短かったせいで予定より出番が繰り上がり、あるキャラの不幸度を上げていきます（w

第十二話 火対水

イーシャの質問に、スアウは黙って立ち上がった。

いつの間にかその右手には布を巻いた大鉾が握られている。左手で持っていた氷が瞬時に水へ変化し おもむろにスアウはその冷水を頭からかぶった。

スアウに触れるやいなや水は溶け消え、代わりだともいうように彼女の髪が硝子のごとき色彩へと変質する。

首飾りが突然切れて、バラバラと空で弾けた真珠が音を立てて床に落ちた。

「……いい度胸だ。スアウ」

ドラクロの顔から見る間に笑みが消え、その眼がギラリと険悪な光を放つ。

嫌な予感に、イーシャはササツと後方に三Mメートルほど退避行動を取った。

「ちやつちやつと片つけるか!!!」

がなると同時にドラクロは翼を広げ、床を蹴った。

彼の両手の爪が二十センチほど伸びて、金属のように硬化する。凶器と化した右の貫き手を、ドラクロは迷う事無くスアウの胴体めがけ突き出した。

スアウは黙したままその一撃を避け、先程までイーシャの居た位置を見かけを裏切る力強さと俊敏さで回避する。

勢いのついていたドラクロの爪は、一瞬前までニンフ族長が座っていた場所に風穴を開けた。

風穴から亀裂が放射状に広がり一秒も経たぬ間に、その大きさに見合つて頑丈だったはずの長椅子ソファが半壊する。

「……な、何事ですか?!」

イーシャは困惑もあらわにそう言った。

突然始まったドラクロとスアウの戦闘の意味が、さっぱり理解できない。

「イーシャちゃん、スアウが戦闘態勢に入りやがったの見てたろ。あの水はともかく、使い切りの魔道具くひかざりで増幅ブーストか。なら、大鉾アレも何かあるな。周到に小細工使つてまで俺に勝ちにきてやがる」

イーシャにも、半壊した長椅子ソファにも見向きもせずになんか答えるとドラクロはスアウに襲いかかった。

対するスアウは彼ではなく、観戦状態に入っていたイーシャに向けて左手を掲かかげる。

「マズイ。」

イーシャの長年戦場で磨かれた勘が、生命の危機を訴えた。武器を持つて会議に出る事など禁止されていたから、当然「紅の刃」は自室に置きっぱなしである。

しかし、退避には既に遅く　スアウから放たれた水が、イーシャから空気を阻んだ。

何が起こつたのか。

イーシャはしばらく把握出来なかった。

水の冷たさに驚き、空気を求めて闇雲に頭を振り、手を動かす。

息苦しくなつた頃、ようやくイーシャは悟つた。

彼女の頭を、ぐるりと水が覆っているのだ。

水球が、頭の中から首元まで。

ごぼり。

口から洩れた空気の泡が、浮かんで消える。

ニンフ以外の人間を殺すのに、大量の水は必要ない。バケツ一杯ほどあれば充分に事足りる。

イーシャは齒を食いしばって息を止め、これ以上空気が出ないように心掛けた。

いつの間にか、スアウがすぐ隣に居て。

水の膜ごしに、ドラクロが炎を吐きだしたのが見える。

よく見ると、ドラクロは両腕と両足に渦巻くオレンジ色の炎を纏まとっていた。

目の錯覚ではない証拠に、彼の足下の絨毯が焦げて、その下の白い石床が覗いている。他に被害が無い事から、その炎はきちんと制御されているのだろう。

スアウは手に持った大鉾を、無造作に迫りくる火炎に向けて突き出した。

結果は、刀身部分の布が一瞬で燃えて落ちただけで。対消滅を起こしたように炎が消える。水蒸気すら発生していない事で、瞬時に同質量の水の魔力で対応したのが見てとれた。

軽量化の呪もかかっているのか、スアウは軽々と苦にした様子も無く扱っている。

剥き出しになった大鉾の刀身は、金属では無かった。

深い蒼の、磨き抜かれたような美しい輝きを放つ　巨大なダイヤ。
ア。

水属性を持つ、通常敵わないはずの相手の力を打ち消すほどに、

強い『力』ある武器型の魔道具。

イーシャがずっと休みのたびに探していた、義兄に渡したいと考えていた理想の魔道具がすぐそこにある。

たぶん。きつとアレは『紅の刃』のように

酸欠で意識を朦朧もうちゅうとさせながら大鉾について推察すいさつしていたイーシャは、咽喉のどに冷たい感触を覚えた事に気付かなかった。

スアウとドラクロが何か話している事は理解しているが、声が聴こえない。

遠のく意識の中、イーシャはぼんやり思った。

水気の無い室内で溺死でっせいなんてしたら、みんな首を捻ひねるわね。

それを最後に、彼女の意識は暗闇に呑まれた。

深い深い眠りの底で。

イーシャは夢を見た。

これは夢だと分かっているのに、まるで実際にあつたことを外から眺めているような、何故か起きてるように思考も出来る変わった夢を。

「この存在こそ咎とがなり。

知ることなかれ。近寄ることなかれ。見ることなかれ。

触れることなかれ。解き放つことなかれ。

時足らずして。放たれたのであれば、大いなる厄やくが覆おつであ

るつ

「

あのバテユイ樹海にある遺跡の最奥で。

天井にカタストロフが封じられている中心地の真下で、一人誰かが立っている。

イーシャには後ろ姿しか見えないが、腰まである美しい銀髪で、纏った白い衣装とその声からして女性のようだ。

「我等は此処に示し。残す。

不幸にして幸いなる者よ。我等のコトノハを唱える者よ。

心せよ。覚悟せよ。その身に余りある力を受け止めることを

」

あの時、イーシャが聴いた、口に出させられた『力』あるコトノハを、朗々と美しい声で女性が謡う。

ぼんやりとその全身が淡い光に包まれて、ひどく浮世離れた光景だった。

「理解せよ。識るがいい。聖と邪を開放することを。

願わくば時よ。十全に満ちていよ。大地よ。放たれる力を受

け止めてあれ」

光の波が一瞬取り巻いて、広がる。

遺跡の壁まで広がった光は、溶けるように消え失せた。

「これでよし。あとはこの術式対象となる夢の民が来そうな文献でも、誰かここに連れてきて書かせればいいわね。一つじゃ心もとなけれど、複数作らせたらいつらに怪しまれるし。カーフィはものすつごく悪運が強いから、多分平気」

女性は天井を見上げた。そこには氷塊と鎖に包まれたカタストロフの姿がある。

問答無用で意識を奪い去るはずの美しい光景に、女性はうっとり

とした声で語りかけた。

「だあいすきよ。可愛いカーフィ。誰よりも愛してるわ。自分よりも世界よりも愛してるから 私は、貴方を優先させる。私のする事、いつか赦してね」

カーフィ。

状況的にカラストロフの愛称だろう。

それなりに本人と仲が良くなければ、そして許されなければ基本的に愛称で呼ぶ事は無い。

銀髪で、カーフィと呼ぶ仲良さげ というより彼を熱愛する『神』である光の民アルブの女性。

あてはまりそうな人物名を、イーシャは一人だけ知っていた。

エーリス。

目覚めたカラストロフが、イーシャと見間違えた人間。

くるり。

突然女性は振り返った。

しっかりとこちらに体を向けているというのに、何故かイーシャには彼女の顔が見えず、整った口元だけが見てとれる。

「夢を介して私を見ているでしょう？」

そうなるように私が術を組み込んでおいたから。愚かな夢の民。必要だからラインをあの子と繋がるようにしたけど、さっさと死ぬことね。

すぐ死ぬ脆弱さだから鍵に指定してあげたけど、術式上、仕方がないとはいえ生きてるうちはずっと、カーフィとラインが繋がってるなんて なんて妬ましい。ホント、早く死んでちょうだい」

ドロドロに憤激の混ざった、強い口調で女性は嘲笑う。
見えない眼差しから、イーシャの全身の血が引くような強烈過ぎる憎しみを感じる。

「警告よ。カーフィの鎖が消えたら此処に来なさい。わかることがあるわ」

でもカーフィには言っちゃダメ。

その言葉を最後に、イーシャは夢から覚めた。

第十二話 火 対 水（後書き）

エーリス……設定ではもう少し違った性格だったんですが。

奴の不幸の一部と念じて書いたらヤンデレに……（汗）

第十三話 スアウの主張（注！！流血描写あり）（前書き）

総合アクセス数がなんと1000を超えました！！

お気に入り登録して下さった方。

読んだ下さった方々のおかげです。

拙い作品ですが、これからもよろしくお願いします。

祝モードの作者ですが、本編はシリアス中です（汗
しかも。

保険だったはずの残酷表現あり、な回。

苦手な方、ご注意ください。

第十三話 スアウの主張（注！！流血描写あり）

ピチャ……………ぴちゃ……………ん……………ぴちゃん……………

滴る水音に、イーシャは目を覚ました。

ぼんやりとしたまま瞼を上げ、片頬に当たる冷たい石床の感触に困惑する。

起き上がろうと体に力を入れてみても、手足がいうことを聞かない。

痺れて動けないのではない。血の巡りを遮らぬ程度の強さで、しかし決して自力で解く事が出来ぬよう執拗に縄で縛られているのだ。縄抜けは成功しそうにない。

イーシャの状態では肩の関節を外そうと、無駄に痛いだけだ。

何しろミノムシのような状態。彼女を縛る縄は両手首から両肩、両肩から両足首までというように何重にも巻かれていた。

少し息苦しいから猿轡やゐりつちまでされているようである。

滴り落ちる水音は未だに聞こえてくる。

イーシャは見える範囲を観察した。

何も無い部屋だ。

薄暗く、水気も無い。

何かあるのは見えない方向のようだ。

イーシャはそう判断を下すと、壁に向かってゴロゴロと転がった。壁に身体を押しつけて、ジリジリと上半身を起こし、どうにか寄りかかるような形で床に座る。そして顔を上げ 先程より視界が広がって見えた室内の様子に、イーシャは息を呑んだ。

イーシャから見て右側に扉があり、すぐ脇の壁に刀身を布で巻いた大鉾が立てかけてある。

スアウが持っていたものだろう。
わざわざ再び布で刀身が覆われているのは、イーシャに使わせな
いたためだろう。

あの時、無地の布で隠されていた柄部分は、びっしりと符で覆わ
れて何か書いてあるようだ。

この場所に、何かの呪をかける媒体として利用されているのかも
しれない。

ただ、彼女が驚いたにはそれについてではない。

イーシャがいるのとは逆側の壁に、ドラクロがいた。

壁にくい込んでいる太い鋼鉄製の輪はドラクロの両手両足を掴み、
その身体を標本にされた虫のように磔はりつけにしている。

双翼と尻尾には鋼で出来た杭が深々と突き刺さり、壁に縫い止め
ていた。

鋼の杭を伝って流れ落ちる紅い血が、強制的に空に浮かされた彼
の足の下にある、数人が入れそうな深く広い大皿こぼに零れ落ちていき、
室内に水音を響かせている。

意識が無いのだろう。

ドラクロはぐったりと脱力し、目を閉じて項垂うなだれていた。わずかに
胸が動いて呼吸しているのが見えるので、生きているようである。

「ぶぐぐー!？」

叫ぼうとして、イーシャは猿轡けんぐしわの事を思い出した。

焦燥感に駆られながら壁に顔を押し付け、頬をすり付けるようにしながら摩擦で外そうと、しばし格闘する。

どれほど時が経ったのか。

焦るあまり、じつとりイーシャの額が汗ばんだ頃、ようやく片側の布がずれて外れ、肩に落ちた。思い切り大きく口を開け、口の中にあつた布を舌で押し、ぺっと吐き出す。

息苦しさと不快感が無くなり、イーシャは咳き込んだ。

滲んだ涙がわずかに視界をぼやけさせる。

咳が落ち着いたのを待って、大きく息を吸い込んだ。

「ドラクロ様！！ 起きて下さい！！」

イーシャは腹の底から大きく声を出して叫んだ。

状況が分からないのならば、知っていると思わしき人に聞くしかない。そして、大量に出血している上に意識が無いとなると、生命の危機でもあった。

数分ほど、呼びかけを続けたらどうか。

戦場で配下に号令を出し慣れているイーシャは、まだまだ余裕で叫んでいた。

ドラクロの反応は相変わらず無かったが、息を吸いこんでいると別の方向から応答があった。

「……酸欠で気絶したのに。ずいぶん元気」

特徴のある、切れ切れの弱々しい声。

イーシャは慌てて正面から視線を移した。

開いた扉のすぐ傍に、スアウが立っている。

彼女は金属製の大きな長方形の鞆を手に、真つ直ぐイーシャを眺めていた。

さんざん叫んでいたのだ。扉が開く音に気付かなかったのはまあ良い。

ただ、人間の気配に気づかなかった事は、イーシャにとって衝撃的だった。族長の地位は、伊達や酔狂で成れるものではないという事だろう。

室内に入るとスアウはイーシャには目もくれず、ドラクロの方へと向かった。

「あの大声でも起きない。スゴイ……仕方ない」

ずっとスアウの右手が上がる。

唐突に、彼女の上げた手のひらの前に直径四十センチほどの水球が具現した。

イーシャはアレをくらって気絶したのだ。

素潜りの達人でも無い水中訓練を受けてもいない者が、空気を遮断されて水を飲めば数分経たずに窒息する。

派手さは無いものの、実に有効な術だろう。

スアウは水球を、ドラクロに向かって投げつけた。

水球は激しい音を立ててドラクロの顔面で弾け、飛沫を散らす。

スアウは素早く二投目に入った。またも飛び散る水球。

「っ……っ???…な、ん……?」

薄く眼を開け、頭を振りながらゆっくり顔を上げたドラクロに、

スアウの三投目が綺麗に当たった。

ぶつかると弾ける事から、イーシャのくらったものより殺傷力事は低いものの、結構な物理的衝撃力があるらしい。

戸惑っていたドラクロの顔が歪み、怒りにか瞳孔が縦に割れる。反属性という事も、効力を上げているのかもしれない。

水に濡れそびったドラクロの身体から、しゅうしゅうと音を立て蒸気が上がった。

「て、め、え……何しやがるっ!!」

先刻までの弱々しさが嘘のように、気迫のみなぎったドラクロの罵声が響く。

目に見えて分かるほど彼の身体に活力が宿り、オレンジ色の瞳の輝きは炎を連想させた。

「スアウ！ てめえ、どういっつもりだ！？ 俺達を拉致監禁しやがって！ 覚悟は出来てんだろーな!？」

濡れた金髪が、ドラクロの放射する熱で一気に乾く。

ゆらゆらと、風もないのに彼の髪が揺らめいた。

壁に礫状態はじりでなければ、ドラクロの発言もずっと迫力があつただろつ。

八の民で、こと個人の戦闘能力に関してはドラゴニアが最強だ。

小細工を使おうとも、火の民最強であるドラクロにスアウが勝利する事が出来たことを知れば、みな驚愕するだろう。

そう。

結末を見ていないが、イーシャにもドラクロが負けた事は分かった。

そうでなければ、こんな状況になっていない。
ドラクロの様子からして、勝敗の決し方に相当な不満を持っている事が分かった。

「……覚悟。何十年も前から、とっくに出来てる」

スアウは淡々と言い、怒り心頭なドラクロに近づいた。近づきながら水球を創り出し、二度三度と彼に投げつける。

「貴方を拘束してる、それ。中身、火の精霊用の封じ石。怒っても無駄。強い感情を幾ら注いだって、外に炎が吐けるほどの力、振るうの無理。無駄な事しないの薦める」

しゅうしゅうと音を立て、ドラクロにかかった大量の水は蒸発していった。

スアウは逆手に持っていた金属製の鞆をドラクロのすぐ傍に置くと、蓋を開け中身を取り出す。

出てきたのは数個の鋼の輝きを持つ半円の輪、空の大ビン、青い液体が詰まったビン、そして楽に五人前くらい入りそうな巨大な弁当箱だった。

「連れてきたの、ちゃんと理由ある。イスフェリア、レスクの人質。ドラクロ、貴方は治癒力の高い血を供給してもらうのに必要」

イーシャはぞっと身震いした。

それを意味するのは、ディアマスへの反旗。

「……何故、ですか？」

スアウはイーシャを一瞥すると、目を伏せ大きな溜め息を吐いた。愚問だと、その仕草が大いに語っている。

「わたし達、八十年待った。でも、もう待って耐えるの、お終いにする」

スアウはドラクロに目を戻し、暗緑の翼に刺さる二本の杭を続けざまに引き抜いた。出血を抑えていたものが外れ、勢い良く血が吹き出す。

ドラクロが苦痛を表情に現したのは一瞬で、見る間に貫通していた大穴が塞がっていった。

スアウが治癒術を掛けたのではない。彼が自力で治したのだ。

「夢の民がつくづく愚かなのは、よく分かっているつもり。だから、何処のヒトの国の支配に入る気なかった。でも、メイザスは手を結んで王国に協力して五十年経っても変わらないなら、隙をついてデアアマスをつとつてみれば良いとさえ言った。そうする事でわたし達の怒りを表におもてにだせと」

メイザス。別名を交渉王。

風の民ハーピイ、闇の民サレ、水の民ニンフと盟約を取り付けた九代目デアアマス国王だ。彼の没後の十年間は暗黒時代と今は言われている。

何故なら、四人もの王が死んだから。

十代目と十二代目は戦死、十一代目は事故死、十三代目は毒殺。当然、十四代目として即位した現在遠征王と呼ばれるミルドは疑いをもたれた。

同腹の姉と異母兄三人を死に導いた黒幕ではないか、と。

「次の四人は何もしないまま死んで、ミルドは王国を広げる事しか頭に無かった。でも。ルーフィアは色々手を回して頑張ってくれたから、もっと待ってみる事にしたの」

スアウはドラクロの様子をジツと見つめ、長い尻尾を半円の輪を使い、せつせと壁に固定し始めた。

「水を汚し、わたし達を傷つけ……それだけなら、辛いけどあと百年くらい待つてあげても良かった。でも、イスフェリア。貴方の同族達は、わたし達が決して認められない事をした」

ドラクロの顔が、再び苦痛で歪んだ。

スアウが尻尾に刺さっていた杭を抜きとったせいだ。

翼の時と同じく血が噴き出したが、あっという間に肉が盛り上がり傷が塞がっていく。

まさしく『竜の子に近い』ドラゴンニアという民族名に相応しい、もの凄い再生能力である。

「わたし達にとっての『神』。海竜王。リウフィアサンあの御方を、愚かな夢の民が酷く傷つけた!!」

もう自己再生が間に合わないほどの傷。強い毒に侵されている。あのまま亡くなられてしまったら、次代の引き継ぎが出来なくなってしまう!!

リウフィアサン海竜王となられる御方は常に先代の遺骸を食べて、その血肉と代々の知識と能力を己のモノとするのに!

次代もそのまま毒で亡くなってしまう!!」

スアウの血を吐くような叫び声。

声帯が強くないらしき彼女には、信じられないほど力強く。筆舌に尽くしがたい心の痛みを、言葉に内包していた。感情の高ぶりに、その青灰色の瞳から光る涙が落ちる。

ディアマスとしては頭が痛いどころか胃も痛む問題だった。

水の民と盟約を結び、その保護を約束したメイザス王から代々続く、王国の悩みの種なのである。

イーシャは、そのメイザスとの間に結ばれた期限付きの約束の事について知らなかった。

多分、知らされるのは王太子になってからなのだろう。

そもそも、ニンフから寄せられる被害報告のみで専用の対策部署が出来るくらいなのだ。知っていれば、よりいっそう焦ってしまう。

リヴァイアサン
海竜王に関する被害報告と抗議文書も、目録だけで三冊分もあるのだ。

「あの御方は今、深い深い海の底で、わたし達の治療を受けている。わたし、百八十七年生きてきて、あれほどまでに酷い姿見た事無い！！」

そんな姿見てまで、耐えてやる必要が何処にあるというの！！」

第十三話 スアウの主張（注！！流血描写あり）（後書き）

読んで下さってありがとうございます！！

第十四話 その頃の王城（前書き）

前回の続きが入るので、微妙にタイトルミスです。

作者はタイトルつけるの正直、苦手（TWT

変なタイトルだったら、思いつかなかったんだと生温かく見守って下さい。

第十四話 その頃の王城

水の民ニンフには人魚の他に、もう一つ強欲者を惹きつける迷信がある。

それは涙石。

こぼした涙が魔力を含んだ、美しい結晶体になるという。

体内にある水の精霊の影響で、己の中の水分を制御できるニンフはめつたに涙する事は無い。

生まれて数年の幼児時代、出産時、そして死の直前以外は数回ある程度と聞く。

故に囚われの身になったニンフは酷い拷問を受け、死ぬと遺体をバラバラに切り裂かれて食わるといふ悲惨な末路を辿る。

イーシャは涙石の事も迷信だと思っていたが、これは事実だったようだ。だからこそ、余計にもう一つの迷信を信じ込む者が出るのだらう。

かつり、かつり。

スアウがこぼす涙が頬を滑り落ちると、一瞬光って結晶化し、音をたてて床に落ちた。

色は光に透けるような薄い青で、真珠の半分ほど大きさである。

「……ヒトがヒトである限り、争いは無くならない。仮初かりそめであつても、ようやく平和な時代になれる空気の片鱗が覗いてきたのに。強欲な者は、そんなものに興味を持たない。自身の利以外、考えられない 本当になんて、愚かしい」

イーシャは、悔しさに胸を突かれながら呟いた。

これでは何のために今まで戦ってきたのか、分からなくなる。

ディアマスを広げ、レスクを支えて、より多くの持たざる者に安定した暮らしをさせてやりたい。

そう考え、己の手を血で穢し、部下を死地に送ってきたのに。

ほんの一部である強欲者のせいで、また多くの血が流れるのだ。

時代の流れも、世界の秩序すら見ないふりをして、己の欲望を叶える。

「世界に最も逆らうのは夢の民……リア・ノイン様の言ったとおりですね」

「イスフェリア。貴女が嘆いても、仕方ない事」

さつと涙を拭くと、スアウは先刻とはうって変わって、淡々とした様子で首を振った。

「少なくとも、メイザスは助けてくれた。ルーフィアとレスクは頑張ってくれたから、ディアマスの血族は嫌いじゃない」

スアウは大皿に溜まったドラククの血を、空きビンに流し込んだ。慎重な手つきで、最後の一滴まで落とすと、きつく栓をする。

「だから、飢えさせない。人質として大事に扱う。でも、今はドラククの栄養吸収が最優先。たっぷり食べて、たっぷり血を作ってもらわないと困る」

「……海竜王リザアィアサンの治癒に、俺の血を使うためか？」

スアウは無言で頷くと、空になった鞆を台替わりにして、ドラククの口に謎の液体入りピンを近づけた。

きゅつきゅと栓を抜く音が聞こえてくる。

「それなら、わざわざ火の民全体を敵に回すような卑怯な真似してまで、無理やり俺を連れて来なくても良かっただろー？ 交渉に割く時間も惜しいほどヤバい状態なのか？」

「火の民あなたたちと交渉、早期に終わらせるの大変。正面切って戦って勝たなくてはダメ。それは不可能。それくらいなら、卑怯な手段でも攫さらって用事を済ませたら帰す。その方がよっぽど時間かからない」

実に嫌そうに顔をそむけ、ドラクロは怪しげな青い液体を、不審に染まった眼差しで見ている。

スアウはグイグイと背伸びして、彼にビンの中身を吞まそうと頑張っていた。

「大丈夫。食べれない物は混ぜてない。栄養価凄く高い。血もすぐ元通りになる」

「ああ。増血剤か……マズくないとは言わねーの？」

「嘘になる事、愛しい人に言う。よくない」

「ハア〜!？」

顎を外さんばかりに、ドラクロが大きく口を開けた。

その絶好の隙を見逃さず、スアウは謎の液体を彼の口に流し込み、吐かせないためか顎を押しして口を閉じさせ、手で口元を塞ぐ。

「へー……そうだったんだ。好いているか嫌ってるかは分からなかったけど」

イーシャはぼそりと独りごちた。

スアウはドラクロが近くに居ると、必ず彼の方を見ていた。感情

が読み取れなかったから、反属性故に目が行ってしまっただろうと、イーシャは考えていたのだ。

反属性は反発する。同時に強く惹きつけられる。

相手に対し、何も感情を抱かないという事は絶対ないのだ。

以前、何かの折にルビエラが主張していたのを、不意にイーシャは思い出した。

そうだ、ルビエラ。

『紅の刃』さえ、あの時持っていれば攫われる事も、それ以前に酸欠で気絶する事も無かったのだ。

水球がぶつかった時点で蒸発し、むしろ反撃していただろう。

スアウの持ち込んだ大鉾が、イーシャの考えたような物だったとしても、その場にはドラクロが居たのである。二対一で勝てたはずだ。

彼女が愛用の武器を持ってない事もあって、スアウは会議の直後に接触するのを狙っていたのだろう。所詮現実味しよせんが無いもの話だったが、イーシャは思わずに入れなかった。

「心配しないで良い。ドラゴニア、わたし達より血の量自体多いといっても今日はもう採らない。綺麗な血が欲しいから薬物なんて絶対混ぜない。しっかり食べて、ドラクロ」

「……気が重い……」

及び腰で、どちらかと言つと嫌そうなドラクロ。

そこはかとなく楽しげなスアウ。

そんな二人を眺めながら、イーシャはこの反乱の行く末を考え、

溜め息をついた。

そして。

王城の混乱っぷりを想像し、あちらで当事者になる事はないものの、胃に痛みを感じた。

彼が与えられている部屋に帰り扉を開けると、惨状が広がっていた。

長椅子ソファの残骸、焦げた床、どろりと高熱で焙あぶられ冷えて固まった痕跡のある石造りの長方形テーブルの卓。

これらに火の精霊の気配の名残。

空のケース、濡れた床に転がる十数粒の真珠、居間全体に水の精霊の気配をはつきり感じた。

優勢なのは水の精霊だ。

これだけ気配が強いとなると、あえて証拠を残していったとみていい。

床に散らばった食器は三人分。

そして、この場所に馴染み無条件で入れるのはイーシャだけだ。

その彼女が招き入れた二人が戦闘になり、この場が荒れたまま放置されている事からして連れて行かれた。

しばらく彼は考えた。

ぐー。腹が大きな音で鳴る。

くるり。

彼はすぐさま振り返って、廊下へ出た。

水の民ニンフがイーシャを誘拐した（多分）
火の民も連れてかれた（と、思う）
ところで夕飯、何処に行けば食べれる？

そう彼が通りすがりの文官に告げるや否や、王城内は恐慌に陥り、レスクは嘆いて頭を抱えた。

大多数の者は、第三騎士団の將軍がやすやすと連れ攫われた事に戦慄して。

後者は水の民との間の盟約を思い出し、愛娘の身の安全を心配して。

レスクは即座に対策本部を設置し、城内に居る各民族長に招集をかけ、協力を要請した。

その結果、更なる混乱が巻き起こる事となる。

今日、王城内に居た水の民は族長であるスアウのみ。

当然、姿を探しても見つからない。

そこまでは上層部も予測範囲だった。

ドラクロが見つからず目撃者を募ると、今日の会議のすぐ後廊下でイーシャとスアウと共に行動していた所を見た　と、犬耳で先が丸まった尻尾をしたバーン族の女官の一人が証言。

この事から、連れ去られたのはドラクロに確定。

その女官はイーシャに夕食について命じられたらしく、隣の小部屋で彼は食事にありつく事となった。

オーウェンは招集を拒絶、そのまま帰って行ったのだ。

この二点においても意見が飛び交い　五時間後。

彼は空腹でろくに頭が回らなかったとはいえ、廊下で下っ端文官

に報告した事を後悔していた。直接上層部に告げに行っていたら、騒ぎになったとしても、もっと規模が小さいものだっただろう。報告しないという選択肢はない。

現場が彼の居住していた場所で、連れ去られたのは彼の面倒を見ていた人間だったからだ。

会議は白熱していた。

何故知っているかと言うと、重要参考人として彼の席も用意されたからだ。

最初の方こそ現場の説明をしたり、聞かれたりしていたが、今は放置されている。

否 放置されていると言うのは正確ではない。用が無かったら、夕食を終えた時に解放されていただろう。

オーウェンについて何か意見を求められるかと思ったのだが、話を向けてくる様子が無い。かといって、口を挟めば意見どころか、下手をすると事の介入すら求められかねない状況に陥っているために、何も言えず身動きが取れない。

彼は物事の矢面に立たされるぐらいなら、退屈とそれに付随する眠気を耐える方を選ぶ。

はなただけ後ろ向きだが、何もせず何も言わない限り、一応は明確な立場を定められずに済む。

三つの選択肢がある時、全てにおいて今も昔も、彼は中立を希望していた。

ようやく会議が小休憩に入った。さすがに、疲れたのだろう。

彼は待ちに待った状況に、迷わず席を立った。

眠気が深刻になったのだ。

魔素を無意識で大量に振りまく夢の民が半数を超えていたので、その吸収・浄化に疲れた　のではない。押し付け合う中身のない内容に、嫌気が差したのだ。レスクへ正直に、眠いから帰って寝ると告げ、さっさと部屋を出る。

その行動に、とっぷり夜も更けていた事も手伝って、制止できる者はいなかった。

迷いのない様子で廊下に出て、歩きながら眉を寄せる。

どれぐらいで部屋に辿りつけるだろう？

彼は方向音痴ではない。

左右どころか、東西南北の正確な位置が測ったかのように分かる。問題は、一人で歩いていると、空気の淀んだ魔素の濃い場を無意識に避けてしまう事だった。

もともと王城という場所自体、空気が淀みやすい場所なのである。人口密度が高いほど穢れやすく、低いほど空気が良い。

王城内で最も清浄な場所は中庭だった。

その上、ちようどあの場所は天も地もマナの通り道に当たる。

彼がふと気付くと、中庭に足が向いてしまっているのは、楽になれる場所を無意識に身体が選択した結果であった。

最短で部屋に戻るには、転移するのが一番手っ取り早い。

今の彼の状態で、徒に力を振るうのは危険行為だ。

魔素や瘴気の吸収と浄化は、元からの体質であるので封印がかかっていようと問題はない。

ただ、純粋な魔力の方はどう作用するか、予測不可能なのだ。

「お待ちいただけますかな。氷魔王殿」

岩を擦るような低い声に、彼は足を止めた。
周囲に注意を向けるが、他者の姿はない。

気配は近くにあるから全身を透化させているか、視界に入っていないか。

後者の可能性を探るべく、彼は視線の位置を下げていった。
ほどなく、大地の民ドワーフの姿を発見する。

大半のドワーフトの身長は百二十から百三十セトの間。彼の身長は二M。^{キート}

近くに立っていれば、余計に視界へ入らない身長差だ。

「……確かペクト、だったな。お前も休みに出たのか？」

彼は自らの名前が出てない限り、右から左へ議論を聞き流し、黙り込んでほぼ置き物化していたが、ペクトの姿が近い位置にあった事は覚えていた。

ペクトも殆ど発言してなかったからだ。話を求められる内容までなっていないかったせいもあるう。

ペクトは厳つい顔を綻ばせ、はっはっは、と笑い声を上げる。

「その通りですじゃ。もう夜も遅い。最も、時間が取れるうちに貴方へ話したい事があったから、後を追ってきたというのもあるのですがの」

「ほー。何の話だ？」

今度は大地の民が何かを起こすのか。

そう考えて、彼は憂鬱ゆううつになった。
別に騒ぎを起こされても構わないし、どうでもいい 彼を巻き
込もうとしない限りは。

うんざりしているのが声に出ていたのか。
ペクトはまた笑い声を上げ、ふさふさとした顎鬚あごひげを撫でた。

「なに、頼みではないですよ。わしはただ、散ったままの記憶の足
しになりそうな事を伝えただけですじゃ。もし既に思い出し
ておられるのなら、逆に質問という形になりますかな」
「そうか。なら聞く」

記憶に関する事ならば望むところだった。
正しい事も正しくない事も影響して、思い出すのに役立つ。
ペクトはまた笑うと、楽しげに目を細めた。

「<闇を照らす月光よりもなお輝きに満つる髪。
陽光を弾き闇に冴え映ゆるは金よりも力強く光放つ瞳>」

彼は眉間に皺を寄せた。
ペクトの言わん事を察したからだ。ドワーフが語るのは、神々を
示す詩歌。

「<獣を友とす永遠の乙女。闇の中、光り道をしるす象徴たる存在>
すなわち、月の女神エーリス。貴方と格別親しい異母姉あねとさ
れてますが、事実ですかな？」

第十四話 その頃の王城（後書き）

一人だけ空気だった族長さんがいたので、出してみました（汗

ちなみに、王城には他の民族の方もニンフとサレ以外普通に勤めています。

マイページがいじれる事に、今更気付きました。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

第十五話 現状の把握（前書き）

今回また長いです。

だいたい、四千字以内を心掛けているんですが。

第十五話 現状の把握

人心地ついて、イーシャは考えた。
考えるくらいしかやれる事が無かったとも言つ。

ドラクロは起きているが、見るからに不機嫌。

瞳孔は元の状態に戻っているが、気軽に話しかけられる雰囲気ではない。

猿轡さげもんを自力で外した点について、スアウに何か言われたりする事はなかった。

そもそも、イーシャは術を使うための導石じゆせきや魔道具を所持していないので、声を封じる必要性はないのだ。

現在イーシャの状態は、縄でミノムシぐるぐる巻き状態からも解放されていた。

皮膚を傷つけないようにか肌ピッタリしていて、感触は柔らかくとも強度の高い大亀型魔獣ランドタートルの腹の革で出来た手錠で、背中の後ろに両手を回されて拘束されている。

どれくらいの強度かというと、鋼鉄製の剣では斬れずに刃が欠けるほどだ。

加工するのに、専用の鋏はさみが必要になるほど硬いのである。
自力で引き千切るなど、もしかするとドラクロは可能かもしれないが、イーシャに出来る芸当ではない。

足枷も同様の物で、長さは肩幅ぎりぎり。走るのには不向きだ。
あまり重さを感じないので、大人しくしていれば同じ姿勢で身体が凝る程度だろう。

手洗いと食事をしに外へ連れて行かれた際、スアウに猿轡さるこしわについての疑問を口にする、ドラクロの拘束準備が整うまで起こしたくなかったからだという。

「準備が間に合わなくて、ドラクロに翼や尻尾の大部分破損覚悟で暴れられたら、拘束取れる可能性あった」

スアウは疲れたように溜め息をついた。

「見ての通り、ドラゴニア、再生力が高くて回復がとっても速い。血の量も多いから、他の民族なら貧血で動けないくらい出血しても元気で暴れる。」

それぐらいの無茶、平気でやる。多分、少し我慢すれば元通りだから無茶と思つてない。

勿論もちろん、現状の拘束はより強化してある。ドラクロの中の精霊弱化してるから自力解除不可能」

水の民ニンフの街は、有名どころが三つ。

永久凍土に包まれたレノン。

巨大な球状の海底潜水都市で、海底大真珠とも称されるクティント。

唯一、ディアマスの正式認可の取れた商人だけに民族問わず門を開く、海上都市ツクフ。

本拠地とされているその三つの内、何処に居るのだろうか。

そーイーシャは考えていた。

人質を有効利用するには、無事を匂わせて何処に居るか分からなくさせるのが手だ。

しかし、ニンフは 精霊を宿す六の民族はヒトほど人口が多く

ない。六の民族全て合わせてもヒトの半数より少し多い程度だ。ある程度の大人数で固まっていられる場所でなければ、奪回を防ぐのに困る事になる。

ドラクロを攫った事で、より一層周囲に武力が必要だ。

十中八、九。族長が帰ってこない火の民の戦意は高いだろうから。

戦争開始前から、ニンフ達の状況はどう考えても詰んでいる。

人数にしても、戦闘能力にしても、敵対勢力の方が桁違いに上回っているのだ。

仮に、水の民の現状を知ってドラゴニア以外の民族が参戦を拒否し中立に回ったとしても、やはり数の差はいかんしがたいものがある。

きつと、勝つ気はないのだ。

積もりに積もった積年の怒りを表明する。

スアウの言っていたように、それが宣戦理由だろう。

現在地については海竜王の世話リヴァイアサンをしているようだから、クティントが有力だ。

海中戦で、水の民に勝てる者はいない。

それこそ、海に強烈な毒を投げ込んで海中資源ごと葬り去る覚悟が必要だ。

戦いに関係ない一般市民も巻き添えを受け、経済的にも大打撃を受ける愚策中の愚策を決行するような上層部では無いから、時間稼ぎの面では持ってこいである。

問題が一つ。

相手が攻めて来ない限り、対関係が悪くなっただけで、宣戦布告じみた行動をした意味がなくなる事だ。

戦況が全く進まないのでは、玉砕覚悟で戦争を吹っ掛けた意味が無い。

怒りを表明するための本拠地として、最も相応しいのはツクフだ。上陸出来る場所が、一か所しかなく、集中砲火を浴びる事請け合いなので、まず都市内で直接戦闘にはならないだろう。海軍力では水の民が上だが、やはり数は力である。補給を断たれて、籠城戦となつて終了だ。

未だ戦闘が始まってないのは、イーシャも分かっていた。スアウ以外のニンフにも会ったが、戦闘中の空気では無かったからだ。

ちらり。

イーシャはドラクロに目を向けた。

視線を感じ取ったのだろう。

ドラクロは相変わらず機嫌最悪といった様子だったが、彼女に目を向けてきた。

「何だ？ 聞きたい事でもあんの？」

無い。そう答えれば、ますます機嫌を損ねてしまつたろう。

イーシャは素早く判断すると、口を開いた。

「ドラクロ様。現在地が何処か分かりますか？」

「多分、レノンだ」

あっさり。迷いのない様子でドラクロは答えた。

「リヴァイアサン海竜王の治療もしてるんだ。わざわざ領域から出さないだろ。他の場所だと、そこを縄張りにしてる魔獣が寄つて来て余計に危険に遭わせる事になるし。リヴァイアサン海竜王の領域内にある拠点なんざ、俺はレノ

んくらいしか知らねー」

レノンに限らず、水の民の拠点は王城から直通になってはいない。正確に言くとクティントのみ繋がっているが、重量制限がある上に座標を特定するための『鍵』になる言語の発音が、ヒトには出来ない音域。ほぼ超音波に近いものなので、風の民と一部の獣の民くらいしか唱えられないのだ。

征服王ミルドが各地に造らせた軍時用の転移門を作動させ、大規模儀式呪文を併用して転移しても、レノンの方向にある大陸北部まで五日はかかる。

そこから船で移動して、氷大陸の方が近いレノンに到着するとなると、更に二十日近い時間が必要だ。

レノンを本拠地に行っているのならば、まだまだ戦線を開くのにも日数が必要である。

「ここに来て、どれくらい経ったか分かりますか？」

ドラクロは一瞬黙り込んだ後、額に青筋を浮かべた。

「氣い使うんじゃねえよ、余計に腹立つ。あんたは、自分が気絶してから時間が聞きたいんだろ？」

彼に瞳が炎色に煌めいた。

その怒りにドラクロの中の精霊が応じたのか、ひんやりとしていた室温がそうと分かるほど上がる。

スアウの施した精霊封じの効果が出ているのだろう。熱気は感じ取れるほど発生しても、炎は具現化しない。

機嫌を損ねないようにしたつもりが怒らせてしまふ事態となり、イーシャは溜め息をついた。

陽気で短気で単純そうに見えて、頭の回転が速くて勘が良い。強さが全ての火の民には珍しいくらい、扱いにくい人物である。

「はい。ドラクロ様のおっしゃる通りです。あれから、どれくらい経ったんでしょう?」

イーシャは非を認め、聞きたかった事を尋ねた。遠慮はむしろ、その怒りに火と油を注ぐだけだ。

「それと、あと二つ。スアウ様が戦闘態勢に入った事が何時^{いつ}理解出来たのか、どうしてこんな状況になったのか教えて下さい」

そう。

イーシャが気になっていたのは、それらの事だった。

ニンフは直接の戦闘に向けた民族ではない。

水中の搜索、海底資源の供給などの支援や財政面でダイヤモンドに貢献していたのだ。

戦闘に入ると姿に変化があるなんて、彼女は聞いた事が無かった。

「精霊を介して、氷を水に変えた時点で理解出来たぞ。

自分の属性を含むモノが傍にあると、少しだけ使える力が増す。直接身体に触れさせて取り込んだら余計に力になるな。ニンフが喧嘩売ってくるなんて初めてだったから、あの髪には驚いたけどよ」

ドラクロは苛立つてはいたが、イーシャの言わなかった『何故』と『以前から知ってたのか』も含めて説明してくれた。

「自分でも薄々は分かってんだろ？ イーシャちゃん。
スアウは色々小細工をしてきたが、戦闘面で俺を圧倒するほどじやなかった。あの大鎧のおかげで互角より上程度。いくら魔道具で底上げしようと肉体の強度は変わんねーから、一発殴れたら多分倒せた。時間的な余裕も無かったしな。あれで相当焦ってたはずだ。いつ氷魔王が帰ってくるか、分かったもんじゃなかったし」
「……だから、最初に私を戦闘不能に追い込んで、盾にしたんですか？」
「やっぱ分かってんじゃねーか」

イーシャは予測していた事態が当たって、へこんだ。

ドラクロは攻め続ければ、勝てた。
スアウが体力不足か、殴り飛ばして骨折及び内臓破裂で床に沈めるか、部屋の主であるカタストロフの帰宅という時間切れかで。
食事前とはいえ燃料も口にしていたので、絶好調に近かっただろう。

ぼさつと緊張感なく観戦していたイーシャという、邪魔なお荷物
がいたせいでドラクロは気を散らされ、不本意な負けを飾った。

「で、隙を突かれて気絶させられたんだが、あいつ格闘面向いてねーな。移動中四、五回目が覚めて、そのたびに気絶するまで殴られたぜ。あんまり痛くなかったし、薬使わなかった理由は分かったが、もうちょっと拘束緩かったら反撃できたっつーのがマジで悔しい。口も手も足も尻尾も動かせなかったんだぜ。

その回数と、俺の腹具合から考えるに一日経ってねえな。せいぜい半日、外じゃ太陽が昇ってしばらくって辺りか」

ドラゴニアの平均消化時間など、イーシャには分からない。

部隊の管轄が違ったため、身近にいないのだ。

ただ、ドラクロが大食漢なのは理解していた。

胡桃くるみのパイを瞬またたく間に片づけ、スアウの差し入れたどう見ても五人前以上の弁当を、動けないので嫌そうな顔をしながら食べさせてもらって完食した点から分かる。

カタストロフより筋肉質でがっしりしているが、ドラクロの方が数セト低いぐらいで体格差はあまりない。

氷魔王の食事が平均値だとすると、あれだけの食材がどうやって数時間で消化され、燃料エネルギー化されていくのだろうか。再生能力を考えたとしても、大いに謎だ。

「……半日、ですか。ではまだ会議の段階ですね」

イーシャの脳裏に、会議を長引かせそうな面々の姿が数人現れて消えた。

その数人は、彼女の苦手とする女性ひとと友人付き合いがあった連中で。

その連中からしてみると、イーシャは気に食わない存在なのだ。

正妃になる事を断固として断り続けたのは忠義と認めるが、以前仕えていた主の夫であるレスクの寵愛を受けた裏切り者と言えるゼリシエレ^{II}イムハールの娘だから。

ちよつとくらい編成が遅れても、ちよつとくらい救出が遅れても、王位継承権を認められたのだからそう簡単には死んだりしないし平気だろう。

そんな考えで邪魔をしているのが、まるで実際見ているかのようにイーシャには分かった。

彼女達はイーシャに嫌がらせをしたいのであって、排除したがるわけではない。

イーシャの排除に動きだしたら、逆に自分達が他ならぬ友人の息^{アルフエ}子に消されると分かっているフシがある。

それだからより厄介なのだ。

これといって間違っていると言い切れるような言動をしないから、邪魔だと処罰したらしたで旗色が悪くなるのはイーシャの方である。

今回は邪魔してくれた方がありがたい。

ぜひ、張り切って会議を長引かせてほしいくらいだ。

開戦してしまったら、もう取り返しがつかない。

水の民が負けて、少なからぬ犠牲を出したヒトとの溝がより深さを増すだろう。

拘束から抜け出してイーシャとドラクロの手で制圧、ないし族長であるスアウを説得出来れば、まだ少しましな結果へと変わってくるだろう。

ただ、現状はそんなに甘くない。

イーシャもドラクロも、自力での脱出は不可能だ。

スアウはドラクロの拘束にはことさら慎重で、イーシャの拘束を食事時も手洗い時も完全解除はしないし、一部解除する間でも数人がかりで周りを固めている。

ルビエラがいれば。

イーシャは無い物強^{ねた}請りをした。

火の王は今頃きつと、暢気にイーシャの窮地を眺めているだろう。同調に距離は関係ないのだ。

あれ。そういえば。

目覚める前に、イーシャは変な夢を見た。

その時、夢の中の女性にいろいろ問題発言されたのは、後で考える事にする。

重要なのは、生きている限りカタストロフと同調ラインが繋がっているらしき事だ。

動けないルビエラではなく、彼に声が届けば。

水の民の現状が、レスクに伝えられる。

イーシャは即座に実行した。

目を閉じて、周囲の音や気配すら感じなくなるほどに、深い深い集中状態に己を導く。

そうして、ただひたすらカタストロフの名を呼んだ。

聞こえているのなら応えて、と

第十五話 現状の把握（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。

そろそろ、イーシャの設定も載せていく予定です。

第十六話 姫将軍の事情（前書き）

ちよつと閑話チツクですが、一応本編です。

主人公がああなつた過去話ですね。

第十六話 姫將軍の事情

何時いつの頃からか。
彼女は知っていた。

自分は周囲の誰にとっても、一番になれる存在ではないと。
気づかせてくれたのは、他ならぬ母セリシエレで。
実感させてくれたのは、彼女に最も愛を注いでくれた父レスクで。
理由を理解させてくれたのは、年の離れた異母兄だった。

「いいですか。イスフェリア。私は王国の剣にして陛下の盾。剣は
繰り手の意のままに敵を切り裂くだけ。陛下の支えになりたいのな
ら、まず先に自分の立場を明確になさい。貴女の立場は決して盤石ばんせき
なものではないのですから」

イーシャにとって、セリシエレは母と言うより師であった。

愛情が無かったとは言わない。

母は彼女なりに娘を愛していただろう。

ただ、一番では無かった。

その理由も、イーシャは他ならぬ本人に尋ねて知っていた。

「どうしてお母様は正妃にならないの？」

「理由は三つあります。私の元々仕えていた主がメラルディーア様
セーマゲルタ様、パリテユイア様、アルフェルク様のご生母で
あった事、私は陛下を尊敬してはいても愛していない事、そして私
の夫は死んでしまったあの人だけで良いと思っっているからです」

セリシエレは既婚者で未亡人だった。

これは正妃の周囲で仕える者には珍しい事ではないのだ。うっかり手をつけられても逃げ帰れる婚家があり、妊娠しても他の男との子だと主張する事で主の邪魔にならないようにと。

純潔が重視される上流階級出身の未婚者では、こういったごまかしが効かない。

ディアマスでは婚姻も政治手段とされており、より効率を上げるために王族に限り重婚が許されている。だからといって、気に入った者とホイホイ結婚する事は許されていない。

特に、相手の意思に反して無理やり婚姻を結ぶ事は不可能だ。

状況的に断り切れず、追い込まれる形で結婚した例もあるが、とにかく王族相手でも求婚を拒否する権利はある。

セリシエレはその権利を行使し、断り続けた。

娘を愛している。でも、一番ではない。

娘を理由に愛してもいない国王レスクの后に納まるには、かつての主と亡くなった夫への想いが強過ぎて出来ない。

セリシエレは己を優先した点が母親として失格だったが、自分に厳しく嘘を何より嫌っていて正直だった。

「イスフェリア。イーシャ。仮にもし、私が死んでも嘆く事はありません。死ねば、あの人と同じ所へ逝けるのですから。むしろ母は幸せでしょう」

その言葉の通り、葬送の棺に横たわったセリシエレは苦痛の色なく微笑んでいた。

その死による悲しみが無かったと言えは嘘になる。

途方もない喪失感に、イーシャが泣かなかつたのは、生前の母の

言葉を思い出したからだ。

死んで現世から解き放たれた母は、愛する夫の元へと逝った。

セリシエレが死亡した事で、イーシャは早々に立場を明確にする必要があつた。

正妃どころか愛妾でもなかった、国王の婚外子。

それは決して身を守るのに都合の良い事実ではない。

宮廷魔導師にはなれない。

その時のイーシャが出来る方法の一つ。

騎士の誓いだ。

イーシャは、セリシエレの棺にすがつて嘆くレスクに歩み寄った。

太腿に巻いたベルトに着けた護身用の短剣を取り出す。

勢いがよかつたせいでドレスの裾が捲れ上がり、一瞬、周囲に真っ白な細い足が際どいところまで見えたが、イーシャは気にしなかった。

そのまま抜き放ち、すつと自らの手のひらを切り裂く。

「い、イーシャ！？ 何を」

「『陛下』、今ここに私は血の誓いを捧げます」

突然の事に驚き戸惑うレスクに応じる事無く。

イーシャは地面に跪くと、レスクの片手の中に血をすりつけ、続けて唱えた。

「我が血は陛下の手の中に。我が身は陛下の御身を守る盾とならん事を。我が剣を振るいし相手は陛下の御心のままに。我が忠誠は全て、陛下だけのもの」

流れるような自然さでイーシャは、腰まで伸びた真っ直ぐな銀系の髪を左手で掴んだ。

何をするのかレスクは悟ったようだが、遅い。

ぶつつー！

一纏まとめにされたイーシャの髪が、肩より上の位置で乱雑に切り落とされた。

ほっそりとした華奢な白い首筋があらわになり、見る者に脆さを感じさせる。

しかし打って変わって、イーシャの紫の瞳に浮かび上がる光は強烈に自己を主張し、ある意味異様なほど落ち着いていた。

「誓いの証に血を、忠誠の証に我が髪を捧げます。受け取っていただけですな？」

ずいっと、切り落とした髪を掲げてイーシャは確認を取った。

レスクは断れない。

第三者がいる場所で騎士の誓いを拒否する事は、その者の失墜を望む事と同意語だ。

騎士は基本的に主に付き従う　断る事は傍に寄るな、と宣言するもの。

その上、イーシャは髪を差し出している。

長い髪が美女の条件であるディアマスにおいて、短い髪の女はよほど幼いか生涯を神職に捧げた者、ヒトの感覚とは違う他の民族ぐらいだ。

長い髪を切って差し出す事は、未婚の主張と同じ。女性騎士の忠義の証としては最上級だった。

「……頼む、イーシャ。私より先に死なないでくれ」

己の騎士とする事を認め、髪を伸ばすよう命じると、レスクは彼女を力いっぱい抱きしめた。

今考えると、あれは継りつかれていたと言った方が正しい。レスクの声は涙が混じり、その身体は震えていた。

「セリシエレはもういない。今、私が利害の関係なく、ただ純粹に愛せるのはセリシエレによく似たお前しかないんだ。私を裏切ったメラルディーアの子は、どうしても愛せない」

イーシャは突然殴られたように、戦慄わななした。

レスクの一番は母で、その付録といった形で愛している。そう聞こえたのだ。

セリシエレが死の旅路に向かい、暫定一位の座が転がり込んできても全く嬉しくない。けれど。

レスクは間違いなくイーシャを必要としていた。

他の誰でもなく、イーシャ自身の存在を。

必要としてくれるのならば、必要だと言ってくれるのならば、全身全霊を込めて傍で支えになろう。

十二歳の秋、イーシャは胸に誓った。

「イーシャ。あの宝物庫の封印を解いて、伝説の『紅の刃』を手に入れたんだって？」

唐突に。

先触れもなく訪ねてきたアルフェルクの姿に、イーシャは爽やかな朝を過ごすことを諦めた。

「王太子殿下。何処からその話を？」

「……父上の騎士になったからって王籍を返還したわけじゃないんだから、お兄様で良いんだよ」

赤い髪、董色の瞳、陽に焼けて鍛えられた長身。

長兄は姿形だけなら、レスクに最も似ていた。

違いは年齢と、わずかに目が垂れて印象が柔らかな事、そしてその眼差しから覇気のようなものを感じ取れない事だ。

彼の瞳をジツと見ると、イーシャはいつも畏れに近いものを感じる。

上っ面の優しげな印象に隠れている、暗く深い光が奥にあるのを気付いたのは何時だったか。

「ではお兄様、その話を何処で聞いたの？」

イーシャはアルフェルクが苦手だった。

それを分かっているながら、長兄は思い出したように予告無くイーシャを構いに来る。

「ラズからだよ」

「！ そうなんだ」

イーシャがラムザアースの協力のもと、『紅の刃』の封印を解き、ルビエラと契約を交わしたのは昨晚の事だ。

情報が漏れるにしては早過ぎると警戒したのだが、当事者から聞いたとなると話は変わってくる。

安堵したイーシャに、アルフェルクはずいっと近づき、自然な仕草でぎゅっつと両手を取った。

「『紅の刃』で第三位になってくれるんだよね。大歓迎さ。ちょっとちゃんと戦場で功を上げて、將軍まで上がっておいでよ」

「……何をいつてるの？ お兄様。私は近衛を目指すために強い武器が欲しかっただけで、王位継承権に興味は全くないわ」

そう告げて、イーシャは眉をしかめた。

アルフェルクの眼差しが、一気に馬鹿を見るようなものに変化したからだ。

「お前は賢い子だと思ってたけど、買いかぶりだったようだね。まるで状況を理解していない」

大きく溜息を吐き、嫌味な仕草で大仰に肩をすくめるとアルフェルクは首を振った。

非常にいらっとくる仕草だったが、挑発に乗せられてはいけない。

アルフェルクはイーシャの知る中で最も優れた人物だ。

一を聞いて十を覚える、文字通りの天才。

王太子という立場からイーシャに見えないものも沢山見て取って、理解し把握できる。

彼がイーシャは現状を把握してないというのなら、本当にそうなのだ。

「どうして、近衛を目指すのはいけないの？」

「死ぬからだよ。一年以内に」

さらりと物騒な単語を、異母兄は口に出した。

「継承問題で、大きな派閥があるのは知っているね。内情がどんな

だと思ってる？」

「アルフお兄様と、ラズお義兄様、あとはどっちつかずの日和見、
でしょう？」

「違うね。君の派閥もかなり前からあるし、挙げてる対象は合っ
ても、お前が考えている題目とは随分違うよ」

イーシャは首を傾げた。

鍛えていたし、騎士を目指していると周りに言った事はあるが、
継承権に飛ぶのはいきすぎだ。早とちりする者達も居たものである。
それより題目が違うとはどういう事なのだろうか。

「歴史の勉強だよ、イーシャ。先代女王である御婆様おはあと先王弟は誰
に殺された？」

「イエルク……！ あ、そのせいで揉めているの？」

白昼堂々殺された女王ルーフィアとその異母弟であるルフェル大
公。

二人は公務として、視察に訪れた街で襲われた。

歓迎する住民達、警護していた騎兵、補佐の文官達 数百人も
の巻き添えの死傷者を出したこの事件は、『嘆きの水曜日』と呼ば
れている。

父である征服王ミルドとは違って、内政に重きを置いて国力を充
実・上昇させ、防衛戦の他は撃って出る事の無かった彼女はディア
マス史上最大に慕われた女王だ。

臣下や国民に及ばず、他国でも尊敬されていた名君である。

風の民も真偽調査に協力を申し出たため、かつてない速さで実行
犯、共犯、主犯が割り出され、次々に刑が決まっていくのを見るの
は出来の悪い喜劇のようだったという。

その黒幕は、イエルク公爵家　かつては公国の君主だった一族。公女メラルディーアとレクトの婚姻により、平和的な方法でディアマスに組み込まれた一族だった。

イエルクは例外一名を除き一族郎党皆殺しで、少しでも事件に関与していた者達は処刑。

例外は王子妃メラルディーア。

彼女は関与していなかったという証拠があり、離縁と王城内の塔へ生涯幽閉となり。

当時十一歳のセーマゲルタと、九歳のパリテユイアは王籍剥奪を受け、監視態勢の整った家にそれぞれ降嫁という形で王城を去った。アルフェルクも廃嫡の危機にあったが、国外のイエルク傍系である大商家ディルナードへの配慮と、当時六歳になったばかりの幼児、他にルーフィア直系がいなくなるという事が重視され、助かったという。

「御婆様おばあが王太子にしていたのは亡くなったルフェル大公だった。

順番を守りたがってる奴等はラズを押し、憎いイエルク混じりとはいえ最年長の直孫を押したい奴等は僕、まだ若年とはいえ騎士の才があり、將軍になれるだろうと予想されている、婚外子であつても御婆様の血を一番問題なく継ぐ君。

この中で一番勢力が強いのはラズだけど、一番望まれてるの君だよ。当然、面白くない奴等は大勢いる。それなのに、王位継承権を取らず近衛を目指してごらん。候補の座を捨てた途端、集中して潰しにかかるよ」

死にたくなかったら大人しく將軍を目指しなさい。

候補が三人いると下手に動きが取れなくなつて、暗殺の危険が僕

やラズに対するのも減るから。

あの時の長兄の眼は、深淵を覗きこんだかのように暗く。
嫌だと言ったら、アルフェルクに殺される。

反射に近い形でそう判断したイーシャは、忠告に従って戦功を挙げ
るべく予定外の初陣を飾った。

後見が望んでいるのはルーフィアの血を継ぐ問題のない直系王族
であって、イーシャ自身ではない。

アルフェルクに教えられた通りで。

彼女はそれを理解させた異母兄が嫌いになった。

必要とされているのに、一番にしてくれない。

それがイーシャを傷つけていたが、彼女は表に出す事無く。
殆ど執着に等しく、最も想ってくれて必要だと言ってくれるレス
クに忠誠を捧げていた。

水の民に拘束された状態でも。

その想いの強さから諦める事無く、一筋の光明に縋り、イーシャ
は数え切れぬほど呼びかけ続けた。

第十六話 姫将軍の事情（後書き）

じっは、お兄様は可愛がってるつもりで妹に嫌われたのを未だに不審がってたりします（w

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

第十七話 囚われた人達（前書き）

迷った末、カタストロフの不幸の一部は会話でさらっと流す事になりました。

これで年齢制限は大丈夫なはず……！

第十七話 囚われた人達

最初に会った時も、最後に会った時も、エーリスは何時^{いつ}だって身勝手だった。

「あの場所の調査？」

「そうよ」

彼が不服さを前面に出したせいだろう。

エーリスは眉を寄せた。

「なあに、その情けない顔。確かに、貴方『あれ』のせいで死にかけたから、仕方ないとは思っけどね。『あれ』は今いないの。全然平気よ」

にっこり。

綺麗に笑って、エーリスは堂々と言つてのけた。

「瘴気が物質化するぐらい強烈に残ってる場所よ？ 私が一人で向かってても全く無意味ね。まず貴方に空気を浄化してもらわなきゃ、まともに調査なんて出来っこないわ……って、その顔。本気で嫌そうね」

目の前が見えないほど溢れ、今にも邪竜化しそうなくらい濃厚な瘴気を浄化して。

彼が疲れから座り込んでいると、エーリスに水袋を差し出された。警戒も無く、受け取ったそれを飲み 気がつく、彼は拘束されていて。

エーリスは傍で彼を眺めていた。

「お馬鹿さんねえ。カーフイ。

私が連れ出して、サレ達に預けるまではしょっちゅうだったんじゃないかってっけ？

口にする物に眠り薬とか媚薬とか盛られて、相手が男でも女でも気付いたら無理やり犯されてるのは。疑いも無く、あっさり飲んでくれるなんて予想外だったから、薬じゃなく酒を混ぜたのに。そこまで信頼してくれてたなんて。私、ホントに嬉しかったわ」

いつも以上に綺麗に笑って、エーリスはそうのたまった。

「もうじき、父様が説明に来るけど少し教えてあげる。貴方を封じるのは一族の総意よ。

モチロン、私もね。全面的な同意じゃないから、幾つかこっそり仕掛ける事があるけど、貴方を封じる事で私の望みも叶うから」

不意に、泡が爆ぜるようにエーリスの姿が消えた。

過去の断片が終わる。

『あれ』がいた『何処か』の場所。

どちらも酷く大切な事だったはずだ　忘れてはいけないもの。

エーリスの事などより、彼はそちらが激しく気になっていた。

夢の中で。

過去の自分は『あれ』をととても恐れている。

意識が緩やかに覚醒して、自然に彼の臉が上がった。

視界に入ったのは、見慣れない白い天井。

天井掃除を定期的に行っていないのか、それとも薄暗いせいのか、

うつすら汚れて見える。

自室と認識しつつある与えられた客室の寝台（ベッド）は天蓋付きで、その色は落ち着いた青だ。この白ではない。

一瞬、何処に居るのか分からなくなり、彼は上体を起こした。鉄格子越しに、番をしていた兵士と目が合う。直後、兵士は無言で床に沈んだ。

「あゝ……そういや、鬱陶（うつたう）しくなつて頭布外（タイバン）したな……」

牢番の兵士はもう一人いるが、同僚の二の舞を演じる気はないよ
うだ。

頑（かたく）なに彼に背を向けて気絶した兵士を介抱し、気付かないと判断するや、引きずつて通路の奥へ消えていく。

牢の外側にある天窓から差し込む光は、眩しいほど明るい。
どうやら昼過ぎのようである。

困った事だ。

何故ここで寝ていたか思い出して、彼は溜め息をついた。
どうやって暇を潰そう。

スアウがイーシャとドラクロを拉致した翌々日。

朝食を終え、まったりしていた時。

来訪した数人の質問に、彼は迷わず全てに『否』と答えた。

その結果が、兵舎の地下にある牢獄行き一名様である。

彼は抵抗する事も無く、あっさり自分から牢に入つて行つたので、
連れてきた連中の方が驚いていた。

『説得』を試みる面々との相対が面倒になり鬱陶しかったのもあ

つて、彼は頭布と黒眼鏡ゴグルを外し、素顔になった。

予想通りバタバタ気絶者続出。

彼が昼寝に入る前、五、六人ほど牢の前に倒れていたはずだが、運ばれたか自力で意識を取り戻して帰ったようである。

彼のいる牢は一般向けより上等だった。

中は清潔で、一人用の低くて小さい卓と布製の椅子があり、手洗いも独立し備えられている。

貴人向けの牢だ。

下級兵の部屋よりも広く、質が良い。

食事もちんとしたものが届けられる。

彼にとってただただ過ごすだけなら、暇だという他は問題なかった。

またゾロゾロ現れるだろう。「説得」者達は、ハーピーハーパーがサレでない限り固まるから五月蠅うるせい事も無い。

緊急時に使えそうな人間は、どんな者だろうと利用する。

ディアマスの上層部にとっては当然の理屈だ。

あくまで物事の中心部に居るのではなく、傍観者の立場でいたい彼にとっては実に迷惑な話だった。

巻き込まれないためならば、考えるか寝る事くらいしか出来そうにない囚人生活でも全くかまわない。

ゴロリ。

再び寝台に横になると、彼は眉間に皺を寄せた。

現在、彼にはもう一つ問題がある。

昨日の朝食が終わった頃からのので、しつこいを通り越して執拗だ。

軽くこめかみが痛む。

深く溜め息を吐くと、彼は目を閉じた。

極力気にしないよう努めながら、他の事に思考を逸らそうとする。

頭の中で響く、音としてではない『声』

細く、途切れ途切れ響く、縋るような泣いているような小さな『

声』は決して消えていかない。

聴こえてこなくなつて安心して、しばらくするとまた繰り返して聴こえてくるのだ。

この『声』がなんであるか、彼は理解していた。

名前を呼んで、応答を求めているから。

問題なのは、彼の第六感が絶対厄介事になるとしきりに囁いてくることだろう。

クー。応えて、お願い。

クー。聴こえてるなら返事を

昨日からそうしているように彼はあっさり無視し、他事で気をまぎわらそうとした。

今朝見た過去は、かなり重要な情報があつた気がするのだ。

彼はしばし、記憶の断片に意識を集中させようとした。

クー。クーってば！ 応えてよ！

三時間後、思考の邪魔でしかない『声』に対し、彼の忍耐が切れた。

牢生活は思っていたよりも、彼の中の余裕と忍耐力を削っていたようにある。

黙れ、五月蠅いめづる

短いながらも鋭い思念を、受け取る『声』の位置を辿って送る。苛々しながら、彼は目を開けた。

イーシャはゆっくり瞼を上げると、大きく息を吐いた。ドラクロから、可哀想なものを見るような生温かい眼差しを注がれているせいではない。それにはとつくに慣れたのだ。

既に四回目を数えた食事と採血目的のスアウ訪問から、しばらく経っていた。

スアウが来るたび中断していたが、イーシャはカラストロフに向けてひたすら呼びかけ続けている。

ルビエラと心話する要領で、見えない線が繋がっている事を想像しながら念じ続けていたものの、正直届いているかどうか分からなかった。

返ってきた返事は短かったが、明らかにルビエラの思念とは違う。ルビエラよりも大きく鋭く、総毛立つほど透き通った『声』で。凶悪なまでに澄んだ力波をかすかに帯びている。

ようやく、繋がった。

安堵しながら、イーシャはひたすら思念を送った。

良かった。繋がって。クー、話があるの
黙れと言ったはずだ

今までの苦勞を嘲笑あざわらうように、あっさり応えこたが返ってきた。

昨日の朝っぱらから俺の頭の中でブツブツぶつぶつ言いやが
って…!!

人質は大人しく助けが来るのを待ってる…!!

どうやらイーシャの呼びかけは、殆ど最初の時点で相手に届いて
いたようだ。

呼びかけの内容まではつきり聴こえてなくて、ずっと何か言っ
てる程度であったのか。

それとも、最初から何を言ってるか聴き取っていて無視してい
たのか。

後者だったら、カタストロフとは一度しっかり話し合う必要があ
るだろう。

返事の内容的にイーシャであると認識をしているようだが、カタ
ストロフは何故繋がっているのか疑問に思わないのだろうか。

しばらく考え、イーシャは思い出した。

封印されていた彼の目が覚めた時に、フィアセレスが推察といっ
た形で同調出来るほど魂の波調その他が酷似しているのでは、と言
っていた。

カタストロフは本当に同調出来るかその場で確かめ、イーシャは
床に沈んだ憶えがある。

実際はエーリス？ の仕掛けた術式で、二人の間に無理やりライ
ンが繋がっている状態だ。

それを教えるべきか一瞬迷ったが、夢の中で口止めされた事も思
い出し、後回しにすることにした。

ねえ、クー。そっち、今どうなってるの？

今度は返事が無い。
単に知らないのか、^{こた}応える気が無いのか。

非常にご機嫌麗しくない様子のカタストロフであるから、後者の可能性が高い。

彼は割と律儀な所があり、知らないならそう言う+話を聞いている場合ちゃんと相槌を打つ人間と知っていたので、ひたすら同じ質問を繰り返す。

イーシャは貴重な情報源を逃す気などなかった。

本当にしつこいな、お前

うんざりしたような「声」が応じる。

元々無表情で、顔の半分が見えないせいもあって分かりにくさを増し、常に淡々としているカタストロフも心話では感情豊かだった。

昨日はずっと会議だった。どの道、開戦はまだまだ先だろう。
賭けてもいいが、今日もきつと会議してるぞ

予想通りの状況に、イーシャは安堵すると同時に呆れた。
微妙にカタストロフの言い方が引っかけだったが、何が気になるかよく分からない。

そうなんだ。じゃあ、他に何かいつもと違う変化はある？

とりあえず、イーシャは情報収集を優先させた。

変化ね。

サレ達が離反表明してきたな

さらりと、頭の中に入ってきた情報。

よく考えぬまま消化しかけ　その重大さを理解し、イーシャは愕然とした。

第十七話 囚われた人達（後書き）

ギリシヤ神話の神様は美少年が大好き。無駄に美形だし、幼少期はありだね！

と、いう作者の考えにより、カラストロフは外見14歳くらいまでR20なめにあつてた事にしました。

第十七話までの人物紹介（軽いネタバレ有り）（前書き）

前回よりはネタバレ度は少なめです。

抜け落ちてる人はいない……と、思いたいです。
実は確認中に一人忘れてて慌てて書きました（汗

第十七話までの人物紹介（軽いネタバレ有り）

主要登場人物

イーシャ（16）

フルネーム イスフェリアⅡキュオⅡイムハールⅡディアマス

主人公。もうじき17歳。

王位継承権第三位の第三王女。

基本、王族教育の一環で年齢に見合わぬほど理知的だが、集中すると周りが見えなくなる性分。

自分自身を必要としてくれる人間に対し、非常に献身的。

本編ではあまり発揮されていないが、武闘派な將軍。

RPG風にレベル（99上限）をつけるなら60前後のSレンジ、L対応可。

スキル的には必殺S・魔力B・パリングA・命中A・薙ぎ払い（炎）S・属性攻撃（炎）S。

『紅の刃』に宿つたルビエラと契約を結んでいる。

エーリスの術により、カタストロフと同調ラインが繋がっており、頑張れば離れていても心話可能な事が発覚。

さらにもっと発揮されていないが、長い銀髪を一つの御団子にしたスタイルのいい美少女である。王女といってもドレスを着ない、將軍の面が強い立ち位置に居るせいだろうか。

現在、水の民に人質として捕われ、カタストロフに電波を送っている。

レスク（48）

ディアマス国王。イーシャの実父。フルネームが決まらない。イーシャに最も愛を注いでいるが、セリシエレの葬儀の際言い放った言葉により、その愛を全面的に信じて貰えなくなった。本人も冷静になってから言葉のまずさに気付いた。イーシャからの壁に気付いているが、しょっちゅう娘への愛を言葉や態度で示す事で挽回しようという決意。実行中である。最近空気が進む。現在、水の民どころか闇の民対策会議で疲弊している。

ルビエラ（?????）

火の精霊王。

のんびりした性格。

実体化すると、肌以外赤づくしの美女の姿を取る。肌は褐色。大剣型魔道具『紅の刃』に宿っており、イーシャと契約中。いつもイーシャの行動を鑑賞している。最近名前は頻繁に出るが登場してない。

カタストロフ（????）

徐々に記憶を思い出しつつある。

神といわれる光の民アルヴと、闇の民サレの間に生まれた超絶美形。

『魔を制す王の器』という先天性特殊体質で、魔力自己超回復・拡大化技能持ち。

常に自分を中心に半径5Mほど吸収・浄化を無意識で行っており、その気になれば規模超拡大や他者への接触による魔素吸収も可能。『氷魔王』という称号持ちで、サレには崇拜されている。

由来となったエストキリアの凍土化は、集めた水の精霊達にひたすら魔力供給して邪竜が完全に凍ったところで終了。本人は基本見てただけである。

過去に様々な虐待を受けており、本人が知らないうちに異母姉がヤンデレ化。

現在、王城の地下牢にはほぼ自主的に入って、上層部を困惑させている。

ファイアセレス（700以上）

森の民エルフ族長。中性的な美女。

ディアマスに加盟したのは二番目。

民族長内では最年長で、盟約を結んだ時も長を務めていたこともあつて調停役もこなしている。

カラストロフの正体が分かってホツとした人。

現在、進まない会議に苛々している。

ドラクロ（355）

火の民ドラゴニア族長。

見た目、20くらいのはんサムな青年。

身長は195くらいで、筋肉質。

八民族で戦闘能力最強であるドラゴニアでも現時点で一番強い。

ドラゴニアがディアマスと盟約を結んだ理由は、炎滅王の無双っぷりに感嘆したため。

普段は陽気で気の良い兄ちゃん。

短気な割に、頭が回り勘が非常に鋭いのでちょっと扱いには注意が必要。

現在イーシャよりもきつい拘束を受け、採血され、スアウに迫られて困惑している。

ペクト（220）

大地の民ドワーフ族長。既婚者で孫もいる。

鎧を着て髭が長い、つぶらな目した笑い声が素敵なおじい様。背が低いので、ドワーフが相手でないと話しかけても見つけてもらうのに時間がかかる。

現在、会議に飽き始めている。

レナールド＝ブエク＝リア・ノイン（118）

風の民ハーピー族長。

作者のノートに書いてある本編の後の話で出番があるから、フルネーム有り。

ちなみに、住んでる街＝一族名＝称号・本人名である。リアは族長の意。

見た目十代半ばの可憐な少女。翼は広げると3M以上ある。

風通しがよく動きやすく翼が出る衣装を好むので、露出は高め。

嘘がつかないので、ちよつと毒舌気味。

現在、鋭すぎる聴覚の問題で会議には出席せず、王城上空で歌ってる。ぷよのほろひれはらひれーとは違って、天上の歌声である。

オーウエン（609）

闇の民サレ族長。

見た目40ぐらい。渋いナイスミドル。既婚者。

例にもれず、カタストロフを崇拜している。

魔素の供給過多により、性格が歪み、なにやら企んでいたが、カタストロフに見抜かれ浄化された。

そのため魂が綺麗になったが、離反計画の中断は出来ず実行。

現在、サレの本拠地に戻り、いろいろ準備中。

スアウ（187）

水の民ニンフ族長。

見た目は20代半ば。

スレンダーな美女だが、無表情かつ眼に感情が浮かびにくいいため、分かりにくい。

人魚狩りに耐えてきたが、崇拜する海竜王が受けた被害にニンフ総出でブチ切れ、人質にイーシャを、回復薬剤供給者としてドラクロを攫った。

ちなみに戦争準備は完了している。

昔メイザスに危ういところを助けられ、盟約の橋渡し役になった。人魚狩りで捕まった際、叫べないように咽喉を薬品で焼かれ、今でも大声を出すのが辛い。

ドラクロに好意を持っているが、拘束には全く容赦が無い。

現在、凍土都市レノンでイーシャ&ドラクロの世話をしつつ、海竜王の治療に忙しい。

セリシエレ・イムハール（享年40）

イーシャの母。故人。

騎士の家系の生まれ。

18で結婚したが、子供も出来ず三年で愛する夫と死に別れる。
鬱々としていたところ義母に薦められて、イエルクに仕える事に
メラルディーアの護衛官 レスクの求婚 断ったらレスクの近衛
騎士となる。

逆らい切れず、レスクの御手つきになりイーシャを妊娠・出産す
るが、后になるのは断固拒否。

レスクを庇って殉職。

アルフェルクⅡダオスⅡイエルクⅡディアマス(26)

イーシャの異母兄。王太子。愛称はアルフ。

外見はレスクによく似ている。

天才肌だが、頭が良すぎて物事に飽きやすく、長続きしない。

非常にマイペース。異母妹が可愛い。

他人を扱うのがうまく、自分の都合が良ければ手を抜いて周りに
やらせる事も多い。

現在、イーシャが攫われたので珍しく真面目に会議に出ているが、
ちつとも進まないので進行の邪魔する数人を食中毒か不幸な事故で
退場させる計画を考えている。

名前だけ出た新規キャラ紹介

ジオフィード(?????)

カタストロフ、エーリスの父。

光の民アルブの長的人物。
カラストロフについては、道具としてしか見ておらず育児放棄しており、不幸の元凶の一員。

メイザス（享年52）

ディアマス九代目国王。別名、交渉王。
風の民、闇の民、水の民を相手取って言葉巧みに盟約を取りつけた。

闇の民との交渉後、帰還中に偶然立ち寄った街で奴隷市場を発見。護衛についていた百名を率いて乱入、壊滅させた。その際、スアウを発見し安全な所まで保護。拠点に帰ったスアウが当時の族長を説得、会談の機会を作った。

ミルド（享年56）

ディアマス14代目国王。メイザスの子。ルーフィアの父。
遠征王とまで呼ばれるほど、他国に軍を率いて攻め込んだ。彼の時代で、ディアマスは三倍近い国土拡張をしている。

きょうだい殺しの汚名を払拭するため、特に疑惑の声を上げていた三人の異母兄の後達と結婚。国土拡張するたび、敗戦国の王女や有力者の娘と結婚したので、最終的に正妃が21人いた。
子供も30人ほどいたが、度重なる戦いと大流行した疫病で2人しか残らなかった。

自身も疫病にかかって死亡。

ルフェル（享年30）

ミルドの末子。ルーフィアの異母弟。レスクの叔父。ラムザアースの父。

実は闇の民なんじゃね？ と噂されるほどフェロモン過多で、ご婦人がたの熱い眼差しを浴びていた御仁。

見た目によらず一途で、政略結婚だったが愛妻家。

出産で死亡した妻の喪に服し、公務を減らしてラムザアースと静かに暮らしていた。

思うように権勢をふるえない事に苛立ったイエルク一族の手で、ルーフィアともども殺害された。

パリテユイア（29）

レスクの第二子。第二王女と呼ばれる事はあるが、王籍を剥奪されている。

とある大臣の妻で、侯爵夫人。二児の母。

遠征で留守にしていたレスクに隠れて母親が愛人を作っていた時期があり、全く似てない事からレスクに実子と思われていない。

メラルディーア・レムリー・イエルク（47）

レスクの王子時代の正妃。二人の王女と王子を生んだ。

典型的な貴族教育を受け、愛人が一人や二人いるのは当たり前だと思っただけ。

予定より早く帰還したレスクに浮気現場に踏みこまれて以来、夫婦仲が冷え切ったが気にしてない。アルフェルクはどっちにとっても義務で生まれた。

イエルクの連座で処刑されるところだったが、最終的に生涯幽閉

に。

侍女が一人しかいないのを不便に思っている。

セリシエレについてはお気に入りだったのでむしろ憐れんでおり、
イーシャはレスクに全く似てなきや母親の分まで可愛がるのにと好
意的に思われている。

第十七話までの人物紹介（軽いネタバレ有り）（後書き）

読んでくれてありがとうございます!!

第十八話 距離なき会話（前書き）

早いもので、もう12月。

皆様も、風邪に注意して下さいね。

第十八話 距離なき会話

「何それ！ 真実なの！？」

イーシャは驚きのあまり目を見開き、肉声に出して叫んだ。

深い集中状態から、急激に現に戻った反動か。

あっさり伝えられた爆弾並みの衝撃情報のせいか。

イーシャはこめかみの辺りがズキズキ痛むのを感じた。

突然、叫び出したせいだろう。

変わらず壁に磔られているドラクロから、不審な眼差しで見られた。

そんな事はどうでもいい。

イーシャにとっては、今のところ問題ではない。

イーシャは再び目を閉じ、深い深い集中状態まで自身を導くと、ラインを意識しながら答えが返ってくるまでひたすら尋ねた。

その話、真実なの！？ クー！

お前に嘘について何か得があるか？ 言ったはずだ。開戦はまだ先だと

続けざまに発生した、長年盟約を交わして相互協力関係にあった二つの民族達の離反。

確かに、開戦はまだまだ先だろう。

想定が異なってしまったのだから、軍の編成だってやり直しになる。

闇の民サレの離反の影響は甚大だ。
サレの能力は暗殺に最も向いている。

闇の精霊の力が最も有効に奮えるのは夜であるが、昼でも十分な効果がある。

影は闇の一部だからだ。

標的の影に干渉して魔力をぶついたり、影自体を操作して動きを止めたり。

レスクは前にオーウェンが、敵対した十M先の相手の肩に落ちた薄い影を操作し、首を絞め落としたのを見た事があると言っていた。この事から、認知されない距離から攻撃しないと一対一では勝利は難しい。

サレは元々近接攻撃も得意としている。

しかも、個人魔力保有量は八の民族一。

理知的で知略にも優れているので、戦場で相対すれば遠慮なくドカドカ攻城級魔法を浴びせてくるのは目に見えていた。

数の差で王国側は勝利は出来るだろうが、被害が恐ろしい数字になるに違いない。

容姿的にも、細身で儂い印象のある水の民と、妖艶で敵意と嘲笑の似合う闇の民では相対する威圧感が段違いだろう。

もっと問題なのは。

破れかぶれの水の民とは違って、勝算が無いのに戦争を仕掛けて来そうにない点だ。

現時点で離反のみだろうが、これから何もしないのならば必要がない。ディアマスに属していた方が暮らしやすいし、他にも利点があったから盟約を結ぶ事になったのだ。

確実に、何かをしかけてくるからこそ、陣営から抜けた。

御父様、頭から煙出して倒れてそうね……

クー、闇の民の離反決意表明って出てるでしょう？ 分かる？

公式か？ それとも非公式？

知っているなら両方

時期的に、おそらく水の民に関する協力要請をオーウェンは断っている。その上での離反表明だとしたら、正当性も取れるのだ。

イーシャが気にかかるのは、カタストロフが非公式の表明を知っているような感触を受けた事である。

スアウによるイーシャとドラクロの襲撃及び拉致事件は、現場が彼の部屋だったので一度は対策会議に発見者として出ただろう。

ずっと会議に出ていたというのは有りえない。

現在カタストロフはイーシャの預かり。

要は長期滞在のお客様扱いなのだ。

彼女の部下として役職に就いているわけではないから、会議に呼ばれる必要性が無い。

先程も、会議自体について他人事ひとごとのような印象を受けた。

カタストロフは、自ら立ち入り禁止の場所に入っていくような積極性を持っていない。

構われるのがあまり好きではないらしいのは、細々した身の回りの世話をさせている者達の報告で理解していたので、誰かと雑談して噂話を聞いたというような可能性も低い。

無いわけではないのはカタストロフの場合、話かけられれば興味が無くても一言二言くらいなら返すためだ。

相手が空気を読めなかつたり、読めても図々しい者だったりすると一方的な会話なら成り立つ事も有り得るのである。

幾ら彼に流れる血の半分が闇の民であったとしても、それだけで

対策会議に呼ばれるかと言えば否だ。

疑問に満たされていたイーシャの脳裏に、淡々とカタストロフの思念が届いて響く。

ニンフ達を救い切れず、その誇りを怪我したダイヤモンドは信ずるぬ値せず。

水の民は随一に穏和で忍耐強い民族。

そんな彼等を戦いに駆り立てた事柄だけで、充分にその証となる。

我等闇の民サレ族は、現世に再び目覚めし我等が至上たる氷魔王に。

この大陸の覇権を委ねようと考える

早い話。

水の民が決起するほど、酷い目にあわせている夢の民が治める国に愛想が尽きた。口だけのお前らに協力するのは嫌だ、という事である。

水の民を怒らせたのは事実だ。

その点は反論できないし、メイザスが反乱の許しを盟約条件として与えているので、前半に対しディアマス側が文句を言える内容ではない。

問題なのは後半だ。

名指しで、カタストロフが示されている事。

それじゃあ、貴方面倒な事になってるでしょ。周りが色々言ってくるじゃない？

そうだな。俺、今牢の中だ。

オーウエンから話聞いてたし、予想はしてたが

非公式を知っていた理由が良く分かった。

民族長定例会議の後、オーウェンに聞かされたのだろう。

事件が起きる前に聞いていたとなると、闇の民はかなり前から離反の機会を窺っていた事になる。

最も最悪の可能性は、水の民と示し合わせて離反計画を練っていた場合だ。そうだとすると、とつくに準備が終わっていて何時でも攻めてこれるといふ事になる。

オーウェン様から話があった時、自分の名前出して良いと許可したの？

これ以上ないくらいはつきりと、俺を巻き込むなって言ったんだがな

幸い、カラストロフに協力する気はまるで無いようだ。

しかし。

イーシャは、彼が置かれている状況に納得いかなかった。

闇の民の離反に無関係であるのなら、牢に入らされる理由が無い。

ねえ、クー。貴方何かしでかしたの？

戦時においても理由なき投獄は禁じられているのよ？

強いて言うなら、何もしなかったせいだろうな

そんなはず無いわ。何もしてないの？

カラストロフの思念が途切れた。

どうやら、自分の行動を思い返して心当たりを探っているようである。

言い方を変える。俺は敵になる事も味方になる事も助言を与える事しなかった。

立場を示めさなければならぬと警告されたが、それでも何

もしなかった。

否定するだけでな

今度はイーシャが黙り込む番だった。

カタストロフは本当に何もしていないようだ。

ディアマスとしては彼の存在を無視できない。

強力過ぎるからだ。

彼がその力を振るい示した事など一度としてないが、ある程度近づけば分かるほどに強大な『力』をその肉体に秘めている。

味方になればこの上なく心強いが、いざ敵に回れば戦慄と恐怖以外の何物でもない。

牢屋に入れても何も解決にならないどころか、むしろ敵対させかねない。

そもそもカタストロフがその気なら、簡単に牢屋から出ていけるはずだ。

それなのに、牢屋の中に居るといふ事はそれだけ何もする気が無い、何もしたくないという意思表示である。

明確な立場を示さないという理由で牢に入れるというのは、やはりやり過ぎだった。

超危険人物を放置出来ず、扱いに困って牢屋に入れた王城関係者の気持ちは分からなくもない。

だが、これは挑発行為に等しい。

牢屋行きにする事で、かえってカタストロフを怒らせ、そのまま王城から出て行ったらどう償う気でいたのか。

言い出した者と、許可を出した者は誰だろう。
脱出後に殴る。

イーシャはぐっと拳を握って決意した。

クー。何故オーウェン様の協力を断ったの？

今の世界に関わり合いたくないから？

俺は利用されるのが嫌いだからだ。

はつきり言っておくぞ。俺がいる方が勝つ。

一撃で王都を壊滅できる自信がある。

封印されてる今の状態でもな。戦う意味がないと思わないか？

誰かに利用されるくらいなら、俺は喜んで牢で退屈している方を選ぶ

イーシャはしばし、絶句した。

カタストロフの実力についてではない。

彼の血の半分は神と謳うたわれた民族のものだし、精霊の協力があったとはいえ大陸半分の氷の世界に変えたほどの人物である。

驚くよりも、納得いく。

イーシャが驚いたのは、その価値観の方だ。

クー、貴方。実はものすつごく消極的な人間だったのね

カタストロフが言語習得に積極的だったので、イーシャは気付いていなかった。

干渉を嫌う素振りそはあったものの、ただ人見知りしているのかと考えてたのだ。

でも、どうしてはつきり言ってやらないの？ 全てに関わる気が無いって。

そこまではつきり言っておけば、牢屋行きになんてならなかったと思うけど

それは言った。だが、状況は変わらん。

現に今も『説得』しようとする奴等が後を絶たないな。

まるで、中立が罪とでも言わんばかりだ

中立は罪ではない。

白と黒しかない世界が、成り立つはずが無いのだ。

灰色の領域はどうしたって必要であるし、無ければただ破滅へと向かう恐ろしい世界だろう。

確かに、カタストロフの行動は一理ある。

当事者でもない彼が積極的に行動しては、何も変わらない。

今の世界に、むしろ関わってはいけないのだ。

当事者同士で戦って結果を出し、或いは手を取り合って解決に持ち込まなければ、また同じ事の繰り返しになってしまう。

ただ、カタストロフの言い分は利用されたくないから中立を選んでいるだけだ。

そして、中立を希望する割にそう在り続けるための努力を嫌っている。

彼のような立場は中立とは言えない。

そう。極度の面倒くさがりだ。

呆れた。中立でいたいのなら、それくらい普通でしょうに

イーシャは苛立ちを感じた。

いつぞやも同じ印象を思った事だが、カタストロフはアルフェルクに似たところがある。

やろうと思えば自分だけで望みの叶うだけの実力が充分以上あるのに、面倒だからと手を抜いているところがそっくりだ。

どんな立場だって、面倒事はもれなくついてくるのよ

どんなに努力を重ねたって、報われない事は沢山ある。

その努力すらしらないのならば、余計に。

貴方は足場すら固めきっていない状態で、ただダラけているだけじゃない。

見ざる聞かざる言わざるで、ただ嵐が過ぎて行くのを待っているだけ

イーシャが言ったその言葉の返答は、今までにないほどに強烈な感情。

お前はエーリスと同じで喧やかしいな。言う事までそっくりで、苛々する

カラストロフの『声』は何処までも冷ややかで、激しい怒りに満ち溢れていた。

第十八話 距離なき会話（後書き）

文字数を気にし過ぎるせいか、どうにも話の展開がスローな気がします。

精進せねば……！！

以下、最近の作品に関する悩み。

登場予定の未出キャラの名前が思いつかんとです。

出番が少ないんで、いつそつけなくてもいいかなと考えた事もあるのですが、設定上ルビエラの対に当たるのでないと不自然さが出てしまいます。

ルビエラさんはキャラ的に名前を呼ぶでしょうし。

ルビエラはルビーからもじってつけたんで、同じようにサファイアからつけようとしたんですが……

女性名しか思いつけないのです。

対になるので男性名が思いつきたいのに。

何故か、作者は男性名が苦手です。

レクトなんて、超テキトー。

作者はRPG大好きなんですけど、知ってるゲームからキャラ名を拝借しようとするイメージが固定されてるせいか、拒絶反応が。

長兄のミドルネームも結構悩みましたが、普段使わないし語感が良かったんで時空を超える物語のラスボス名から取りましたけど。

長々しょうもない悩みまで読んで下さった方、ありがとうございました。す。

第十九話 変化（前書き）

ユニークアクセス数が500を超えました。
本作品を読んで下さった全ての皆様のおかげです。
ありがとうございます！！

今後も張っておいた伏線を回収し、矛盾のある展開や目に余るようなご都合展開はないよう、精進します！！

この決意表明に関係して、残念なお知らせがあります。

この作品は、作者が学生の時キャンパスノートやメモ帳に書いた話を加筆・修正しながら書いてます。

今書いてる辺りで、ちよつとこれ変じゃね？ 都合よすぎるなー、と感じてしまい、手が一昨日から止まりました。

此処さえなんとかなれば、文章に対して変な所ないんですが……
ストックが明日までの分しかありません。

明後日までに解決出来なかつたら、連続更新が止まってしまい、続きをお待たせする事になるかもしれません（TT
そうならないよう、無い知恵を絞ります。

朔夜

第十九話 変化

「カーフィ、ホントに面倒臭いの嫌いね」

よくエーリスはそう言つて、彼を引きずり出した。

「本当に馬鹿みたいよ、カーフィ。そうしなければ本格的に壊れてしまつとしてもね。」

目を瞑つぶつて見ないふり、聴覚を一時的に封じて聴こえないふり、歯を食いしばつて口を閉じて何もしゃべらない。それで事態が過ぎ去るのをただじつと待つてるから、あいつらにお人形さん呼ばわりされるのよ！ 貴方の力が必要なのは事実なんだから、自己主張して態度が大きくなつたとしても殺される事は絶対に無いのよ！？」

彼はその言葉も聞こえない事にしていた。

確かにそうだと、頭の中では頷うないていても。

数百年に渡つて続いた経験が、防御本能として内に籠こもる事を選択させる。

思考が停止したのか。

何かを考えだしたのか。

それとも向こうで何か事体が動き出して、余裕が無くなつたのか。イーシャの「声」が止んだ。

静かになつた事にひとまず満足して目を閉じ、身体力を抜く。夕日が天窓から差し込む中、彼は眠る体制に入った。

束つかの間の平穩、嵐の前の静けさ。

それに値したのだと、彼が悟るのにそう時間はかからなかった。

「……リア？ イスフェリア！？」

自分の名を呼ぶ声とヒンヤリ冷たい床の感触に、イーシャはカッ！と、両目を見開いた。

深く呼吸を繰り返し、知らぬうちに涙がこぼれ落ちているのを感じず。

直接思考に叩きつけられたカタストロフの強烈な拒絶の混じる感情は、彼女の心の奥まで響いていたのだ。

こめかみの痛みも、いつの間にかやって来ていたスアウの存在も、イーシャには、どうでもよかった。

小刻みに身を震わせ、感情のままに叫ぶ。

「クーのド阿呆あほうっ！ 筋金入りの怠あほうけ者っ！！！」

「……はあ？」

スアウとドラクロの怪訝そうな声が、綺麗に重なる。

「クー？ 誰だ、それ？」

イーシャは金切り声でカタストロフを罵倒するのに忙しく、どうでもいいと判断したので無視した。

ひたすら肉声に出して、彼女の知る限りのありとあらゆる言語を使って罵ののしり続ける。

しばらくして、不意に我に返った。

「しまった！！普通に喋しゃべってたんじゃ届かないじゃない！」

啞然とした様子でイーシャを眺める二人をよそに、彼女は一人納得すると再び目を閉じた。

集中状態に入ろうとするが、何故か身体を揺さぶられているため、それもままならない。

イーシャの怒りの温度が更に上がった。

己を揺さぶる手の主を、殺みな気の漲る眼差しで睨みつける。

「集中の邪魔をするなっ！！」

イーシャが正気だったら絶対にしなかったであろう。

十倍以上年上であり、上位者であるスアウに対して怒鳴りつけるなど。

歴戦の猛者であるイーシャの濃密な殺あ気の中に中あてられたのか、単に普段と違って命令口調だったせいなのか。

スアウは彼女の両肩から手を離れた。

「イーシャちゃん。拉致シヨックの衝撃で現実逃避でもしてるかと踏んでたんだが、その様子じゃ違うな。現実を意識から切り捨てるほど集中して、何やってんの？」

イーシャの異様な様子に面喰くっていたドラクロが、殺あ気を浴びて闘争意欲を刺激させられたのだろう。妙に楽しそうな様子で聞いてくる。

イーシャは間髪入れず、言い切った。

「クーと念話！分かったんなら邪魔しないで！」

「この程度の逆境で値を上げるような弱虫じゃなくて嬉しいぜ。それが誰だか知んねーけど、気のすむまで馬鹿にしてやんな」

イーシャは鼻で笑って応じ返すと、再度目を閉じた。深く深く意識を潜らせ、繋がるラインを辿ってカタストロフまでこの一日半そうしていたように、ひたすらひたすら届くと願って罵声を浴びせかける。

イーシャはちゃんと気付いていた。

偶たまに、カタストロフが彼女とエーリスを重ね合わせて見ているのを。

レスクも時々セリシエレの面影を探しているような目で見る事もあるのだ、その分慣れがあったから気づけた。

カタストロフは一瞬険しい空気になって、すぐ安堵やわしたように和らぐ。

よほどエーリスは嫌われているのだろう。

イーシャはそう考えていた。

どうやら、彼の昔馴染みに関する気持ちはそう単純なものではなさそうだ。

彼女の言葉はカタストロフの芯に響き、普段動きはしない感情を大きく波立たせる。

イーシャを必要として、イーシャの管理下にあり、イーシャとほぼ対等に過ごしていた彼は、ほんの少し似ているエーリスの方こそ今でも必要としている。

そう思って、イーシャの中から激しい怒りが湧いた。

彼女の怒りは、小さな子どもが大事にしていた宝物を盗られたモノによく似ている。

恋情からが絡まない独占欲。

『私』は誰かの代わりじゃない。貴方も、『私』が必要ではないの
と。

罵倒はカタストロフまで、ちゃんと届いている。
他ならぬ彼が最初に言ったのだから。

イーシャの罵倒語彙は豊富である。

最初は下士官に混じって戦場入りし、職務上今でも色んな地方からやってくる下級兵とも接触する機会が多くあるのだ。自然に増える。

その全てを言い終え、更に繋ぎ合わせるなどして新たに創作し、言語を変えて最初から順繰りに言い直すこと十二週目。

イーシャは、パツと眼を開いた。

音を立てて血の気が引き、周囲から光が消える。

頭が割れるかのように激しく痛み、視覚の代わりに聴覚が冴え渡って、自分自身の心臓の鼓動の音が煩く感じるほどだ。

その状態で集中など出来るはずもなく、イーシャは激痛に顔を土気色に染め、両手足を痙攣させた。

「!? どうした、イーシャちゃん。今度は何だ!？」

スアウはとっくに出て行ったらしい。

目に見えて異変を起こしたイーシャの耳に、焦った様子のドラク
口の声が響く。

その問いに応える余裕はない。

イーシャは、その感覚に覚えがあった。

これは肉体と魂が上げる悲鳴だ。

樹海の遺跡で感じたものと同種、受容可能容量を遥かに超える『
力』が突如内側に現れた危険信号。

軋みを上げる身体は、あの時と同じように『力』に押され。

痛みに色を失ったイーシャの唇が、彼女の意図しないまま動いた。

様々な悪態を飽きる事なく発信続けるイーシャに、彼は苛立つよりも反省した。

逆上するという事は、イーシャ自身に誰かと同一視されているように感じ取られてしまった点が、幾度かあったという事であろう。そつと心の中にしまつて置いてくれた蟠りを、藪を突いて出させってしまったのは彼の失態だ。

実のところ、彼はイーシャに苦手意識に近いものを感じていた。彼女は光の民アルヴの企てから、一部とはいえ彼を解放してくれた恩人である。

それだけでも感謝の念が尽きないのに、衣食住の世話まで自ら采配を振るってくれた。

他者と接触するのが嫌いな事も、彼が口にせずとも気付いてくれて必要以上に干渉されず、快適に生活出来ている。

イーシャの行動が封印を解いてしまった責任感からであっても、前触れもなくやって来て初対面であるのに名乗らず強引に連れ出し、いきなり闇の民の集落に連れ出されたと思つたら、驚いている当時のサレ族長に押しつけるようにして何も言わず置いていったエーリスとは大違いだ。

あの時、サレ達が『魔王』と気付いてくれなかったらどうなっていたことが。

仮に光の民の企てが世界にとって善と成り得るものであったとしても、彼の感謝の念が尽きる事は無いだろう。

彼等に良いように使われるのはうんざりしているのだ。

エーリスに似ている点が無かったら、もっと分かりやすく態度に出していたらうに。

ふと、彼はある事に気づいた。

そういえば、一度も恩人だと考えている事を伝えていない。

意識してなかったが、自己防衛本能があえて言わせなかったのだ。言葉に出してしまえば、恩は借りになり、彼の立ち位置が決まってしまう。

「……いや。言わなくても同じか。恩人認識があるせいか、イーシヤにどうも強く出れないしな」

声に出して呟いたためか、何事かと振り返った牢番がバタリと倒れる。

結果が変わらないのならば。

延々と続くイーシヤの罵倒を聞き流しながら、彼は一つのことを固めた。

「道よ、通れ」

簡潔な古の力ある言葉が、イーシヤの口からこぼれ落ちる。

ドラクロが大きく息を飲む音が聴こえた。

身体を侵食していた「力」が消えると同時に激痛が消え失せ。

ぐったりと汗だけで床に倒れ伏したイーシヤの耳は、小さな物音

を拾った。

コツリ。コツリ　近づく誰かの歩く靴音。
スアウでは無い。

彼女はまるで滑るように歩くので、杖についてなければ足音を立てない。

「な、お、お前、どう……!?!」

ドラクロの声が不自然に途切れる。

すぐ傍に覚えのある強烈な力波を感じ取って。

イーシャは荒い息を整えながら、ゴロリと転がった。

視界が回り、二本の足が目に留まる。

装飾のように優美で細く長い鎖、どっしりとした強固そうな錠のついた足枷。

嫌な予想が当たって、イーシャは新たにダラダラと冷や汗を流した。

「よお。イーシャ」

カタストロフは腰を落としてしゃがみ込み、イーシャと視線を近づけた。

押さえつけていた頭布と飾り紐がなく、サラサラと彼の前髪が音を立てて揺れる。

目元までしっかりと覆い隠していた黒い幅広眼鏡ゴーグルが外され、あらわになった赤みがかかった金の双眸はキラキラ光っていて。

どう見ても愉快ゆかいとはいえない様子であった。

カタストロフの言葉で表せないほどの美貌を隠すものは何一つな

く。

かつてない近距離で、直視してしまったイーシャはどうしようもなく魅入った。

「黙っていれば、執拗しつように粘ねっこく好き勝手馬鹿ばかにしてくれたな。お前まへ」

ああ。私、死んだかも。

ろくに動かない意識の片隅で、イーシャはそう思った。

第十九話 変化（後書き）

実は微妙に、相手に対する認識がすれ違ってる二人です（w

カタストロフが怒っているのは、イーシャに大してではありません。

第二十話 守りの約定（前書き）

今回、短いです。

第二十話 守りの約定

「……まさか、クーって、氷魔王のことだったのか……？」

どれだけの時が経ったのか。

双方が無言なため、「こびりこびり」膠着状態へと陥おちいっていた空気をドラクロの咳きが壊した。

その声に。

カタストロフが立ち上がってイーシャから視線を外し、振り返ってドラクロを見上げる。

首を絞められたような音を漏らし、火の民族長は硬直した。

カタストロフは整った眉をしか顰め、固まったドラクロを拘束する数々の金属を眺めている。

たっぷり数秒経ってから、イーシャはようやく我に返った。

まぶた瞼をゆっくりと閉じ、体内に残るダメージに対処する。

「イーシャが勝手にそう呼んでるだけだ」

イーシャには見えないが、おそらくカタストロフに直視されなくなったのだろう。

ようやくモノが考えれるように戻ったドラクロが、その問いに反論する。

「……………でもさ。それってあんたが許してなきゃ、呼ばねーだろ」

イーシャの予想に反し、ドラクロはカタストロフと目が合っていた。

精神力が並外れて強かったのだろう。
近距離でなくとも、素のカタストロフと向き合っまともて正気でいられるのだ。

彼の倍以上生きたフィアセレスでも出来なかった事だ。称賛に値する。

「イーシャは一応恩人だからな。他の奴がそう呼んだら無視する」

クーという呼び名は不評だったらしい。

カタストロフは全くそんな様子を見せなかったので、イーシャは気付かなかった。

カーフィよりは良いと思うのだが。

ただそれは今、大した問題ではない。

イーシャには聞きたい事があった。

「クー、どうやって此処こゝに来たの？」

転移魔法は万能ではない。

転移する場所をよく把握しているか、場によって備わっている専用魔法陣の『鍵』となる言葉を知らなければ移動出来ないのだ。

カタストロフが封印された後に出来たレノンの都市に詳しいわけもなく、そもそもイーシャは居所が何処かなんて告げてはいない。それなのに、彼はイーシャのいる座標までバッチリ把握して、近距離に転移してきた。

恐ろしいほどの膨大な魔力を持ってしても、不可能なはずの芸当だ。

「簡単だ。同調を解かないまま思念波の位置を探知すればいい。延

々と来てたから逆転させただけで、俺がいちいち探さずに済んだ。
あとは俺一人通れるだけの魔力を注いで、お前に道を開かせれば完了だ」

イーシャは、先程の苦痛の理由を正しく理解した。

「……もう一つ。どうして此処こゝに来る気になったの？」

カタストロフは行動に伴う作用を熟知している。

面倒臭がりの中立希望だが、行動によって己の立場がどうなるか理解しているのだ。

それが嫌で大人しく牢に入っていたのに。

一瞬考えたイーシャの罵倒に怒り狂って文句を言いに来た、というのは、冷静になってみれば絶対に彼が取らないであろう行動だ。
ご機嫌斜めになっているようだから、カタストロフに罵倒が効果無かったという事はないだろう。

それでも、彼ならイーシャが飽きるまで、諦めるまで罵ののしらせておく方を選択する。

「嫌な事を悟ったからだ」

「は？ 嫌な事？」

カタストロフは鼻で笑うと、パチンと指を鳴らした。

その瞬間、しっかりとイーシャの両腕と両足で拘束の役目をはたしていた魔獣の皮が、バラバラに千切ちぎれて意味をなさなくなる。

きつくなくなつたとはいえ、拘束は拘束。

軽い締め付けが消えて、滞おどろっていた血が全身を廻めぐる。

その感覚に、イーシャは思わず目を開けた。

その目に飛び込んだのは、ドラクロを拘束していた多くの枷が一斉に砕け散る光景で。

支えを失ったドラクロは、驚きに目を丸くしたまま石床に落ちる。

「別に俺がここまで来なくても、お前だけ助ける手はあった。世話になってるし、一言、助けてほしいといえは王城に転移させるくらいしてた」

あ。イーシャは思わず声を出した。

そういえば、一度も助けを求めなかったのだ。

最初は連絡を繋げる事に必死で、繋がったら次は情報を求め、後は罵倒の嵐。

イーシャには最初から助けを求める気など無く、カタストロフからしてみると助けを求めているのだから勝手に転移させるのはちよつと、な状態だったろう。

自分を転移させるのは、他者を転移させるより容易い。たやす

カタストロフにとっては、イーシャに自分自身を転移させるか、彼を転移させるように魔力を送るかの違いだけだ。

最初の内に助けを求めていたら、カタストロフはレクトの所まで出向いて同調し、世話になってる礼だといってイーシャをその場に転移させただろう。

それなら牢行きにもならなかったはずだ。

ディアマス側はその時点で、カタストロフに貸しがある状態になっているから。

「それなら、本当にどうして来たの？ その、嫌な事に関係ある？」

腰を強打したらしく、苦痛に呻くドラクロに視界を固定し、イー

シヤは上半身を起こした。

久々だが、素顔のカタストロフを直視しないのが、まともな会話を続けるための必須条件である。

「お前は一応、俺の恩人なんだよ。イーシヤ」

カタストロフは何とも重苦しい溜め息を吐いた。

「俺を遺跡から解放してくれた。それがきっかけで何が起ころうとも、何も起こらなくても、お前に貸しがあるというのは変わらない。不本意極まりないが、お前が生きている間はお前を介して、世界に関わらざるおえないんだよ」

だからわざわざ此処に来た。

誰かから指摘される前に、自らの立ち位置を明確にするために。

イーシヤは心底驚いた。

彼女自身、カタストロフに貸しているつもりなどなかったからだ。エーリスの目論見もくろみに気付かぬまま乗り、興味本位で見に行ったら解放してしまっただけ。

むしろ、巻き込んでしまったという想いがあった。

イーシヤは今まで気付かなかったが、不評だった呼び名の事とい、彼は密ひそかに彼女に対する幾つかの事柄を、こっそりと譲歩していたようだ。

「故に協力する。ただし、お前の考えにだけな。どの位置に立つかわわれれば、どんな状況であつても俺はお前のいる方を選ぶ。氷魔王カタストロフの名において、約定を交わそう。」

分かつたらとっと起きろ、イーシヤ」

過剰過ぎるほどに強力な味方が誕生したものである。

カタストロフが協力してくれるならば、水の民や闇の民対しても出来る選択肢が確実に増える。

イーシャは、涙の跡が残る顔を手で拭^{ぬぐ}うと立ち上がった。

そういえば。

カタストロフに怒っていた時、スアウが来ていたのだ。

スアウは必ずドラクロの食事を済ませてから、イーシャを外に連れ出して食べさせる。

話しかけると殺気立つ状態だから、放っておいた方が良いと判断されたのだろう。

そのもつともな判断により、イーシャは自然と一食抜いた状態だ。空腹感を覚えていても、自業自得であって仕方ない。

「すげーな……嬉しいだろ。イーシャちゃん？」

氷魔王が一生降りかかる全ての厄介事の手助けしてくれて、傍で守ってくれるなんてさ」

お腹すいたなあ。

そんな事に気を取られつつあったイーシャの耳に、感心しきったようなドラクロの声が響く。

話題の主は不思議そうな眼差しで、固まった身体をせつせと動かすドラゴニアを眺めた。

「夢の民なら長生きしてもせいぜい八十年前後だろ？　すぐだ」

カタストロフが何百年、何千年生きているのか、イーシャには分からない。

彼の口調からすると、八十年は長いと感じていない様子だ。

ずっとではなく、しばらくの間。

イーシャはドラクロの感心した言外の意味にようやく気付き、妙に気恥しくなった。

相手は短い間と考えていようと、彼女にとっては一生である。しかも、傍で守る点については否定してない。

声の様子からして、カタストロフは己の告げた言葉が求婚に近いなどと、全く考えてすらないだろう。

多分、愛玩動物ペットの扱いに近い。

おそらく間違っていない自分の考えに、ずっと年頃らしい恥じらいが消え失せ、イーシャは冷静な思考に戻った。

「それより、ドラクロ様」

グルグルと両腕を大きく回し、コキパキと良い音を響かせて凝りを解ほくし中のドラクロは、イーシャの冷静な声につまらなそうな顔をした。

どうやら、考えていたものとは違う対応が返ってきて面白くなさそうだ。

期待にこたえられなかったようだが、今は冷静さこそ必要な状況だ。

「スアウ様が来るまで、どの程度かかるか分かります？」

「あー、スアウか」

ドラクロは肩幅に足を開くと左右に腰から上を捻り、首をゆっくりと回す。

柔軟に余念がない様子だ。

ドラゴニアは角が合計四本あるために、より頭が重いのだろう。ごき、と少し心配になるような音が首から聞こえた。

「そろそろ来る頃合いだな。腹が減ってきたし」
「……そうですか」

それならもつと深刻そうにしてほしい。

そう感じたイーシャを責める者はきつといないだろう。

軽く笑ったドラクロに流される気がしたので、口には出さないが、
ともあれ。

これからの事を相談する時間はあまりなさそうだ。

イーシャはスアウにどう接すべきか、思案を始めた。

第二十一話 交渉（前）（前書き）

なんとか書けました！！

長くなりすぎたので、次話に続きます。

時間をかけた割に残念な文章になってないか、心配です。

元よりは無理のない文になってるんですが……自信がない作者でした。

第二十一話 交渉（前）

「策を練ってる時間はないって事ですね」

ドラクロの予測に、イーシャは素早く頭を回転させながら移動した。

このまま突っ立っていれば、スアウが扉を開けた時点で自由を取り戻した事が分かってしまう。

即座に扉を閉めて鍵をかけ、緊急事態とニンフ達を招集されるのはマズイ。

外から首だけ出して、部屋を覗きこまれない限り発見されない入り口真横の壁に、イーシャは寄り掛かった。

彼女の行動の意味に気付いたか、ドラクロはすぐ隣、カラストロフは扉で完全に見えなくなる死角　イーシャ達の逆位置に移動する。

「クー、貴方、具体的にどんな事が出来るの？」

それによっても取れる手立ては変わるのだ。

現在の魔法では絶対出来ない事も可能であるなら、スアウに交渉が出来るようになる。

「リウファイアサン海竜王の負傷が一番ニンフ達にとって赦ゆるしがたい事。だから、その問題さえどうにかなるなら、宣戦布告した水の民にとっても最小限の責でこの件は和睦に持つていけると思うの」

「……ディアマスとスアウに対しては、それで上手くいくかもしんねーけど。他のニンフ達が納得すっかは別だぜ？」

カタストロフに対するイーシャの意見に、ドラクロは難しい顔で口を挟んだ。

「約束の五十年が過ぎても、ニンフ達を三十年思い留まらせられたのはスアウが族長だったからだ。あいつがディアマスと、いうかメイザスに恩義を感じていて、盟約の象徴を担ったから、他の奴等もずっと我慢してたんじゃないかな」

「？ スアウ様が象徴、ですか？」

反旗を翻すと決めた現族長スアウの処分、改めてディアマスに加盟、そして水の民が有する独自技術の一部解放。

それが、イーシャの考えた水の民に架せられる最小限の責だ。

ディアマスとしても無意味な戦闘は避けたいし、水の民が加盟した事が入ってきた利益は膨大な金額に及んでいる。

反乱が盟約にも認められていた権利である事も合わせると、これくらいが妥当だ。

あまりきつい責を架してしまうと、水の民とは講和にさえ持つていけない状態になる。

「え？ イーシャちゃん知らねーの？ メイザスが盟約までこぎつけたの、人魚狩りにあって死にかけてボロボロだったスアウを助けて帰したから、当時の族長が会談する気になっただぜ」

「……交渉王が潰した奴隷市で偶然ニンフを助けた点は歴史でも習いましたが、名前までは知りませんでした。スアウ様がそうだったんですね」

なるほど、確かに象徴だ。

どれほどヒトにニンフ達が凄惨せいさんな目に遭わされたのか、身を持つて知っているスアウは差別と妄執まじしやくによる被害者の象徴であり、平穩を早期に願う無言の催促でもある。

ドラクロは水の民の加盟以前から、火の民族長を務めている。当時の事情に詳しいのは、無関係な立場ではなかったからだろう。もしかすると奴隷市壊滅の際、メイザス王に同行していたのかも
しれない。

闇の民との盟約成立直後に遭った事件だ。可能性は十分ある。

「そーだな。当時のスアウは別に上役じゃねーし、記録にや残んねーか。」

とにかく、人魚狩りにあって帰って来れた奴はそういない。咽喉を薬で焼かれたり、子供が産めない身体にされたり……他にも色々惨たらしいメに遭わされ続けたのに、同じ夢の民であるディアマスを信用して庇ったのがスアウだったんだよ。

そのあいつに罰を負わせる　うん、駄目だな。海竜王の件が上手くいつて退く事を良しとしても、スアウ処罰の件が広まればすぐに暴動が起こるんじゃない？」

イーシャは、がつくりと項垂れた。

彼女もドラクロと同意見だ。

スアウはディアマスが信用に置けるといって、水の民に対しての象徴でもある。

そのスアウが、もう少し待ってみよう、きっとこれからは良くなっていく　というように説得していたから、渋々従った者達はきつと多い。

彼女自身、海竜王リヴァイアサンの負傷が無かったら、あと百年は待ってもよかつたようなことを言っていたし、実際説得していたのだろう。

かといって反乱の責任者の処分なしでは、ディアマス側に折り合
いが見つかなくなる。

スアウと引き換えにしても構わないほど価値があるモノを差し出せば、なんとかなるかもしれないが水の民が秘宝を持っている保証はない。

同時に、海底は宝の宝庫である。

もし秘宝たりえる者が存在しなかったとしても、総出で探せば見つからないと言い切れない。

「それで？ クー、貴方はどんな事が出来るの？」

「今、理想的に欲しがられてる力は回復関係だな？ 適性は低かったが俺には必要だったし、対象が自分以外の回復魔法も幾つか使える」

「そう！！ その力が欲しいのよ。現存する魔法で回復呪は存在しないから」

痩せた土地に活力を注ぐ精霊魔法、尽きた魔力を他者から融通される事で回復する呪はある。

神聖魔法も存在するが、それは魔物に対して有効な「力」の付与エンチャントであったり、体力を消費して自己回復能力を一時的に上げる類であって、いわゆる癒しの魔法は存在しない。

癒しの魔力は生命の精霊の領域。

生命の精霊は確かに存在するのだが、精霊が見える民族でもめつたに発見出来ないほど世界に馴染みきつていて、術として作動させるのが非常に困難だ。

生命の精霊の力を借りているつもりで、術者自身の生命力を大量消費してしまい死亡したり、もっと悪いと治療したい対象から生命力を奪ってしまい、傷は治っても衰弱して死んでしまったという本末転倒な例が数多く存在する。

そんな超危険ハイスケな博打に近い魔法は認められず、存在しないという事になっているのだ。

「そうか。海竜王は代替わりしても記憶を受け継ぐし、一応俺と面識がある事になる。治療までは、よほど交渉が下手くそでも持つていけるだろ」

問題はその先にある。

「……！ おい、スアウが近づいて来たぞ。おしゃべりは止めとけ」

ドラクロの警告に。

イーシャは壁に張り付き、息を殺して扉が開くのを待った。

一人でやってきたスアウは、扉の傍で陣取っていたイーシャにあっさり組み抑えられた。

物理的な衝撃に、スアウの手からすっぽ抜けた巨大弁当箱が床を滑る。

ドラクロは、当たり前のようにそれを拾った。

開けっぱなしになった扉の裏側に立っていたカタストロフが、素早く扉を閉める。

スアウの抵抗は、本当に僅かな間の事だった。

すぐに、彼女を押さえつけているのがイーシャで、ドラクロと共に自由になっている点に気付いたからだろう。

じっと居なかつたはずのカタストロフを眺めていた。

弁当の蓋を外し、中身を食べ始めたドラクロを無表情の中に少しの呆れを浮かばせて見るカタストロフは繰り返すが、目にした者の

意識を奪う素顔である。

そうと分かりにくいのが、スアウは意識が飛んでるのかもしれない。スアウの顔を覗き込むと、案の定反応が無かった。

抵抗しても無駄と悟ったわけではなく、第三者がいる事から状況が変化したと気付いたわけでもない。超絶美形に魅入って硬直しているようだ。

イーシャは少し考えた末に、スアウの視界を塞ぐように立った。カタストロフにも、スアウに背を向けるように指示する。

暴れられないように服のベルトが何かを使って拘束する事も数秒検討したが、それでは彼女が望むような話し合いにならない。

相手を拘束して行うのは交渉と呼べるものではない。

脅迫、あるいは恫喝だ。

カタストロフが鍵を外側から掛けていたこの場所に居る時点で、既に水の民達の計画は破綻はたんしているのだ。

わざわざ余計な反発を招くような行為はしない方が良さだろう。

今回は三対一であるし、スアウはあの鈍型魔道具を所持していなかった。

無力化するのは容易たやすい事だ。

「水の民ニンフ族長スアウ！」

イーシャは腹の底から声を出した。

びりびりと響く大声に、瞬またたき一つしていなかったスアウの身体が僅かに動く。

スアウはゆっくりとした動作でイーシャの様子を眺め、ドラクロを拘束していた残骸を見つけると大きな瞳を曇らせた。

肺の中の空気を全て絞り出すような、長く深い溜め息を吐く。

「残念……身動き出来なくて嫌々わたしの手で食べるドラクロを見るの、楽しかったのに……」

え？ まず気にしたのって、そっちなの？

予想外の発言に、イーシャは驚いた。

拉致監禁していた二人が解放され、新たに一人追加されている状態なのである。その危機的状況を見て、その言葉が最初に出てくるとは思ってもよらなかった。

驚いてるイーシャにかまわず、スアウは立ち上がった。

その瞳は凧いでいて、常のように彼女が何を考えているのか読みにくい。

「イスフェリア。説得なら、無駄」

淡々とした様子でそう言って、スアウはゆっくり首を振った。

その切れ切れの声はいたって穏やかで、揺るぎない。

「不測の事態。それが何？ 切り札が無くなって、勝機が更に零ゼロに近づいても、わたし達の心を蝕むしほんだ憎悪が色褪あせる事無い。既に投げつけられ続けていた石、投げ返した。もう黙って、なるべく当たらないように祈って避け続けるなんて、出来ない」

打って変わって深刻シリアスな内容。

どうやら先程の珍妙な発言は、会話の主導権を取るためのものだったらしい。

それにしても。

イーシャは一つ気にかかる事があった。

ドラクロは一旦、食べるのを止めてくれないだろうか。それほど大きくないものの、彼が忙しく物を食べる音が、空腹のせいか妙に耳に着くのだ。

そのせいで、スアウが作り上げている深刻な空気が台無しである。

「赦す事は出来ない。そう言った。世界に逆らう愚かな同胞がいると嘆いたその口で、わたし達にまた元の虐げられる生活に戻れというの？ あの方が負った傷が治るわけでもないのにな？」

「治るなら、反乱を止めると？」

欲しかった言葉に、イーシャは真面目な顔で尋ねた。

まずはスアウの言質を取りたい。

彼女の質問にスツと、スアウの眼が細まる。

ちらり、とドラクロを 正確には、その傍でこちらに背を向けているカラストロフを見やった。

「……なるほど。氷魔王が出来る？」

「必要があつて覚えたそうです」

双方とも、何を、とは聞かなかつた。分かり切つた質問だからだ。

「……条件、なに？」

「反乱を止め宣戦布告を撤回する事、ダイヤモンドに再加盟する事、この反乱の首謀者かその人物に引き代えてもダイヤモンドが欲しがるといふような財宝の類を差し出す事、水の民の独自技術の一部譲渡し知識を解放する事 ですかね。」

それならダイヤモンドの上層部も納得すると思います」

スアウは黙り込んだ。

水の民の怒りは、骨の髄まで達しているのだ。

納得のいく代価を貰ってもやはり納得出来ないという者は、必ず出る。

それでも、スアウは水の民ニンフの族長である。

避ける事の出来る戦いで、無為に散る手段は取りたくないと考えるだろう。

そして、この交渉内容は理不尽な請求ではなかった。

第二十二話 交渉（中）（前書き）

またしても、終わりませんでした。
つ、次こそは……！！

第二十二話 交渉（中）

「……ディアマス王国第三王女イスフェリアどの」

黙って考え込んでいたスアウは顔を上げ、イーシャを真っ直ぐに見つめた。

「貴女の停戦勧告を、水の民ニンフ族長スアウリヴァイアサン、テイカティは全面的に承諾する……ただし、海竜王リヴァイアサンの治療が先。でないと、皆を説得出来ない」

それはそうである。

イーシャには王位継承権が取れるほどの戦歴は合っても、空手形で信用されるような交渉実績はない。

「分かっています。海竜王リヴァイアサンの座ざす場所まで、我々を案内願えますか？」

「イスフェリアと氷魔王は構わない。でも、ドラクロは駄目」

不思議な条件だ。

イーシャは意図する事が分からず、首を傾げた。

「あ？ 何で俺は駄目なんだ？」

真横から声。

イーシャが目を向けると、ドラクロがいた。いつの間にか、食事を終えていたようだ。

返事を真剣に待つあまり、周囲の気配探知がおざなりになっていたのだらう。

ドラクロはイーシャの右手の平に、ほんのり冷たい丸型のものを押し付けて握らせた。

見てみると、右手の中にオレンジ色の果物。

イーシャが食べてない事を忘れてなかったようで、くれるらしい。空腹なのは確かだったから、彼女はありがたく頂戴する事にした。柔らかい果物の皮を指で剥いて食べる。

甘酸っぱい果汁が口の中に広がった。果物は水で冷やされていたようで、瑞々しく新鮮だ。

スアウは一連の様子をじっと見ていたが、ややあってドラクロに目を向けた。

「貴方があの御方 リヴァイアサン 海竜王の座す場所まで行く、命の危険多い。

海の中、潜る。凍土も歩く。居るの水の精霊ばかり……ドラゴニア見たら、皆が焦る」

火の民は別に泳げないわけではない。

水に入ると体内の精霊が不機嫌になり、扱える力が減って多少戦闘能力が落ちる程度らしい。

しかし、反属性である水の精霊の多数集う場所に行つて、無事でいられる保証は無かった。

精霊達が害するというわけではない。

珍しがつて詰め寄って来るくらいするだろうが、水の精霊自体は基本的に無害だ。

問題は、戦闘用意万全で殺気だっているニンフ達である。

下手すると拘束を抜け出し、スアウを脅していると受け取られ、沢山いる水の精霊の助力を呼びかけて命懸けの攻撃をしてきかねない。

ただでさえ、火の民は族長を攫われて（おそらく）気分を害し、卑怯な手段を取った水の民に良い感情を抱いてはないだろう。少しでも命の危険があるなら、置いていった方が良い。

スアウがイーシャに対する危険な状況に気を配らないのは、単にカタストロフの存在あつてのことだろう。

おそらく、彼女に対する危機はカタストロフがどうにかすると考えている。

その通り、どうにかなるだろう。

イーシャの魔力属性は火であるものの、問題なく泳げる。

憎まれている夢の民だが、素顔のカタストロフを後ろに従えて歩くだけで、ニンフ達は戦闘意欲どころか意識を失うだろう。

スアウ目線では、カタストロフがイーシャに心話で散々罵られ、仕方なく此処まで助けに来た事になっていそうである。

そう考え、イーシャは苦笑した。

一度頭に血が上っていた際、心話してた事を口に出して言い切つたし、カタストロフが嫌々決めなくなかった立場を定めて此処に来たのは事実。

あながち誤解とも言い切れない。

「なるほど。ではドラクロ様はここでお待ち下さい。下手に刺激を与えて事態を複雑化する事は、ディアマス側としても避けたいでしょうから」

「……ちっ！ 仕方ねーな。分かったよ」

説明から察したのだろう。

ドラクロは、ふてくされた様子で床に胡坐あぐらをかいて座り込む。

さっさと行けと言わんばかりに、しっしと手を振ってくる。

不機嫌そうなドラクロの仕草に、イーシャは苦笑し、スアウの方に目を向けた。

スアウは予想通りジツとドラクロを見てるが、なんとなく満足げだ。

「ドラクロ、大人しく待ってて。あとでお菓子持ってくるから」

「……イーから、はよ行け」

「ドラクロも、そう言ってる。イスフェリア、氷魔王。着いてきて案内する」

スアウに頷き返すと、イーシャはカタストロフに向かって声をかけた。

「クー、私の後ろに居てね。スアウ様、私、クーの順番で行くわよ」

「りょーかい」

イーシャは、日に三度の食事とトイレ休憩で部屋の外に出ていたが、その時とは逆方向に向かってスアウは歩き出した。

廊下の端の扉まで真っ直ぐ進む。

途中、二名ほどニンフに出くわしたが、彼女達はカタストロフの美の前に硬直。

立ちつくされると危険なので、イーシャは通路の端に座らせておいた。

スアウが開けた扉を通ると、岩肌が見えた。

天然洞窟らしく、足元がボコボコして少し歩きにくそうだ。

空気により水分が多くなる。

気温が高くないせいか、しつとりとした潤いのある感じだ。

レノン は平地部分が住居地区に、天然洞窟部分が通路にでもなっているのだろう。

凍土であるから当然なのだが、急激に温度が下がり、イーシャには正直寒い。

スアウは平然としている。

樹海の遺跡の時も思ったが、体内の精霊が極端な寒さや暑さを和らげるか、防いでくれるのだろう。

氷室のようだったのに、フィアセレスもケロツとしてた。

「 温もりを 」

カタストロフも、寒暖感覚についてはイーシャと同様だ。

簡潔な古代魔法語が響き、彼とイーシャの身体を暖かな空気が包んだ。

「クー、ありがとう」

「ただのついでだ。一人だけ寒そうにしてられると、バツが悪い」

カタストロフは素っ気なかったが、ついでだろうとありがたい事は確かだ。

イーシャは機嫌良く、スアウの後を追った。

そう進まないうちに、洞窟が行き止まりになる。

正確には、水で満たされ、歩いては進めなくなった。

匂いからして、海水だ。この洞窟は海に繋がっているのだろう。

「……聞くの忘れてた。二人とも、泳げる？」

スアウは身体を半分海水に浸しながら、尋ねてきた。
水中にあるためか、既に変態が終わっている。

スカートの下から覗いていた細い脚は、うろこに覆われ、指が消えてヒレに変化済みだ。

「私は問題なく泳げますが、どれくらいの距離でしょうか？ 息が続く距離でしょうか？」

「……あの御方が座す場所、空気ある。だけど、貴方達の息が続くか分からない。」

息が続くとしても、海水の温度の問題がある。

レノン周辺は流氷も多い海域だ。

冷たい海水だと、身体にかかる負荷は大きい。

イーシャは振り返り、カタストロフの首を飾る赤銅色の首環トルクに視線を固定した。

「クー……何とかならない？」

「問題ないな。風の精霊に頼んで、空気を固定すればいい話だろ」

あっさりと言うカタストロフ。

何とも頼もしい事だ。

スアウも、何処か安堵の色を瞳に浮かべている。

治療出来る相手が近くまで来ているのに、身動きの取れないらしい海竜王リヴァイアサンまで届けられないというのは非常に悔いの残る結果である。

そうならなくて本当に良かった。

「そう。じゃあ、ちゃんと着いてきて。少しでも逸れたら、海の魔

物達の縄張りに入ったりする」

「分かりました」

真剣な眼差しで言うスアウに、大きくイーシャは頷き返した。

ちやぷん！ と、スアウの頭が海水に沈んで見えなくなる。

「音を奏で、音を運ぶ。最も古き^{シルフイード}楽師達。魔力を供給する。相応なる対価を受け取ったなら、指示に^{こた}応えろ」

カタストロフの呪　でなく精霊語に、周囲の空気が蠢き、答えるように風が渦を巻いて彼を取り囲む。

低位の精霊は先天性の才能がないと、その姿を視認出来ない。

ルビエラと契約していても、生まれ持った才能がないイーシャの目には精霊の姿が見えていなかった。

だが、居るのは分かる。力を感じ取れるからだ。

イーシャが受ける印象からして、風の精霊達は大勢集まって居た。姿が見えていたなら、逃げたくなるほど居るのではないかと思う。これだけ集まっていたら、中位の精霊よりも扱える力が大きいのではないだろうか。

カタストロフはスツと、イーシャを指差した。

「海中に行く。その夢の民の娘ごと包め」

ひゅっつ。

風の吹きつけるような音と共に、直径三M^{メートル}ほどの空気の膜が二人を取り囲んだ。

「これでいい。イーシャ、海に入れ」

「うん。助かったわ。ありがとう」

軽く頭を下げて礼を言ってから、イーシャは海水に足を踏み入れた。

取り囲む膜の範囲の海水が移動し、靴は濡れない。

従来の魔導師に、こんな事は不可能だ。

魔法や呪で水中を行く術はあるが、どうしても服は濡れる。

直接精霊の力を借りているからこそ、出来る芸当だろう。精霊使エレメンタいは非常に希少で、イーシャも己の他は見た事がない。

スアウに置いて行かれたら困るので、イーシャはさっさと海中に潜った。

潜るといっか、落ちるに近い。

イーシャの目に、はっきりと海の中が見えた。

近くを泳ぎ過ぎて行く魚の群れ。

遠くに、茶を基調とした色あいのクジラほどに大きな亀が見えた。

もしかしたら、大亀型魔獣ランドタイトルかもしれない。

海の色は深さを示すように青く、光が弱くて暗く。

海底の方は深過ぎて、イーシャの目には底が見えなかった。

空気の膜ごしに、スアウが海中に佇むようにして待っているのが見える。

「変化を受け入れ、乾きを潤す、多くの存在オンディーヌを守りし者達。魔力を供給する。望むに足る対価を受け取ったなら、指示こたに応えろ」

こぼこぼと、存在を主張するように周囲に大量の細かい泡が浮かんで消える。

カタストロフは、スアウを指で示した。

「俺の声が聴こえているな？ ティカティ一族いちぞくのスアウ。
一番近い処にいるニンフの後に続くよう、この膜を押せ」

スアウが了承を示すように大きく頷いた。

水膜のついた両手と足ビレを動かして、素晴らしい速さで先を泳ぎ出す。

さすが、水の民と言うべきか。

普通に泳いでいたらとても追い付けない、放たれた矢のような速度だ。

水の精霊達は、カタストロフの指示通りの働きをした。

同速度で二人のいる空気の膜が動き、追走する。

見る間に周囲の景色は変わっていき、光の差さない真っ暗な海底にある、洞窟の中にスアウが入っていった。

洞窟と分かる理由は、ぐるりと取り囲むように生えている植物が青く光っており、その形が見て取れたからである。

洞窟の中は、光源があり水中何があるか見て取れる。

天然のものを改造した、明らかに人間の手が加わった洞窟で、入り口が大型船でも楽に通れるほど大きい。

視界から、不意にスアウの姿が消えた。

ザバツ！！

カタストロフに従っている水の精霊の力で、一気に水上に押し上げられる。

そこには沢山の水の民達と、彼等に囲まれ、上体を岩場に残りを海水に沈めて、力なく横たわった巨大な海竜の姿があった。

第二十三話 交渉（後）（注！！流血描写あり）（前書き）

海竜 東洋の竜

（例、ドラゴンボールのシェンロン。遙かシリーズの白竜・黒竜）

その他 西洋の竜

（例、テイルズ、FFなどで出るドラゴン）

この作品で作者の中にある竜のイメージです。

今回、少し流血描写があります。

苦手な方、ご注意ください。

第二十三話 交渉（後） （注！！流血描写あり）

海竜王は、その名に相応しく巨大だった。

全長は数百、いや海水に沈んでいる分を加えると千Mを超えているのではないだろうか。

胴体と同じくらい、細く 全体に比べてそうに見えるが、幅は数十Mあるだろう 首が長い。

元々は、白銀と青のうろこに覆われた美しい身体をしていたのだろう。

大きな岩山にでもぶつかって裂けたような巨大な傷が腹の近くにあり、どす黒い血を流す傷の周りがあるとどころ禿げたところから、ありし日の姿が想像出来る。

開いた口の牙が数本欠け、髭が毒のせいで抜け落ちたのか、妙に短い。

一つの角が半分から不自然に折れ、前の両足の爪が半分以上剥がれて、脇腹に深々と小さなものが幾つも刺さっている。

小さい、といっても周囲で世話をしているニンフと同じくらいか、もつと大きいくらいだ。

海竜王が巨体過ぎて、遠近感がおかしくなっている。

じつとイーシャが目を凝らして見ると、その小さなものは大量の銚だった。

抜かずに刺さったままなのは、おそらく出血を抑えるため。

これだけの巨体に、これほど多くの傷を負わせたとなると、相当大規模な船団が動いているのは間違いない。

レノンの近海まで来れるとなると、資産規模も相当あるとみていい。

問題は、どうやってダイヤモンドの巡回船と水の民の網を潜り抜け

たかだ。

おそらく、水の民の方は遭遇と同時に捕えられてしまったのだろう。人魚狩り被害者が行方不明者のリストに入ってしまったている。

巡回船の方はルートと時間を知っていて見つからないよう一隻一隻くぐり抜けたか、協力者が海軍内に居て素通りさせたかだ。

帰ったら海軍上層部を含め、末端の友人・その家族に至るまで洗わないとならない。

イーシャは管轄外なので、直接の手立ては取れない。

命令範囲が広く、管轄外でも手を出せるのはレスクか王太子だ。

まだ闇の民の方の離反問題も残っているから、総司令であるレスクは忙し過ぎて手が回らない。

アルフェルクも当然忙しいものの、長兄はヤル気にさせればもの凄く仕事が早いのだ。

頼んでみる価値がある。

「……これはまた……手酷くやられたな」

カタストロフは、イーシャと同じようにじつと海竜王リウアイアサンの姿を観察していたが、思わずと言った様子で呟いた。

彼があつた事のある海竜王は、ずっとそう呼ばれるに相応ふさわしい威容と美しさを兼ね備えたものであつたことだろう。

なまじ知っているからこそ、余計に痛々しさが増すのかもしれない。

「傷が塞がる速度が、毒のせいですごく遅い。数百種類の毒が混ざって、効き目が強くなってる。水の精霊に頼んで少しづつ解毒を試みてるけど、効果薄い」

「ドラク口様の血は、もう?」

「うん。今日取った分まで、薬草と混ぜて飲ませた。それで細かい

裂傷が全部塞がってくれたから、そろそろ銚も抜きたいと考えていたところ」

スアウは悲しみと怒りの混じる複雑な表情で、イーシャを見た。

「あの腹の傷、多分、毒のせい。毒でフラフラしたところに海底の洞窟にぶつかって、裂けた。毒の元はあの銚だと思う」

「毒を完全に消すか、完全に腹の傷を消すか。どちらかが出来れば？」

スアウの言わんとする事に気づき、イーシャは尋ねた。

想像は当たっていたようで、スアウは大きく頷いて見せる。

「……そこまでやって見せたら、皆は反対出来なくなる。今のまま、きつと、十年近くかかると思う」

「そうですか……クー？」

振り返って肩の辺りに視線を固定し、イーシャは呼びかけた。
ふう。

カタストロフは大きな溜め息を吐き、肩をすくめて見せる。

「分かった。しばらくかかるだろうが、治療に行つてくる。テイカティ一族のスアウ。ついでにこの辺一带、浄化もしとくぞ」

「？ 浄化つて……この辺り、そんなに魔素があるの？」

恨み骨髓に達し、神以上に崇拜する海竜王リウマイアサンがヒトの悪意ある攻撃を受けた上での重傷だ。

確かに、水の民の発する怒りや悲しみや憎しみが強烈に渦巻いて、魔素化してもおかしくない。

「魔素は瘴気に転じる。残していくとロクな事にならない」
「瘴気と魔素は別のものじゃないの?!」

瘴気は魔物の放つ生体エネルギー。
イーシャはそう習った。

浄化の申し出を受けたスアウも訝しげに首を傾げているから、彼女もそう習ったのだろう。

二人の反応に、カタストロフも首を傾げていた。

「おかしい……知識が曲げられて伝えられてるのか？ 時が経って曲がった可能性があるか」

何やら一人で納得すると、カタストロフは瘴気について説明した。

魔素は引き合う性質を持っており、放っておくとどんどん周囲から集まってくる。

瘴気は集まった魔素が凝固し、半物質化状態になったもの。

瘴気も同様の性質を持ち、放っておくと物質化 魔物に変わる。魔物化する際、特に瘴気の量が多く濃度が強いと邪竜と呼ばれる化身となる。邪竜は物理攻撃が通用しないので、倒すのが大変という事だ。

「今ある瘴気の半分は元々、世界が作られた時発した余剰分の力だ。生じたモノはどんなものであれ消える。世界も例外じゃなく、滅びる為の因子として定着した。だから、瘴気は魔物化しなくても、在るだけで世界を緩やかに腐らせ、壊す」

知性のある魔物でも、話が通じないのはそういう理由だったらしい。

辿っていけば、負の感情の塊と言っているいい存在なのだ。

世界を破壊する役目を担うのなら、魔物は世界全てが敵であつて、壊すべき相手と分かり合う必要がないのだから。

「魔素の状態であつても、厄介な性質がある。引きずられやすいのは闇の民に限っているわけじゃない。濃度によっては、あらゆる動植物の意識を染める……覚えがないとは言わせないぞ。」

強い悪意を向けられて恐れ、恐れを恥じて怒り、怒りを超えて憎み、憎しみが長じて絶望へと変わる」

カタストロフの声は淡々としていたが、まるで詩を誦そらんじているように聞こえる。

「つまり、魔素や瘴気は治安面でも放っておけないのね？」

「……昔に比べ、桁違いに瘴気の量が減って、邪竜もいないようなのに随分と戦いくが多い。人口が増えただけでは説明がつかん」

戦火を増すごとに、悪意や悲哀も増す。それだけ魔素が増えて、意識を染められるものが増える。染められた者が発する悪意に、さらにまた誰かが毒される。

負の循環だ。

連鎖を止める事は容易ではない。

染められずに浄化出来る『魔王』を除いて。

「……分かった。最大範囲で浄化もお願いする……人体内の魔素は無理？」

「個人のもとは一人ひとり、直接接触する必要がある。この場に居るニンフ達全員を希望するのか？」

「……あの御方の治療が最優先。目に余るような人間だけ、お願いするかもしれない」

スアウに頷くと、カタストロフは海竜王リヴァイアサンへ向かって歩き出した。治療中で忙しく作業をしているせいか、彼に気付かないニンフ達が多いらしく、数人しか倒れるものは出ない。

その後ろ姿から目を離すと、イーシャはスアウに顔を向けた。スアウはまるで祈るように目を伏せ、両手を握り合わせている。

「スアウ様。今のうちに聞いておきたい事があります」
「？ 何？」

「ディアマスに何を引き渡すつもりですか？」

すっと、スアウは目を開けた。

首を傾げ、じっとイーシャを見つめてくる。

なんだか不思議な事を言われた。そう言いたげな様子だ。

「引き渡すのはわたしの身柄。わたしは長。責任を取る、当然の事」

やっぱり。

イーシャが考えたように、スアウは自分一人の犠牲で、この局面を乗り越える事にしたようだ。

だが、それでは困った派生事態が生じてしまう。

「……ディアマスが欲しがりそうな秘宝たぐいの類に心当たり、全くありませんか？」
「わたしの身で済むのに、差し出す必要ない」

スアウの言い回しからして、秘宝はあるようだ。

ただ、スアウは己と引き換える必要性が無いと考えている。説得しなければ、水の民達が暴動騒ぎ一直線だ。

イーシャはしばらく考え、言葉を選ぶかどうか考えた。上手い言葉が思い浮かばなかったので、諦めて率直に伝える。

「秘宝を差し出して下さい。貴方と引き換えでは、水の民が暴動を起こすとドラクロ様が言っていました。私も、そう考えます」

「？ わたし、本当は長に成れるほど能力ない。ダイヤモンドに脅しかけるに有効だと選ばれた。今回の事で、耐えられなくなったら本気で離反する前例作った。脅しは間にあってる。わたし、子供も産めないし、貢献出来る事もうないから、大丈夫」

スアウは本気でそう思ってたと言っているようだ。

二人の会話が聞こえていたのだろう。

すぐ傍で薬品を運んでいた水の民の青年が、酷く驚いたように族長を見つめている。

信じられない。何言ってたんだコイツ、と言いたげだ。

この反応からして、ドラクロの懸念の方が正解だろう。

「貴女はご自身を過小評価なさっているようですね。それとも、それだけ秘宝は渡す事の出来ない、大切なもののですか？」

「渡しても、ダイヤモンドにはどうにも出来ない。封印が強過ぎて、わたし達も助けてさし上げられないから、渡すの問題ない」

またしても、気になる言い方だった。

スアウの言い方は、秘宝が意思を持っているかのように聞こえた。しかも、封印ときて、上位者に対するような言葉遣いである。もしかすると、もしかするのかもしれない。

イーシャは以前抱いた予想を口に出した。

「その秘宝、上位精霊でも宿っているんですか？」

「……すごい。よく分かった」

「『紅の刃』も同じですからね。秘宝は私達を連れ去る時に使った、あの青い大鉾ですよね？」

こくり。

大きくスアウは頷いた。

やはりあの鉾型魔道具は、イーシャの考えた通りの逸品だったらしい。

「渡してもかまわないなら、大鉾の方を引き渡して下さい。暴動は嫌です」

「……符を巻かないと封印結界が作動してる。たまにしか水の王、起きてないから危ない。誰にも持てない。符を巻いたまま、使う人間、属性ないと扱えないの」

封印を解いてない時の『紅の刃』と同じような状態らしい。

そんな状態でも、ドラクロに互角以上の戦闘を成立出来たのは親和性が高い水の民であったためだろう。

それにしても火の王^{ルヒエラ}だけでなく、水の王も封じられているとは。何の目的があつて、封印処置が取られたのだろうか。

「その状態でも構いませんから、大鉾の方を渡して下さい。スアウ様が納得出来ないようでしたら、とりあえず此処に居る方全員に聞いて回ってみて、どちらをディアマスにやるか決を」

「……分かった。そこまでいうなら、聞いてみる」

渋々と、気の進まない様子だったが、スアウは了承してくれた。

ホツとして、イーシャは海竜王^{レヴァイアサン}の方へと目を向ける。

ちょうど、カタストロフがその頭の傍まで近づいたところで。

遠過ぎてイーシャには何をしているか分からなかったが、話しかけたのだろう。

閉ざされていた海竜王リウマリアサンの瞼があがり、黒い眼があらわになった。

第二十三話 交渉（後） （注！！流血描写あり）（後書き）

ストックが溜まらないため、作者はドキドキが止まりません。
連続更新記録が止まらないよう、頑張ります。

第二十四話 治療（前書き）

タイトル微妙……

作者は更新直後に自分で読んで、おかしい処の確認と、見つけれたら誤字訂正しています。

作者の方にある一文の文字数と、読者様が見る文字数、違うので偶にバランスがおかしくなるんですね。

ストックがなくてぎりぎりなので、ここ数日編集が甘いです。誤字を見つけたら、どんどんご報告下さい。

パソコンの様子が変です。

時々操作してないのに、勝手に画面が上下したり、マウスが効かなくなったり……

ノートン入れてますが、完全スキャンでも完全に効いてないような修理に出すべきでしょうか？

第二十四話 治療

彼が海竜王リウファイアサンの頭部に近づいて行ったのは、意識の確認をするためだった。

意識の有無で、使うべき呪が変わってくるのである。

彼が声をかけようとしたその時、不意に海竜王リウファイアサンの閉ざされていた瞼が重たげに上がった。

彼の身の丈よりも巨大な丸い眼が、ゆっくりとこちらを見る。

縁側は黒灰色、中心に向かうごとに黒さを増す宝玉のような瞳は確たる知性の光が煌めいていた。

懐かしい、澄み切った波動だ。貴様か。

先代ではなく、我とは初めて会うな。カラストロフ

瀕死に近い状態にはうって変わって、威圧感のある堂々たる思念波が轟く。

作業中のニンフ達が、ハツとしたように手を止めた。

その事から、彼限定のものではなく、思念が周囲全体に響いたと分かる。

まだあの者達の良いように、こき使われてるのか？

おぬし、世界を捨てたあの者達に恨みこそあれ、恩など受けていまいに

「初めまして、だな。今代の海竜王リウファイアサン……とりあえず、今ここに居る理由はあいつ等の意図する事じゃない。ヒトの娘とニンフの長に頼まれ、貴方が負った傷と毒素を癒しに来た」

そつと手を伸ばし、海竜王リウアイアサンの鼻先に触れる。
その呼吸は一定でなく、時々喘鳴ぜいめいのようなものが混じり、決して楽観視していい状態ではないのが分かった。

「治療する。今から注ぐ力を受け入れ、抵抗するな」

好きにしる。我に、おぬしほど力ある者に逆らう力は残って
ない

「それは良かった。下手に抵抗されると、余計に手間取る」

意識を確認したかった理由がこれだ。

海竜王リウアイアサンは、その特殊な継承により時が経つほど力が増す。

そのため、外部からの力を排除するあらゆる抵抗力が強いのだ。
意識のない状態でも抵抗する力は変わらないので、本人（竜？）
の意思がある状態でない術が非常に効きにくい。

彼は、鼻先にあてた手のひらに意識を集中させた。

まずは、この巨大に蓄積された魔素を抜く。

魔素は治療の邪魔になるのだ。

手のひらを焦点に、浄化の力場を形成する。

ぶわり。

海竜王リウアイアサンの巨体から数多あまたの粒子が浮かんで、彼に向かって吸い寄せら
れるように飛んでくる。

粒子は黒い。

黒、と言っても正確には違う。

黒ではないが、黒としか表現出来ない色だ。

光が無く、暗く昏く、おぞましい。負と悪意を凝縮した魔素モノに相
応しい、見ているだけで気分が悪くなるような粒子。

視覚化した魔素は、彼に触れると細かく弾け、虹色またたに瞬いて体内

に吸収されていく。

先日のオーウェン相手とは桁違いの魔素の量だ。

ちよつとしたきつかけで、瘴気と転換しただろう。

例えば、海竜王リウアイアサンが死んでいたら、確実に瘴気に転換していた。

ゾツとしない話だ。

海竜王リウアイアサンの遺体から生成された瘴気が、その軀むくろを媒体に邪竜と化す。

そうなっていたら、この近辺の水の民は壊滅しただろう。

「生と死を導く、運命ノルンの天秤を握る者達。魔力を供給する。気の済

むまで貪り、満足あたいに値したのならば、目の前に現れ出よいで」

彼の中に全ての魔素を取り込んで、一欠片残さず浄化した。

次は生命の精霊を呼ぶために周囲に魔力を放射し、精霊語で呼びかける。

放射した魔力を何処かに吸収された感覚が起こり、ゆらゆらと、

影のように薄い子供の姿をした精霊が浮かび上がった。

命素マナの色である青銀の光を帯び、眼を閉じたその精霊は性別の格差が見えず、男女どちらにも見える。

人型を取ったとなると、この生命の精霊は上位だ。

精霊は基本的に、低位は動植物の姿、中位は人型と動植物が混ざったような亜人型、上位は完全に人間の形を取っている。

彼の魔力は浄化の性質を帯びているせいか、昔から精霊に気に入られており、供給するだけで色んな手伝いをしてくれるのだ。

今回の治療も、速度を上げる必要性があつて、彼は協力を願った。

「海竜王リウアイアサンを癒す。力を貸してくれ。必要になったら、そのつど遠慮なく魔力を持つていけ」

分かった。力、貸す

微かに了承の声が聴こえ、彼は患者（竜？）のほうへ向きやった。

リウファイアサン
海竜王の腹の傷が半ば以上癒えたところで、イーシャはスアウと共にその場に居合わせた百名ほどの水の民の説得に成功した。

まだまだ一部でしかないが、好感触である。
その百人の半数に頼んで、残る水の民の説得に協力をお願いした。その中には長老と呼ばれる者が数人、一族単位の長も数人いたため、より効果が見込める。納得いかないようならこの場に連れてくるようにも伝えた。

宣戦布告の解消は、早ければ早い方がよい。

ちなみに、その場にいた全員にダイヤモンドに引き渡すのはどちらが良いか、スアウは自分が行くつもりだと言ってきたきかない事も含めて尋ねると、全員が秘宝を渡す事を選択した。

水の王は大切だが、封印が解けない。
悪用されるような事にはならないだろうから、構わない　と。
スアウはまだ納得していない顔をしていたので、不安に思ったのだろう。

数人ずつ、いかにスアウがニンフ達に必要とされているか、こんなところにお叱りに来た。

「……忘れてた。イスフェリア、これ」

お叱り騒動が済んで、いささかぐったりしていたスアウが、新たにやってきたニンフから金属製の鞆を受け取ると、差し出してきた。

訝しげに思いながら鞆を開けたイーシャの目に、見覚えのある巨大弁当箱と透き通った水晶玉が飛び込んでくる。

昼食に続き、夕食を抜くところであったので、素直に弁当箱はありがたい。

巨大なのは、きっとカラストロフの分も一緒にしてあるからだろう。

水晶玉は、魔道具だった。

中心にある光が古代魔道文字マジックから推察するに、通信機。

「これ、ダイヤモンド国王に用事ある時、使う。レスクに直通。まとまるの早そうだし、イスフェリア、連絡していい。氷魔王、黙って出てきたなら、きつと大騒ぎ」

「！！ ありがとうございます。スアウ様。さっそく使わせていただきます」

スアウの言う通り、今頃王城は大騒ぎだろう。

抵抗なく地下牢に入っていったカラストロフが、気付いたら姿が無くなっているのだ。

ダイヤモンド王城は転移魔法による侵入者を防ぐため、特殊な結界が張り巡らされており、所定の位置でなければ転移出来ない事になっている。

カラストロフは、どうやって結界を突破してきたのか。

転移防御結界は、網と面を合わせて何十か重ねてあり、常時作動する関係上ほんの少しだけ、不規則に点のような隙間が発生する。

その結界の隙間を通ってきたなら問題は少ないが、その強力な魔力で結界ごとブチ破ってきた可能性も捨てきれない。

ブチ破っていたら、その瞬間宮廷魔導師達に感知され、転移魔法を使って脱出した事になり、闇の民の声明もあってカラストロフの

認識が敵対に。

隙間を通ってきたのなら、『説得』しに来た面会者か、食事を届けに来た牢番によって気付かれるまで、カタストロフの不在は上層部には伝わらないだろう。

「スアウ様。あの、この使い方は……？」

「文字に向かって魔力流すだけ」

「分かりました」

イーシャは水晶に右手を当てて、言われた通り魔力を注いだ。

一瞬、白く光ったかと思うと、水晶玉にレスクの顔が映る。

徹夜でもしているのだろうか。

眼の下に、くつきりと青黒い隈くまが浮かび、顔色が良くない。

水晶玉内のレスクと目が合い、信じられないものを見たとも言ふような感情が、その董色の瞳に浮かんだ。

《い、イスフェリア？ どうして、お前が……》

「カタストロフ殿と心話で語り合い、こちらにお呼び立てして事態の収拾の協力を取り付けました」

少し離れて海竜王リヴァアイアサンの治療を見ていたスアウを呼んで、隣に座ってもらった。

イーシャの隣にいるスアウが見えたのか、ますますレスクの顔に深い驚愕が彩られた。

「スアウ様とも話し合い、重体の海竜王リヴァアイアサンの治療と引き換えに、宣戦布告と離反を取り消して下さるといふ事に落ち着きました。現在、カタストロフ殿の手で治療が進んでおります」

《そ、それは真か?!》

「わたし達にとって、海竜王^{リウアイアサン}は何においても重要な御方。あの方を治療してくれる事引き換えなら、戦うの止める当然」

レスクはポカンと大きく口を開き、間抜けな顔になった。

イーシャは真面目な顔を崩さずに、結果報告を続ける。

「今回の負債として、『紅の刃』と同様の名前付き精霊の封じられた大鉾型魔道具を差し出してくださるそうです。他に、水の民独自の技術の一部解放も認めるとの事。

陛下。水の民へ対する会議は終了させて下さい。意味がありませんから。

私とドラクロ様、カラストロフ殿は治療が済み次第、帰還いたします。詳しい事はその際に報告を　今から食事を取りますので、これにて失礼いたします。あとでまた、連絡しますので」

《え?　ちょ、ちよつと待てイーシャ!》

言つべき事は言ったので、イーシャは魔力を流すのを止めた。

ぷっん!!

音を立てて、水晶玉に浮かんでいたレスクの映像が消える。

レスクとしては色々と聞きたい事はあるだろうが、イーシャはそろそろ空腹が辛かった。

悪いと思いつつ、食欲を優先させる。

水晶玉の機能は一方通行なのか、沈黙したままだ。

ほっと一息つくと、イーシャは巨大弁当の一段目攻略を始めた。

第二十五話 帰還（前書き）

第二十四話。タイトル訂正しました。
連絡 治療

第二十五話 帰還

海竜王リウアイアサンの治療は、結局丸三日通して行われた。

正確に言うならば、当初予定していた腹の大傷を治すだけなら半日かからず終わったのだ。

そこで止めて帰っても問題なかったのだが、責任者スアウが同胞の説得に行ってしまった、それにイーシャが着いて行ったのである。

まさか一人でダイヤモンド王城へ帰るわけにもいかず。

特にする事もなくなった彼が、暇つぶしに顔見知りの治療をより進めたのは、水の民にとって幸運な事だっただろう。

傷を塞ぐのより、解毒の方が厄介だった。

未だ完治には至っていないが、もう海竜王リウアイアサン自身の自己治療で充分に事足りる。

体力が戻り次第、水の民の手から離れるだろう。

彼よりも更にすることがない上、水の民を刺激する事を懸念して軟禁状態に甘んじていたドラクロの苛立ちは酷かった。

イーシャが戻ってきたと聞くなり、自主的に籠こもっていた部屋から飛び出して行ったかと思うと、彼女の襟首を引っ掴んで彼の元に連れて来るほどに。

イーシャはドラクロの事を半ば忘れていたらしく、青い顔で抵抗も無く引きずられてきた。

「イスフェリア。数日のうちに、ダイヤモンドに行く。レスクにヨロシク」

ダイヤモンド側に連絡を入れ、帰還報告をしていると、二人の後を追いかけてきたスアウがそう言った。

戦闘動員にした者全員の説得に費やされる時間は、まだかかるよ
うだ。

民族全体だったら、数日単位は無理であろう。

「レウアイアサン海竜王の治療、感謝する。氷魔王カタストロフ殿。ドラクロ、貴
方の血も役に立った。今度、火の民にも謝罪とお詫びに行く」

頭を下げると微笑んだスアウに笑顔を返し、イーシャは転移魔法
の呪を唱えた。

彼女の魔力では、王都まで持たないので事前に打ち合わせた通り、
足元に浮かび上がった魔法陣に、彼の魔力を流し込む。

くにやりと視界が歪み、閃光と共に元に戻った。

一瞬、身体が宙に浮いて落下する。

転移特有の現象を慌てずにやり過ぐすと、見覚えのある儀式室に
到着していた。

足元にある大きな転移魔法陣から数Mメートル離れた所に、十名ほどの人
間が立っているのが目に入った。

ディアマス国王レスクと、その近衛騎士らしい者が五名、他の四
名は服装からして文官のようだ。

感動の再会に胸を熱くしていたのは、その場でただ一人だけだっ
ただろう。

その一名 レスクは、愛娘に向かって顔を輝かせ、駆け寄った。
イーシャを抱擁しようとした国王の両腕は、空を掻き抱く。

さっと、無駄のない動作でレスクを避けたイーシャは、にっこり
と微笑んだ。

「直接お目にかかるのは数日ぶりにございます、陛下」

「ああ。イスフェリア。私のイーシャ。無事のように、本当に良か

った」

「ええ。私、怪我の一つもございません。これも、カタストロフ殿の助力があつてこそです」

じり、とレスクが僅かに彼女から後退した。

つつう、と、その額から汗が流れ落ちて行く。

イーシャの顔には微笑みが浮かんでいるものの、眼差しは冷ややかで、ちつとも笑っていない事に気付いたからだろう。

「陛下。カタストロフ殿の事で、お聞きしたいと考えていた事があります。私、ディアマスは戦時下でも罪なくして投獄はないと学んだのですが、それは誤りであつたのでしょうか？」

「いや、誤りではない……法でそう定められておる」

「では、何故、カタストロフ殿を地下牢に収監した愚か者が出たのですか？」

「一体誰が、投獄する許しを与えたのです？」

イーシャの両手は、いつの間にかレスクの首元に伸び、襟口を捉えて締め上げる準備が整えられていた。

口元には花のような笑み、董色の瞳に凍てつくような冷たさを湛えたままだ。

近衛達は、ちらりと彼女の手のありかを見たものの、止める気はないようで微動だにしない。

文官達は青い顔で父娘のやり取りを、ハラハラしながら見守っている。

ドラクロは退屈そうに、そんな光景を眺めていた。

父娘の会話に興味がなかったので、彼はさっさとその場を辞す事に決めた。

イーシャを待っているのが面倒臭いというより、体調がいささか優れないからだ。

大股で儀式室から脱出し、何処と意識せず、足の向くまま進む。廊下を行き交う者達が硬直し、バタバタと倒れ伏していくのも気にならない。

普段なら怪我の有無くらい確認するが、彼は本格的に気分が悪くなってきた。

他人の様子を気にする気にならず、どうでもいい。

この数日内で、魔素を吸収し過ぎたせいだろうか。

つらつらと、そんな事を考える。

彼はスアウに申し出た通り、レノン滞在中は自己最大広範囲の浄化を毎日行っていた。

大気中のものだけでなく、瘴気転換寸前の海竜王リヴァイアサンの体内から取り出した魔素も含めると、封印状態のこの身には許容限界値オーバーワークに近かったのかもしれない。

『魔王』は魔素や瘴気による魂の侵食が無いとはいえ、滅びの因子を体内に吸収して、何もダメージが無いわけではないのである。

彼も、それは例外ではない。

魔力の方と言うと、まだまだ余裕である。

生命の精霊を呼び寄せたまま力を借り受けるのに、ガンガン魔力を持っていかれたが、消耗は現時点での一割程度にしか過ぎない。

ふと気付くと、彼は中庭に辿りついていた。

清浄な場を、疲弊した身体が求めたようだ。

体内のダメージが、澄んだマナを吸収する事によって和らいでいく。

ウトウトと、心地よさに立ったまま眠りそうになり、彼は足早に順路を逸それた。

ベンチを探したが、見つからない。

眠気が限界に来ていた彼は、ふかふかした草の絨毯の上に身を横たわらせた。

あつという間に意識が落ちる。

吸い込まれるようにして入り込んだ眠りの中、彼は聴き覚えのある声を聞いた。

レスクを締め上げた結果、カタストロフを投獄した者の名前を聞く事に成功した。

レスクの所に暴挙が伝わった時には、すでにカタストロフは地下牢から姿を消しており。

すでに、愚か者の処分は終わっているのだという。

会議を意図的に邪魔していたようなフシのある人間は、三日前から出て来なくなったそうだ。

タチの悪い食中毒にかかって、会議に出るところではないらしい。

「アルフがニコニコしておったから、あやつの仕事だろう」

「……そうですか」

王太子は邪魔だと判断したら、それくらい平気でやりかねない人間である。

いたってイーシャも同感で、反論する気にもならなかったので、他の情報を求める事にした。

「それで？ 闇の民の対策は進んでいるのでしょうか？」

「あちらが離反宣告以来、動きが無いからな。軍編成を進めてはい
るが、具体的な対策にはまだ至ってない」

「そうですね……将は何名ほどを？」

イーシャは自分が候補に入っている事を前提に、尋ねた。
レスクには伝えていないものの、カタストロフはイーシャの味方である。

任命されたら、カタストロフを連れていく気満々だ。

彼を崇拜する闇の民達にとっては、一番戦闘するのに気の進まない相手となるだろう。

「今の地点では二名が決定しておる。総大将は私、副将にラムザアースを連れていく予定だ」

「!? 今回もラムザアース殿下ですか? あの方、グラウニアに定期駐屯中ではありませんか。他の師団を派遣して、呼び戻されたので?」

ディアマスの將軍は己の軍団を率い、三ヶ月ごと交代で、最も激戦区であったグラウニアに駐屯する。

基本、騎士団の番号で回ってくるため、次は彼女が向かう予定だった。

期間も交代には、まだ一月以上あつたはずだ。

「ああ。まだ到着しておらんが、軍団ごと呼び戻した。

やる気のある時なら、アルフが一番戦略にしても戦術にしても謀略にしても効果を上げてくれるが、いつもそうと限らん。私に何かあつた時、次王はあやつだしな。だからどんな相手でも、アルフの次に戦略が得意で、総合能力的にも安定感があるラムザアースが一番私の副将に向いておるし、今回も任命する」

「そうですか……」

レスクは、ラムザアースを連れて戦場に出る事が多かった。

能力的な相性の問題であつて、彼が義理の息子である従弟をうつんじているからではない。

むしろ、レスクは実の息子より養子であるラムザアースの方を気に入っている。

おそらく、レスクはアルフェルクが死んでも泣かないが、ラムザアースを失えば泣くだろう。

レスクの騎士となったイーシャは、主に命じられて戦場に出る事はあっても、主と共に戦場に出た事は数回しかなかった。

將軍に任命されてしまったので、一騎士として着いていけないのである。

レスクはイーシャと同じく前線向きの指揮官であるので、補佐の役目を果たすとなると相性が良くないのだ。

「では、現時点では闇の民との決定的な亀裂はないのですかね？」

レスクは大きく頷いた。

良かった。素直にそう思える。

昔からどちらかと言うと敵対的な相手である。

すぐに何かを仕掛けてくるかと考えていたが、現状は慎重路線で行く気らしい。

「一つ、闇の民に対し、行ってみたい事があります。ラムザアース殿下にもご相談の元に行いますので、お許し願えますか？」

「良かるう……無事であったとはいえ、慣れぬ環境で数日過ごしたのだ。疲れていよう。イスフェリア、今日はゆるりと休め」
「御意に」

イーシャは一礼すると、儀式室を出た。

戻って来てすぐにカラストロフが出て行き、話の途中でドラクロが王都入りしていたらしきドラゴニア数人に連れて行かれたので、彼女が他に気にすべき相手はない。

レスクに休めと言われたものの、今後の相談のためにカタストロフを訪ねたが、客間に彼の姿はなかった。

客間に、数日前の戦闘の形跡は一切残っていない。居間部分の家具と絨毯が違う物に替えられているぐらいか。

特に今はする事が無かったので、イーシャは散歩ながらカタストロフを探した。

数十分ほどして、廊下に倒れている面々を発見する。

全員に怪我はない。

一人を起こして尋ねてみると、案の定カタストロフを目撃したせいだったらしい。

彼に素顔をさらしたまま歩かれると問題になるのは、本人もすっかり自覚があつただろうに、どうかしたのだろうか。

同じような事が数度続き、イーシャはいつの間にか、王城の中庭に辿りついていた。

そういえば前に中庭を誉めていたな。

イーシャは思い出し、そのまま順路に沿って探索を続けた。

カタストロフを見つけられぬまま、籠城戦になつたとしても自給自足可能なように食用可能な果実が生るものを中心メインに作られた中庭を、あつさり一周し終わる。

イーシャは首を傾げた。

いない。図書館にでも行っているのだろうか？

とりあえず、彼女はもう一周回る事にした。

今度は順路に拘こたわらず、木の陰なども慎重に探す。

ややあつて、イーシャは探し人を発見した。

カタストロフは、ちょうど低い木の陰に隠れるような位置で寝転

がっている。

幸いな事に、イーシャに背を向ける形で寝ていた。

素顔でいると聞いた時に準備したヴェールを片手に、彼女は歩み寄り、声をかけた。

「ちよつと、クー。こんなところで寝たら駄目よ」

反応はない。

しかし、イーシャは異変に気付いた。

呼吸音が一定ではない。

微かに呻き声うめが聞こえる　　魔まされているのか。

随分と苦しそうな様子に、イーシャはしばらく迷ったが、彼の肩に手を伸ばした。

第二十六話 記憶の覚醒（前書き）

今回、短いです。

伏線を幾つか回収。

作者はビビリです。

昨日のアクセス人数がかつてないほど多く、とっても嬉しいですが反面びびりました。

新たにお気に入り登録して下さった方々、拙作を読んで下さった皆様、ありがとうございます。

第二十六話 記憶の覚醒

カラストロフは戻りつつあるものの、記憶喪失だ。

しかも、本人は詳しい事を口に出さないが、あまり過去に良い記憶がないらしい。

光の民アルヴについて話していた時、生まれずにすんだ　　そう
発言した事からも、辛い過去が窺い知れる。

もしも、思い出したくなかったような記憶を、悪夢として観てしまっているのなら。

これからも一緒に居てくれる。守ってくれると約束してくれたカラストロフを苦しめるのは、イーシャも本意ではない。

失われた辛い過去の光景を見るより、現実でイーシャと闇の民対策をする方が、彼としても精神的に楽であろう。

そう考え、彼女はカラストロフを起こす事に決めた。

「クー、起きなさい！」

声をかけながら、ヴェールをカラストロフの目元に置く。

いきなり目を覚まされても、その美貌を直視して硬直しないようにするためだ。

イーシャはカラストロフの肩に両手を置き、大きく揺さぶった。

「クー!!!　クーってば!!!　起きてー!!!」

がば。

予測に反し、勢い良くカラストロフが起き上がり、ヒラヒラとヴェールが彼の膝に落ちる。

はあはあと、乱れた呼吸を繰り返す彼は額に手をやっており、そ

の大きな手で顔が半ば以上隠れ、イーシャにとってはひと安心だった。

よほど嫌な夢を見ていたのだろう。

カラストロフは汗だくで、微かに震えていた。

「……クー？ 大丈夫？」

イーシャはおそろおそろ声をかけ、彼の様子を窺った。起こしてよかったのだろうか。

いつも平靜なカラストロフが、これほどまでに動揺をあらわにしている。

イーシャの呼びかけに、びくっ！ と、弾かれたように大きく肩を揺らし、その手が彼の額から離れた。

カラストロフの驚いた顔が、真っ直ぐイーシャを見ている。しまった。

そう考えると同時に、イーシャはうつとりとその美しい顔に見惚れた。

「……イーシャ。ああ、ここはダイヤモンドか」

カラストロフの声は常よりもかすれて低く、弱々しい。

彼に声をかけられたせいか、イーシャの思考は僅かに動き出した。脳の大半は、じっくりとその美を愛めでることに夢中なので、普段よりも動きが鈍い。

カラストロフは、明らかに様子がおかしかった。

その金色の双眸は安堵に光り、見る間に潤んで、ポロポロと大粒の涙がこぼれて落ちる。

どんな悪夢を見ていたのか。

カタストロフに対して、酷い暴力から助けられたいいけない子供
を見ているような印象を受けるなど、イーシャにとって初めての事
だ。

元々肌が黒いから分かりにくいのが、血の気が引いているのだろう。
存在を確かめるようにイーシャの手を、ぎゅっと握りしめたカタ
ストロフの両手はじつとりと汗ばみ、ひんやりと冷たい。

そして、やはり震えている。
怯えている、といってもいい。

では今カタストロフが、こうして彼女の手を握りしめている行為
は、^{すが}継りつかれていると言った方が正しいのか。

その事実には、イーシャは驚愕した。

無駄に偉そうな物腰が常態の、^{デフォルト}実際古代竜と一対一でも勝てそう
な強者の風格を備えていたカタストロフが、^{ひと}他人にそうと悟られる
ほど怯えるなんて。

「……聞いてくれ。イーシャ。悪い知らせだ」

その声には悲痛の色が混じり、彼の頬を流れる涙がより深刻さを
増幅させる。

ボロ泣き状態であるというのに、その美しさがちっとも崩れない
ところも凄い。

「……役割を思い出した。決して忘れるな。そう言われて、決して
忘れないと言いつ返した事だったのに……久遠くおんの眠りの中に、置き忘
れていた」

涙に濡れたカタストロフの瞳は、呼吸を奪うほどに美しい。

その瞳に浮かんだのが、安堵のままなら　恐怖で無かったのな
ら、どれほど良かっただろう。

「邪竜の頂点にはバケモノがいる……光の民は、そのバケモノを決して完全消滅させる事が出来ず、復活するたびに討伐して封じるしかなかった。

全力で封じても数百年ごとに破られて、また暴れ出して世界を壊すのを止めて封印　これを繰り返す事が出来なくなりそうだったから、あいつ等は再び世界に解き放たれる事がないよう、封印したバケモノをゆっくりと浄化し、完全に消失させるための生きた楔を作ったんだ。

その楔で贅たるのは、俺自身。

あの封印は、俺の力を増幅して直接バケモノに叩きこみ、現世に実体化する事無きよう閉じ込めるための獄であり棺だった」

神と謳われ、崇拜され神格化された光の民が、全力を尽くしても消滅出来ずに封じるに甘んじざるおえなかった、世界の滅びの因子。カタストロフは語る。

長きに渡る光の民とアルウエスの戦いの余波により、世界の強度は徐々に落ちて行った。

また、倒しても倒しても数百年でまた復活を遂げ、世界を壊し始めるアルウエスとの戦いに厭いでいた事もあって、それは色々な方法を試していったのだという。

思考錯誤のうちに、光の民が目をつけたのは闇の民の体質だった。詐欺に近い形で、当時の『魔を制す王の器』を連れ出す事に成功。アルウエスとの戦いに同行させた。

『魔王』は、アルウエスの放出する瘴気に当たって気絶。

三日三晩、生死を彷徨ったものの生き延びた。

狂うことなく、正気のまま目覚め、光の民を驚愕させたのである。その上、『魔王』は数分しか意識が持たなかったが、その時の討

伐が常とは比べようがないほど被害が少なく、楽に済んだ。

光の民はそのまま『魔王』を帰すことなく、監禁した。

討伐に参加していた一人が、光の民の肉体に『魔王』の体質を併せ持った子が生まれれば、アルウエスの封印に使えるのではないかと意見したのだ。

試しに子供を作ってみよう。

そんな軽い感じで監禁が決定し、『魔王』は目的の子供が生まれるまで強制的に孕まされ続けた。

民族が違うのだ。

そう簡単に、双方良いとこどりの子供など生まれてこない。

殆どの子は育ちきる前に流れ、無事生まれてもどちらかに偏って中途半端で脆く数年で死んでいった。

母体となった『魔王』は肉体的には守られていたが、精神を病み、死ぬ事も許されず、カタストロフが生まれた頃には発狂していたという。

カタストロフが物ごころついた時には、目的の子が生まれたせいか緩んでいた監視の目を盗み、『魔王』は自害して果てていたそうだ。

一人の『魔王』の人生を滅茶苦茶めちゃくちやにしてまでして、ようやくと生まれた目的に叶う子を、光の民達は肉体的にも精神的にも鍛え続けた。

息をしていれば問題ない。

そういった、乱暴極まりない扱いで。

やがて、復活してきたアルウエスとの戦いにて、強制的に参加させたカタストロフの浄化威力と肉体強度を確認。

カタストロフは光の民の思惑通り、とても役に立った。

やはり瘴気に当たって倒れたものの、半日で元気に目覚めた。

これなら大丈夫だ。

そう判断を下し、アルウエスが再び蘇ってくる前にと、完全消滅のための封印を用意。

何も知らされてなかったカタストロフごと封じて、お終いにした。

「そのバケモノの名前は、邪竜王アルウエス。アース神教の、滅びを司る終末の神の名と同じ」

こわい。コワイ。怖い。

カタストロフの瞳は、彼の感情を明確に物語ってくれる。

「呪具を介して、俺の力はアルウエスの浄化と封印に常に持つていかれているから、猶予はある。アルヴは、世界の害に対しては慎重に慎重を重ねる。

少なくとも、ジオフィードは俺の封印が解ける可能性も、考慮していた。解けてしまった時のために、再封印の処置も出来るよう、準備を整えている途中だと言っていたな」

《だあいすきよ。可愛いカーフィ。誰よりも愛しているわ。自分よりも世界よりも愛しているから。私は貴方を優先させる。私のする事、いつか赦してね》

不意に、いつか夢の中で聞いたエーリスの言葉が、イーシャの脳裏に響いた。

エーリスは何故カタストロフを優先させた結果、決して解いてはいけない封印を破壊する処置を取ったのだろうか？

従来 of 封印のままでは、カタストロフに対して何か悪影響があったのかもしれない。

それならそうで、もっと再封印の処置に関するヒントを沢山残してくれれば。

イーシャは、見た目が自分に似ているらしいエーリスに対し、役立たず、と心の中で罵った。

彼女の可愛い愛する人は、カーファイ迫りくる避けきれぬ脅威に怯えきって、最も脆弱な夢の民であるイーシャの前で泣いているのだ。

愚かさや嫉妬を口にするより先に、重要なヒントを言ってくれたらよかったのに。

「……光の民は、もうこの世界にいない。このまま、アルウェスを放置するわけにはいかない。

だからといって、俺だけでは命懸けで全力を賭しても倒すなど不可能だ。ジオフィードが言っていた再封印処理を探すしかない……イーシャ。頼む。お願いだ、手伝ってくれ」

第二十六話 記憶の覚醒（後書き）

ストックが溜まらない……（TWT）

そろそろ人物紹介を挟むべき頃合いですが、新キャラまだ出てないし。

どうしようかと思っています。

第二十七話 準備（前書き）

総アクセス数が5000を突破！！

なんか、昨日からものすごい勢いです。

お気に入り登録して下さった方、

読んで下さった全ての皆様のおかげです。

本当にありがとうございます！

今回、シリアスではないです。

第二十七話 準備

大丈夫、も。

私に任せておいて、も。

イーシャは、言っただけであらなかつた。

彼女に出来たのは、ただ頷いて、恐怖に震えるカタストロフの手を握り返した事だけ。

その程度の、慰めにすらならない行動だったが、カタストロフはしばらくすると落ち着いた。

最もアルウエスの脅威を実感している張本人は、自力で立ち直つたのだ。

イーシャが生涯を通じて、これほどまでに弱つたカタストロフを見たのは、この時ただ一度だけ。

はつきりと彼に頼られたと感じたのも、この時だけだった。

とりあえず、落ち着いてヴェールで豪快に顔を拭つたカタストロフに対して、イーシャは言いそびれていたエーリスについての夢の話をした。

エーリスはカタストロフに言うなと言っていたが、彼女が気付かなかつた、ヒントになるような事があつたらと思つたのだ。

カタストロフは、苦虫を噛み潰したかのような苦り切つた表情を浮かべた。

「あの女、何てことやってくれてんだ……！！」

がっくりと地面に両手をつき、頂うなだ垂れたカタストロフの声は絶望

感でいっぱいだった。

「……確かに、幾つか仕掛けとくとか言ってたな……でも何でまたわざわざ、呪具が一つか二つ破損してからなんだ？ 何か再封印に
関係があるのか？」

ボソボソと呟いて、項垂れ屈みこむカタストロフの後ろ姿は気の
せいか、煤すすけて見える。

とりあえず、美貌の直視から免れ、ようやくマトモに思考が出来る
ようになったイーシャは、今後すべき事を脳裏に思い浮かべた。

一つ目。

宮廷魔導師を借り受けて、古代書の調査。

イーシャのように、魔導師でもないのに古語が読める人材は少ない。
い。

どれだけ時間が残されているか分からないから、レスクに申請して
借りられるだけ借り受けなくてはならないだろう。

数は力だ。

古代書の調査なんて面倒なものは、人海戦術に限る。

ティアマト

邪竜王アルウエスについて、少しでも記述のある古代書を探すところ
から始めるのだ。

先は長いだろう。

イーシャは実のところ、何かの拍子にアルウエスについての記述
を読んだ覚えがあるのだが、どんな内容の本だったかは頭に残って
いない。

今まで読んだ古代書の中で、名前を見た覚えがある程度だ。

一度読んだ本の内容を忘れないなんて、アルフェルクのような超
人的特技は持ち合わせていない。

二つ目。

盟約を交わしている六の民族達への協力要請。

少なくとも、千の時を生きる火の民、森の民、闇の民には、カタストロフについての記述がしつかりと残されていたのである。

アルウエスについて書かれた文献等も残っている可能際は十分あった。

三つ目。

闇の民離反の早期解決。

これは二つ目と理由が被るが、貴重な文献ぶんげんが残っている可能性が十分あるので、是非とも協力してもらいたいのである。

国内の情勢が落ち着いていた方が、調査も容易くなる事でもあるし。

レスクに聞いたところ、ラムザアースの王城への帰還予定は今日の夜から明日の昼。

さつさとカタをつけるためにも、イーシャが思いついた対策を実行させてもらわなくては。

今のところ、すべき事はこの三つだ。

イーシャはちらり、とカタストロフへ目を向けた。

まだ何やらぶつぶつ言っている。

彼も、エーリスの暴挙に色々考える事があるのだろう。

「クー。私、色々手配するべき事が出来たから、行くわね。そのヴェールあげるから、部屋に戻る時はちゃんと顔を隠してちょうだい。怪我人が出ると困るわ」

「……ああ。わかった」

イーシャは答えが帰ってきた事に満足し、立ち上がると足早に歩

き出した。

カタストロフはまだ考えているのか、中庭を去るところか立ち上がる気配すらない。

素顔でフラフラ出歩かないのであれば、彼は別段に問題を起こすような人物ではないので、放置しても特に状況は変わらない。

午後一番に謁見申請をして、イーシャは久しぶりに自室へと足を踏み入れた。

レノンでは着替えも用意され、カタストロフが来てからは風呂も入れるようになったから、身体は汚れていない。

問題は、今も着ている礼服だ。

素材に絹糸が使われており、ドラクロとスアウの戦闘に巻き込まれたため、かなりくたびれてしまっている。

これはもう、作り直した方が良い。

当日、背中の中ほどまである銀髪を纏めていた髪止めは行末不明。

きっと、イーシャを運ぶ時に何処かへ落としたのだろう。

レノンで気付いた時には、もう無かった。

風呂解禁になった際、かろうじてピンで髪は纏まっていたものの、頭がくしゃくしゃになったままなのが嫌だったので、それからずっと下ろしている。

先ほどとは違い、午後の謁見は公式の場であるのだ。

服装は普段着用している軍服で良いにしろ、それまでに綺麗に髪を纏めなくては。

そんな事を考えながら、イーシャは主寝室へと足を踏み入れた。

その瞬間。

「がばあつ！ と、具現化していたルビエラに正面から思いっきり抱きつかれた。」

「実体化している精霊には体重が存在するため、勢いがあれば体当たりと同じ事である。」

「予測外の事態にイーシャはよろめいたが、どうにか両足に力を入れて踏ん張り、後ろへ倒れ込むのを防いだ。」

「イーシャちゃん、おつかえり〜。待つてたよ〜」

「……ただいま、ルビエラ」

「そういえば宝物庫で封印を解いてから、ここまで『紅の刃』を所持していなかった事は初めてだ。」

「その結果、初めての熱烈帰宅歓迎に繋がったのだろう。」

「ルビエラは柘榴石色の瞳をキラキラ輝かせ、首に両手を回して抱きついたままイーシャを見つめている。」

「ねえねえ〜。イーシャちゃん、アクエリオスは結局いつ来るのぉ〜?」

「? アクエリオス?」

「イーシャは首を傾げた。」

「無事だったかと一言も聞いて来ないのは、まあいい。」

「ルビエラは契約を交わした関係上、常に同調し、イーシャの視覚と聴覚から得られる情報を、そのまま己のものとしているのだ。」

「彼女はイーシャがどんな状況にあったかなど、リアルタイム現実時間で知っている。」

「本来、イーシャの五感全てをルビエラは同調可能なのだが、味覚

や痛覚や触覚は精霊である彼女が必要としていないので、この二つのみである。

イーシャを介し、世界を鑑賞するのなら二つで充分らしい。

「だって、スアウちゃんの代わりにニヒダイヤモンドアマスへ来るんでしょ？
アクエリオス。久しぶりに会えるんだもの。凄く楽しみ」

スアウの代わり「水の王が封じられた大鉾。
アクエリオス「水の王の名。」

そんな公式が、イーシャの脳裏に浮かんだ。
水の王の名前など古代書にも載ってない事から、すぐに思いつかなかったが、火の王たるルビエラには自明の事だったのだろう。
彼女の反属性で対に当たるのだ。知らない方がおかしい。

「数日内にはスアウ様と共に来ると思うけど……ルビエラ。お願いだから、発見早々戦いを挑んだりしないで頂戴ね」

「？ アクエリオスの方から喧嘩吹っ掛けてくる事はあるかもしれないけど、私はそんな事しないよ？」

火の性質は烈猛。れつもう

水の性質は変化の受容。

反属性の二柱が出会って、喧嘩を吹っ掛けるとしたら火の王からだと、イーシャでなくとも普通はそう考えるだろう。

ガラガラと音を立てて、イーシャが想像していた穏和な水の王の姿が崩れ落ちる。

「そ、そうなんだ……水の王の方が好戦的なの」

「ん……それはちょっと違うかしら。私はアクエリオスが大好

きだから、アクエリオスは私が大嫌いなのだ。ごく普通の時は穏やかなのよ。

私はくつつきたい、アクエリオスは傍に寄られるのも嫌。だから近寄るな、って感じで攻撃仕掛けてくる事ならあるって事よ。」

一般に考えられる反属性として、正しい対応をしているのは水の王の方だろう。

ルビエラも間違っではない。

反発するが故に惹かれるのも、反属性の性だ。

大きな溜め息を吐いて、ルビエラを己の身体から引っぺがすと、イーシャは来ていた礼服と薄汚れたブーツを脱いだ。

下着姿で洗濯行き用の籐で編まれた大きな籠かごに放り込み、備え付けの衣装庫クローゼットを開ける。

衣装庫内には、ずらりとダイヤモンド近衛騎士専用の武官服一式とブーツが並ぶ。

イーシャは普段こちらを常用しているので、ドレスの類は専用の衣装部屋に置いてあるのだ。

ダイヤモンド王家の色である赤と紫を基調とした近衛騎士専用の武官服は、割と着る者を選ぶ。

イーシャは髪も肌も色素が薄いので、ことのほか良く似合っていた。

王家の人間が似合わないとなると結構洒落シヤレにならない事体なので、イーシャがしっかり似合う事に大勢の者がホツとしている。

レスクの近衛騎士であると同時に、イーシャは第三騎士団の將軍であるため、そちらの武官服一式も三着ほど隅っこの方にかかっているが、王城に居る際は殆ど着用しない。

その代わりに、第三騎士団將軍を示す金細工きじょうの徽章を右胸の上に

つけるのだ。

皺一つない、部屋付き女官の匠の技が光る武官服を取りだし、徽章と剣帯と皮のベルトを天蓋付き寝台トットの傍にある小さな棚の上に置く。

イーシャが寝台トットに座って、下着の上に白いシャツを羽織おほったその時、事件は起こった。

「イスフェリア。お帰り〜。ついでにラズ連れてきたよ」

「ちょ、義兄上。無断で入るのは」

「ばあん！ と、乱暴に主寝室の扉が開け放たれ、反射的に顔を上げる。

ほぼ同時に響いた、聞き覚えのある二つの男性の声に、イーシャは硬直した。

第二十七話 準備（後書き）

次回、先制はイーシャのターン。

紅の刃で斬る

なぐる

ルビエラに助力を頼む（火魔法）

ひめいをあげる

の、どれかで始まります（W

第二十八話 仲良しきょうだい（前書き）

今回予想外に目立ってる人の作者イメージは外見まるで違うけど、活動的な執着心ありのシュナイゼル（byコードギアス）です。

第二十八話 仲良しきょうだい

硬直したのはイーシャだけではなかった。
無断で乙女の主寝室に乱入してきた、二人組の片割れも同様である。

全く動揺していない方は、柔らかい赤毛に董色の垂れ目をした長身の美青年　アルフェルクであった。

その異母兄は、硬直したイーシャを、じーっと眺めている。

白いシャツを羽織はつただけで、胸当ぶらて、シヨーツ、ガーターベルトに靴下なほば下着姿の異母妹に対し、実に遠慮のない観察の眼差しだ。

問題は、動揺して硬直しているもう片方。

陽の光に透けてキラキラ輝く金髪。

天然の紫水晶アメジストを彷彿とさせる、角度によっては色が変化してみえる瞳の切れ長の目。

繊細に整った顔立ちに、薄い象牙色の滑らかな肌。

鍛えられ引き締まった長身瘦躯を、白と藍を基調とした飾り気の少ない武官服に包んだ美青年だ。

見た目だけなら、夢見る乙女が想像に描く正統派王子様然とした彼は　王城に居ないはずの義兄ラムザースであった。

おそらく彼は、予想より早く帰還出来たので、まずアルフェルクへ挨拶に行ったのだらう。

レスクに謁見要請しても、すぐ呼び出されるとは限らないので、時間潰しも兼ねてだ。

イーシャの帰還を伝えられ、レスクとの父娘再会おやこが終了したのを

見計らって彼女の顔を見に来た王太子に引つ張られる形で、イーシヤの自室へ先触れも無しに突撃をかますハメになった。

本当に相変わらず、巻き込まれ体質だ。

着替え中の義妹兼内密の婚約者と遭遇そうくうなんて、何処の恋愛活劇ラブコメだろう。

そこまで判断し、イーシヤは立ち上がって近くに置いてあった『紅の刃』を掴んだ。

「二人とも、さっさと出てって!!」

イーシヤはきりきりと柳眉を逆立て、眼光鋭く睨みつけながら、抜刀した。

彼女の怒りに反応し、大剣の刀身に逆巻く炎が駆け上がる。

「すまない。イーシヤ」

ラムザアースは謝って出て行ったが、アルフェルクはニコニコしたまま無言で出て行く。

イーシヤは炎を消して納刀すると、楽しそうに状況をただ眺めていたルビエラに顔を向けた。

「ルビエラ。ちょっとお兄様に　ああ、アルフお兄様の方ね

火、着けてきて。すぐ消えるので良いから」

「は〜い」

ルビエラは楽しそうな顔のまま、クスクス笑い声を上げて寝室から出て行った。

パタン。と、小さな音を立てて扉が閉まる。

イーシャは寢室の扉に鍵をかけると、着替えを再開した。

「お兄様は相変わらず困った方ね。ラズも止めればよかったのに……」

ラムザアースはどういう訳か、昔からアルフェルクに逆らわない。これはディアマス七不思議の一つである。

彼は基本的に、何に対しても執着が薄い。

必要がある、必要があるかもしれない　という考えで、様々な分野の知識を集めて覚えはするが、興味があるのとは違うので、額面通りに受け取らないし拘らない。

それが柔軟な発想に繋がっている。

自分自身に対しても関心が薄く、軍に入るまでは傍仕えが用意していた物をなんら注文付けずに着て、伸ばすと邪魔だという理由で短髪にしていたぐらいだ。

彼が軍に入ってから、イーシャは武官服以外着てるのを見た覚えがない。

そんな彼だからこそ、王族随一の視野の広さを持つ。

万物に関心が薄いが故に、ほぼどんな時も平静であるため、重要な判断を誤る事が無いのだ。

歴戦の知将の様々な知略の源は、彼の無関心から成り立っている。関心が薄いと言えど、己の身分・地位・権力による責任感・義務感・自覚は持っており、彼は非常に有能であった。

多くの人々にとって残念な事は、彼の数少ない関心を寄せる人物の筆頭がアルフェルクだという点であろう。

二人は仲の良い兄弟　というより、主人と忠実な下僕しもべに近い。これが今まで、ラムザアースが王位継承権二位に甘んじている理

由だ。

当人にその気がないどころではない。

無理に対抗馬としてもつていくと自殺するか、順位を上げようと目論もくろんだ関係者全員を速やかに処分して回りかねないのだ。

人々は噂する。

王太子はラムザアースに催眠術か、服従の呪いか、薬物で精神操作でもしたのではないのか　と。

ただの噂と笑い飛ばせないのは、アルフェルクがやろうと思えば実行に移す人物で、精神操作が可能なほどに天才だからだ。

「んん。よし、あとは髪だけね」

イーシャは着替えも身支度も、身分と不釣り合いだが自分一人で作れる。

これはセリシエレの教育の成果だ。

ドレスの際はさすがに手伝ってもらっているが、基本一人で簡単な身の回りの事は出来るよう、きちんと教育された。

軍に入って戦場に出る王位継承権保持者達も同様で、この数年毎日側仕えの手を借りて身支度しているのは、王太子妃のみである。

慣れた手つきで髪を纏め、ピンと髪留めで高い位置に固定すると、イーシャは立ち上がった。

睨むように寝室の扉を見てから、足早に歩み寄り、鍵を開けて外に出る。

主寝室は居間と繋がっており、すぐさま他人の家で寛くわんぐ二人の姿が、イーシャの視界に飛び込んできた。

来る途中に手配していたのだろう。

王子二人は二脚の長椅子ソファにそれぞれ座り、実に優雅にお茶をして

いた。

ルビエラはふわふわ浮きあがって、二人の様子を眺めている。

アルフェルクの座る長椅子ソファの後ろに、イーシャ付きの女官である獣の民バーンのシイルが直立不動で控えていた。

着任時に触らせてもらったモフモフした長い尻尾が、ぶわりと膨らんで先がクルンと丸まり、犬耳がピンと立っている。

可哀想に。緊張しているらしい。

シイルは有能かつ度胸があるので、最近はカタストロフの世話役の一人に任命していたが、ここには王太子と第二王子と、ついでに火の王まで揃っているのだ。

この面子相手に緊張するなど言うのは、どだい無理な話である。

「シイル、下がっていいわ」

「承知いたしました、イスフェリア殿下。それでは王太子殿下、ラムザアース殿下。御前、失礼いたします」

シイルは一礼し、優美かつ足早に去っていった。

イーシャはそれを確認すると、二人に近づいた。

長椅子ソファは居間に二脚しかないので、一瞬迷ったが、義兄の少し離れた隣に座る。

彼女からしてみると、話があるのはラムザアースなので、彼と向き合った方が遣りやすい。だが、少しの空間は取れるとはいえアルフェルクの隣に座るなど御免であった。

イーシャが座るのを見て、何を考えたのかルビエラが長兄の隣に座る。

「お帰りなさい、ラズ。ただいま帰還しました、アルフお兄様。そ

れで？ 一体、何をしにいらしたの？」

イーシャは前者には笑顔を、後者には冷え切った眼差しを向けた。分かりやすい差別に、アルフェルクはフルフルと首を振り、肩をすくめて見せる。

「悲しいね、イーシャ。お前が無事なのは聞いていたけど、可愛い妹の様子を案じて此処こゝまで足を運んできたこの兄を、押しかけた夕イミングが悪かったとはいえ、邪険にするなんて……

ラスだっけしっかり見てたのに、僕だけ燃やすなんて酷い！！」

ルビエラはちゃんと頼みを聞いてくれたらしい。

よく見ると、アルフェルクの上着が一部焦げている。

「ラスは謝ってくれました。それに、お兄様には前科があるの、お忘れになったのですか？」

「んー？ ああ、そういうえばそうだったね」

アルフェルクは真顔になり、ややあつて頷いた。

長兄は気が向けば、イーシャの都合などお構いなしにやってくる。イーシャが居るかどうかは、先に人をやって確認させているのか、彼女の知る限りすれ違った事はない。

前科 三年前、背丈が随分伸びたので新調するため、下着姿で採寸している最中に、彼は堂々部屋に入って来た。

「身長はあの時から止まったようだけど、随分胸と腰回り成長したんだね。イーシャ。胸ウエスト周りは絞れているし、実に良い感じに育っている」

イーシャは、ひきつった顔をルビエラに向けた。

「ルビエラ、お兄様をアフロにしてやって」

「えー?! この綺麗な赤い髪、燃やしちゃうの?」

「あー……じゃ、他の部分で良いから」

「はい」

ぼっ!!

火柱が一瞬、アルフェルクを中心に上がって消える。

王太子は髪以外、綺麗に軽く焦げて煤けていた。

さすが火の王。長椅子ソファに一切被害はない。

「……ごほっ!! けほん! なんで止めないんだい、ラズ」

「明らかに義兄上が悪いですから」

のんびりと、ラムザアースは優雅にお茶を啜った。

むっとした様子で、アルフェルクはシイルが用意していったおし

ぼりで、煤けた顔を拭く。

「……まあいい、イーシャ。ラズになんか話したい事があつたんだらう?」

お前達の婚約解消は生命の危険があるから薦めないし、婚前交渉も避けさせたいから同席するけど、僕は居ないものとして遠慮なく話していいからね」

がふっ!

ラムザアースが、長兄のあまりの言葉にむせた。

飲んでた茶が気管に入ったのだらう、苦しそくにむせ続けるラムザアースの広い背中をイーシャは擦こすってやった。

「アルフお兄様、いつから知ってました？」

婚約は内密だった。

内密も何も、当事者二人しか知らない事だ。

恐ろしい事に、アルフェルクは以前から知っていたとしても違和感がまるで無い。

「お前達が相手に対して呼び方を変えたからね。お前が將軍になる前は、ラズお義兄様、イスフェリアだったのに。別に気付かれても構わないからそうしたんだらう？」

お前達の立場だったなら、僕だって婚約するさ。王太子が無事国王になったとしても、お前達が王位継承権持ちだという立場は変わらない。お互いにお互いの身を保証するなら、それが一番安全だ。生まれた子を僕の子供と結婚させると言えば、ひとまず周りも落ち着く」

その鋭さを、政務の方に全て回してほしいものだ。

王太子として政務を片付けるようになった頃からそうしていれば、水の民ニンフも闇の民サレも、離反する時期を遅らせるか、取り止めたかもしれない。

「……王太子殿下。陛下には申し上げましたが、今回の水の民の宣戦布告は組織だった密漁者が海竜王を重体リヴァイアサンに追い詰めた事が原因です。大変遺憾ながら巡回船所属だけでなく、最悪の場合海軍そのものに協力者がいると考えられます。今回の事が二度と起こらぬよう、家族の友人に至るまで徹底した捜査が必要でしょう」

イーシャはラムザアースの背中から手を離し、姿勢を正して真っ直ぐアルフェルクを見た。

異母兄としてでなく、王太子に対する話だからだ。

「私の権限では、残念ながら捜査の手を回す事が出来ません。それ故、お願い申しあげます」
「いや」

アルフェルクは真面目な様子の異母妹に、煤けた手を拭きながら、あっさり了承した。

「業突く張りで無神経なそいつらのせいで、可愛いお前が本来、遭わなくてもよかったメにあつた事だしね。念入りに掃除してあげよう」

柔らかに微笑むアルフェルクの双眸は、
四年前と同じように、深淵のような昏い光を湛えていた。

第二十八話までの登場人物紹介（軽いネタバレ有り）（前書き）

ネタバレあるといっても、少しです。

第二十八話までの登場人物紹介（軽いネタバレ有り）

主要登場人物（18話～28話で名前が出てきた者に限る）

イーシャ（16）

（イスフェリア「キユオ」イムハール「ディアマス」）

主人公。

基本真面目で、王家の教育により冷静。

理的で、献身的。

集中すると周りが見えなく事もしばしば。

ディアマス王国王位継承権第3位。

最近攫われたり、心強すぎる味方が出来たり、世界の命運を握ったりしかけたり、兄二人に着替え中、部屋に踏みこまれたりと忙しい。

火の王たるルビエラと契約を交わしているので、一応ジョブ的には將軍兼魔劍使い兼精靈使い^{エレメンタリー}。

戦略兵器『紅の刃』を所持しているが、武器として使う事が多く微妙に宝の持ち腐れ状態。

王女だが婚外子であるので、将来臣下としても困らぬよう身の回りの事や、軽い家事ならこなせるように亡き母親から教育を受けた。実は三才になるまで乳母に育てられたため、それまで父レスクの近衛騎士であった母セリシエレにはあつた事が無かつたりする。

内密に婚約している義兄とも、十歳になるまで後宮区間で暮らしていたため数回しか会つた事が無かつた。そのため、婚約に抵抗感がない。

二人の間にあるのは親愛です。

カタストロフ(???)

光の民アルヴと闇の民サレの『魔王』との間に生まれた、双方良いとことりの御仁。

超絶美形。

そのかわり、生まれ落ちたその時から生贄になる事が決定しており、肉体と精神を鍛えるという名目で酷い人生を送らされていた。父は育児放棄、母は自殺、異母姉はヤンデレと家族にも恵まれてなかつたりする。

封印から解放され、イーシャに後見を受けて王城で暮らしていたが、恩を返すために彼女の味方をする事に嫌々決めた。

母譲りの『魔を制す王たる器』であるため、精霊には非常に愛されている。

『氷魔王』という称号持ちの魔力タンク。

現在、邪竜王アルウエスに対する世界の楔であることを思い出し、異母姉の仕掛けで解放されたと知り、非常にブルーな気持ちになっている。

レスク(48)

ディアマス王家第16代当主。

イーシャの実父。しつくりくるものがないので、作者はこの人のフルネームを考えるのを諦めました。

統一王という大層な呼び名を持つ割に、出番が少ない。

水の民ニンフとの戦争にならずに済んだ事はホツとしているものの、まだ闇の民サレの方は動きが無いので緊張状態が解けない。

ルビエラ(?????)

火の精霊王。

『紅の刃』に封印されており、イーシャと契約を交わしている。封じられているので思い通りに動けないが、いつもイーシャの目と耳で世界を観察している。

カタストロフと水の王に強い好意を持つ。

実体化すると、紅い髪に褐色の肌の美女の姿をとる。

彼女は割と重要なキャラなのだが、精霊の性質上興味のない事は全く覚えてないため、情報源としては役に立たない。

ファイアセレス（700以上）

森の民エルフの族長。

会議を邪魔する面子が消えたので、内心ホツとしている。

現在、ディアマス王城に滞在中。

ドラクロ（355）

火の民ドラゴニアの族長。

イーシャと一緒にレノンで拉致監禁され、リヴァイアサン海竜王の治療目当てに強制献血する事態に陥っていた。

水の民説得に燃えるイーシャに三日間存在を忘れ去られており、大人しく自主的に軟禁状態に甘んじていたため、とつてもストレスが溜まっている。

現在、お迎えに来た族長候補のドラゴニア達を殴り伏せ、ストレス解消兼族長の座に相応しい実力を示していたりする。

スアウ＝ティカティ（187）

水の民ニンフの族長。

ニンフ達から絶大な支持を得ている事に気づいてなかったため、反乱の責をとってディアマスに己の首を差し出そうとしていた。

イーシャと同胞にこっそり説得され、涇々水の民の秘宝である大鉾を差し出す決意を固める。

現在、ニンフ達の説得に忙しく、各地を飛び回っている。

オーウエン（609）

闇の民サレの族長。

カタストロフを崇拜している。

現在、ディアマスより離反。何やら準備中。

アルフェルク・ダオス・イエルク・ディアマス（26）

レスクの第三子、長男で王太子。イーシャの異母兄。

愛称アルフ。

マイペースな天才。

嫁はいるが、政略結婚なため、愛は無い。

イーシャを可愛がっており、救出に邪魔な面子を食中毒で入院に追い込み、それ以外の人間もさっさと軽く脅しをかけて会議を円滑にした。

最近は諜報関係に興味があるので、情報が早い。

ちなみにイーシャは気付いてないが、彼女がお願いすると二つ返事でOKがでる。

ラムザアースⅡアフランⅡエウドリⅡディアマス(22)

レスクの叔父である亡きルフェル大公の嫡子だが、騒動を恐れた上層部の考えにより、養子として迎えられる。

王位継承権第二位。

愛称ラズ。

正統派王子然とした外見だが、何事にも関心が薄い。

聡明で視野が広く、責任感と義務感を持ち合わせており、アルフェルクよりは国王に向いているのだが、何故か義兄に非常に懐いているため、周りに残念がられている。

後見関係でドタバタしていた時、セリシエレに助けられ、しばらく世話になった事から、一緒に行動する事が増えたイーシャを身内として認識。

それまでは関心ゼロだった。

イーシャと内密な婚約関係にあるが、親愛であつて、ロリ趣味はない。

わりと巻き込まれ体質。

エーリス(????)

純粹な光の民アルヴで、カタストロフの異母姉。

世界よりも彼を愛している。

伝承では月の女神とされており、動物に係する能力があるらしい。

黒幕(?)の一人。

新規名前登場&サブキャラ

アクエリオス(?????)

水の精霊王。

作者はこの人の名前を異常に考えました。サファイアで思いつかなかったなので、アクアマリンで考えてみて、出てきたのは某スポーツドリンク。あんまりなので、一文字変えました。

ルビエラが嫌い。

現在、水の民秘宝の大鉾に封印されており、寝てる事の方が多い。

シイル(23)

獣の民バーンの娘さん。実は名前でてなかったけど初登場、十四話だったりします。

イーシャ付きの女官。

最近はカタストロフ付き。

犬耳に、モフモフ長い尻尾の人狼族。

第二十八話までの登場人物紹介（軽いネタバレ有り）（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます！！

第二十九話 闇の民対策（前書き）

復活しました！！

風邪はホント、引き始めに治すべきですね。

気付いたら、総ユニーク人数が千人突破です！！

今まで拙作を読んで下さった全ての皆様のおかげです。

ありがとうございます！！

皆さんも、風邪には注意して下さい。

リアル多忙に付き、更新速度が落ちる可能性が出てきました（TWT
毎日は無理かもしれませんが、二日に一度は更新したいと思っ
ています！！

今回、短めです。

第二十九話 闇の民対策

「こんな所で、なにをしているの？ 氷魔王」

上方から降ってきた美しいソプラノに、彼は顔を上げた。
ふかふかした草の絨毯の上に座り込んだ彼の、五、六M上^{キート}空に、
髪と同じ蜂蜜色の両翼を大きく広げた風の民ハーピー族長の姿がある。

鳥とは違って、体内の風の精霊の力を無意識化で行使しているせいか、羽ばたきは少ない。

「あれ？ 顔、隠してないんだ。目、綺麗な金色なのね」

「……お前、確かリア・ノインと言ったか……」

「ええ。それで合ってるわ」

リア・ノインはゆっくりと降下すると、彼の傍に着地した。

「それで？ なにしてるの？」

「……ちよっと回復しに來ただけだ。ここはマナの通り道だからな」

とりあえず最初の目的はそうだったので、彼は答えると草の上に横たわった。

色々思い出しておかげで余計に疲れたのだ。

ひと眠りしようか、と思う。

「ね。氷魔王なら聞いても平気でしょう？ 歌いましょうか？」
「確かに平気だが……他に観客がないかどうか確認してからにする」

ハーピイの狂乱セイレーンの旋律は、彼を含めた光の民アルヴにとってはちょうど良い魔力回復手段であるものの、他の民族にとっては異なる。

同族以外の者にも聞かせたい。

そんな欲求がハーピイの本能にあるからこそ、事故や問題が起るのである。

「分かっているわ。何か望みの曲はある？」

「何でもいい。それより、邪竜についての情報はるか？」

ハーピイの情報網は広い。

民族単位で放浪癖がある風の民は、勝手に動けない族長の好奇心を満たすため、己が知り得た各地の様々な情報を報告するのだ。

リア・ノインは眉をひそめた。

「うーん……世界の各地で邪竜が出ているか、知りたいんだよね？
魔大陸ハッシュガルドで何十年前に出たらしいけど、神竜ツエツェアルセリシヤスに倒されたって言うぐらいしかないかな。前の族長リア達の時代も、貴方が封じられてからの邪竜報告は代に一、二件あるかないかの頻度んどで、全部違う神竜に倒されてるよ。」

光の民アルヴは結局のところ、この世界に与えられた役目を放棄したのだ。

確かに代わりに邪竜を倒せそうなのは、世界の一部である神竜くらいだろう。

瘴気瘴気の量は、彼の封印前の数十分の一ぐらいまで激減している。

そう頻繁ひんぱんに、邪竜が生じるような状況ではないから、世界も十分対処できる回数に落ち着いているらしい。

激滅した理由は、分かっている。

莫大な瘴気の塊であるアルウエスごと、能力の増幅処置をした彼を封じたからだ。

彼を封じて三千五百年ほどで、どれだけアルウエスの力が削ぎ落とせたのか。

その点、非常に気にかかるところだが、確かめるためだけに危険を冒すわけにはいかない。

「それじゃ、ティアマト邪竜王アルウエスについて何か知っているか？」

「……んー……ティアマト邪竜王アルウエス、ねえ……」

リア・ノインは、ますます眉根を寄せた。

アルウエス、アルウエス、と口の中でブツブツ繰り返す。

「……もしかして、アルウエスって終わりの魔物のこと？」

「お前達が神と呼んでいた光の民アルヴが、封じる事が出来ても決して消滅させられなかったバケモノがそれに当たると言うのならな」

「うん。それで合ってるみたい」

リア・ノインは大きく頷いて見せた。

すう、と息を吸い、吐き出しながら美しい声で謳う。

「世界の始まりの日に地の底より生まれし、死を司る存在。

其は世界を喰らいし、巨大にして強大なる魔物。

幾千、幾万の月日を戦いを続け。

神はついに、彼のものを封じる事に成功した。

神域で眠る彼のものの前では、息をひそめよ。

眠りを妨げてはならぬ、眠りを覚まさせてはならぬ。

神が無き時代、彼のものが覚醒たのならば、一切の希望を捨

てよ。

それは世界の終わりの始まり、そして世界樹は枯れ落ちる

「

リア・ノインの歌声と共にまき散らされる魔力は心地よく。

特に情報は得られなかったと、少しの落胆を感じながら、彼は目を閉じた。

「それで？ 義兄上が言っていた話したい事って何なんだ？」

ラムザアースの問いかけに、イーシャは小さく息を吐いた。

暗い光を宿すアルフェルクの眼から、視線を逸らせる理由が出来てホツとしたのだ。

さっと視界を、隣に座る義兄に固定する。

「闇の民サレの対策についてです。献策けんさくが一つあるのですが、聞いて下さいますか？ 闇の民サレ対応戦闘部門副将、ラムザアース「アフラン」エウドリ「ディアマス殿下」

「……陛下の許しは？」

「既に。内容は未だいま申し上げていませんが」
「聞こうか」

ラムザアースは軽く姿勢を正した。

もともとダラけて座っていたわけではないのだが、イーシャの口調いごが公的立場を求めているからであろう。

「闇の民は離反表明に氷魔王カラストロフの名を上げました。その点を利用出来ると思います」

「ああ。確か、

我等闇の民サレ族は、現世に再び目覚めし我等が至上たる氷魔王に、大陸の覇権を委ねようとする

だったか？ 離反表明に載せてたな。彼等の大義を利用するか」

イーシャは大きく頷いた。

「はい。委ねると言うのなら、従ってもらいましょう」

闇の民が、どういつつもりでカタストロフの名を挙げたかは分からない。

彼はオーウエンから非公式のものも聞いていると言っていたから、何か離反する事で叶う事柄があったのだろう。

色々あったせいで、すっかり非公式の表明を聞くのを忘れ去っていた。

後でカタストロフに聞いてみなければ。

「今回の水の民の事件で、カタストロフ殿は私に解放された借りがあるから、私が生きている間は私の味方となって下さると、約定を結んで下さいました。その件を闇の民側に報告し、直接彼に出向いて伝えてもらうか、一筆あちらに直筆の手紙を出してもらうかして、離反を取り消してもらえればと考えます」

これで断れば、闇の民の大義は無くなる。

理由に挙げた水の民ニンフは、既に宣戦布告を撤回し、再度の盟約を交わす手続きに入っているのだ。

離反するにあたって掲げた二つが消えてしまう。

闇の民にとって、大陸の覇権を委ねようとした至上たるカタスト

ロフの性格から目論めくろんだ計画が、彼の不規則イレギュラーな行動によって潰れていく。

従ってくれればいい。

それならば、水の民に続いて余計な被害が出ずに、元の鞘に収まるだろう。

ドラクロの血液という犠牲が出た水の民とは違って、無血で、だ。

従わないのならば、その時は。

イーシャは戦闘を希望して、カタストロフと共に最前線に立つつもりだ。

カタストロフが敵対しているのがはっきり分かれば、土気どころではなくなるだろう。

そうして、最小限の犠牲で降伏に追い込めばいい。

「なるほど、お前の味方ね。お前はディアマスの味方だ。表明に忠実であるのなら、カタストロフ殿がお前を選んでいるその間は、どうあってもディアマス側に付いている必要がある、と言う訳か」

ラムザアースは呟くと、頷いた。

そうして、すいっとアルフェルクの方へ目を向ける。

まるで、貴方はどう思いますか、と意見を求めているかのように。

煤まみれの上着を脱ぎ、のんびり茶を飲んでいた王太子は、にっこり微笑んだ。

ラムザアースの目線が、再びイーシャへと戻る。

「私も行ってみたい良いと思う。早速陛下にも申し上げなければ。カタストロフ殿にも、協力をお願いするんだ。一度、直接お会いするべきだな」

「私、午後一番に謁見要請をしているわ。ラズも同じでしょう？
その時、申し上げれば良いじゃない」

イーシャは言葉を崩した。

公的に伝えたかった事はもう済んだ。

私的な時間ラムザアースに、ダラダラと硬い喋り方をする気はない。
い。

アルフェルクに対してはずっと敬語でも気にならなかつたりする
のだが、これは仁徳の差と言うものだろうか。

「クーは あ、カタストロフ殿の事ね 大抵午後は部屋にいる
から、先触れなしでも平気だと思うけど、私も一緒に行くわね。多
分、ラズだけで会いに行ったら会話にならないと思うし」

「ああ。頼む」

「謁見が終わり次第で良い？」

「そうだな。これといって大した報告はない。陛下がいつもの長話
をされたとしても、ちょうどお茶の時間あたりには会いに行けるか
何か土産でも持っていこう」

ラムザアースもレスクに長話で捕まるらしい。

イーシャのように結婚の話では無さそうだが、何かの注意だろう
か。

ラムザアースへ下手に結婚話を薦めると後見勢力が黙っておらず、
困った事になりかねないので、基本レスクはそっち方面の話を振ら
ない。

「楽しそうだね……僕もついていきたいけど、仕事が出来たし。ま
た今度、カタストロフ殿の美貌を見に行くよ」

「お兄様。その時は、前もって連絡下さいね」

ニコニコと頷くアルフェルク。

これはまた押しかけてくる気だな。

過去の経験から、イーシャはそう判断した。

いっそ、カタストロフが素顔でいる時に来ればいいのだ。

そうすれば、反省するだろう。

イーシャはこっそり溜め息を吐いて、脳内メモ帳に午後の予定を書き足した。

第三十話 賠償（前書き）

時間ぎりぎりでの仕上がりです。

（現在23：45）

編集がめちゃんこ甘いので、変だな、と思うところがあったら感想
で報告お願いします。

第三十話 賠償

「水の民ニンフ族長スアウ・ティカティ様が参られました」

イーシャが帰還して五日後。

ひとまず戦闘動員の説得が終わり、情勢が落ち着いたとの連絡がスアウからディアマスに入った。

今回の騒動の終了宣言と詫びの品を届けに行こうと考えているが、何時なら都合が良いかという確認の水の民上層部からの連絡に、レスクは即座に返事を返した。

その翌日の昼過ぎ。

イーシャは謁見の間に呼び出されていた。

玉座にレスク、その一段下の右側にアルフェルク、左側に宰相オースガルド。

王太子から一段下がったところで、玉座から見て右側にラムザアース、左側にイーシャが直立して控える形になっており、他にも重臣達が各々の待機場所で控えている。

その光景は壮観の一言につきた。

スアウはそんな重厚な雰囲気漂う謁見の間の空気をモノともせず、何も持たずに静かに歩いてくると所定の位置で膝を着いた。

首を前斜め十五度傾けて目を伏せ、胸の前で握り拳を作った両手を関節部分が噛み合うように当てて、そのままゆっくりと咽喉元まで上げる。

その仕草は水の民の、正式な謝罪を示す礼だった。

イーシャを含め、この場に居合わせたもの全てが、知ってはいても初めて目にする礼である。

「よくぞ参った、スアウ^{おもて}。ティカティ。面を上げよ」

レスクの重々しい声に、スアウはゆっくり顔を上げた。

オースガルドが書状を広げ、読み上げる。

「今回、長年に渡って続けられていた一部の夢の民ヒトによる、水の民ニンフ連続拉致暴行殺害事件 リヴァイアサン 通称『人魚狩り』における我々ディアマスに対する確執、海竜王の重体によって爆発したヒトに対する憤りの結果、盟約に定められていた期限を超過していた事も合わさり、メイザス王との間に認められた離反・反乱を起こした。

ここまで相違は？」

「無い。全て合っている」

スアウの口調は相変わらずだった。

元々、ディアマスで使っているスローン大陸語は、夢の民ヒトの間で使われていた言葉であって、他の民族が生来話している言語ではない。

敬語でなくとも、スローン大陸語を話している事そのものが、既にヒトに対する譲歩であるのだ。

よって、この場に居合わせている重臣の中でも、動揺を見せたのはディアマス王家に対し忠誠心が強い者のみであって、その者も注意する馬鹿馬鹿しさには気付いており、指摘はしない。

オースガルドの罪状の読み上げは続く。

「ディアマスに対する人質として、第三王位継承権保持者であるイ^{リヴァイアサン}スフェリア^{リヴァイアサン}キユオ^{リヴァイアサン}イム^{リヴァイアサン}ハール^{リヴァイアサン}ディアマス王女殿下を。海竜王の治療薬剤材料の供給者として、火の民族長ドラク^{リヴァイアサン}口殿を戦闘の

ち拉致。レノンにて二人を監禁。

……メイザス王との盟約内容に明記され、権利として認められているとはいえ、ディアマス王国に対し反旗を翻し、要人二人を誘拐・混乱を起こした事を認めますか？」

「認める」

「こたび水の民ニンフ族が犯したディアマス離反・国家反逆罪に対し、再び盟約を結ぶニンフ族長として貴女が差し出すものは？」

スアウは礼を崩して真っ直ぐ立ち上がると、パン！ と、大きな音が鳴るほど強く両手を合わせた。

合わせた両手をゆっくりと左右に広げる。

バチバチと青い光が弾け 小柄なスアウの身の丈以上ある大鉾が、唐突に現れた。

一目で分かる。見事な業物だ。

刃先から柄の端まで、感嘆の吐息がこぼれるほどの素晴らしい美術品のようでありながら、紛うことなき実用品である。

刃の部分は全て輝く青いダイヤモンド。

柄部分にある大きな丸い宝珠が、ひときわ目に眩しい。

スアウの持っている部分だけが呪符が巻かれているから、全く封印は解けていないのだろう。

持ち運びを楽にすると同時に、ディアマスに対して見た目の豪華さを重視させるための処置のようだ。

もしかすると水の王は起きていて、少しの間だけという説得で呪符なしで持つという事を可能にしているのかもしれない。

「これはわたし達、ニンフの秘宝。銘は『蒼の閃』と言う。『紅の刃』の対。今回、わたし達の犯した罪の謝罪としてディアマスに与える、相応しい強力な戦略兵器」

スアウは『蒼の閃』を手に持ったまま、前進した。
何人かは抜刀し、レスクの壁になりに行ったが、手で制されてピタリと止まる。

周囲の複雑な視線を浴びながら、スアウはレスクの前で膝をついた。

「レウアイアサン海竜王の容体、おかげさまで持ち直した。この場に居ない、氷魔王カストロフ殿。そして、彼かの方の力を貸してくれるよう頼んだイスフェリア殿下に、水の民ニンプの誇りと血脈において、感謝の意を」

スアウはくるりと柄側を、レスクに向けて差し出した。

「この中に封じられた水の王アクエリオスは、深い眠りにつかれています。でも、素養無きものが持つ事を赦ゆるされてない。わたし達でも長年この封印から水の王を解き放つ事、出来なかった。水の王の眠りが覚めて、契約を交わすまでは保管に厳重な注意を。そうでなければ、無用な死人が出る」

レスクは反射的に受け取りかけて、手を止めた。

「それでは、私には持てぬな。私は大地の属性だ。アルフェルク、お前は？」

いきなり話を振られて僅かに身じろぎしたが、それ以外の動揺を見せずに王太子はゆっくり首を振った。

「残念ながら。私の属性は風ですので」

「ラムザアース、お前はどうか？」

ラムザアースは首を振った。

じつと『蒼の閃』に観察の眼差しを向けたまま、答える。

「私は複数の属性持ちですから、水の王のお気に召さないかと。この『蒼の閃』の周辺に漂う魔力の波長からして、純粹で強い水属性の持ち主でなければ反発が起こって攻撃されますよ。本当に、見事な迎撃態勢になってますね。宝物庫に入っていた時の『紅の刃』と、そっくり同じです」

ラムザアースは『天眼』持ちだ。

命素の動き、魔力の強弱が常時はつきり見て取れ、精霊も視える。他にも違ったものが見えるらしいが、どういふものか本人にも説明出来ないと言う。

過酷な暮らしをしていたディアマスの家系に時折現れる、先天性の体質である。

イーシャのように魔導師を目指していた者、現職魔導師であるも^{すいぜん}の垂涎の能力で、視るだけで複雑怪奇な魔道の術式をも容易に見破る。

その眼があるからこそ、イーシャと一緒に『紅の刃』の封印を解く事が出来たのだ。

そのラムザアースが言い切るのならば、水の王のお気に召すような強い水属性の持ち主でないと運ぶ事すら出来ないと言う事である。

ルビエラは火達磨にしていたから、アクエリオスは超高密度で超高速な水圧で潰されるのか、はたまたスッパリ切断されるのか。

「……おそれながら、申し上げます。陛下。この場で持てる者がスアウ様を除き一名もいないようですので、直接宝物庫まで運んでいただくのが良いかと愚考いたします」

イーシャは、そう提案した。

彼女は当然無理だ。

火の王と契約しているから、むしろ他の人間よりもキツイめに遭ルヒエラいかねない。

スアウ　と、いうより反乱騒動を引き起こした水の民に対して懐疑的な者は居るだろう。

だからといって、降伏の証でもある秘宝を運ばないで放置するわけにもいかない。

「そうだな。そうする事にしよう。スアウに対し、不安を抱く者がいるかも知れぬ。イスフェリア、ラムザアースと共に宝物庫へ案内せよ」

言いだしつpegが責任取れ。

口に出してはないが、レスクの発言は暗にそう語っていた。

ラムザアースは『蒼の閃』の危険を明言したから、完全なとばかりでもないし、もう済んだ事とはいえ誘拐犯とその被害者を二人きりで連れ立たせてるのはマズイ　という判断あってだろう。

「ちょうどいい。氷魔王にも改めて礼をしなければ行けなかった。直接会いたい。出来る？　イスフェリア殿下」

スアウの提案に、イーシャは頷いて見せた。

彼女が帰還した日は、レスクとの謁見の後すぐ、借り受けた魔導

師打ち合わせが入り、ラムザアースへカタストロフの紹介をするどころではなく。

今日までは、アルウェス対策と溜まっていた通常書類業務に忙殺され、時間が取れてなかったのだ。

ちょうどいい。

イーシャとしても、同感である。

「……その他に、ダイヤモンド側に対して譲渡するものはありますか？」

ひと段落した。

そう判断したらしく、オースガルドが冷静極まりない様子で、先刻の罪状判決に話題を戻した。

何処か緩んでいた空気が、その言葉にぴしりと引き締まる。

「水の民ニンフ族は、所持していた秘の一部を公開し、提供し、知識を渡す」

スアウの言葉に、あらかじめ予め内容を伝えられてなかった、王族＋宰相以外がどうも睜目した。

海底に他の民族でも生活可能な都市を造り出すほど、水の民の独自技術は優れている。

それを一部とはいえ、差し出すと言うのだ。
驚くのも無理はない。

これで、余計なちよっかいを出そうとする者も出ないだろう。
水の民は、罪状をくつがえ覆すに相応な対価を差し出したのだから。

第三十一話 宝物庫（前書き）

何か話が進まない……（汗）

今日は寒いですね。

またしてもギリギリな仕上がりなので（現在23：55）、編集が
甘いです。

タイトルが残念すぎる（TWT

第三十一話 宝物庫

アルウェスという世界の危機が迫っていると分かっても、カタストロフの生活に大した変化はなかった。

本人は古代書探しを手伝いたがったが、貴方がいるだけで集中出来なくなる者が多いから来ないでほしい　そう宮廷魔導師長にキツパリ言われてしまったので、手伝いを諦めたと言った方がよい。それでも、何もしていないと焦燥感ウツクシに駆られるのか、王城に滞在したままのリア・ノインに毎日何らかの情報を聞きにいっている。

そうイーシャは、シイルからの報告で聞いていた。

どおりで、闇の民に向けた再盟約勧告の手紙を二つ返事で引き受けるはずだ。

カタストロフはアルウェスへの恐怖のあまり色々考え過ぎて、何かしてないと不安であるらしい。

今回の訪問で、少しは気分が上向けばいいけど。

イーシャはそんな事を思いながら、宝物庫の一室の扉を開けた。

何も無い、頑丈で広いだけの部屋だ。

遠征王の時代は、あと数室ある空の宝物庫の天井まで埋めるほどに金銀財宝が入っていたが、後を継いだルーフィアの手によって売り飛ばされ、公共事業を始めとした内政改革の資金源となったのである。

一応、ちゃんと国宝に指定されている財宝たぐいの類は、役目をはたしている宝物庫にある。

しかし、全盛期たる遠征王ミルトの時と比較すると、三分の一もない。

スアウは空の宝物庫の中心に『蒼の閃』を安置すると、柄に貼られた呪符を千切った。

呪符が剥がれ落ちた瞬間、『蒼の閃』の周辺を冷気が取り巻き、あつという間にぶ厚い氷が大鉾の全体を覆いつくす。

それだけでは『蒼の閃』に宿っているアクエリオスの気が済まなかったのか、もともと封印がそういう術式だったのか。

冷気は壁、床、天井まで広がっていき、見る間に氷が宝物庫の中に張り巡らされた。

中心である大鉾は脈打つように、強烈な魔力を撒き散らして光っている。

イーシヤは漂う冷気に後ずさると、廊下へと逃れた。

ラムザアースは元々扉から部屋の内部へ入っておらず、一面の氷の世界をじつと観察している。

スアウは氷に両足をとられたようだが、何事か彼女が呟くと、氷はスアウの周囲から退いていった。

「これでよし。イスフェリア、氷魔王のところ、案内ヨロシク」

動揺の欠片もない様子でスアウは宝物庫を出ると、そう言った。

イーシヤは頷き、扉を閉める。
ガチャリ。

専用の鍵をかけると、扉に光る魔法陣が浮かび上がった。

すつと、ラムザアースが流れるような仕草で手袋を外し、魔法陣に右手を触れさせる。

バチバチと音を立て、障壁バリヤに割り込んだ彼の指先が裂け、こぼれた血が光に触れた。

「この扉を開くもの、この血に連なる存在であれ」

血の呪。

賊などの関係の無い者を、重要な場所に容易に近づけさせないために施す簡易術式だ。

これで、ラムザアースの血縁しか、鍵を持っていても障害なしでこの扉を開ける事が出来なくなる。

このままでは、イーシャやアルフェルクは開けられない。

血の呪は、術者の兄弟などの近縁や子孫が対象なのだ。

彼の父親の異母姉の孫では、近縁の対象とするにはやや遠い。

扱えなくとも、何かの理由で必要になる事はある。

イーシャは慌てて、義兄と同じように手袋を外した右手を魔法陣に伸ばし、己の血を光に触れさせた。

同様に唱えると、すぐさまラムザアースに腕をとられ、引っ込めさせられる。

「イーシャ。魔力を纏まといもせず利き腕を突っ込んだな。私のように脆もろい部分が見えてないのに、無茶をする」

しげしげとラムザアースは、イーシャの裂けた右手を眺め、不快そうに眉を寄せた。

彼の右手は中指の先端が少しばかり裂けただけで、彼女のように右手全体に裂傷を負おっているわけではない。

『天眼』の視界から拾った情報を活かして、普通の剣で飛んできた魔法をぶった斬って無効化出来るラムザアースである。

今回も、見切つて最小限の傷で済んだらしい。

ラムザアースはイーシャの右手を持ったまま、絹の手巾ハンカチを片手で取り出した。

布地の端を啞え、片手で引つ張って引き裂く。
彼は、慣れた手つきで簡易包帯をイーシャの右手に巻きつけた。

「あとできちんとした手当てを受ける」

「うん。分かっている。ありがとう、ラズ」

軽く右手を握ったりして様子を確認してみる。

イーシャが障壁バリヤに触れていた時間が短かったせいか、見た目ほど深い傷は無く、チクチク軽い痛みがある程度。

数日で完治する程度の軽傷だ。

しっかりと包帯を巻いて手袋をしていれば、今の時点で剣を握っても平気だろう。

宝物庫の鍵を安置所に返すと、イーシャはゆっくりとした速度で歩く事に腐心した。

スアウに合わせたのである。

今回はダイヤモンド側の反感を最小限にするためか、スアウは杖またはその代わりになる物を所持していないからだ。

宝物庫までと同じようにラムザースが杖代わりを申し出て、エスコートしているとはいえ、普段のイーシャの歩く速度は一般女性に比べてかなり早い。

ゆっくり歩くと念じていなければ、スアウに負担がかかっただろう。

王城の中心地から、イーシャの居住区間までは結構な距離があるのだ。

宝物庫のあった地下から一階に上がってしばらく歩いていると、シイルの姿が見えた。

そのおかしさに、イーシャは眉を寄せる。

政治の中枢地であるこの近辺を、イーシャ付き女官であるシイル

が歩くのは、何らかの用事がある時くらいだ。

イーシャは特に何も命じていないから、用事も何もないだろう。

「……シイル？ どうして此处に？」

「あ。イスフェリア様」

イーシャが声をかけると、ほっとしたように安堵の溜め息を吐き彼女の背後に居る水の民族長と第二王子ラムザアースというディアマスの重要人物を目にして、シイルはぶわつと尻尾を膨らませた。

ぴんつと犬耳が立ち、くるんと尻尾の先端が丸まっていく。

「……二人の事は気にしないで」

「分かりました」

単にカタストロフに会いに行く途中なので、別段隠す必要はない。しかし、そう告げたらカタストロフ付きでもあるシイルの立場から話が脱線しかねないので、イーシャは曖昧あいまいな言い方をした。

仕えている者に対して忠実で、主が白と言ったら黒でも白になるのが王宮付き女官というものである。

シイルは、何を考えたのか分かりにくい笑顔で頷いた。

「それで？ 何故こちらに来ているの？」

「それが……カタストロフ様が、イスフェリア様に話したい事があるから部屋に来るよう伝えてほしい、とおっしゃいました」

「……そう。分かったわ」

珍しい事もあったものである。

むしろ、彼から呼びつけるなど初めての事ではないだろうか。

だからこそ、シイルも大事と判断してイーシャを探しに来たのである。

「ちょうど私も、この二人もカタストロフ殿に用があつて、ここま
で案内して来たの。長引くかもしれないから、四人分の御茶と軽食
の用意を」

「はい。かしこまりました」

この場の全員に向けて一礼すると、シイルは流れるように優雅で
ありながら、競歩と言つても過言ではない早さで一行の視界から去
つていった。

イーシャはその後ろ姿をなんとなく見送つてしまつたが、ハツと
我に返り、再び歩き出す。

カタストロフは、また何かアルウエス並みに重要事態でも思い出
したのであろうか。

イーシャはそう考え、違つと心の中で否定した。

重要事態だつたら、もつとシイルを急かしているか、イーシャに
同調して転移してくるだろう。

ただ単に、闇の民への書状が完成したから受け取りに来い　と、
いうのも充分あり得る。

ここ数日忙し過ぎたイーシャは、書状の依頼を出したその一度し
か、カタストロフの所に顔を出していないのだ。

水の民の件がある前は、毎日昼過ぎ、遅くともお茶の時間までに
は訪れていた。

イーシャと頻繁ひんぱんにあつていたから、カタストロフはわざわざ人を
遣やつて呼び出す必要が無かつたのである。

彼女が何時いつ来るか分からなくなつたから、来るまで待つているの
を止めた可能性が高い。

思考を巡らせている間に、足は目的地へ黙々と進んでいたらしい。
イーシャが気付いた時には、カタストロフの部屋の前に辿りついていた。
ちらつと背後に目を向ける。

イーシャが感じ取っていた気配の通り、少し離れてスアウとラムザアースが立っていた。

スアウの呼吸は平常通りである。
どうやら、ゆっくり歩く事を無意識でも彼女は行っていたようだ。

こっそりと安堵の吐息をこぼし、イーシャは両開きの扉のノックを叩くと、返事を待たずに開けた。

義妹の不法法と言っている行動に、ラムザアースが何か言いたそうな顔をしていた事に気付いたが、気付かなかったフリで無視して室内に踏み入る。

ノックの習慣が無かったカタストロフ相手では、作法を守って返事を待つても無駄だ。

しっかりノックの意味を教えたのだが、室内に居ようと返事が返って来ない。

当然、カタストロフが扉を開ける事もないのである。

彼に付けた女官も最初は戸惑っていたが、今は慣れたもので、ノック＋入室の挨拶のみで待たずに扉を開けるくらいだ。

居間にはカタストロフの姿があり、だらりと新しい長椅子ソファに腹ばいで寝そべっていた。

重大な用事があるような人間がする態度ではない。

「こんにちは、クー。今日はお客様を連れてきたの。シイルから用

事があると言付けは受けただけど、それは急ぎの話？」

「別に。それより、俺に客？」

カタストロフは来客と聞いて、姿勢を若干正した。

具体的に言うなら、うつ伏せ状態の身体を起こしてイーシャの後ろに目を向けただけで、姿勢自体は未だグテッと垂れている。

スアウとラムザースは、予想外の垂れっぷりにやや戸惑ったようだが、部屋の主たるカタストロフに向け、軽く目礼をすると居間に入ってきた。

第三十一話 宝物庫（後書き）

ラムザアースは割とチートです。

というか、出てきた若いディアマス王族の三名は全員チート。
イーシャも、はたから見ると十分チートな部類ですね。

第三十二話 将来設計（前書き）

一日ぶりです。

本当に師走は忙しいっ！！

新たにお気に入り登録して下さった方、
評価なさって下さった方、ありがとうございます。
高評価にうかれた作者です。
気を引き締めて、完結までひた走ります！！

第三十二話 将来設計

「数日ぶり。氷魔王。改めて礼を言いに来た」

ラムザアースの腕から手を離し、スアウはカタストロフの前まで来ると、ひつじく跪いて深く頭を下げた。

「リヴァイアサン海竜王の命を救ってくれた大恩。その恩に報むくいる。わたし達水の民ニルフは貴方の望むよう、ただ一度ひとたびのみ、リヴァイアサン海竜王に関する以外のどんな事でも指示に従うと誓う」

真摯しんじな眼差しで告げるスアウに、カタストロフは頷いて見せた。

「お前達の気持ちは分かった……そうだな、イーシャが死んで住む場所が無くなったら、かくま匿ってもらうかもしれない。それでも？」

「匿う？ 養うじゃなく？」

「匿うで合ってる。俺は表舞台に立つ気が無いからな」

カタストロフの寿命は何時までか、誰にもはつきりと分らない。竜並みに生きる光の民アルヴと、千の年を生きる闇の民サレの混血という世界に一人だけであるう人種だからだ。

彼の言う竜は、おそらく古代竜エンシェントドラゴンの事であろう。

現代生きている竜の寿命もハッキリとは分かっていないのだから、見当もつけにくい。

現時点で、彼が百年単位で生きているのは、その言動の端々から分かっていている事である。

そしてヒトであるイーシャが、カタストロフを置いて死ぬのは当然の事で、確定した未来だ。

後見がいなくなった時点で、カタストロフが困った事になりかねないのも想像は容易い^{たやす}。

本来ならば、彼が頼るのは闇の民だっただろう。

『至上』呼ばわりされているぐらいだ。

カタストロフを崇拜する闇の民達は、歓喜でもって彼を迎え入れるに違いない。

しかし、あらゆる物事に巻き込まれる事を嫌う彼が、現状で闇の民に身を寄せるといふ可能性は無いのだ。

意思に反して担ぎ挙げられ、不満も多少ある状態。

今回の件が穩便に収まらなかつたら、余計に行きにくいだろう。

「匿って養うでも構わない。貴方一人ぐらい、扶養が増えても十分やっていける」

「……アルウエスの事は聞いているか？」

「聞いている。その件で、正式にダイヤモンドから内密の調査要請を受けた。封印が完全に解けて貴方が死に、世界を腐らせて喰らう魔物が放たれば、わたし達も困る」

カタストロフはフウ、と溜め息を吐いた。

大理石で出来た長方形^{テーブル}の卓に両肘を乗せ、組んだ両手の上に顎を載せて前屈み^{かが}になる。跪いたままのスアウと、顔上半分を隠したカタストロフの目線が同じくらいになった。

「はつきり言うのだ。俺はアルウエスが消滅させるために、寿命が延びている可能性が高い。氷結封印されていたとはいえ、その間も完全に老化が止まってたわけじゃないからな。ごくごくゆっくりとだが、身体の時計は進んでいた。」

その証拠が、俺の髪だ。封印された時点より、五、六セト伸びてる。約三千五百年で数か月分、俺の身体は年をとっていた。解放さ

れてからも、前に比べて代謝が緩やかになってる……下手をすれば、万単位で生きるかもしれない。

ただ一度、リウアイアサン海竜王を癒した程度で、そこまで負担は掛けられん」

だから匿うだけでいい。

そうカラストロフは考えたようだ。

水の民は戦闘能力の面で恵まれていないが、穏和で世情に積極的に関わっていくような性質など持ち合わせていない民族である。

利用されそうにない分、ただ飯ぐらいでいるのは気が咎められない。

スアウはしばし、考えるように伏し目がちになり黙り込んだ。

ややあって、大きな目でカラストロフを見つめる。

「……貴方、浄化する。その代価に、わたし達生活の面倒みる。これでもいい」

魔素による治安の影響と、魔物の発生のメカニズムを語ったのは彼自身だ。

正式に定期浄化で魔素を消すのを仕事にすることで、扶養する事を終身雇用条件に切り替えた。

治安が良くなれば、その分ニンフ達の心の平穏に繋がる。

魔物が出にくくなる事で、人材的経済的な被害も少なく済む。

双方にとって、悪くない状態だ。

「そうか。そういう体制を取ってくれるなら、匿ってくれ。記憶を取り戻してから、最大範囲で浄化するのは俺の日課だ。特に負担じゃないな」

妙にカラストロフがダラけているのは、もしかするとそれに関係があるのかもしれない。

イーシャはそう考えたが、本題から遠ざかる可能性があったので、用事が済んだ後で聞く事にした。

スアウが立ちあがるのを待ってから、手でラムザアースを示す。

「クー。こちら、ラムザアース殿下。私の義理の兄に当たるわ」

静かに二人の話し合いを見守っていたラムザアースは、突然のイーシャの指名にも動揺せず、対応した。

イーシャの隣まで移動し、軽く頭を下げ、微笑む。

「ラムザアース」アフラン「エウドリ」ディアマスです。ラズとお呼び下さい。氷魔王カラストロフ殿。周囲から、貴方の事はうかが伺っています」

おや。珍しい。

イーシャは意外に思った。

礼儀正しいのは、カラストロフを上位者と判断したからと納得がいく。

しかし、ラムザアースは興味がない者に対して愛称で呼ぶ事を許す事はおろか、愛想笑いなどしない人間だ。

それが許されている身分である。

イーシャだって、初対面の時に愛称で呼ぶ事を許されはしなかったし、彼から笑いかけられるようになったのは理由は教えられなかったものの、数か月間ラムザアースがセリシエレに弟子入りしていた関係で一緒に過ごす時期があったからだ。

カタストロフの空前絶後の美貌のせいだろうか。そう思つてすぐに、イーシャは違つと否定した。

確かに、ラムザアースの表情に称賛の色があるものの、そんな俗っぽい理由で他者に関心を向けるような人間だったら、もっと後見勢力は彼を王位に向けて押し出せたはずである。

イーシャの疑問は、カタストロフが身体を起こし、じいっとラムザアースの方に注目した事で氷解した。

「……珍しいな。お前、俺の周りで何が起きてるのか視えてるだろ」「はい。貴方の周りに、極小の黒い『何か』が吸い寄せられて虹色に弾けて消え失せるのが見えます。キラキラして実に目映まばゆい」

カタストロフに吸い寄せられて光つて消える、黒い粒。

それに、イーシャは覚えがあつた。

魔素だ。

それが浄化される様が、ラムザアースは普通に見えているらしい。ただでさえ、美の象徴のように麗しい人間の周りで常にキラキラぴかぴか光っていれば、幻想的であると同時に気になつても仕方ない。

「その黒っぽいのは魔素だ。俺は、意識せずとも常に周囲の魔素を浄化してる。生まれつき常に魔素が視えるのは、サレくらいだぞ。夢の民で、その眼を持つか。随分と生きにくいだろ」

「……魔素とは知りませんでした。慣れました。それに、人となりを判断する時に役に立っています」

魔素は負と悪意。

イーシャは、ラムザアースの他者に対する無関心っぷりの理由の一端が分かった気がした。常にそんなものが見えているのなら、好んで近付かないだろう。もしかすると、彼がアルフェルクに妙に傾倒しているのは、比較的魔素を撒き散らさない人間であるからなのかもしれない。

リウアイアサン
海竜王の治療中に現れた可視化した魔素は、彼女から見てもおぞましいものだった。

同じように見えるという闇の民が、ヒトに対して嫌悪感丸出しの眼を向けてくる一因は魔素にあるだろう。

なにしろ、夢の民ほど魔素を生みやすい民族は他にない。

「そうか。それで？ ラズとやら、お前は俺に何の用だ？」

再び、ソファアー長椅子の背もたれに体重を預け、だらりとしながらカタストロフが尋ねた。

そのやる気がなさそうな様子は、実に偉そうだが、不思議と不快感はない。

「理由があってもイーシャの味方となってくれている事に、義兄あにとして感謝を。そして、今回行き違いがあったとはいえ、縁深い闇の民サレに対して文章面から説得に回って下さるとの事で、作戦本部の人間として協力者へのご挨拶に参りました」
「なるほど。ちょっと待て」

カタストロフは呟くと、おもむき徐に立ち上がった。

垂れていた無気力さが嘘のように素早く、その姿が主寝室へと消えていく。

「スアウ様、ラズ。座って待ちましょう」

未だに誰も座っていないままだったので、イーシャはそう声を掛けた。

先程までカタストロフが沈んでいた場所を避ける形で、対面にあり長椅子ソファにラムザアース。

一人掛けの椅子にイーシャとスアウがそれぞれ腰かける。

カンカン！！

ノツカーを叩く音に、イーシャは入口を振り返った。

扉は開かない。

ノツカーを叩いても無意味だと知らないか、第三者が居ると知っているか。

「入りなさい」

「失礼いたします」

イーシャの返事に、扉の片側が開いた。

予想通り、そこに居たのはシイルで、お茶一式が載った台車を押し入ってくる。

シイルが茶菓子を並べ始めるのと、主寝室からカタストロフが戻ってきたのは、ほぼ同時だった。

彼の手にはリボンで巻かれ、筒状になった上質な紙が握られている。

カタストロフ登場に、ますますシイルの緊張が高まったのが分かったが、イーシャは見なかった事にした。

可哀想であるが、これは彼女の仕事の範囲内である。

見慣れない重要人物が二人揃って訪ねてくる事は、そうそうないが今後ありえないとは言い切れない。

ちよつとした試練とでも思ってもらおう。

「頼まれていた物だ。確認しろ」

すすつとシイルが本来の主人であるイーシャの後ろに控え終わった瞬間、カタストロフが口火を切った。

依頼したイーシャではなく、ラムザアースに向けて渡したのは、そちらの方に主権があると感じ取ったからだろうか。

受け取って義兄がイーシャを見たので、言わん事を察し、見やすいように彼の隣に移動する。

ラムザアースは彼女が座るのを目で確認してから、リボンを解いて書状を広げた。

第三十三話 闇の民の事情（前書き）

ちよつと遅れました。

第三十三話 闇の民の事情

書状を見たイーシャは、思わず目を擦った。改めて見ても、結果は同じ。

新品の上質紙に、古代魔道文字ルンが書き連ねてある様は、酷く違和感溢れる光景だ。

正しい書き方、正しい文字並びがこうあるべきだという、良い手本になりそうではあるが、大抵の者では容易く読み取れないどころか、文字である事すら判別不能な文章。

幾語か、イーシャにも未知である単語と文字がある。

失われた文字すらある事、超高等魔法を写した巻き物スクロール並みの魔力が籠こめてある事から、書き手がカタストロフであるという点は決して疑われないだろう。

闇の民は魔導師も多いから、古代魔道文字ルンの解読も可能であるので内容が伝わらないという、根本的な問題も大丈夫だ。

問題はその内容だった。

読み解けない部分は想像で補うが、要約するところだ。

勝手に自分の名前を使った事によって感じた怒りと文句、今後同行者付きでしばらくの間なら街に浄化しに行っても良いという事、不自然でなく自分が滞在出来るように夢の民とそれなりに友好を保っておけ　と、いう命令書と言った方が相応しい文章である。

確かに闇の民サレはカタストロフを上位者と扱ってるものの、こんなに上から目線でいいのかとイーシャは悩んだ。

「……カラストロフ殿。貴方からという点は疑われないと思うのですが、どうしても貴方を迎え入れたい理由が、今回の闇の民離反に關係してあるのでしょうか？」

同じように文章を読んでいたラムザアースが、そんな事を聞いた。カラストロフは、大皿に載った小麦粉を練って焼いた塩菓子つまを摘みながら頷く。

「オーウェンが言うには、あいつ等の本拠地の近くに、十年くらい前に起きた地震の影響で出来た洞窟が、年に数日の割合で異界に繋がららしい。当然、危険な動物・魔獣・魔物が出てきても良いように嚴重に監視体制を作って、有志を募って探索に向かわせた」

後回しにしていた、非公式の方の離反理由に關係がある。
イーシャはそう悟った。

これほどダルそうに軽く言うような内容ではない。
異界に続く洞窟など、世紀の大発見である。

「異界から戻ってきた連中の話を聞く限りでは、そちらの世界の一つの大陸で、今のところ意思疎通が出来る存在は魔獣しか確認できていないらしい」

幾つか摘んでしょっぱかったのが、カラストロフが一気にカップの中の茶を飲み干す。

流れるような動きで、移動したシイルがすかさず空のカップに茶を注いだ。

本日のお茶は、綺麗な緑色が特徴のエウドリ諸島産のニン茶というもので、ほんのり渋いが後味が残らず口の中がさっぱりとして飲

みやすい。

ラムザアースの亡き母親はエウドリ諸島の首長の娘であるので、良く飲んでいるからシイルはこの茶を選択したのだろう。

部屋の主が食べ始めたのを見てか、スアウが隣の皿に載っていた蒸し菓子を口にする。

「その世界全てを調べつくしたわけじゃない。が、洞窟から繋がっている先の大陸はスノーンの半分ほどの面積であっても、住んでいる人種がない……サレにとっては理想の楽園ユートピアに近い土地だ。俺が封印された後、危機感を感じていた連中が、どうすると思う？」

「移住しようとするわね」

闇の民はヒトに対して良い感情を持っていない。

先程イーシャにも理由が分かった事だが、始終おぞましい魔素を撒き散らす者達とは極力近づきたくないと考えているはずだ。

王国に仕官していない理由は、これに尽きるのではないかと思う。ディアマスと盟約を結んだのは、まだ他より政策がマシという判断からだったらしいと聞いている。

そんな状態で、未開であつても理想の土地を見つけたら間違いなく、住みやすいように準備をして移住を敢行するだろう。

離反＝戦争ではなく、離反＝異界への引越宣言だったようだ。

「移住のための離反ですか……悪意からの離反宣告でないのは良い点ですが、人口の面からみても経済の面からみても、ディアマスとしては諸手を振って歓迎出来ない理由ですね」

ラムザアースは難しい顔をした。

おそらく、イーシャ自身も全く同じような表情を浮かべているだ

ろつ。

「当初は、先ず百人ほどの若い世代が移住して、村を作り生活基盤を完全に整えてから徐々に規模を拡大していったって、数十年から数百年かけて全員異界に移動する予定を建てていたようだな」

「当初、と言う事は今は違つと？」

「ああ。俺が封印から出てきたから、意見が割れた」

カタストロフはもりもりと塩菓子を食べている。

公式文書に触れるのに塩まみれ油まみれの手ではいけないので、

イーシャは一口も口にしていないが、そんなに美味しいのだろうか。

「移住するのは、『魔王』が生まれなくなった事が一番大きな理由だ。保守的で、生まれた地を離れたくない奴等も多い。今よりも魔素に染まらずむ未開の地に惹かれる気持ちもあるが、住み慣れた土地から離れないでもいいなら、それに越した事はない」

「ちよつと待つて。クー、『魔素を制す王たる器』^{ずいじち}つて闇の民随一の魔力保持者^{ずいじち}つて以外に何か重要な役目があるの？」

カタストロフは無造作にニン茶を啜^{すす}り、小さく首を傾げた。

怪訝^{けげん}そうなイーシャとラムザアースを見て、蒸し菓子を頬張^{ほおば}るスアウに顔を向ける。

彼女が食べ終わるのを待つて、カタストロフが問いかけた。

「『魔王』に求められる役目、知ってるよな？」

「知ってる。大気中とそれ以外の魔素の定期的な浄化」

スアウの答えに、正解とばかりに頷くカタストロフ。
なるほど。

小さくラムザースが呟いた。

「闇の民は常時魔素を吸収している。自分の意思でなく。個人の許容量を超えた場合に何かマズイ点があるから、『魔王』が存在している場合、体内の過剰魔素を引き出す　と、いうことでしょうか？」

「そういうことだな。俺が封じられる事で随分瘴気が減ったとはいえ、『魔王』はサレに必要だ。三千年以上いなかったから、望む気持ちは蓄積した分熱狂的に氷魔王オレの身柄を望んでいる。異界移住を強行しなくて良くなる分、余計にな」

徐おもていに、カタストロフはおしぼりで手を拭くと、蒸し菓子に手を伸ばした。

塩菓子に飽きたか、スアウが黙々と食べているので気になったのだろう。

「だからオーウェンは俺を連れ出したかったが、俺にキツパリ断られた。あの頃は封印された理由もろくに分からなかったし、情報を集めるには此処に居た方が良いと判断したからな。」

重症な奴を連れてくれば良いと言ったら引き下がったが、ちょうどニンフが離反した。それで、移住強硬派のサレが良い離反理由が出来たから便乗した、つてのが今回の顛末てんまつだ。意見が二つに割れたままだから、氷魔王カタストロフに大陸の覇権を委ねる　なんて文章になったんだと思うぞ」

だから、この文章で良い。

そうカタストロフは言いたいようだ。

闇の民の困っている問題を解消する事に、異論はない。

浄化しに行つてやるから、代わりにこちらの指示に従え　と、闇の民側は受け取る事だろう。

これはどれだけ、あちらがカタストロフを望んでいるかにもよるが、三千年以上待ちに待っていた人物の言葉なのだ。おそらく、全面的に呑む。

もともと異界への移住の計画もゆっくりと進めるつもりだったのだから、多少遅れるくらい何でもないと判断を下す可能性が高い。千を生きる民族だ。本来、気は長い。

ブルートウスは戦乱の大陸。

離反の機会はこの先も在るだろうし、東大陸のリン女王^{ハッシュガルド}や南大陸のラスス皇国のように、ディアマスが千年以上続く保証など何処にもないのだから。

ついでに実績も無い。

ブルートウスでの最高記録は二百年ほど前に滅んだエリシエイル王国の、三百十七年だ。

一月持たなかった国だってある。

「……色々な情報を聞かせて頂き、感謝します。カタストロフ殿。書状はこのまま変更せず、送る事にしましょう」

ラムザアースはそう言うと、慎重な手つきで書状をくるくる巻いて、リボンで固定した。

カップの中の茶を一気に飲み干すと、注ごうとするシールを手振りで制止する。

「ラズ、もう行くの？」

「ああ。闇の民の離反解決は早ければ早いほど、ダイヤモンドも安定する」

「ちょっと待て」

立ち上がりかけたラムザアースを、何故かカタストロフが止めた。

思わぬところからの制止に、イーシャは目を見開いた。

カタストロフも人見知りする方なのだ。

用も無いのに自発的に呼びとめるなんて事は、まずしない。

「何か御用でしょうか？」

「お前、丸一日予定を空けれるか？」

質問に質問で返され、ラムザアースは僅かに眉間へ皺を寄せた。

怪訝そうな表情だったが、ややあつて頷く。

そうかと呟いて、カタストロフはイーシャに顔を向ける。

「イーシャ、お前はどうか？ 丸一日休めるか？」

「え？ 私も？ 二、三日待ってくれば緊急でなくとも休めるけど……もしかして、クーの用事に関するの？」

カタストロフは大きく頷いた。

「エーリスが鎖が砕けたら来いと言っただろう。つまり、あの遺跡に何か手掛かりがあると言う事だ。調べに行きたいから、一緒に来い」

数日間、自分の問題なのに殆ど何も出来なかったから、行動したいようだ。

言っている事は、理屈としても間違っではない。

封印具が一つ、二つ碎けてからでないとも機能しないかもしれないと言う不安はあるが、再封印に対する情報になりそうなものは集めるだけ集めたいのだろう。

「……私は構わないけど、なんでラズも？」

「目は多い方が良い。ラズの方は俺の見てる視界に近いから、イーシャや俺が見過ごしていたモノに気付く可能性もある」

イーシャはラムザアースを見やった。

現時点で彼は、対闇の民の副将である。

「そうそう簡単に王城を離れるわけにはいかない。」

しかし、アルウエスの再封印に関する情報は全てにおいて、優先されるのだ。

カタストロフの事情は全て、ディアマス上層部は知っており、当然ラムザアースも知っている。

「分かりました。調整して、丸一日空けます。フィアセレス様にも連絡をとる必要がありますので、明日と言うのは不可能ですが」

イーシャの予想通り。

ラムザアースは承諾すると、今度こそ邪魔されずに立ち上がって部屋から去っていった。

第三十四話 再調査

カタストロフの要請から三日後。

イーシャとラムザアースの予定を調整し、ファイアセレスの許可を経て、一行はバテユイ樹海のシリスの街へと移動した。

ファイアセレスを加えた四名で、更に遺跡のある草原まで転移する。

こうして即座に移動出来たのは、封印が解け、強大な魔力が消失した遺跡の近辺を調査しやすくするため、エルフ達が遺跡直通の転移門を新たに構築してくれていたおかげだ。

樹海の悪路を数時間も進まずに済んだ事は、正直助かる。

今回は何も手掛かりがない可能性も否定出来ないなので、色々な道具を用意し、鞆に詰めておいた。

両手が自由に使えるように背負い鞆リュックサックか、肩掛け鞆ショルダーバックを各々装備している。

「私は外部の方を調査します。一旦終了しましたら、遺跡内部へ向かいますので皆さんはお先にどうぞ」

「分かりました。お願いします、ファイアセレス様」

以前訪れてた時と比較すると、遺跡は様変わりしていた。

建築に使用されている材質は変わっていないと言うのに、壁も壁も受ける印象が全く違う。

前は何処か排他的な印象を受けたものだが、今はずっと温かく、ずっと柔らかなものに変化を遂げていた。

遺跡内の空気は、外の温度とほぼ同じか、陽の光が差し込まない

地下であるせいも少し低いくらいだ。
肌寒さは感じるものの、凍死を覚悟するほどではない。

以前よりずっと空気が軽いのは、カタストロフを解放したせいであろつ。

圧迫感しまは未だ存在していたものの、以前とは違った種類のものであった。

これは遺跡が稼働している証拠だろう。

細かな変化も見逃さぬように、ゆっくり歩きながら階段を下っていったが、イーシャの見つけられた変化は遺跡の印象と圧迫感だけでしかなかった。

中心部に辿り着いたものの、はっきりと目に見えるような変化は見当たらない。

「……やっぱり、何も無いわね」

前回訪れた時あったのは、生命の危険を感じさせ、この場から遠ざけるような圧迫感だ。

今あるのは、まるで逆。

こつちにおいで。

そう語りかけられて、内部に向かうのに背中を押されているような印象を受ける。

「ルビエラ、具現てきて」

調査するならば、人員は多い方が良い。

イーシャが見つつけられずとも、何かを見つけるかもしれない。

隠し部屋とか。

イーシャの招きに応じて、赤毛の美女の姿が唐突に現れた。ルビエラはいつものように微妙に空に浮きながら、彼女に詰め寄ってくる。

「私、何すればいいの〜？」

「天井の方を調べてくれない？ 私は飛べないから、そっちの方は変化があっても見つけようがないのよ」

「はいは〜い。天井付近を見てくるのね〜」

ルビエラはニコニコ笑いながら、すいーっと上昇し空中を移動して、見る間に天井付近へと辿り着いた。

ちゃんと調査しているのか、空中移動はゆっくりだ。

ラムザアースは壁、カタストロフは床を観察している。

イーシャはラムザアースとは違う面の壁を調べる事にした。

地上とは違って、地下の空間なら隠し部屋を造っても、図面がない限り他者には分からない。

壁を叩いて音の違いを聞いてみたり、触って手のひらで受ける違いが無いが、真剣にイーシャは調査した。

どのくらい、そうしていただろうか。

気付くと、ルビエラがすぐ傍まで来ていた。

「イーシャちゃん。天井には特になんにも無かったわ〜」

「そうなの。じゃあ、次は天井付近の壁を下りながら見てきてほしいんだけど」

「ちょっと待て」

唐突に、カタストロフの音が割って入った。

随分離れた地点を調べていたはずだが、イーシャが壁を夢中で調べているうちに近づいていたらしい。

壁際のイーシャから彼が立っている場所までは、五Mメートルもない。

「ルビエラ。上空から床部分がどうなっているかは観察したか？」
「え〜？ してないよ〜。イーシャちゃんは天井を調べてつて言ったもの〜」

ね〜。

イーシャの同意を求めるように、にっこり笑ってルビエラは首を傾げてみせた。

確かにルビエラの言う通り、彼女には天井を調べてこいとしか頼んでいない。

イーシャは頷き、同意を示した。

「……じゃあ、ちょっと上空まで行って、壁を調べながらでいい。ついでに、床がどうなってるかも観察してきてくれ」

「は〜い。カタストロフ様の言う事も調べてきてあげるね〜」

そう言って、再びルビエラが上空へと浮上していく。

イーシャはラムザアースの位置を確認すべく、周囲を見回した。
集中し過ぎて、ラムザアースが一度調べた部分を調査するのは避けたい。

徹底した調査をするにあたっては、違う人間が視るのは二度手間と言う事にならないものの、今日は時間制限つきなのだ。

まず全体を見る事を優先させたい。

ラムザアースは先程、イーシャの反対側を調査していた。
現在地はイーシャに近づいてきている。

このままなら、同じ所を調べるような事にはならないだろう。
イーシャは、壁の調査を再開した。

「カタストロフ様」

しばしして、ルビエラの声が上方から響き渡った。

「ある程度高いとこに来て見たらあ、床に模様が見えるようになってたわよ」。これって多分文字かな？」

「そうか。やっぱり、この更に地下に何かあるな」

びた。

イーシャは思わず叩く手を止め、声の聞こえてきた方向を振り返った。

カタストロフはほぼ中心部に近い位置に立って、空に浮いているルビエラを見上げている。

「クー。何、そのやっぱりって」

「ん？ ああ。光の民の作る建物は、だいたい地上部分より地下深くに重要な場所を置いてる事が多いんだよ」

けるつと、カタストロフは重要な事を口に出した。

先にそう言ってくれば、イーシャも床を重点的に調べただろう。だいたい、と言っているので違う事もあるから伝えなかつたのだろうが、微妙に苛立ちが湧く。

「ルビエラ、降りてきてくれ」
「りょうか〜い」

イーシャは壁の調査を中断して、後で調査を再開した時分かるように石灰片チヨークで印を付けると、ルビエラの予測降下地点へ向かった。石灰片チヨークをしまい、用意しておいた帳面ノートとペンを鞆から取り出す。

ラムザアースも彼女と同じ事を考えたのか、壁の調査を止め、降りてくるルビエラに近づいて行った。

ルビエラは床から僅かに浮き上がった位置で、ぴたりと静止する。

一番のりはイーシャだった。
帳面ノートを広げ、ペンをルビエラに差し出す。

「ルビエラ。分かった範囲で良いから、ここを上から見えた模様を描いてみて」

「は〜い。分かったわ〜」

イーシャが両手で持ち上げてページを固定した帳面ノートに、ルビエラはニコニコと目を細めて微笑みながら、ペンを動かして描く。

徐々に形になっていくそれは、確かに模様のようにも見えるが文字であった。

歪いびつだが、古代魔道文字ルンだ。

人間と違って、文字など使わない精霊であるルビエラがそう判断出来たのは、イーシャの目を介して度々たびたび見ていたからだろう。

「ん〜と……こんな感じ〜。この辺は良く分からないわ〜」

ちよんちよんと、ペン先では無い方でルビエラは帳面ノートの紙面を突ついた。

そうやって示された部分は、かなり曖昧な形だ。

きちんと読み解ける文字を含めると、こんな文章になる。

導くは破魔、示すは浄化。 の× を掲かげよ

「……鍵のようなものが必要になるみたいだ」

「そうみたいね。肝心の部分が読み取れないけど」

イーシャは二番のりのラムザースと帳面ノートを覗き込みながら、考えた。

浄化は分かる。カタストロフだ。

破魔の象徴は月。おそらく、月光の魔力。

月光が差し込む時間に、カタストロフがこの場所を浄化し、条件に当てはまるものを掲げれば入口が開くなり魔法陣が浮かぶなりするのだろう。

「上空から見て文章が出来るようなもんだと、一時的な術式だろうな。鎖が砕けてなくなってる場合は、そんなもの用意しなくても直通になるだろ。封印が欠けて危険域に入ってるって事だしな」

ようやく辿り着いたカタストロフが、帳面ノートを覗き込んだ。

「……とりあえず、この辺全体浄化してみるか。条件が整っていないなりに、多少魔力が動くのが見えるだろ」

そう言って、カタストロフは目を閉じた。

普段彼が纏っている、凄まじく純粹に澄み切った高密度の力場が、風よりも速い速度で周囲に広がっていく。

その浄化の力に応じるごとく、床一面に光を放ち、巨大な魔法陣が浮かび上がる。

「イーシャー!!」

「へ? なに」

焦った様子のラムザアースが、彼女を抱き締めた。

イーシャの嗅覚が、洗髪剤らしきスツとする薬草の匂いと服に焚きしめた虫除けの香が混じった、ほのかに甘い匂いを覚えた瞬間。

金と銀の光に輝く粒子が取り巻いて、覚えのある魔力の流れを感じ取る。

身体から重さが消えて空中に浮き上がり、パツと光が弾け、視界が一瞬ねじれて黒に染まった。

浮遊感が唐突に消失し、そのまま落下する。

事態が把握出来ずに固まっているイーシャと違って、ラムザアースは冷静だった。

転移特有の現象に慣れきっている彼は、義妹を腕の中に抱え込んだまま、軽やかに着地する。

そうして、身体を離すとイーシャの左手と自身の右手を繋いで、周囲を見渡した。

ラムザアースが油断なく周囲を観察する様子に、イーシャは我に返った。

条件が該当していないはずなのに、どうして転移したのかと考えるのは後でいい。

「……こじって……」

イーシャの目に飛び込んできた光景は、かつて見たものと非常によく似通ったものだった。

カタストロフが封じられていた頃の、先程までいた空間に。

第三十五話 隠し儀式場（前書き）

ここ数日寒いですね。

皆様も風邪には気をつけて。

作者は、今週の土曜日曜と、実家の大掃除に駆り出されそうになってます。

明日更新出来なかったら、大掃除でバテたんだとお考え下さい。

今回長めです。

第三十五話 隠し儀式場

天井に、四方の壁にびっしりと刻み込まれた古代魔道文字ルンと増幅の魔法陣と様々な幾何学模様。

床一杯に描かれた、頂点に水晶に入ったマナの木を備えた巨大な八芒星。

広大とも言える空間に満ち溢れている、高純度で高密度な魔力。凍えるような冷気こそ無いものの、かつて、カタストロフが封印されていた様を彷彿ほうぶつとさせる光景。

大きく異なるのは、天井には封印されたモノが吊るされておらず、床に描かれた八芒星の中心地に在る事であろうか。

部屋の中心地に安置された、巨大な氷塊の中に居るのは目を閉じた女性だった。

ヒトならば年の頃は、十代後半辺り。

まさに、光輝くような美貌の持ち主だった。

銀を紡いで糸にしたようなキラキラ光って輝く髪は、膝まで伸びて緩く波立っている。

パールホワイト真珠色の肌。

コラルピンク紅珊瑚色の小さな唇。

すんなりと伸びた四肢と、均整の取れた体を法衣のような白い衣装で包みこんでいた。

イーシャが見る限りでは、装身具を一切身につけていないようである。

カタストロフのような封印具らしき物は、見当たらない。

目も眩みそうな女神のごとき美女は、突然の訪問者にも何ら反応を返す事なく、氷の中で佇んでいる。

その他にカタストロフと違う点は、非常に美しいと思うものの、目を離す事の出来ない。ただ彼を見る事だけしか考えられない、といった強烈極まりない吸引力がないという事か。

実に助かる違いだ。

周囲の細かい差異を確認すべく、中心地に近寄ろうとしていたイーシャは、しっかりと握られままの左手を引っ張られて歩くのを止めさせられた。

まるで走りだそうとしたところを、飼い主に紐で引っ張られた犬のように。

進めない。

少しの非難を眼差しに込めて振り返ると、無表情のラムザアースと目が合う。

四年前の母親の葬儀の後、『紅の刃』の封印を単身解こうと宝物庫に突進しようとして、直前で彼に止められた時とそっくり同じ表情であった。

義兄は興味の無い人間に対し、愛想笑いを向けはしないが、無表情にはならない。

傍目はためには、うっすら口元だけ微笑んで見えるような顔を向ける。

なまじ美形であるために、穏やかな微笑みと判断される事も多々あるが、ラムザアースの目を見ればそうでない事は一目瞭然だ。

その紫水晶色アメジストの双眸が、その辺の木や石よりつまらないものを眺めていると、はっきり語っていた。

イーシャが『それ』を理解したのは、彼との接触が増えた十歳の

頃。

初めて気付いたのは、特に理由もなくアルフェルクが顔を出した時で、長兄に向ける笑顔とのあまりに激しい較差ギャップに震え上がったものだ。

その代わり、初めてラムザアースに笑顔で接されるようになった時、周囲に対しても凄しい優越感を覚えたものだった。

彼が特別扱いみじちの人間だけに向ける、綺麗な笑顔と麗らかな春の陽だまりを連想する暖かく柔らかい眼差し。

絶対零度より酷い、無関心極まる路傍ろぼうの石以下からの変化。

イーシャの場合は強烈な優越感だったが、普通の神経の人間だったらうつかり恋に落ちるか、絶対の忠誠を誓いそうな較差ギャップだ。

この拒絶アルカイツクスマイルの微笑を見抜けるかどうかで、ディアマス上層部は無能診断を下しているという、まことしやかな噂があったりする。

ラムザアースが完全な無表情になる時。

それは、彼が心底呆れ果てている時である。

呆れ過ぎて表情を作るほどの気力も起きない　と、無言で教えてくれているのと同じだ。

「……うん。分かった、ラズ。一体どんな仕掛けがあるかも分からない、危険な場所へ無防備に行くって言いたいのが分かったから、その無表情かお止めてちょうだい」

「そうか。分かってくれて何よりだ」

ラムザアースは苦笑を浮かべた。

イーシャが進もうとしていた中心部を眺め、ふつつと溜め息をこぼす。

「わざわざ術式が作動している方に近づくんじゃない」

「やっぱり作動中なんだ。あの女性の封印だけじゃないよね？」

彼女の問いに頷くと、彼は目を細めて中心部に観察の視線をやった。

「……ここから見てとっただけでも、五種類は同時に作動してる。供給、誘導、結界、拡大化……あと一つは、増幅か？」

近くで観察すれば、もつと違う術式がある。

ラムザアースはそう考えているからこそ、勝手に移動しないように彼女の手を離さないのだろう。

カタストロフの時は突っ切っても何も起きなかったと言っても、理論的に論さされそうだと。

問答になっても言い負かされるだけ。

中心部を調べるのは諦め、イーシャは別方面に目を向けた。

二人が立っている場所は、魔法陣の外側。

この空間内で満ち溢れる魔力が何も影響を及ぼしていない、ほんの僅かしかない場所だ。

そこを通って、魔法陣を踏まないように進んで行けば、頂点部分にあるマナの木なら、二本か三本はすぐ傍で観察出来そうである。

「ラズ、あの木の辺りなら見に行ってもいいでしょう？」

「……そうだな。今は作動してないようだから、問題無いだろう」

同意も得たので、イーシャは意気揚々と最も近いマナの木（巨大水晶入り）へ向かった。

特に障害もなく、マナの木の傍へと到着する。

リイイ……イン。

不意に。

イーシャの背負う『紅の刃』が、かすかな音を立てた。

驚きに、目を丸くして背中の中剣帯から鞘ごと外す。

『紅の刃』の紅い宝珠が内側から小さく光を放ち、小刻みに振動している。

「ラズ、ちよつと調べるから手を離して」

「……仕方ない、か。私では触れない事だし」

ラムザアースは頷いて、パツと握った手を離した。

『紅の刃』に限った事ではなく、所有者が限定される特殊な魔道具は、正式な持ち主以外が触れないようになっていた。

封印を解いた後、一度ラムザアースに協力を願って調べてみたところ、接触した瞬間に火柱が発生。義兄は危うく火達磨になりかけた。

慌ててイーシャがルビエラに注意したので、彼には火傷も無く、どうにか事無きを得たが非常に危なかつたのである。

それ以来、イーシャは直属の部下や女官に通達を出している。

私がない時、絶対に触ろうとするな。触ったら火達磨になって
焼け死ぬ と。

「ラズ、何か異常な流れは見える？」

「特に無いと思うな……ここは大気中の魔力密度が異常だから、見つけられないだけかもしれないが」

「そう」

イーシャは大剣の異変を調べるべく、自由になった手で『紅の刃』を丹念に探った。

柄部分はじんわり暖かい程度に発熱していたが、鞘の部分は何ら常時と変化を見せていない。

抜刀して、刀身部分を確認してみると、柄同様に発熱していた。

宝珠の光は、ちかちかと小刻みに点滅を繰り返している。

宝珠事体、指で触ってみて、熱いと感じる前に痛みを覚え、イーシャはすぐさま触るのを止めた。

ふうー。

ひりひりする指先に息を吹きつけ見てみると、火傷はしていないようだ。

宝珠部分は触らないよう、気をつけよう。

そう決意を固め、イーシャは耳をすませ、音を探った。

鈴のように高い時もあれば、低く鈍くぶつ切れる時もある、何とも言えない音色だ。

慎重に、根源を探してみたものの、よく分からない。

一人で調べるには、この辺りで限界だった。

ルビエラ

イーシャは大剣に意識を集中させ、目を閉じて呼びかけた。分からないのなら、知つていそうな精霊ヒトに聞けばいい。

興味の無い事は、重要でも覚えぬ存在であっても、さすがに長年封じられていた宿床について無知ではないだろう。

教えてほしい事があるの。
私の目の前に具現してちょうだい

浄化の力場で広々とした空間を満たす。
条件に該当する力を浴びて、床が光り輝いた。

床に浮かんだ魔法陣。

その力が、イーシャに向かって収束していく兆^{きざ}しを見てとって、
彼は慌てた。

「イーシャー!!」

彼と同じものを視てとったのか、ラムザアースが咄^{とつ}嗟^なに彼女に抱
きつく。

「へ？ なに」

一人だけ事態を分かっているイーシャが、間の抜けた声を上げ
た。

ハッキリと目視出来る濃度になった金と銀の魔力の粒子が二人を
包み込み、身体から色彩^{いろ}が消え、輪郭^{りんかく}が歪^よんでぶれる。

ブレが瞬時に広がって、二人の姿が彼の視界から完全に消え失せ
た。

間違いない。

空間転移魔法における現象だ。

「……なんでイーシャだけ作動したんだ？」

ポツリと彼は呟いた。

該当していたのは、彼の浄化と、破魔 伝承で月の女神と呼ばれるだけあって、月の魔力を持っていたエーリスの仕掛けた同調術式から漏れる、僅かな名残だけのはず。

読み取れずに分からなかった鍵を、イーシャだけが持っていたとでも言うのだろうか。

聞かれたと思ったのだろう。

こてん、とすぐ傍に居たルビエラが首を傾げる。

「さあ？ でも私が此処に入れるって事は、イーシャちゃん達あんまり遠くに行ったんじゃないって事よね？」
「そつだな」

彼はイーシャに繋がっているラインに意識を沿わせ、先を手繰った。

距離は五十M前後。

先は、予測通り更に地の底だ。

「ん？ あれ？ あれね？」

彼はさっさと現場に移動すべく、イーシャへ転移分の魔力を送ろうとしていたが、ルビエラのおかしな様子に取り止めた。

ルビエラはいつもの笑顔を消し、珍しく真面目な顔で首を捻って、豊かな胸の下で腕を組んでいる。

ややあって、ぼん！ と火の王は手を打った。

「あー。思い出した〜！ 見た事あるな〜って思ったら」
「どうした？」

精霊がするには、妙に人間くさい仕草の数々だ。
これもイーシャとの契約の影響だろう。

彼が問いかけると、ルビエラは途端に眉間へ皺を寄せた。
再び首を傾げ、顎の下に軽く握った右手を当てる。

「……怒らないでねえ、カタストロフ様」

「は？ 俺が怒る？」

「ちよつと前は怒ってたもの〜」

精霊の言う『ちよつと前』は、なかなか理解しにくい。

その精霊にもよるのだが、年単位である事もザラだ。

良いから教える。

彼がそう促すと、ルビエラは素直に口を割った。

「イーシャちゃんの視界にね。氷水晶に入ったエアリスちゃんが見えるの」

それを聞いて、彼は目を丸くした。

エアリスの魔力は月の性質 すなわち、破魔と増幅だ。

アルウエスの消滅封印の強化に、これほど最適な人材はない。

時期的には、彼よりも後に軸としてこの遺跡に取り込まれたのだらう。

今までの足跡からして、エアリスは再封印に関係しているのは明らかだった。

彼のように騙されて　と、いうのは考えられない。

ふと、嫌な想像が彼の脳裏に浮かんだ。

呪具の鎖が関係するのは、アルウエスだけではないのかもしれない。

今は大丈夫だが、エーリスが砕けた後に来るよう言っていた事からして、何らかの伝言^{メッセージ}を仕込んでいる可能性が高いだろう。

「あ！……ごめんなさい、カタストロフ様。ちょっと呼ばれたから、あっちに行くね」

その言葉を残して、ルビエラの姿がかき消える。

彼自身も行くべきだろうか。

そう一瞬思ったが、エーリスがいるのだ。

動いていない状態でも、あの義母姉に近寄るのは精神的に気が進まない。

「……ああ。なるほど。イーシャだけが、精霊^{ルビエラ}と契約してたな。それが該当条件か」

現実逃避を始めた彼は、不意にそう思い至った。

第三十六話 紅の刃（注！ 残酷表現あり）（前書き）

大掃除、疲れました。

作者の部屋は暖房器具がコタツしかないので、キーボードをちよつと叩きにくい状態なのです。寒い空気で手が動かしにくい……

今回、微妙に残酷表現あります。苦手な方、気をつけて下さい。

第三十六話 紅の刃（注！ 残酷表現あり）

呼びかけてすぐに了承の返事があり、イーシャの目の前に巨大な炎が出現して、瞬時に消える。

現れたルビエラは首を傾げながら、己より低い位置にある契約者イーシャの顔を見下ろした。

「どうしたの？ イーシャちゃん」

「これを見て」

イーシャはルビエラに向け、『紅の刃』を掲げて見せた。

大剣型魔道具は、高く低く強く弱く、音色を奏でながら振動と発熱を繰り返している。

ルビエラは、自分の宿処の常ならぬ状態に、ますます怪訝そうな表情で首を傾げていた。

「あら？ 変ね？ どうしてそんな風になってるのかしら？」

「貴方でも理由が分からないの？ ずっと長い間、この中に封じ込められているのに？」

ルビエラは、とぼけて言っているようではない。

本当に、不思議そうな様子である。

基本的に精霊が物事に対して興味を持たず、あっさり忘却する性質とはいえ、随分とおかしな反応だった。

「ずっと……？ そんなに前のような気はしないんだけど、そういえば何時から此処に閉じ込められてんだっただかしら？」

「！……それも分からないの？ 誰に封じ込められたかも？」

「うん……そういわれても、気付いたらこの中にいたのよね」

もしかして。

覚えていないのではなく、意図的に誰かの手によって忘れさせられているのか。

イーシャはそう考えた。

ルビエラを封じたのは、光の民アルヴに間違いない。

体内に精霊を宿す火の民^{ドラゴニア}、水の民^{ニンフ}、風の民^{ハービー}、大地の民^{ドワーフ}、森の民^{エルフ}、闇の民は力を借りる事はあれど、精霊を利用するといった考え方はしない。むしろ精霊は気難しい友人扱いであるので、そういう考え方は嫌悪の対象となっている。

獣の民^{バイン}は一樣に魔力が低い民族なので作成出来ず、夢の民^{ヒト}は光の民の残した魔道具を参考により簡易な物しか作り出せない。

仮に魔道具へ封じ込める事が出来たとしても、対象は低位の精霊だろうし技術が低いため、もっと封じる物が大型になるだろう。

火の王^{ルビエラ}が暴れ、何十年何百年と災害を起こし続けていて仕方なく

という可能性も無いわけではない。

しかし、精霊は世界の意思を受けて動く事が殆どであるのだから、一民族が関与していい理由にはならないのである。

だいたい、水の王も同様に封じているのだ。

火の要素^{エレメント}が弱化したから、自然界の均衡^{バランス}を取るために封印したかもしれないが、それなら最初からルビエラを封じなければいいだけの事。

特に理由なく精霊王達を封じるだなんて、ありえない。

何のために封じたのか。

神ならぬ、イーシャには分からない事だ。

「……火の王。この木に、何か感じないか？」

ラムザアースが、マナの木を指で示す。

『紅の刃』はこの木に近づいた途端、異変を起こしたから、彼の質問は最もだった。

ルビエラは、スイーッと滑るように空中を移動した。

しげしげと興味深そうな様子で、周囲をくるくると回って眺める。

ぺたり。

徐に水晶の表面に手のひらを当てると、驚いたように彼女が目を丸くした。

ポツポツポ。

ルビエラの周囲に握り拳ほどの金色に光る炎が八つ、とり囲むように浮かんだ。

金色の炎から光線が伸びて繋がり、作られた八角形の結界の中に火の王を閉じ込める。

「な！？ ルビエラ！」

当然の事態に驚くイーシャと、息をのむラムザアース。

外野とは違い、ルビエラはきよとんと困惑の表情のまま、己の周囲を囲む光をつんつんと指で突いていた。

リイイイイ……イイン。

水晶に包まれたマナの木が、共鳴するかのよう^に音を立てる。

イーシャの手から抜き身の『紅の刃』がするりと抜け出て、勝手に空中に浮かんだと思うと、真っ直ぐにルビエラへ向かって飛んだ。

「え!?!」

音も無く。

『紅の刃』は、八角形の中に居るルビエラの胸の中心を貫いた。

「……かはっ!?!」

その衝撃に、火の王の口から苦しげな呻き声がこぼれ出る。

『紅の刃』はルビエラを貫いたまま、背後の水晶に突き刺さり、ピキピキと罅^{ひび}を生じさせて止まった。

その様子は、まるで串刺しにされたかのよう。

「いやあああ! ルビエラー!?!」

一瞬で起こった惨劇に、イーシャは悲鳴を上げた。

かくりと力無く頭を、両手足を垂れ、大剣の柄頭までをもその胸に深々と埋めたルビエラの反応は無い。

実体を持っている間は、精霊であっても物理的なダメージを受ける。

つまり、幾ら強大な力を持った精霊であろうと、実体化中に相應のダメージを受ければ死ぬのだ。

「落ち着け! イーシャ。よく見る、火の王から血が出てない」

「うそっ!?! あんなに深く刺さってって、無事なハズ」

ラムザアースに叱咤され、イーシャは恐る恐るルビエラの胸に目をやった。

ちょうど彼女の胸の深い谷間に埋まった形で、『紅の刃』の柄だ

け飛び出て見えるが、確かに血液がちつとも流れ出ているようには見えない。

ルビエラが纏っている衣装が、微妙に色彩が異なる紅い布地を重ねた物であるとはいえ、刺し貫かれたからには多少の血が内側から滲み出るはずだ。

そして、精霊は死ぬと消滅する。

人間ならば心臓がある急所部分を貫かれても、ルビエラは実体を保ったままだ。

いつこうに、何処にも解けて消えていく傾向が見えなかった。

「もしかして……気絶してるだけ？」

「……多分、そうだな。先程からずっと見てるが、火の王の力の一部も衰える気配がない。反応が無いのは意識を失ってるせいだろう」

生きてる。

イーシャは安堵のあまり、へなへたと床に座り込んだ。

彼女にとってルビエラは一番の戦友で、相棒だ。

傍に居ない時であっても、常に彼女が見ていてくれるという意識がハッキリとあった。

失ったと思つて、浮かんできた絶望感と喪失感は大きく、身体が震える。

ルビエラの脛が震えてゆっくりと上がり、ぱちぱちと瞬きを繰り返す。

「んう？……アレえ？ あー！！ びっくりした〜！」

緊張感の欠片もない暢気な声を出し、ルビエラは顔を上げた。

イーシャはじつと観察してみたが、彼女に苦痛の色は全く見えな
い。

本当に大丈夫そうだ。

安堵の溜め息を吐くと、イーシャは目の前に差し出されたラムザ
アースの手を取って、立ち上がった。

腰が抜けた状態だったので、非常に助かる。

「ルビエラ。元気そうで良かったわ。何処にも異常はない？」

「ん〜。変な感じはするけどお、消滅するような危険はこれといっ
て感じないわ〜」

「？ 変な感じって？」

ルビエラは、自身に突き刺さったままの『紅の刃』を握った。

一瞬、彼女の姿がかき消えたかと思うと、イーシャの隣に再び具
現する。

ルビエラを閉じ込めるように発生していた金色の八角形は、どこ
にもない。

『紅の刃』は、ルビエラが消えると同時に水晶が光り、その光に
押し出されでもしたような形でそのまま落下した。

からん。

その全長にしては随分と軽い音を立て、床に転がって止まる。
罅ヒビが入っていたはずの水晶は、傷一つない滑らかな表面を見せて
いた。

「え〜つとお……どうしてなのか分かんないんだけど、このまま此
処の中にいなきゃいけない気がするの〜」

そう言って、ルビエラはびしりとマナの木を指差した。

「何かね。あの傍に居るとほっとしたわ。もっと傍に寄らなきゃって思ったの。」

『紅の刃』はこの遺跡の機能の一部に、明らかな反応をした。

冷静に考えてみれば、再封印に関係があるのだろう。

だが、外にこぼれ出ていたとはいえ、封じ込めている本体の核部分を串刺しにしてまで近づけようとするなんて。

胸に刺さったのは核があるからであろうが、見ていて心臓に悪い。

精霊を封印に利用するなんて、光の民は己達の下に見ているのだろうか。

いかに世界のためだろうが、そういう考えがなければ先程の光景は無かつただろう。

ルビエラが『紅の刃』に戻ってから、マナの木に向かって行くように術式を組み込めばいい話だ。

「……ルビエラが再封印に関係があるのなら、スアウ様から『蒼の閃』を献上してもらった事は正解だったと言う事ね」

対たる魔道具が、対たる精霊王が無関係だなんて、とても思えない。

イーシャは『紅の刃』を拾い上げると鞘に収め、剣帯に固定した。未だに振動を繰り返し、小さく鳴っているが、とりあえず今は無視だ。

ルビエラが離れた事で、水晶のひび割れが修復された。

何も術式が新たに作動して無かった事から、再封印に関係があっても、現状では何か足りないのだろう。足りない『何か』を探し出す必要がある。

ここまでの成果も報告しなければ。

そう考えて、ふとイーシャはルビエラに目を向けた。

「そういえば、クーは？」

「カタストロフ様？ さっきの場所に居ると思うよ。」

カタストロフなら、同調すれば簡単に此処へ来れるはずだ。

イーシャとしたら痛いし苦しいので、止めてもらいたいものの、手掛かりを一番欲しているのは彼である。

来ないはずがない。

それなのに、何故居ないのだろうか。

イーシャは首を傾げながらも、目を閉じ、集中して意識を彼とのラインに沿わせた。

クー。手掛かりを見つけたけど、現状じゃどうにもならないわ。

だからこのまま遺跡の外に転移しようと思ってるんだけど、どうする？

分かった。それならそのまま外に出る。

俺はフィアセレスとすれ違いにならないよう、歩いて戻る

カタストロフの思念は深い安堵に満ちていた。

手掛かりが見つかっただけにしては、随分大袈裟な反応だ。

それとも、それだけ不安が大きかったのだろうか。

イーシャは怪訝に思いながら目を開けると、ラムザアースに転移で外に出ると告げた。

第三十七話 ずれた伝承（前書き）

遅くなりました!!

投稿したら寝ます。

相変わらず、タイトルが決まらない……（TWT）

今日は仲間内の忘年会に出てました。

作者は酒の匂いだけで気持ち悪くなる下戸なので、呑んできません。

第三十七話 ずれた伝承

「フィアセレス様。質問があるのですが、今よろしいですか？」

イーシャとラムザアースが遺跡の外まで転移して、待つ事数十分。遺跡の出入り口から姿を現したカタストロフ、フィアセレスとも無事合流した。

さすがに、数十分も延々と階段を上ってくるのに疲れたのだろう。些いさか生彩を欠いた様子のフィアセレスは、閉じられた切り株型出入り口に腰を下ろした。

「質問？ 私にですか？」

イーシャは大きく頷いて見せた。

「はい。重要な事なのです」

イーシャの言う『重要』な事に思い至らなかったのか。

フィアセレスは訝しげな眼差しを彼女に向けたものの、ややあつて頷き返した。

「それはなんでしょう？」

「ルビエラの事です」

ルビエラが火の王だとイーシャが知ったのは、フィアセレスが教えてくれたからだ。

『紅の刃』には火の王が宿っている。そう、彼女は口にした。伝承からだと言っていたが、誰に聞いたのか。

イーシャは、それが気にかかった。

ディアマス王家からではない。
それは確かだ。

前の所持者である炎滅王ヴィルリドは、『紅の刃』に火の高位精霊が宿っている事しか周囲に教えていない。

公私の記録媒体のどちらにも残っていない点から、彼女の名前すら他者に話していなかった事が分かる。

イーシャが封印を解いた当時のルビエラの様子からして、彼女自身が契約者以外に名前を呼ばれる事を忌避していた節があり、この点は何とか理解可能だ。

しかし、当時の情勢を考えると、火の王との契約は隠す必要がない。
むしろ、大々的に広めた方が良い状況下である。

炎滅王は火力こそ滅法強いが、虚弱体質であったために体力が無かった。それもあつて短期決戦に持ち込むべく、敵に容赦のない戦略を多用。

より早く相手を降伏に持ち込むため、敵を脅すのに良い手立てがあつたなら、躊躇なく利用するような性格だったようだ。

隠す理由など、何処にも無い。

この事から、ヴィルリド自身、ルビエラが火の王だとは知らなかった可能性が非常に高かった。

そして『紅の刃』は、火山の噴火で岩肌が崩れ落ち、マグマ層と洞窟が繋がる事で発見されるに至った。

古くから地元には伝えられ、民間伝承になっていたような秘宝の類ではない。

まして、発見地から遠いバテユイ樹海に住まう森の民に伝えられているにしては、繋がりが無さ過ぎる。

「貴女は以前私に、『紅の刃』に火の王が宿っていると聞いていたとおっしゃいましたね。誰からお聞きになったのですか？」

フィアセレスは怪訝そうな様子を崩さなかった。

「以前も伝えた気がしますが、伝承です。代々エルフの長に口伝で教えられるものですよ」

しばし、エルフ族長を観察してみたものの、イーシャの眼には偽っているように見えなかった。

「……そうですか」

イーシャは、眉間に皺を寄せた。

お膳立てした者がいる。

考えれば考えるほど、わざわざ森の民達に、伝承として情報を残した者が居るとしか考えられない。

カラストロフの時のように、エーリスかもしれないし、他の光の民かもしれないが、手のひらで踊らされている感じがして軽い苛立ちが湧く。

「それでは、他に何かへ精霊王が封じられたという話は聞いた事がありますか？」

「いいえ。それはありません。ですが、どの属性の精霊王も久しく世界に現れていないと、言うような事柄は耳にした覚えがあります」

実際、アクエリオスは『蒼の閃』に封じられていたのだ。
封じられているのは火と水だけであるとは、決して言い切れない。

イーシャはファイアセレスに礼を言つと、遺跡の隠し部屋で遭つた状況をその場で説明した。

ファイアセレスとカタストロフ二人ともが、精霊王がアルウエスの再封印に利用される可能性が高い事を聞いて、不愉快そうな様子へと変わる。

ルビエラが、意図的に記憶を忘却されているような節があると告げると、ファイアセレスは殺気だった。

「奴等ならやりかねないな」

カタストロフは、そう嫌な保証をしてくれた。

「ファイアマト邪竜王アルウエスを相手にしていた影響で、精霊王への敬意なんて麻痺しててもおかしくない。あいつらは過剰な魔素に精神を侵されなくても、この世界を守っているのは光の民じぶんたちアルヴだという強烈な自負があつた。だから、自らを神などと名乗るほど傲慢しつまんになれたんだろつ。

効率だけ考えて、世界の一部である精霊王達を利用しようとしても、なんら不思議はないな」

「そう……さつきも言ったけど、現状では打てる手立てはないから、王城に帰還しようと思つのよ」

イーシャの言葉に、カタストロフは黙したままのラムザアースの

方へ顔を向けた。

「ラズ。お前も、イーシャと同じ考えか？」

「ええ、私も同意見です。カタストロフ殿。

現時点では、『何か』足り無い様子でした。『紅の刃』に反応を起こしても、新たな術式は作動する気配はカケラも在りませんでし
たし、水の王に意見を求めるにしろ一旦帰還すべきだと考えます」
「……分かった。お前達の意見通り、帰ろう」

カタストロフは、気の進まない様子であったものの、ようやく頷
いた。

自分で現場を確認していないのだから、気にかかるのも無理はな
い。

そもそも、何故イーシャに同調しなかったのか、謎だ。

封印の何らかの影響で同調出来ないのなら、ルビエラだってその
対象だったはずである。

彼女が来れて、カタストロフが来れないわけがない。

他になにか理由があるのだろうか。

重要ならば、彼の方から言ってくる。

そう判断を下し、イーシャは首を捻るのを止めた。

まだ憤慨している様子のフィアセレスに協力の礼を言う。

そして、イーシャ自身は魔力の消耗が激しかったので、ラムザア
ーに王城までの転移を頼んだ。

ディアマス王城に帰還するとオーウエンが、単身レスクに謁見をしていた。

命じられて、帰還を待っていたのだろう。

儀式室にいたシウスに、すぐさまレスクからの伝言を伝えられ、謁見の間に呼び出されたラムザースとはそこで別れた。

王立図書館とは正反対の区域には、各民族長の宿泊施設がある。

元々は他国向けの迎賓館だったその白い石造りの建物は、四階建てで、下に行くほど間取りが広く、上に行くほど狭い。

正面から見ると、三角形を思わす建物だ。

一階は火の民と大地の民、二階は水の民と獣の民、三階は森の民と闇の民、四階全てが風の民の私用となっている。

この間取りはディアマス側は一切関与せず、七つの民の族長達の話し合いの元に決定した。

現在まで、この間取りについて誰からも文句は上がっていない。

全職員は、ヒト嫌いの気がある水の民と闇の民を考慮し、獣の民で構成されている。

「お久しぶりです。氷魔王カラストロフ様。貴方様が御望みになられたように、僕たる我等闇の民サレはディアマス王国と再度の盟約を結びました」

職員の兎耳のバーン男性に案内され、使用中の室内に入るや否や、オーウエンはそう言って、カラストロフの足下に跪いた。

イーシャと職員の事は視界どころか意識にも入っていないようで、真っ直ぐカラストロフだけを見ている。

イーシャは下がるように動作だけで命じ、職員を退室させた。

うかつに声に出して、オーウエンを刺激したらマズイ。

そう感じるほど、イーシャから見て闇の民族長の眼差しは外野の存在を無視し、熱を帯びてカタストロフを見つめていたのである。

「……重度の魔素中毒を起こしている者を連れて来いと言ったはずだが、まあいい」

カタストロフは溜め息を吐くと、一番近いカウチまで歩いて行き、腰を下ろした。

「オーウエン。立て。俺は今も昔も、お前達を支配する気などない。今回は、俺の利害とお前達の主張が反した。命ずるのではなく、注意するつもりであの手紙を出したただけだ」

面倒事が嫌いなカタストロフらしい主張に、オーウエンはシユンと肩を落とし、残念そうな表情を浮かべた。

命ずるつもりはないと言っているし、本人も実際そのつもりではなさそうであるが、彼の態度は明らかに上から目線だ。

一度、ハツキリ教えてやった方がカタストロフのためなのかもしれない。

余計な誤解を招かないためにも。

でも、すで偉そうじゃないクーって、気持ち悪いかも。

イーシャは口に出せば、室内の男性二人両方から怒られそうな事を考えていた。

そっと、オーウエンの視界に入らないように移動する。

カタストロフからほど近い、猫足の一人掛けソファに腰かけ、イーシャは状況を見守る事にした。

「ディアマスの国王から、俺が封じられていた本当の理由を聞いたか？」

「いいえ」

ゆっくり立ち上がると、オーウェンはカタストロフの傍にある椅子に腰を下ろした。

当初傍まで行って、立ったままでいるか迷ったようだったが、目の前の麗人から手振りで座るよう指示が出ていたせいか、実に居心地悪そうな様子で座っている。

「私は、貴方様の手紙で決まった闇の民の総意をレスクに伝えた後、一刻も早く報告を申し上げるべく自去いたしました」

つまり、カタストロフに会う事を優先するあまり、ディアマス側とは必要以上の話を全くしていないと言う事であるらしい。

カタストロフは片手で髪で隠れた額の部分を抑えると、溜め息混じりにアルウエスについての説明を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5353y/>

姫将軍と世界の楔

2011年12月28日02時52分発行